

県道円座香南線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第4冊

横井南原遺跡
上道池東遺跡

2023.3

香川県教育委員会

県道円座香南線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第4冊

横井南原遺跡
上道池東遺跡

2023.3

香川県教育委員会

序 文

本書には、県道円座香南線道路改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市香南町横井に所在する横井南原遺跡（よこいなんばらいせき）及び上道池東遺跡（かみみちいけひがしいせき）の報告を収録しています。

横井南原遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓群、近世の開発に伴う水路群を検出しました。香南町での発掘調査事例は多くないなかで、特に方形周溝墓群は当地の弥生時代後期の動向や墓制を解き明かすうえで、貴重な調査となりました。

上道池東遺跡では、近世から現代にいたるまでの水路群等を検出し、開発の歴史の一端が明らかになつたほか、7世紀後半～末頃の、窯跡に由来すると考えられる須恵器が多量に出土しました。周辺には7～9世紀代の窯跡が多く知られており、当地の須恵器生産の歴史に関わる資料の一端を得ることができます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、関係諸機関、地元関係者各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 高原 康

例　言

- 1 本書は、県道円座香南線道路改築工事に伴い平成28・29年度に実施した、横井南原（よこいなんばら）遺跡、及び令和2年度に実施した上道池東（かみみちいけひがし）遺跡（ともに香川県高松市香南町）の発掘調査の本報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業においては、次の方々、機関の協力を得た。
大久保徹也、地元自治会、地元水利組合
- 4 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆の担当は以下のとおりである。
横井南原遺跡
　第4章 株式会社 文化財調査コンサルタント
　その他 文化財専門員 山元素子
上道池東遺跡
　第7章 株式会社 吉田生物研究所
　その他 主任文化財専門員 山元素子
全体の編集は山元が行った。
- 5 本書で用いる座標系は世界測地系（国土地標第IV系）で、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 6 遺構は、次の略号により表示した。
SA：構列 SB：建物 SD：溝 SK：土坑等 SP：柱穴 ST：墓 SX：その他の遺構
- 7 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（m）である。
- 8 遺構断面図中の注記の色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。
- 9 土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。同表中の残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 10 遺物の時期は以下の文献に掲った。
信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ（第19次調査）第二分冊』2011
香川県教育委員会ほか

佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室解説 40周年記念
考古学論叢』

佐藤竜馬 2016 「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1） 9世紀後葉～11世紀前葉
の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 26 年度』香川県埋蔵文化財センター

佐藤竜馬 2000 「第 5 章　まとめ 第 1 節　高松平野と周辺遺跡における中世土器の編年」『空港跡地
整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 冊 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会ほか

松本和彦 2003 「第 3 章　総括 第 4 節　西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合
整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 5 冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員
会ほか

佐藤竜馬 2003 「第 6 章　まとめ 第 3 節　近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会ほか

須恵器の年代は（佐藤 1993）、近世陶磁器・土師質土器は（松本 2003・佐藤 2003）に挾った。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	3

第2章 立地と環境

第3章 横井南原遺跡の調査の成果

第1節 調査の方法	6
第2節 土層	6
第3節 遺構・遺物	19

第4章 横井南原遺跡の自然科学分析

第1節 炭化材の樹種同定・土器胎土分析・ガラス玉類の蛍光X線分析・種実同定	103
---------------------------------------	-----

第5章 横井南原遺跡のまとめ

第1節 周溝墓について	118
第2節 近世の溝群について	121

第6章 上道池東遺跡の調査の成果

第1節 調査の方法	126
第2節 1~3区の調査	126
第3節 4区の調査	157
第4節 5区の調査	163
第5節 6区の調査	177
第6節 7区の調査	202
第7節 その他の出土遺物	205

第7章 上道池東遺跡の自然科学分析

第1節 上道池東遺跡炭素年代測定	206
第2節 上道池東遺跡出土炭化材及び木製品の樹種調査結果	208

第8章 上道池東遺跡のまとめ

第1節 遺構の変遷	214
第2節 高松市香南町の窯跡出土須恵器について	216

挿図 目次

横井南原遺跡

第1図 調査地位位置図 (1/800,000)	1
第2図 周辺の道路 (1/25,000)	5
第3図 調査区割図・土層断面図位置図 (1/600)	7
第4図 ①1区西壁土層断面図 ②2区南壁土層断面図 (1/40)	9 ~ 10
第5図 ③2区中央あぜ土層断面図 (1/40)	9 ~ 10
第6図 ④2区南壁土層断面図 ⑤2区西壁土層断面図 (1/40)	11
第7図 ⑥3区西壁土層断面図 (1/40)	12
第8図 ⑦5区西壁土層断面図 (1/40)	13 ~ 14
第9図 ⑧7区西壁土層断面図 (1/40)	13 ~ 14
第10図 ⑨3区南壁土層断面図 (1/40)	15 ~ 16
第11図 ⑩4区東壁土層断面図 (1/40)	15 ~ 16
第12図 ⑪4区西壁土層断面図 (1/40)	15 ~ 16
第13図 ⑫4区南壁土層断面図 (1/40)	17
第14図 ⑬5区南壁土層断面図 ⑭6・7区南壁土層断面図 (1/40)	18
第15図 周溝墓配置図 (1/200)	21 ~ 22
第16図 周溝墓等高線図 (1/150)	23 ~ 24
第17図 周溝墓1 (SX4010・SX4015・SX6007) 平・断面図 (1/80・1/40)	25
第18図 周溝墓1 (SX4010・SX4015・SX6007) 断面図 (1/40)	26
第19図 周溝墓2 (SX4010・SX4011・SD4006)・ 周溝墓3 (SX4010・SX4011・SD5001) 平面図 (1/80)	27
第20図 周溝墓2 (SX4010・SX4011・SD4006)・ 周溝墓3 (SX4010・SX4011・SD5001) 断面図 (1/40)	28
第21図 周溝墓2 (SX4010・SX4011・SD4006)・ 周溝墓3 (SX4010・SX4011・SD5001) 断面図2 (1/40・1/20)・出土遺物 (1/4・1/2)	29
第22図 周溝墓2 (SX4010・SX4011) 遺物出土状況 (1/20)	30
第23図 周溝墓4 (SD4005・SD4006・SD5003・ST4009) 平面図 (1/80)	31
第24図 周溝墓4 (SD4005・SD4006・SD5003) 断面図1 (1/40)	32
第25図 周溝墓4 (SD4005・SD4006・SD5003・ST4009) 断面図2 (1/40)・出土遺物 (1/1・1/4・1/2)	33
第26図 周溝墓4 (SD4005) 遺物・石出土状況1 (1/20)	34
第27図 周溝墓4 (SD4005) 遺物・石出土状況2 (1/30)	34
第28図 周溝墓4 (SD4006) 遺物・石出土状況3 (1/30)	35
第29図 周溝墓4 (ST4009) 平・断面図 (1/20)	37 ~ 38
第30図 周溝墓5 (SD4005・SD3027) 平面図 (1/80)	39
第31図 周溝墓6 (SD3027・SD3028) 平面図 (1/80)・ 遺物出土状況 (1/20)	40
第32図 周溝墓6 (SD3027・SD3028) 断面図 (1/40)	41
第33図 周溝墓6 (SD3027) 遺物出土状況 (1/20)	42
第34図 周溝墓6 (SD3027・SD3028) 出土遺物 (1/4・1/2)	43

第35図 周溝墓7 (SD5001・SD5003) 平・断面図 (1/80・1/40)	43
第36図 SD3033 平・断面図 (1/40)	44
第37図 SD6003・SD6006 平・断面図 (1/80・1/40)	44
第38図 SD7036 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)	45
第39図 SD7036 土器出土状況 (1/20)	46
第40図 近世以降遺構配置図1 (1/200)	47 ~ 48
第41図 近世以降遺構配置図2 (1/200)	49 ~ 50
第42図 SB7001 平・断面図 (1/40)	52
第43図 SA3001 平・断面図 (1/40)	53
第44図 SX1007 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)	54
第45図 SX2024・SX2026・SX2027・SX2028・SK2043 平・断面図 (1/40)	55
第46図 SX2045・SX2047・SX2050・SX2060・SX2062 平・断面図 (1/40)	56
第47図 SX3013・SX3014 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/2)	58
第48図 SX4002・SX4044・SX4005・SK4012・SX4014 平・断面図 (1/40)	59
第49図 SX5004・5005 平・断面図 (1/20)・出土遺物 (1/2)・ SX5006・5007・5008 平・断面図 (1/40)	60
第50図 SK6001 平・断面図 (1/40)	61
第51図 SK7001・7002 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)	62
第52図 SK7010 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4)	63
第53図 SK7015 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)	64
第54図 SK7016 平・断面図 (1/40)	64
第55図 SK7028 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4・1/2)	65
第56図 SK7029 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4・1/2)	66
第57図 SK7030 平・断面図 (1/20・1/40)	67
第58図 SK7030 出土遺物 (1/4)	68
第59図 SK7031 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4)	69
第60図 SK7032・SK7033・SK7037 平・断面図 (1/40・1/20)	70
第61図 SK7033 出土遺物 (1/5)	71
第62図 SD1001 出土遺物 (1/4)	72
第63図 SD1001 平・断面図 (1/100・1/40)	73 ~ 74
第64図 SX2002・SD2031・SD2055 平・断面図 (1/80・1/40)・出土遺物 (1/4・1/2)	75
第65図 SX2003・SX2004・SD2005 平・断面図 (1/80・1/40)・出土遺物 (1/4)	77
第66図 SX3025 平・断面図 (1/80・1/40)	78
第67図 SD2006・SD2021・SD2023 平・断面図 (1/80・1/40)	78
第68図 SD2033 平・断面図 (1/80・1/40)・出土遺物 (1/4)	79
第69図 SD2034・SD2035 平・断面図 (1/40)	80
第70図 SD2063・SD2064 平・断面図 (1/80・1/40)	80
第71図 SD2032・SD3049・SD2061・SD3047・SD3054 平・断面図 (1/80・1/40)・SD3014 出土遺物 (1/4)	81 ~ 82

第 72 図	SK3003・SK3006 平・断面図 (1/80・1/40) · SK3003 出土遺物 (1/4) ······	84
第 73 図	SK3003・SD3004・SD3015 平面図 (1/80) ······	85
第 74 図	SD3004・SD3015 断面図 (1/40) · SD3015 出土遺物 (1/4・1/2) ······	86
第 75 図	SD3002・SD3007・SD3008 平・断面図 1 (1/100・1/40) ······	89 ~ 90
第 76 図	SD3007 平・断面図 2 (1/100・1/40) ······	91
第 77 図	SD3007・SD3008 出土遺物 (1/4・1/2) ······	91
第 78 図	SD3002 平・断面図 (1/80・1/40) ······	91
第 79 図	SD3050 平・断面図 (1/60・1/40) ······	92
第 80 図	SD3050 出土遺物 (1/4・1/2) ······	93
第 81 図	SD6002 平・断面図 (1/40) ······	93
第 82 図	SD7003・7004・7005・7006・7008 平・断面図 (1/60・1/40)・出土遺物 (1/2) ······	94
第 83 図	SD7034 平・断面図 (1/80・1/40) ······	95
第 84 図	SD7035 平・断面図 (1/100・1/40)・出土遺物 (1/4) ······	96
第 85 図	柱穴平・断面図 (1/40)・出土遺物 1 (1/4) ······	98
第 86 図	柱穴平・断面図 2 (1/40) ······	99
第 87 図	柱穴平・断面図 (1/40)・出土遺物 3 (1/4) ······	100
第 88 図	柱穴平・断面図 4 (1/40) ······	101
第 89 図	その他出土遺物 (1/4・1/2) ······	102
第 90 図	樹種同定顕微鏡写真 1 ······	105
第 91 図	樹種同定顕微鏡写真 2 ······	106
第 92 図	碎屑物・基質・孔隙の割合 ······	109
第 93 図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 1 ······	110
第 94 図	碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 2 ······	111
第 95 図	胎土薄片顕微鏡写真 ······	112
第 96 図	ガラス玉の実体顕微鏡写真 ······	113
第 97 図	種実同定写真 ······	114
第 98 図	周溝墓変遷図 (1/500) ······	119
第 99 図	近世溝群の変遷 1 (1/400) ······	122
第 100 図	近世溝群の変遷 2 (1/400) ······	123
上道池東遺跡		
第 101 図	調査区割図 (1/800) ······	127
第 102 図	1 ~ 3 区造構配置図 1 (1/100) ······	129 ~ 130
第 103 図	1 ~ 3 区造構配置図 2 (1/100) ······	131 ~ 132
第 104 図	① 1 区南壁土層断面図 (1/40) ······	133
第 105 図	② 1 区あぜ土層断面図・③ 2・3 区北半部 南壁土層断面図 (1/40) ······	134
第 106 図	④ 2 区西壁南半部南端土層断面図・⑤ 2 区西壁 北半部土層断面図 (1/40) ······	135
第 107 図	SB01 平面図 (1/40) ······	136
第 108 図	SB01 断面図 (1/40) ······	137
第 109 図	SK01 平・断面図 (1/40) ······	138
第 110 図	SK03 平・断面図 (1/40) ······	138
第 111 図	SK04 平・断面図 (1/40) ······	138
第 112 図	SK05 平・断面図 (1/40) ······	138
第 113 図	SK06 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4) ······	139
第 114 図	SK10 平・断面図 (1/40) ······	140
第 115 図	SF01 平・断面図 (1/20)・SX01 平・断面図 (1/40) ······	141
第 116 国	SK01 出土遺物 (1/4・1/2) ······	142
第 117 国	SK02 平・断面図 (1/40) ······	142
第 118 国	1 ~ 3 区 SD01 ~ SD07 断面図 (1/40) ······	143
第 119 国	SD02 ~ SD07 出土遺物 (1/4・1/2・1/1) ······	144
第 120 国	牛跡検出状況 (1/20) ······	146
第 121 国	柱穴平・断面図 1 (1/40) ······	147
第 122 国	柱穴平・断面図 2 (1/40) ······	148
第 123 国	1 ~ 3 区第 5 層須恵器・土師質土器鍋 出土位置図 (1/150) ······	149 ~ 150
第 124 国	1 ~ 3 区第 2・3・第 4 層 須恵器出土位置図 (1/150) ······	151 ~ 152
第 125 国	包含層第 5 層 土師質土器鍋 (61) 出土状況 (1/10) ······	153
第 126 国	1 ~ 3 区第 5 層出土遺物 (1/4・1/2) ······	154
第 127 国	1 ~ 3 区第 4 層出土遺物 (1/4・1/2) ······	155
第 128 国	1 ~ 3 区第 3 層出土遺物 (1/4・1/2・1/1) ······	156
第 129 国	1 ~ 3 区第 2 層その他出土遺物 (1/4・1/2) ······	156
第 130 国	4 区平面図 (1/100) ······	158
第 131 国	4 区 1 トレンチ北壁・1 トレンチ東壁 2 トレンチ西壁 (1/40) ······	159
第 132 国	5 区平面図 (1/100) ······	160
第 133 国	5 区土層断面図 1 (1/40) ······	161
第 134 国	5 区土層断面図 2 (1/40) ······	162
第 135 国	SB5001 出土遺物 1 (1/4) ······	164
第 136 国	SB5001 平面図 硬石出土状況 (1/50) ······	165 ~ 166
第 137 国	SB5001 出土遺物 2 (1/6) ······	167
第 138 国	SK5001 平・断面図 (1/40) ······	168
第 139 国	SK5002 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4) ······	168
第 140 国	SK5003 平・断面図 (1/40) ······	168
第 141 国	SK5004 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4) ······	169
第 142 国	SK5005 平・断面図 (1/40) ······	169
第 143 国	SD5002・SD5004・SD5005 断面図 (1/40)・ SD5001・SD5003 合流部遺物出土状況 (1/20) ······	170
第 144 国	SD5001 出土遺物 (1/4) ······	171
第 145 国	SD5003 出土遺物 (1/4) ······	172
第 146 国	5 区柱穴平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4) ······	173
第 147 国	5 区包含層出土遺物 (1/4・1/1) ······	175
第 148 国	6 区平面図 (1/100)・北壁土層断面図 (1/40) ······	176
第 149 国	SK6001 平・断面図 (1/40) ······	176
第 150 国	SK6002 平・断面図 (1/40) ······	177
第 151 国	SK6003 平・断面図 (1/40) ······	177
第 152 国	SK6004 平・断面図 (1/40) ······	177
第 153 国	SK6005 平・断面図 (1/40) ······	177
第 154 国	SK6006 平・断面図 (1/40) ······	177
第 155 国	SK6008・SK6009 平・断面図 (1/40) ······	178
第 156 国	SK6010・SK6015 平・断面図 (1/40) ······	179
第 157 国	SK6010 石縫平面図・立面図 (1/20) ······	180
第 158 国	SK6010 出土遺物 1 須恵器・磁器 (1/4) ······	181
第 159 国	SK6010 出土遺物 2 陶器 (1/4) ······	182
第 160 国	SK6010 出土遺物 3 土師質土器 (1/4) ······	183
第 161 国	SK6010 出土遺物 4 土師質土器 (1/4) ······	184
第 162 国	SK6010 出土遺物 5 石器・錢貨 (1/2・1/1) ······	185
第 163 国	SK6010 出土遺物 6 木器 (1/4) ······	185
第 164 国	SK6011・SD6002・SD6004 平・断面図 (1/40) ······	186
第 165 国	SK6011 出土遺物 (1/4) ······	187
第 166 国	SK6012 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/2) ······	187
第 167 国	SK6013 平・断面図 (1/40)・出土遺物 ······	

(1/4)	188
第168図 SK6014 平・断面図 (1/40)	188
第169図 SK6015 出土遺物 1 (1/4)	189
第170図 SK6015 出土遺物 2 (1/4)	190
第171図 SK6017 平・断面図 (1/40)	190
第172図 SK6018 平・断面図 (1/40)	191
第173図 SD6001・SD6002・SD6006・SD6008 断面図 (1/40)	191
第174図 SD6001・SD6002・SD6004 出土遺物 (1/4・1/2)	191
第175図 6区柱穴平・断面図 1 (1/40)	194
第176図 6区柱穴平・断面図 2 (1/40)	195
第177図 6区柱穴平・断面図 3 (1/40)	196
第178図 6区柱穴平・断面図 4 (1/40)	197
第179図 6区柱穴平・断面図 5 (1/40)・出土遺物 (1/4)	198
第180図 6区柱穴平・断面図 6 (1/40)	199
第181図 6区包含層出土遺物 (1/4)	201
第182図 7区平面図 (1/100)	202
第183図 7区柱穴平・断面図 (1/40)	203
第184図 7区柱穴平・断面図 (1/40)	204
第185図 その他の出土遺物 (1/4)	205
第186図 炭化材顕微鏡写真 1	210
第187図 炭化材顕微鏡写真 2	211
第188図 炭化材 3・木製品顕微鏡写真 1	212
第189図 木製品顕微鏡写真 2	213
第190図 道構変遷図 (1/400)	215
第191図 茶園窪跡出土須恵器 (1/4)	216
第192図 高松市香南町の主要窪跡図 (1/20,000)	217
第193図 大坪窪跡出土須恵器 (1/4)	218
第194図 音谷池東岸窪跡・音谷池出土須恵器 (1/4)	219
第195図 新池窪跡出土須恵器 (1/4)	219

表 目 次

横井南原遺跡	
第1表 柱穴一覧	97
第2表 樹種同定結果一覧	104
第3表 土器胎土分析結果一覧	106
第4表 薄片観察結果 (1)	107
第5表 薄片観察結果 (2)	108
第6表 薄片観察結果 (3)	109
第7表 分析試料の概要	113
第8表 旋光 X 線 (半定量) 分析結果	113
第9表 種実同定結果	114
第10表 横井南原遺跡周溝墓一覧	120
上道池東遺跡	
第11表 1～3区柱穴一覧	148
第12表 5区柱穴一覧	174
第13表 6区柱穴一覧 (1)	193
第14表 6区柱穴一覧 (2)	199
第15表 6区柱穴一覧 (3)	200
第16表 6区柱穴一覧 (4)	201
第17表 7区柱穴一覧	204
第18表 測定試料および処理	206
第19表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	207
第20表 上道池東遺跡出土炭化材及び本製品同定表	209
第21表 横井南原遺跡 土器観察表 (1～4)	221～224
第22表 横井南原遺跡 瓦観察表	224
第23表 横井南原遺跡 玉観察表	224
第24表 横井南原遺跡 石器観察表	225
第25表 横井南原遺跡 金属観察表	225
第26表 上道池東遺跡 土器観察表 (1～13)	226～238
第27表 上道池東遺跡 瓦観察表	238
第28表 上道池東遺跡 玉観察表	238
第29表 上道池東遺跡 木器観察表	239
第30表 上道池東遺跡 金属観察表	239
第31表 上道池東遺跡 石器観察表	239
第32表 歴民資料土器観察表 (1～4)	240～243

写 真 図 版 目 次

写真表紙	
ST4009 北西から	
横井南原遺跡	
図版 1	
1区全景 北から	
22・32区全景 北から	
21区全景 北から	
21区全景 南から	
図版 2	
22・32区全景 北から	
22・31区全景 南から	
22・32区全景 東から	
31区全景 南から	
31区全景 北から	
図版 3	
31・4区南全景 南東から	
31・4区南全景 南から	
4区南・31区全景 北から	
図版 4	
4区北全景 北から	
5区遺構検出状況 北西から	
6区全景 北から	
7区全景 (南半) 北から	
図版 5	
7区全景 北から	
7区 (SD7034・7035付近) 北から	
22区南壁 北から	
1区西壁 東から	
図版 6	
3-1区南壁 北から	
4区西壁 (南半) 東から	
7区西壁 (SD7034) 東から	
7区西壁 (北端) 東から	
周溝墓 1・2 (SX4010) 遺物出土状況 北から	

図版 7	周溝墓 1 SX4015a-a'断面 東から	周溝墓 6 SD3027 土器 (12) 出土状況 東から
	周溝墓 1・2 SX4010 遺構検出状況 北から	周溝墓 6 SD3027 完振状況 東から
	周溝墓 1・2 SX4010 遺物出土状況 東から	周溝墓 6 SD3027a-a'断面 東から
	周溝墓 1・2 SX4010 遺物出土状況 東から	周溝墓 6 SD3027c-c'断面 西から
	周溝墓 1・2 SX4010a-a'断面 西から	周溝墓 6 SD3027b-b'断面 (北半) 東から
図版 8		周溝墓 6 SD3027b-b'断面 (南半) 東から
	周溝墓 1・2 SX4010・SX4011 合流付近遺物出土状況 南から	周溝墓 6 SD3027d-d'断面 東から
	周溝墓 1・2 SX4010a-a'断面付近遺物出土状況 東から	図版 16
	周溝墓 2・3 SX4010g-g'断面 (東半) 南から	周溝墓 6 SD3027e-e'断面 南西から
	周溝墓 2・3 SX4010h-h'断面 (南半) 東から	周溝墓 6 SD3028 東端付近検出状況 北から
	周溝墓 2・3 SX4010i-i'断面 西から	周溝墓 6 SD3028 (東端付近) 西から
	周溝墓 2・3 SX4011j-j'断面 南から	周溝墓 6 SD3028g-g'断面 西から
	周溝墓 2・3 SX4010 土器 (1) 出土状況 南西から	周溝墓 6 SD3028 土器 (21) 出土状況 西から
	周溝墓 2・3 SX4010 土器 (2) 出土状況 西から	周溝墓 3・7 SD5001・5003 西から
	周溝墓 3・7 5-1 区西壁断面 (SD5001) 東から	周溝墓 7 SD5001a-a'断面 北東から
図版 9	周溝墓 4 東から	SD6003a-a'断面 西から
	周溝墓 4 南から	SD6005b-b'断面 東から
図版 10	周溝墓 4 南から	SD7036 土器出土状況 東から
	周溝墓 4・7 検出状況 南から	図版 17
	周溝墓 4・7 南から	SD7036 土器出土状況 北東から
	周溝墓 4 南から	SD3033 断面 東から
	周溝墓 2・4 SD4006m-m'断面 西から	SD7036a-a'断面 西から
	周溝墓 2・4 SD4006 石出土状況 東から	SD7036b-b'断面 西から
図版 11	周溝墓 2・4 SD4006 全景 東から	SD7036c-c'断面 西から
	周溝墓 2・4 SD4006 石出土状況 南西から	SB7001-SP7021 断面 東から
	周溝墓 2・4 SD4006 北から	SB7001-SP7024 断面 東から
	周溝墓 4・5 SD4005 東から	SA3001-SP3034 ~ 3043 断面 北から
	周溝墓 4・5 SD4005 (東半) 南から	図版 18
	周溝墓 4・5 SD4005 土器出土状況 西から	SA3001-SP3039 ~ 3043 検出状況 西から
図版 12	周溝墓 4・5 SD4005b-b'断面 東から	SA3001-SP3037 断面 西から
	周溝墓 4・5 SD4005c-c'断面 東から	SA3001-SP3042 断面 西から
	周溝墓 4・7 SD5003o-o'断面 南から	SX1007 断面 東から
	周溝墓 4・7 SD5003r-r'断面 西から	SX2028b-b'断面 (北半) 西から
	周溝墓 4 ST4009 全景 北西から	SX3013 断面 東から
	周溝墓 4 ST4009a-a'断面 (南半) 西から	SX3014 検出状況 南から
	周溝墓 4 ST4009a-a'断面 (北半) 西から	SX3014 断面 南から
	周溝墓 4 ST4009d-d'断面 南東から	SX4004 断面 南から
	周溝墓 4 ST4009e-e'断面 北西から	SX5004 石出土状況 北から
図版 13	周溝墓 4 ST4009c-c'断面 北西から	SX5006 断面 南から
	周溝墓 4 ST4009g-g'断面 (東半) 南東から	SK7001 断面 南東から
	周溝墓 4 ST4009f-f'断面 (東半) 南東から	SK7002 断面 南から
	周溝墓 4 ST4009f-f'断面 (西半) 南東から	SK7010 断面 南西から
	周溝墓 4 ST4009 短側板擺方土器出土状況 南東から	SK7010 壺出土状況 南西から
	周溝墓 4 ST4009 検出状況 (北半) 北西から	図版 19
	周溝墓 4 ST4009 検出状況 (南半) 南東から	SK7028 断面 西から
	周溝墓 4 ST4009 炭化材 (分析試料含む) 出土状況 南東から	SK7028 壺出土状況 北から
	周溝墓 4 ST4009 完振状況 北東から	SK7029 断面 西から
図版 14	周溝墓 5・6 東から	SK7029 壺出土状況 東から
	周溝墓 6 北東から	SK7030 断面 北から
	周溝墓 6 北西から	SK7030 壺出土状況 東から
図版 15	周溝墓 6 SD3027 土器出土状況 西から	SK7030 ~ 7033 東から
	周溝墓 6 SD3027 西端付近土器出土状況 西から	SK7031 壺出土状況 南から
		SK7032 壺出土状況 南から
		SD1001b-b'断面 北東から
		SX2002 周辺 南西から
		SD2055 土器 (55) 出土状況 東から
図版 16		図版 20
		SX2002d-d'断面 東から
		SX2003・2004b-b'断面 南から
		SX2004c-c'断面 南から

SX2004	南から	上道池東遺跡
SD2021	周辺 西から	図版 28
SD2021	断面 北から	1区全景 南から
SD2023	断面 北から	1区全景 南西から
SD2031	断面 東から	22区遺構検出状況 南から
SD2032a-d	断面 南から	21区全景 北から
SD2033b-b'	断面 東から	2-3区全景 北から
図版 21		3-4区全景 南から
3区・4区	全景 南から	3-1区全景 南から
SK3003b-b'	断面 南から	1区南壁土層 北から
SD3004・3015	北東から	22区西壁土層 東から
SD3049b-b'	断面 北から	21区西壁土層 北東から
SK3003・SK3004-c	断面 南から	③2-3区北半部南壁土層(西半) 北から
SD3015・SD3004-h	断面 西から	図版 29
SD3015d-d'	断面 南から	3-2区全景 北から
SD3015e-e'	断面 南から	3-1区全景 南から
SX3013・SD3028	断面 東から	1区南壁土層 北から
SD3007d-d'	断面 南から	22区西壁土層 東から
SD3007e-e'	断面 南から	21区西壁土層 北東から
図版 22		③2-3区北半部南壁土層(西半) 北から
SD3007・SD3004・SD3015	北西から	図版 30
SD3007	北から	1-3区 SB01 北西から
SD3007・SD3008・SK3003・SK3006	周辺 南から	1区 SB01-SP04 断面 南西から
SD3007e-c'	断面 南から	3区 SB01-SP23 断面 南東から
SD3007 上層	土器(74) 出土状況 南から	3区 SB01-SP26 断面 南東から
SD3007 最上位	土器(75) 出土状況 東から	3区 SB01-SP27 断面 南東から
SD3008k-k'	断面 西から	3区 SB01-SP29 断面 南西から
SD3008j-j'	断面 東から	1区南壁土層(SK04付近) 北から
SD3032b-b'	断面 南から	2区 SK06 土器(1) 出土状況 北から
図版 23		2区 SK06 土器(1) 出土状況 北から
SD3008・SK3003・SK3006	周辺 東から	図版 31
SD3049・SD3050・SD3054	周辺 東から	2区 SX01 内 SF01 検出状況 南から
SD3050 土器(79)	出土状況 南から	2区 SX01 内 SF01 検出状況 南東から
SD3050c-c'	断面 南から	2区 SF01a-a'(西半)・b-b'(北半) 断面 北西から
SD3050d-d'	断面 南から	2区 SF01b-b' 断面 北から
SD3050e-e'	断面 南から	2区 SX01 内 SF01 検出状況・SX01 断面 南西から
SD3050f-f'	断面 南から	2区 SX01 土器(2) 出土状況 東から
SD3050h-h'	断面 南から	2区 SX01 土器(3) 出土状況 南東から
SD3050j-j'	断面 南西から	2区 SF01b-b' 断面(南半) 東から
SD3050a-a'	断面 東から	図版 32
図版 24		2区 SF01 検出状況 西から
7区全景(北側)	北から	2区 SF01 北西から
SD7003c-c'	断面 東から	2区 SX01 北西から
SD7004e-e'	断面 北から	1区 SK02 断面 西から
SD7006d-d'	断面 北から	1区 SD01～SD05 南から
SD7034	断面 東から	3区 SD02・SD04・SD05 断面 北東から
SD7035d-d'	断面 北から	3区 SD02・SD04・SD05f-f' 断面 南から
SP2009	断面 北から	図版 33
SP2013	断面 北から	1区 SD02・SD04・SD05b-b' 断面 北から
SP2015	断面 西から	2区 SD06・SD07e-e' 断面 北から
SP2053	断面 西から	1-2区 開溝検出状況 南から
SP2065	断面 南から	1区 SD02～SD05a-a' 断面付近開溝完掘状況 南から
SP3044	断面 西から	1区 開溝 1断面 北から
図版 25		1-2区 第4層上面開溝完掘状況 南から
遺物写真 1		1-2区 開溝完掘状況(第4層上面) 南から
図版 26		21区 開溝・牛蹄跡・ピット検出状況(南部) 南から
遺物写真 2		21区 開溝・牛蹄跡・ピット完掘(南部) 東から
図版 27		22区 牛蹄跡検出状況 南から
遺物写真 3		22区 牛蹄跡完掘状況 南から
		22区 牛蹄跡検出状況 南から
		22区 牛蹄跡検出状況 南から
		22区 牛蹄跡1・2完掘状況 南から
		22区 牛蹄跡完掘状況 北から

- 図版 35
- 1区 SP10 断面 南から
 - 1区 SP11 断面 南から
 - 2区 SP14 断面 東から
 - 3区 SP21 断面 南から
 - 1区 SP07 断面 南西から
 - 3区 (9) 南西から
 - 21区 (36) 東から
 - 21区 (37) 東から
 - 1-2区第5層 (39) 東から
 - 1-1区第5層 (43) 東から
 - 21区 (45) 北西から
 - 21区 (45) 北から
 - 22区第5層 (52) 南東から
 - 22区第5層 (52) 東から
 - 21区 (54) 西から
 - 22区 第5層 (59) 西から
 - 22区 第5層 (59) 北から
- 図版 36
- 21区第5層 (50) 東から
 - 21区第5層 (50) 北西から
 - 21区第5層 (50) 北から
 - 21区第5層 (61) 東から
 - 21区第4層 (67) 北東から
 - 21区第4層 (84) 北西から
 - 21区第4層 (115) 北東から
 - 12区第4層 (93) 西から
 - 22区第4層 (97) 東から
 - 21区第4層 (98) 北西から
 - 21区第4層 (103) 西から
 - 22区第4層 (110) 北から
 - 22区第3層 (129) 南から
- 図版 37
- 4区 1 トレンチ全景 南から
 - 4区 1 トレンチ北壁土層 南から
 - 5区 全景 南から
 - 5区 e-e' 土層 (西半部) 北から
 - 5区 e-e' 土層 (東半部) 北から
- 図版 38
- 5区 全景 南から
 - 5区 SB5001 北から
 - 5区 SB5001 東側石列 東から
 - 5区 SB5001 東側石列 西から
 - 5区 SB5001 東側石列 西から
 - 5区 SB5001 東側石列 西から
 - 5区 SB5001 西から
 - 5区 SB5001 北側石列 南から
 - 5区 SB5001 南西隅 南から
 - 5区 SK5004 壁出土状況 南から
 - 5区 SD5002 南から
 - 5区 SD5004 北から
- 図版 39
- 5区 SD5004 土管検出状況 北から
 - 5区 SD5001・SD5003 合流部 南から
 - 5区 SD5001・SD5003 合流部 東から
 - 5区 SD5001・SD5003 合流部 北東から
 - 5区 e-e' 断面 SP5001 検出状況 北から
 - 5区 SP5007 遺物 (181) 出土状況 上から
- 5区 SP5007 遺物 (181) 出土状況 北から
- 6区 全景 (南半) 東から
- 図版 40
- 6区 北壁土層 南から
 - 6区 全景 (西半) 南から
 - 6区 SK6008 断面 南から
 - 6区 SK6009 断面 南から
 - 6区 SK6010 遺物 (250) 出土状況 南から
 - 6区 SK6010 石管検出状況 東から
 - 6区 SK6010 石管検出状況 北から
 - 6区 SK6011・SD6002・SD6003 断面 南から
- 図版 41
- 6区 SK6015 遺物検出状況 南から
 - 6区 SK6015 遺物検出状況 西から
 - 6区 SK6015・SK6010a-a' 断面 南から
 - 6区 SD6001・SD6002 断面 南から
 - 6区 SD6004 断面 南から
 - 6区 SP6001 断面 南から
 - 6区 SP6003 断面 南から
 - 6区 SP6007 断面 南から
 - 6区 SP6010 断面 北から
 - 6区 SP6011 断面 東から
 - 6区 SP6019 断面 西から
 - 6区 SP6020 断面 南から
 - 6区 SP6071 断面 北から
 - 6区 SP6072 断面 南から
- 図版 42
- 6区 SP6082 断面 東から
 - 6区 SP6089 断面 西から
 - 6区 SP6089 底面石出土状況 南から
 - 6区 SP6098 断面 南から
 - 6区 SP6100 断面 南から
 - 7区 1 トレンチ 北西から
 - 7区 1 トレンチ 北壁土層 南から
 - 7区 2 トレンチ 北から
 - 7区 2 トレンチ 北壁土層 南西から
 - 7区 2 トレンチ 北壁土層 南から
 - 7区 SP7007 南から
- 図版 43
- 遺物写真 1
- 図版 44
- 遺物写真 2
- 図版 45
- 遺物写真 3
- 図版 46
- 遺物写真 4
- 図版 47
- 遺物写真 5

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯

県道円座香南線（香南工区）道路整備に先立ち、高松市香南町横井周辺について、平成28年度に香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課が事業実施機関として、香川県埋蔵文化財センターが試掘調査を担当した。その結果、遺構が検出され、須恵器、土師器などが出土し、遺跡が確認されたため、2,077m²について、事業実施に先立ち保護措置が必要と判断され、「横井南原遺跡」として発掘調査を実施することになった。

平成29年度には、前年度に試掘調査を実施できなかった部分について、本調査と平行して試掘調査を実施した。その結果、遺構の広がりが確認されたため、引き続き併せて本調査を実施した。



第1図 調査地位置図 (1/800,000)

同じく、県道円座香南線（香南工区）用地の、高松市香南町上道池周辺について、令和元年11月に香川県埋蔵文化財センターが担当して予備調査を実施したところ、遺構、古代～近世の遺物包含層が確認され、須恵器、陶磁器片が出土したため、1,278m²について「上道池東遺跡」として本調査を実施することとした。また、令和元年11月の予備調査の際に、家屋が未退去のため調査が実施できていなかった用地について、令和2年度2月から、本調査と並行して、家屋が撤去された用地から順次予備調査を実施した。

第2節 調査の経過

横井南原遺跡は、平成29年度1月に394m²、平成29年4月～10月に2,741m²の発掘調査を実施した。調査は直営方式で実施した。平成29年度には、本調査と並行して、試掘調査が終了していなかった部分についても試掘調査を実施し、遺構が確認できた1,058m²についても期間中に合わせて実施した。

発掘調査の体制は以下のとおりである。

平成28年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
範括	課長 小柳 和代	副課長 片桐 孝浩	所長 増田 宏	次長 森 格也	
範務・生涯学習推進グループ	課長補佐 爰丸 伊知朗	副主幹 松下 由美子	秘書課 課長（兼）	副主幹 遠藤 政好	
	主事 和木 麻佳		主任	主任	寺岡 仁美
文化財グループ	課長補佐（兼） 片桐 孝浩	主任文化財専門員 山下 平重	主任	主任	高木 秀哉
	主任文化財専門員 乗松 真也		主任	主任	丸尾 麻知子
			主任	主任	西谷 敬司
			主任	主任	岩崎 昌平
			調査課 課長	調査課 技師	森 格也
				嘱託	竹内 裕貴
				嘱託	今井 由佳

平成29年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
範括	課長 小柳 和代	副課長 片桐 孝浩	所長 増田 宏	次長 森 格也	
範務・生涯学習推進グループ	課長補佐 中川 純朗	副主幹 松下 由美子	秘書課 課長（兼）	副主幹 遠藤 政好	
	主事 和木 麻佳		主任	主任	高橋 駿行
文化財グループ	課長補佐（兼） 片桐 孝浩	主任文化財専門員 信里 芳紀	主任	主任	丸尾 麻知子
	主任文化財専門員 乗松 真也		主任	主任	岩崎 昌平
			主任	主任	横井 隆史
			調査課 課長	調査課 文化財専門員	森 格也
				文化財専門員	山元 素子
				文化財専門員	宮崎 哲治
				主任	西谷 啓司
				主任技師	真鍋 貴匡
				技師	大山 駿矢
				嘱託	井上 加奈子
				嘱託	名倉 美保
				嘱託	懸永 貴美
				嘱託	角野 熊

上道池東遺跡は、令和元年度に予備調査を実施し、遺跡が確認された1,278m²について、令和2年11月～令和3年2月に本調査を実施した。直営方式で実施した。

当初は、令和3年2・3月に、家屋の撤去が完了した用地から予備調査を実施し、令和3年度当初から本調査を実施する予定であったが、家屋の撤去が予定より早く進んだため、予備調査の実施後必要に応じて調査範囲を広げて本調査として実施し、令和3年3月に保護措置を完了させた。

また、隣接する上道池の一部が工事用地に含まれることから、池の水を抜く機会を捉えて遺跡の有無、特に、本調査で須恵器の焼成失敗品が多く出土したことから、須恵器窯跡の痕跡の有無を確認した。しかし、窯跡などの遺跡の痕跡は認められなかった。

発掘調査の体制は以下のとおりである。

令和2年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長 渡邊 智子	統括	所長 西岡 達哉		
副課長	愛染 伊知朗		次長 横口 隆幸		
統務・生涯学習推進グループ	課長補佐(兼) 愛染 伊知朗	秘務課	課長(兼) 横口 隆幸		
	副主幹 長谷川 江里		副主幹 齋藤 政好		
	主事 尾平 俊		主任 高橋 鞠行		
文化財グループ	課長補佐 古野 錠久		主任 石田 こずえ		
	主任文化財専門員 松本 和彦		主任 寺尾 一夫		
	技師 益崎 卓巳		主任 遠山 豊		
		調査課	課長 佐藤 電馬		
			主任 斎藤 博実		
			技師 谷本 雄也		
			会計年度任用職員 名倉 美保		
			会計年度任用職員 徳永 貴美		

第3節 整理作業の経過

整理作業は、令和3年10月～令和4年5月に、横井南原遺跡・上道池東遺跡と併せて、1班体制で実施した。

横井南原遺跡は、樹種同定、種実同定、ガラス玉分析、土器胎土分析を株式会社文化財コンサルタントへ委託して実施した。

上道池東遺跡は、注記作業を株式会社文化財サービスへ委託して実施した。樹種同定、AMS年代測定を株式会社吉田生物研究所へ委託して実施した。

整理作業の体制は以下のとおりである。

令和3年度整理体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
範囲	課長	渡邉 智子	範囲	所長	高原 康
	副課長	佐藤 遼馬		次長	北山 健一郎
範務・生涯学習推進グループ	課長補佐	長谷川 江里	範務課	課長（兼）	北山 健一郎
	副主幹	桑原 秀樹		副主幹	高橋 真行
	主事	安藤 瑞基		主任	石田 こずえ
文化財グループ	課長補佐（兼）	佐藤 遼馬		主任	松浦 佐和
	主任文化財専門員	森下 英治		主任	寺尾 一夫
	技師	竹内 勉貴		主任	遠山 豊
			資料普及課	課長	信里 芳紀
				文化財専門員	山元 素子
				会計年度任用職員	北瀬 敦子
				会計年度任用職員	小早川 真由美
				会計年度任用職員	土井 美穂
				会計年度任用職員	中野 俊美
				会計年度任用職員	加藤 恵子
				会計年度任用職員	大山 和子
				会計年度任用職員	小林 奈光子
				会計年度任用職員	山本 基公美
				会計年度任用職員	佐立 晶子
				会計年度任用職員	池内 妙子
				会計年度任用職員	大林 真沙代
				会計年度任用職員	森 后代
				会計年度任用職員	池田 匹

令和4年度整理体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
範囲	課長	萩原 鈴嗣	範囲	所長	高原 康
	副課長	佐藤 遼馬		次長	北山 健一郎
範務・生涯学習推進グループ	課長補佐	長谷川 江里	範務課	課長（兼）	北山 健一郎
	副主幹	福田 正裕		主任	岩西 浩二
	主事	安藤 瑞基		主任	石田 こずえ
文化財グループ	課長補佐（兼）	佐藤 遼馬		主任	松浦 佐和
	主任文化財専門員	森下 英治		主任	遠山 豊
	文化財専門員	宮崎 哲治		主任	寺尾 一夫
			資料普及課	課長	信里 芳紀
				主任文化財専門員	山元 素子
				会計年度任用職員	北瀬 敦子
				会計年度任用職員	小早川 真由美
				会計年度任用職員	大林 和子
				会計年度任用職員	山本 基公美
				会計年度任用職員	佐立 晶子
				会計年度任用職員	池内 妙子
				会計年度任用職員	森 后代
				会計年度任用職員	池田 匹

参考文献

香川県教育委員会 2018「理蔵文化財試掘調査報告 XXIX 平成 27、28 年度 香川県内遺跡発掘調査」

第2章 立地と環境

この地域の立地と環境については、「県道円座香南線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 池内古田遺跡・池内御所原遺跡」に詳しいので、同書を参照されたい。本書では、遺跡の立地と周辺の遺跡について簡単に触れておく。

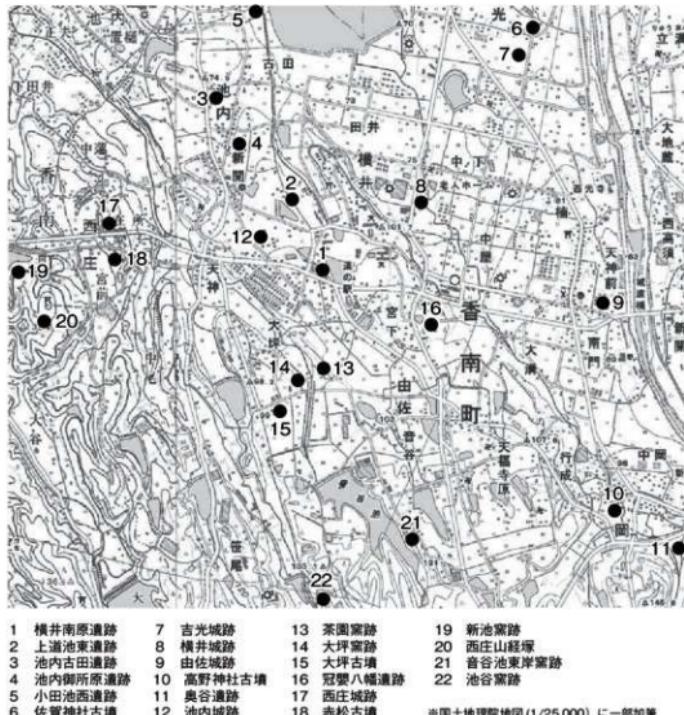
横井南原遺跡・上道池東遺跡は、更新世段丘のうちの中位段丘面に立地し、概ね北西方向へ緩やかに傾斜する。中小河川の浸食による狭い開析谷が八手状に入り組んでおり、両遺跡ともその斜面上に立地

する。

弥生時代の遺跡では、実態は明らかではないが、弥生土器が採集された冠堀神社遺跡、小田池西遺跡、奥谷遺跡等がある。古墳時代では、下位段丘面に横穴式石室を持つ佐野古墳、中位段丘面には下田井古墳や赤松古墳等が認められる。古代では、開析谷斜面に須恵器窯跡群が認められるようになる。7世紀末～9世紀代に操業していたもので、現在茶園窯跡、大坪窯跡、新池窯跡、音谷池東窯跡、池谷窯跡が知られている。中世では、池内古田遺跡で水路群が掘削され、水田開発が始まる。近世には溜池の築造が進み水源が確保されると、本格的な水田開発が進み、現在の景観の基礎が造られたと考えられる。

参考文献

- 松本敏三・岩橋幸一 1985「香川県古代商業道路分析調査報告Ⅱ(旧多度郡・旧那珂郡以東)」瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第2号 瀬戸内海歴史民俗資料館
香川県教育委員会 2003「香川県中世城館詳細分布調査報告」
高松市教育委員会 2005「櫛岡山古墳・城所山古墳群」



第2図 周辺の遺跡

第3章 横井南原遺跡の調査の成果

第1節 調査の方法

調査は、平成28年度に実施した南東部分を1区とし、平成29年度は、2区から7区まで、概ね田畠の筆ごとに調査区を設定して調査を行った。

造成土・耕作土は重機により掘削し、包含層・遺構は人力により掘削を行った。平面図はCubic「遺構くん」により作成し、適宜手描きによる実測図を作成した。断面図は手描きにより作成した。

第2節 土層

各調査区では土層堆積状況の確認のため、壁面で土層図を作成した。池側である東側は尾池のコンクリート擁壁との境界であったため概ね西側の壁面で作成し、適宜東西方向の壁面の土層図を加えた。地形は、西側の丘陵上部から東側の尾池に向けて傾斜し、南から北へ緩やかに傾斜する。

①②1区西壁・南壁（第4図）

厚さ0.7m～1m程度の表土・造成土の下部でベースを検出した。

西壁では、ベースは10cm大の風化礫が多く含む浅黄橙色シルトで、削平を受けていると考えられる。ベースの標高は南北方向の延長35mで89.9～90.1mで、緩やかに北へ傾斜する。

南壁は東半部について作成した。ベースは、調査区東端付近ではにぶい黄色シルト（灰白色粘質土を含む）層、中央から西側では10cm大の風化礫を含む浅黄褐色シルト層で、もともと標高の高かった調査区西側で削平が著しいことが窺える。

③2区中央あぜ（第5図）

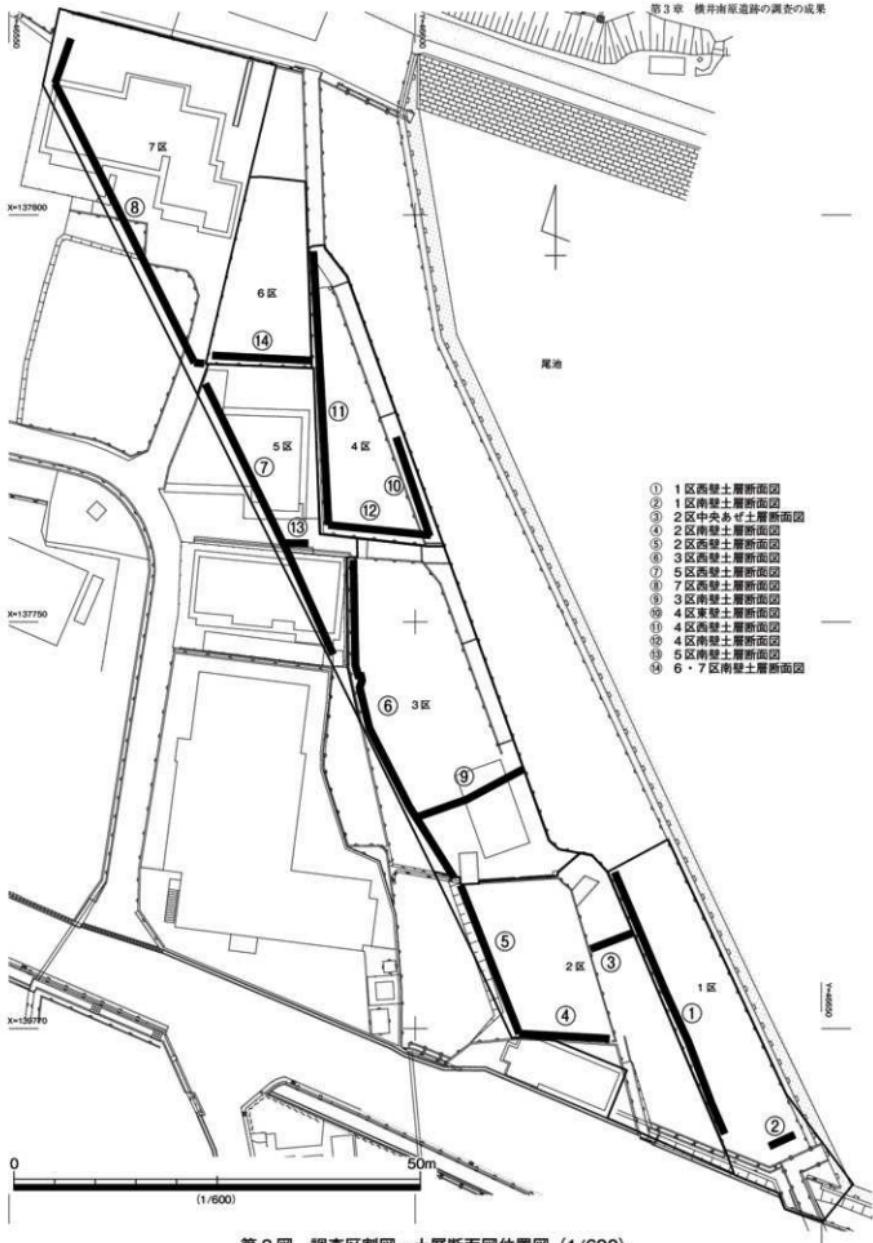
2-1区やや北寄りで設定した東西方向の土層観察用あぜである。上面から20cm程度までは近代までの耕作土、その下部30cmの近世以降の包含層が認められ、その下部でSX2003と考えられる溝状遺構がある。ベースの標高は概ね89.5mで、風化礫を多量に含む黄褐色粘質土・浅黄色粘質土である。

④⑤2区南壁・西壁（第6図）

基本層序は造成土・耕作土・灰色砂混粘質土（旧耕土）、ベースである。

南壁では造成土は東端以外は認められず、標高は概ね91.9m付近で耕作土、91.75m付近で灰色砂混粘質土（旧耕土）、91.5m付近でベースを検出した。もともと標高が高かった西側は、ベースは風化礫で、著しく削平を受けていると考えられる。東半部は、風化礫の上に明黄褐色粘質土（風化礫混）のベースが認められた。東端部付近では床土を切り込んでSD2032の断面が認められた。

西壁では、耕作土面の標高は91.9m、ベースの標高は91.6m程度である。ベースは風化礫で、削平を受けたものと考えられる。北端ではSD2033の断面が認められ、その一部を破壊してコンクリート畔の掘方が認められた。



第3図 調査区割図・土層断面図位置図 (1/600)

⑥⑦⑧ 3・5・7区西壁（第7～9図）

基本層序は造成土、耕作土、床土、ベースである。

3区では耕作土直下でベースを検出した。表土上面の標高が概ね91.5m、ベースの標高は91.2m程度である。ベースは風化礫で、削平を受けていると考えられる。全体にベースは南から北へ緩やかに、西から東へやや急に傾斜し、3区は5・7区に比べやや低い。

5区はもと宅地部分で、厚さ1m程度の造成土の下部に、標高91.7～91.8mで宅地造成以前の旧耕作土上面を、標高91.5m程度で明黄褐色粘土（風化礫を多く含む）のベースを検出した。南半でのみ耕作土の下部で厚さ10cm程度の床土を検出した。

7区ももと宅地部分である。厚さ0.3～0.5m程度の造成土の下部で、標高91.5～91.9mで宅地造成以前の旧耕作土の上面を、標高91.3～91.7mでベースを検出した。ベースの上面は北へ傾斜する。調査区北端付近は尾池の埋立土が認められた。

⑨3区南壁（第10図）

基本層序は造成土、現代耕作土、床土、旧耕土、ベースである。

SD3007を境に西側では耕作土直下でベースが認められる。現代耕作土上面は91.4m、ベースは91.1mで、ベースは削平を受けている。SD3007より東側では現代耕作土、床土、旧耕土が認められ、その下部でSD3050、SK3003を検出した。現代耕作土上面は91.5m程度、ベース面は91.3mを最高にして東側へ傾斜する。

⑩⑪⑫⑬4区東壁・西壁・南壁、5区南壁（第11～14図）

基本層序は耕作土、造成土、近世～近代の耕作土・包含層、黄褐色粘土（風化礫混じり）（ベース）である。

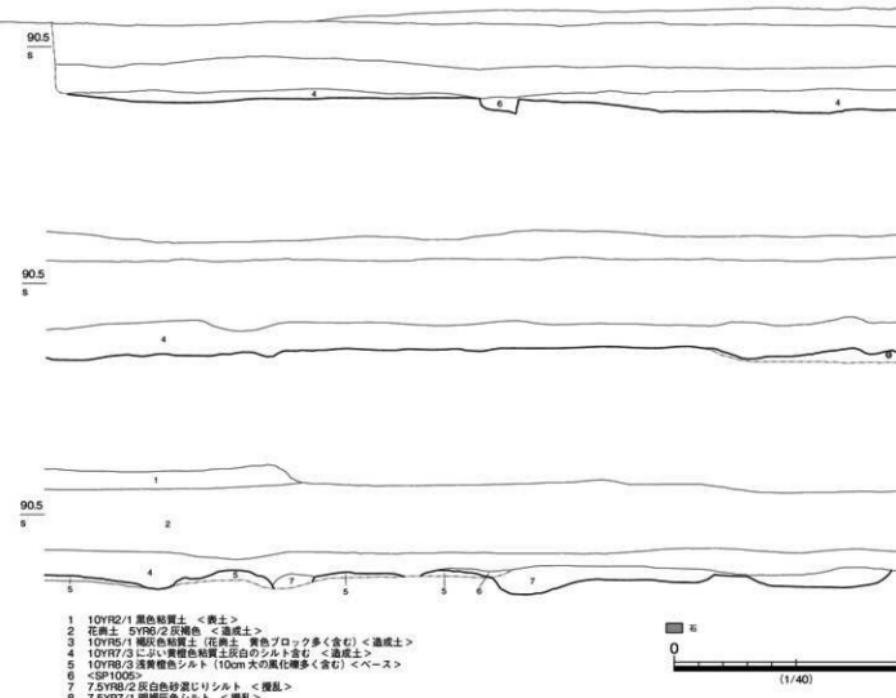
東壁では、浅黄色シルト（近世以降の包含層）の下部で、南から7m付近までSD3007又はSD3015埋土（灰黄色シルト層）が8cm程度堆積し、その下部に周溝墓を構成するSD4005・4006の埋土が堆積する。土層断面からは、SD4006がSD4005に先行することがわかる。SD4005・4006の上面は標高90.7～90.8mで、北側へ傾斜する。3区周辺は標高が低いようである。

西壁は、厚さ30～40cm程度の耕作土、造成土、近世～近代耕作土の下部で周溝墓を構成するSD4006、SX4010を検出した。ベースは黄褐色粘質土で、筋状の灰白色粘質土、風化礫が混じる。ベースは削平を受けたと考えられる。遺構面の標高は概ね91.1mである。調査区北端付近では、厚さ20cm程度の淡黄灰色・灰黄色粗砂混粘質土の包含層が堆積する。

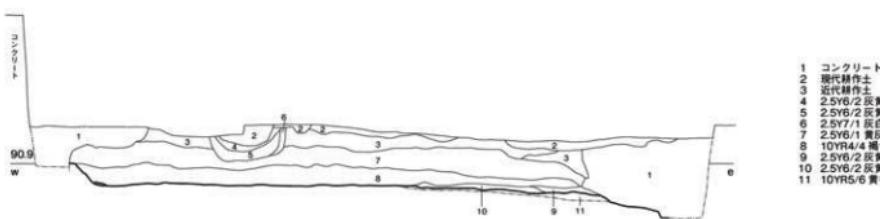
南壁では、概ね中央付近から西側は、厚さ25～35cmの耕作土・造成土・近世～近代耕作土層の下部で周溝墓を構成するSD4005を検出した。周溝墓の検出面の標高は約90.9～91.1mである。ベースは風化礫の混じる黄褐色粘質土層である。調査区東側ではSD3007の断面が認められる。調査区の西半部のベースは標高が高く、調査区中央付近の傾斜変換点付近に近世の溝SD3007を掘削し、その後堆積により平準化した様子が窺える。SD3007の検出面の標高は90.85～91.0mである。

5区南壁は4区南壁とは連続する位置関係である。もとは宅地であり、厚さ12m程度の造成土の下部で風化礫を含む黄褐色粘土のベースを検出した。削平を受けていると考えられる。ベースの標高は91.4mで、4区より30cm程度高い。

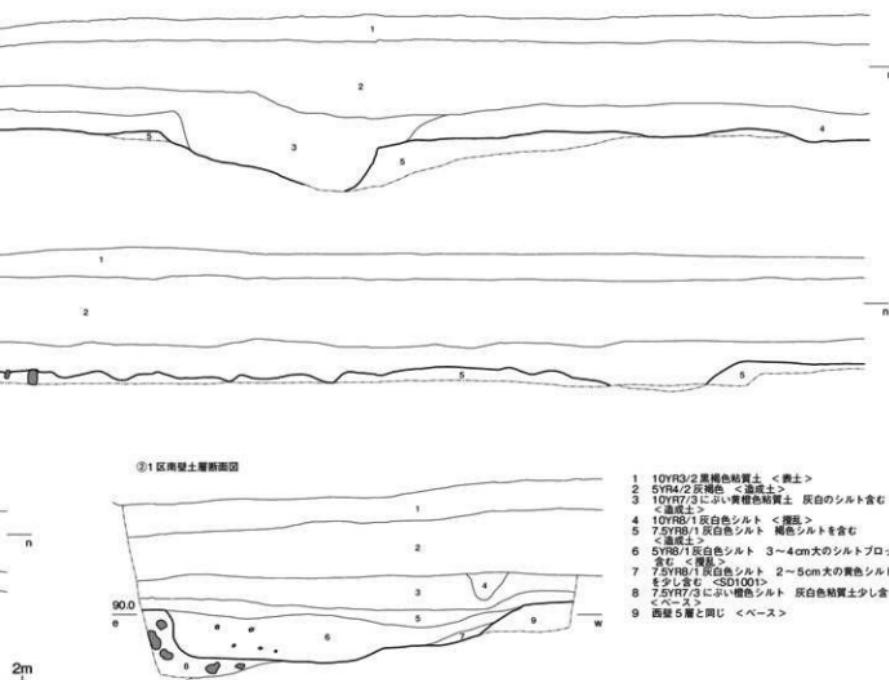
① 1区西壁土層断面図



第4図 ① 1区西壁土層断面図



第5図 ③ 2区中央あらわし

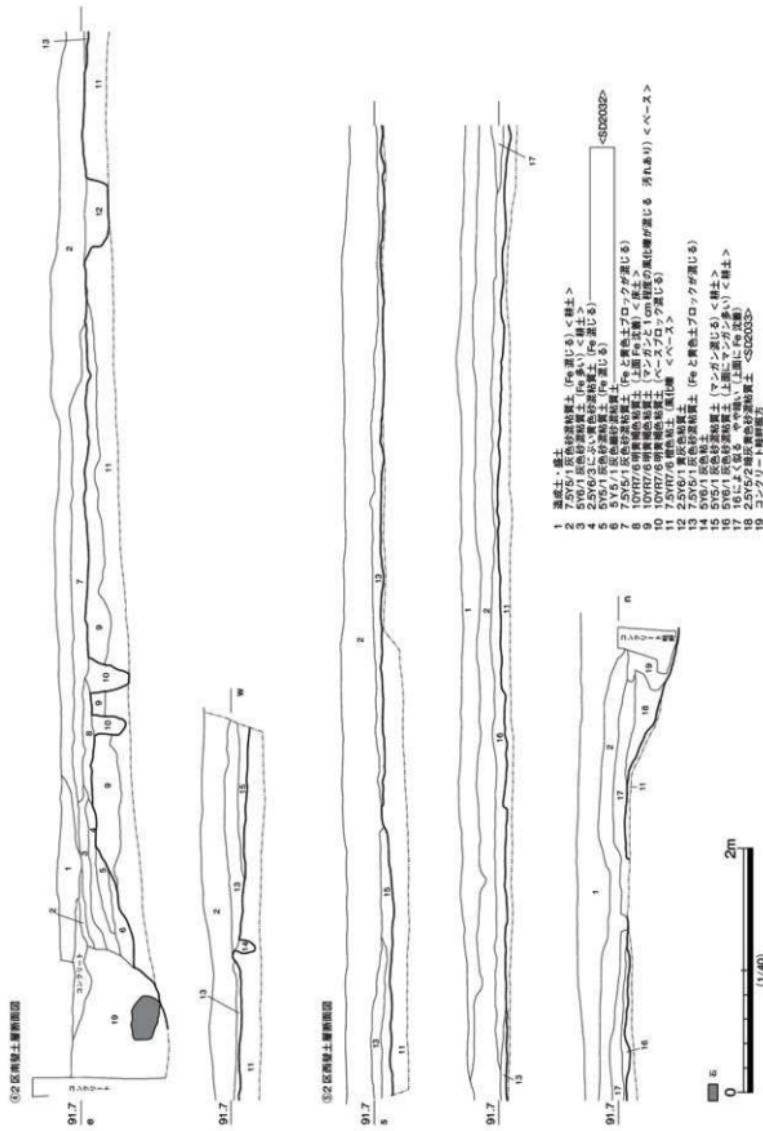


② 1区南壁土層断面図 (1/40)

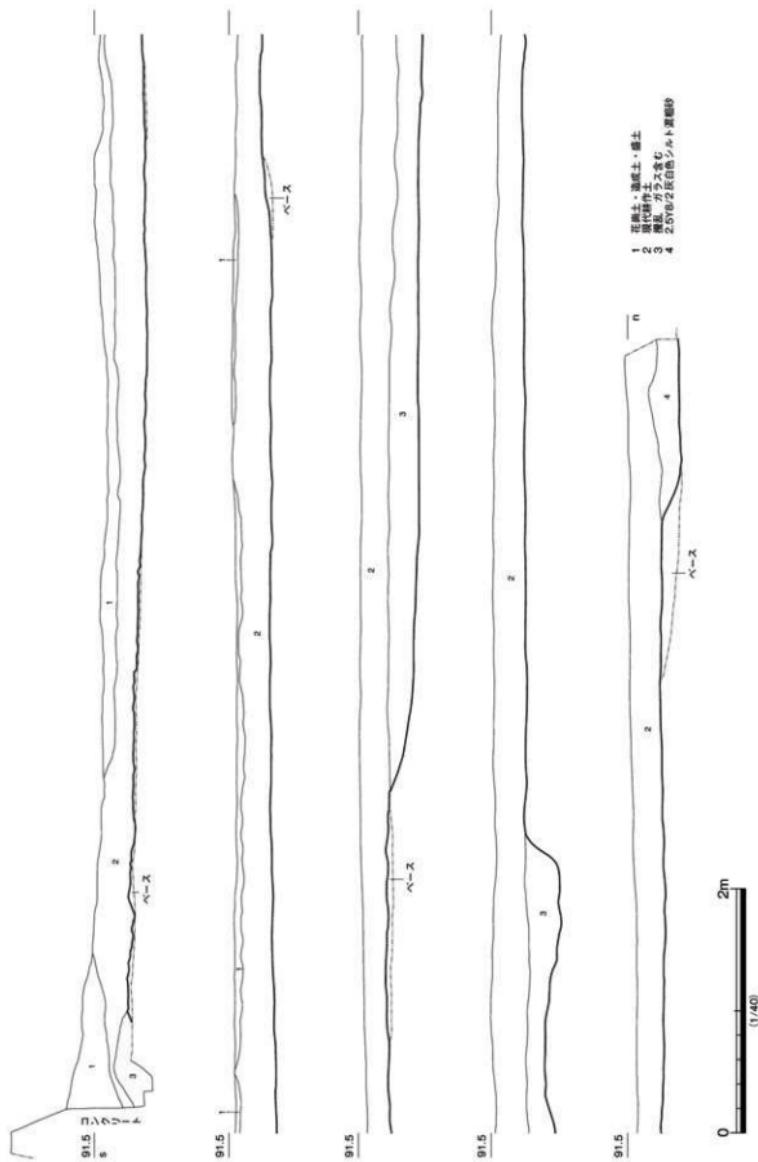
堆積物
 黄色シルトにマンガンが層状に混じる
 黄色シルトと 10YR4/4 黄褐色粘質土が斑に混じる
 黄褐色粘質土と 10YR3/4 相模褐色粘質土が斑に混じる
 黄褐色粘質土と 2.5Y6/1 黄褐色粘質土が斑に混じる (3mm ~ 3cm 大の風化塊を少量含む)
 黄色シルトと 10YR5/4 にふい黃褐色シルトが斑に混じる (5mm 大の風化塊を中量含む) < SX2003 か >
 黄色シルトと 2.5Y6/4 にふい黃褐色シルトが混じる (2mm 大の風化塊が斑に混じる) < SX2003 か >
 黄褐色粘質土と 2.5Y7/3 混青色粘質土が混じる (5mm ~ 5cm 大の風化塊を多量に含む) < ベース >



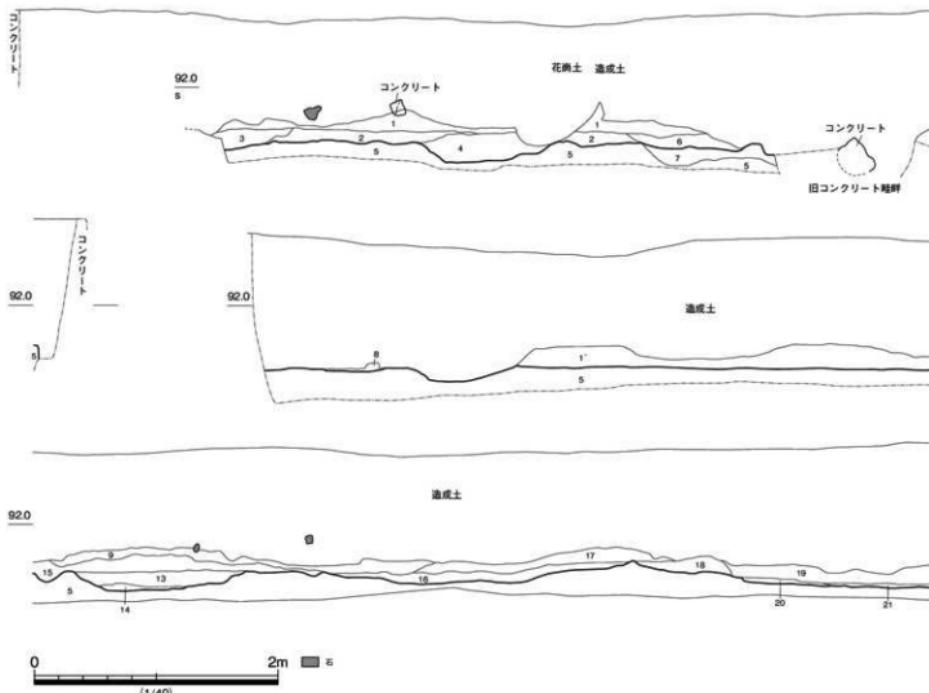
・ゼ土層断面図 (1/40)



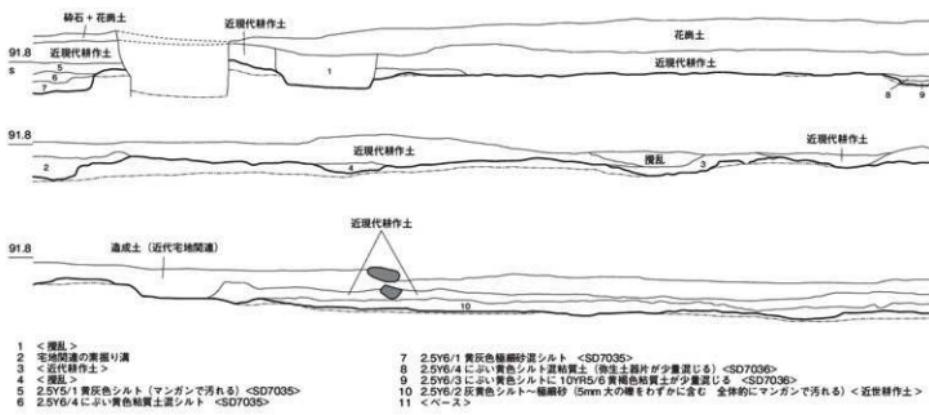
第6図 ④2区南壁土層断面図・⑤2区西壁土層断面図 (1/40)



第7図 ⑥ 3区西壁土層断面図 (1/40)



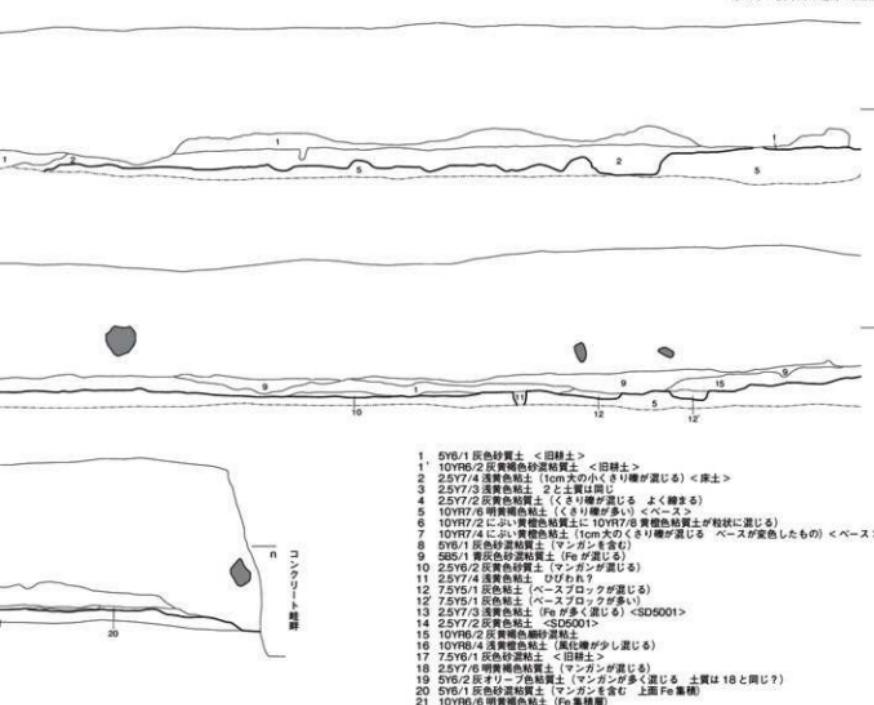
第8図 ⑦5区西壁



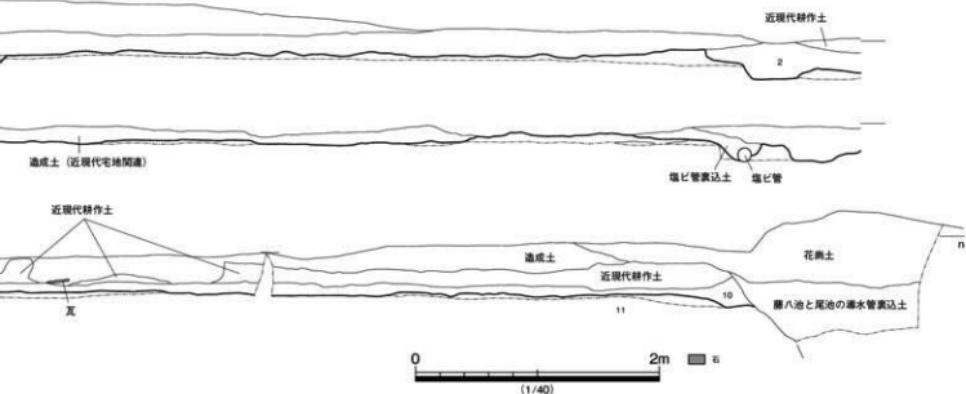
- 1 <擾乱>
- 2 宅地開闢の表面層
- <近現代耕作土>
- 4 混凝土
- 5 2.5Y5/1 青灰色シルト（マンガで汚れる）<SD7035>
- 6 2.5Y6/4 に青色シルト（マンガで汚れる）<SD7035>

- 7 2.5Y6/1 青灰色極細砂混シルト <SD7035>
- 8 2.5Y6/1 に青色シルト混粘土（生土断片が少々混じる）<SD7036>
- 9 2.5Y6/3 に青色シルトに10mm位黄褐色粘土が少々混じる <SD7036>
- 10 2.5Y6/2 灰青色シルト一極細砂 (5mm位の塊をわずかに含む 全体的にマンガで汚れる) <近現代耕作土>
- 11 <ベース>

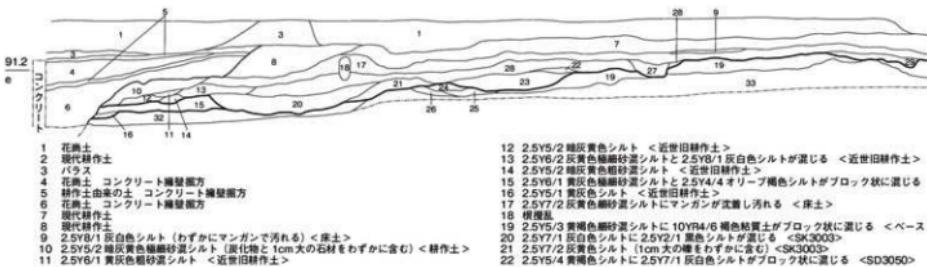
第9図 ⑧6区西壁



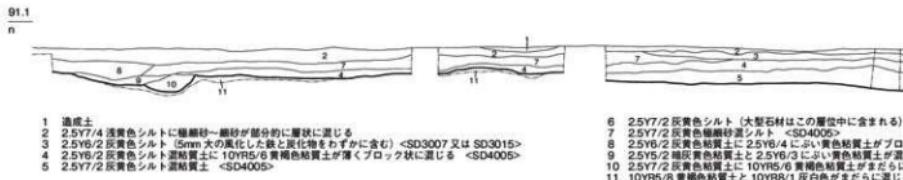
土層断面図 (1/40)



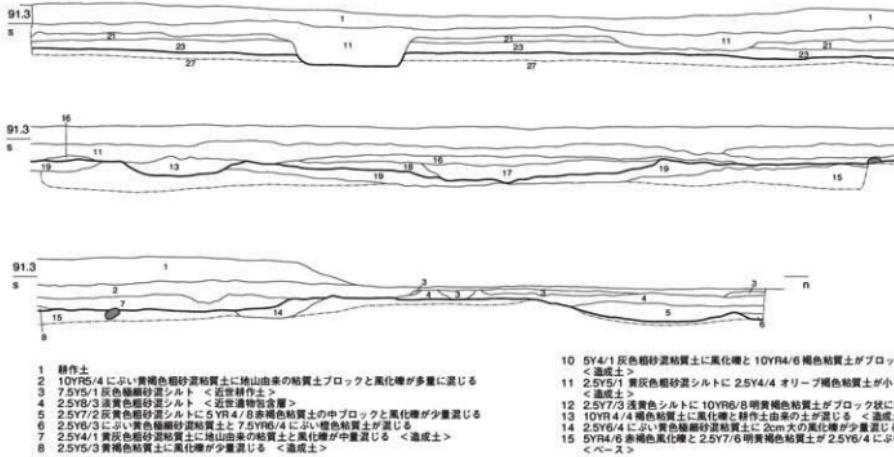
土層断面図 (1/40)



第10図 ⑨ 3区南壁



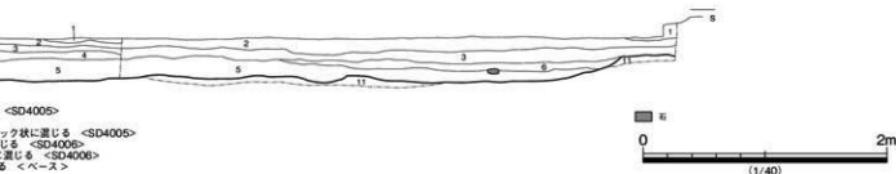
第11図 ⑩ 4区東壁



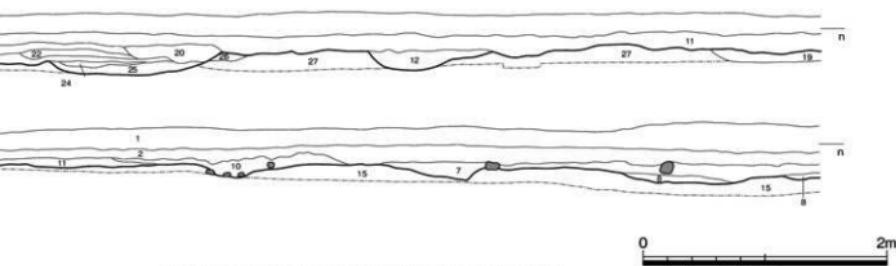
第12図 ⑪ 4区西壁



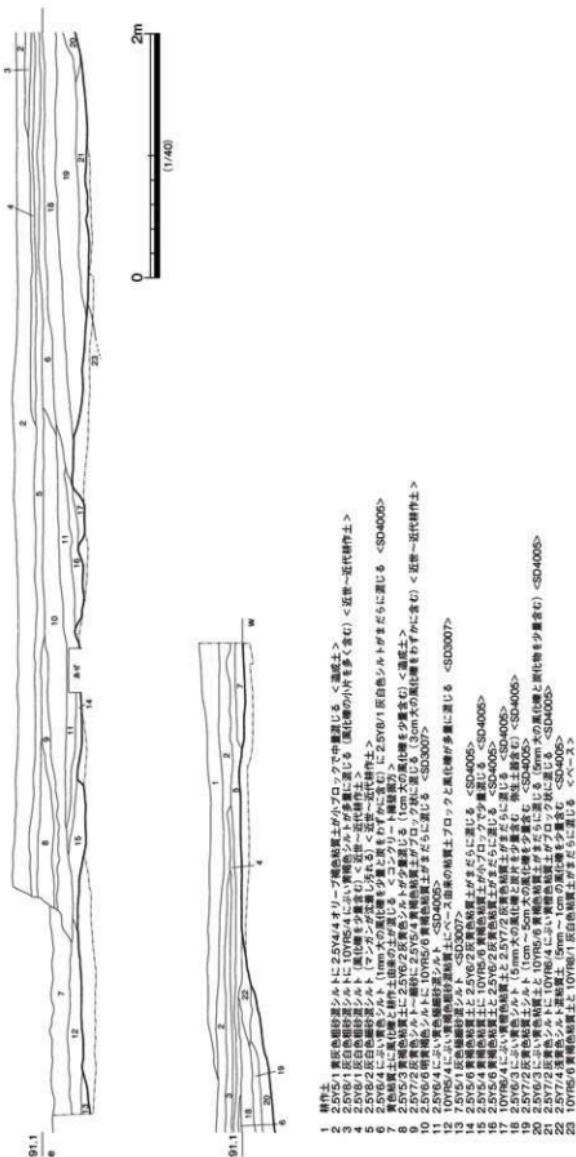
壁土層断面図 (1/40)



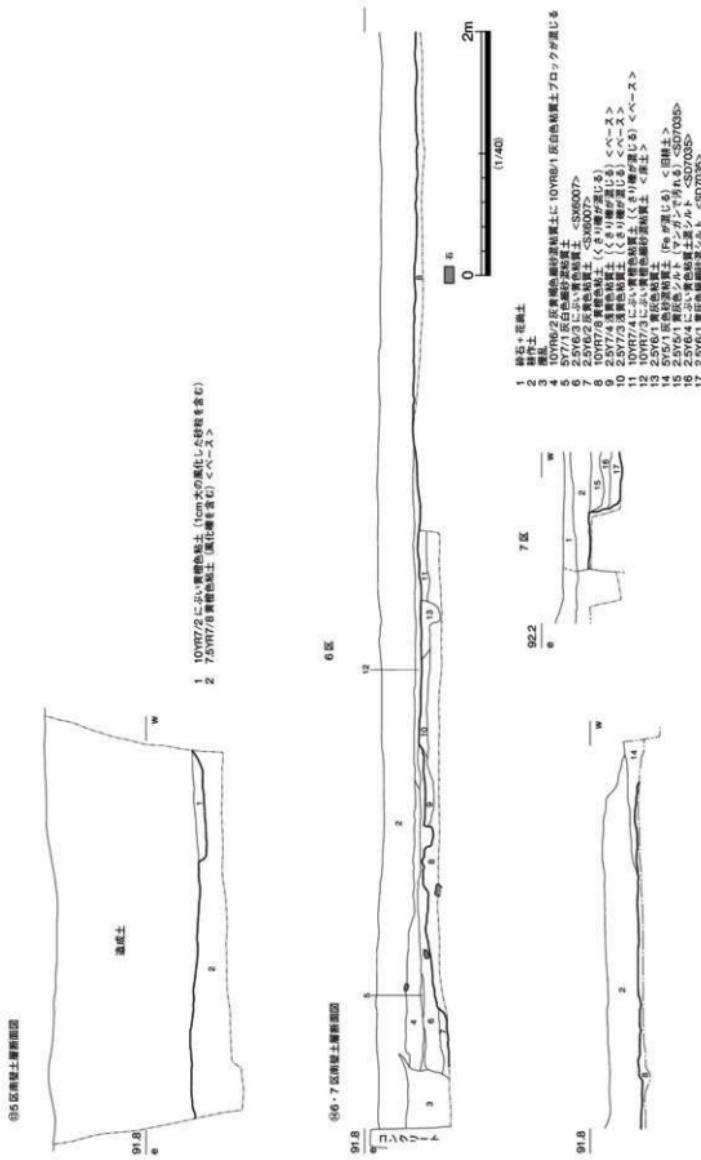
土層断面図 (1/40)



壁土層断面図 (1/40)



第13図 ④区南壁土層断面図 (1/40)



第14図 ⑬ 5区南壁土層断面図・⑭ 6・7区南壁土層断面図 (1/40)

⑭ 6・7区南壁（第14図）

6区と7区の南壁はほぼ連続する位置関係である。概ね造成土・耕作土の下部でベースを検出した。6区では概ね厚さ25～30cmの耕作土の下部にベースである風化礫が混じる黄褐色粘土層を検出した。ベースの標高は91.4mであるが、東端付近では徐々に下がり、SX6007へ至る。7区部分は旧宅地であり、造成土・耕作土の下部で遺構面を検出した。ベースの標高は91.8mである。

第3節 遺構・遺物

1 弥生時代の遺構・遺物（第15図）

①周溝墓（第16図）

周溝墓は東斜面上に築造される。全体に北と東へ下がる地形だが、東西方向の傾斜が強い。概ね東西方向に長い隅丸方形の形状で、溝を共有させる。西側と東側では溝の底のレベルの高低差が大きく、斜面に沿って傾斜していた様子が窺える。

周溝墓は、3区北半、4区、5区、6区で7基検出し、周溝墓1～7とした。標高91m付近に立地する。近世以降、水田を造成した際に標高の高い部分を削平し水準化したため、特に調査区西半部では削平が著しい。周溝の遺存状態は悪く、主体部は1基しか検出できなかった。

周溝墓1（SX4010・SX4015・SX6007）（第17・18図）

4区北側から6区南東隅で検出した。方形に囲われた区画を想定するが、東側は調査区外へ延びるために全体の規模・形状は不明である。SX4010により南側、SX4015により北側を画すが、SX4015の西半部は擾乱により消失する。西南隅はSX6007がSX4010に連続すると考えられるが、西南隅のみの検出にとどまった。溝の深さは浅く、SX6007より北側の溝が途切れていたかどうかは明らかではないが、少なくとも溝の深度は浅くなっているようだ。SX4010は周溝墓2の北辺と共通である。区画内の規模は、溝の内側で東西7.2m以上、南北7.3mである。溝に囲まれた部分は近世の掘り込みが多く平坦な面が少ないが、掘り込みの及ばない面では北端付近で標高91.00m、南端で91.02mである。主体部は検出されなかった。c-c'断面でも主体部にかかる遺構は認められなかった。削平によるものと考えられる。

北を画するSX4015は検出長1.78m、幅1.46m、深さ7.6cmを測り、埋土はベースブロックを含むにぶい黄褐色シルト層である。溝底のレベルは90.94m程度である。西半部は検出されなかつたが、擾乱が著しいためと考えられ、SX4015が西へ延びる可能性もある。SX4015の埋土中からは、弥生土器小片と考えられる土器小片が出土しただけであった。

西側を画するSX6007はSX4010の西半部から北側へ続く遺構である。東肩は調査区境へ延び、東側の4区では延長部を検出していない。北側は途切れるが、SX6007部分の底のレベルと溝の外側のレベルはほとんど差がなく、削平のため失われた可能性もある。SX4010の南肩からSX6007の北端までの延長は6.56m、幅1.50m、深さ20cmを測る。西肩、北肩とも段掘り状を呈する。底部のレベルは最深部で91.10mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SX4010は周溝墓2との共有する遺構である。4区と5区にわたって検出した。東西方の延長12.53m、幅は、SX4011との連結地点付近およびその東側では3.24mを測る。SX4011との連結部分からやや離れる東端付近と5区部分では底にさらに溝状に、また、SX4011との連結部付近は不整円形に落ち込み

が認められる。SX4010 の底のレベルは 90.77 ~ 91.27m 程度で、東側へ傾斜する。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。出土遺物については、周溝墓 2 で記述する。

周溝墓 2 (SX4010・SX4011・SD4006) (第 19 ~ 22 図)

北側を周溝墓 1、南側を周溝墓 4、西側を周溝墓 3 に接する方形周溝墓である。区画の規模は、溝の内側で南北は 7.07m、東西 5.86m 以上を測る。南西隅は、平面精査では溝を検出していないが、遺構の遺存状態は悪く、本来は溝が存在した可能性もある。a-a'・b-b'・c-c' 断面では周溝墓主体部に関わる遺構の痕跡はなかった。区画内の標高は 90.92 ~ 91.08m である。

SX4010 は周溝墓 2 の北側を画する溝で、周溝墓 1 との境界に位置する。4 区と 5 区にわたって検出されたが、周溝墓 2 を画する部分については東西方向の延長 5.60m、幅は東部付近では 1.54m、SX4011 との連結地点付近およびその西側では 3.42m を測る。SX4011 との合流部付近では小礫が散乱し、弥生土器壺が出土した。周溝墓 2 の北西隅に相当する溝の内側で検出され、何らかの供獻にかかる土器である可能性が高い。溝の底のレベルは 90.77 ~ 90.90m で東へ傾斜する。東端付近では幅 0.84m、深さ 10cm 程度 1 段低い筋があり、調査区外へ延びる。埋土中からは弥生土器壺の他、弥生土器小片、サヌカイト片が出土した。

SX4011 は周溝墓 2 の西側を画する、周溝墓 3 との境界に位置する溝である。SX4010 との遺構の切り合い関係は認められず、SX4010 と同時併存と考えられる。延長 4.49m、幅 1.23m、深さは 5cm 程度である。溝の底のレベルは 90.94 ~ 90.99m で南から北へ傾斜する。

SD4006 は周溝墓 2 の南側を画する溝で、周溝墓 4 との境に接する。4 区西寄り部分でわずかに南へ屈曲する。この屈曲部は SX4011 の延長部に相当する。屈曲部より東では、SD4006 の形状は、中程付近で南へやや膨らんでおり、周溝墓 2 への意識がより強いと考えられる。SX4011 の延長上の屈曲部分は、楕円形状に埋め戻したようなベースブロックが埋土上半に堆積する。この土坑状の遺構は、もともと掘削されていた溝を周溝墓 4 の築造に伴い埋められた可能性が考えられかもしれない。4 区東壁土層から、SD4006 は周溝墓 4 の南側を画する SD4005 より古い。このことから、周溝墓 2 築造後に周溝墓 4 が築造されたと考えられる。

SD4006 の周溝墓 2 部分の検出長は、7.45m、幅 1.03 ~ 1.27m、深さ約 30cm を測る。SD4006 の周溝墓 2 と接する部分の溝の底からは、20 ~ 30cm 大の礫が出土した。礫の下部は約 4 ~ 10cm のベースブロックを多く含む層で、溝の底からはやや浮いており、初期に土とともに溝の中へ転がり落ちたものと考えられる。溝の底のレベルは 90.55 ~ 90.90m で西から東へ傾斜する。SX4011 延長部の土坑状の部分は、西側の溝の底より 16.4cm 程度低く、東側とはほぼ高低差はなかった。

1 は SX4010 から出土した弥生土器広口壺。SX4011 との連結部に近い位置で出土した。口縁端部には凹線が 4 条施される。弥生時代中期後半新段階頃。3 はサヌカイト製石鎌。有茎式。上部・下部ともに欠損する。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半新段階頃と考えられる。

周溝墓 3 (SX4010・SX4011・SD5001) (第 19 ~ 21 図)

周溝墓 2 の西側に接する。SX4011 により東側を、SX4010 により北側を、SD5001 により南側を画する。西側は該当する区画溝は検出されず、調査区外にあると考えられる。区画の規模は、溝の内側で東西は

Y=85610

Y=85600

Y=85590

Y=85580

Y=85570

Y=13770

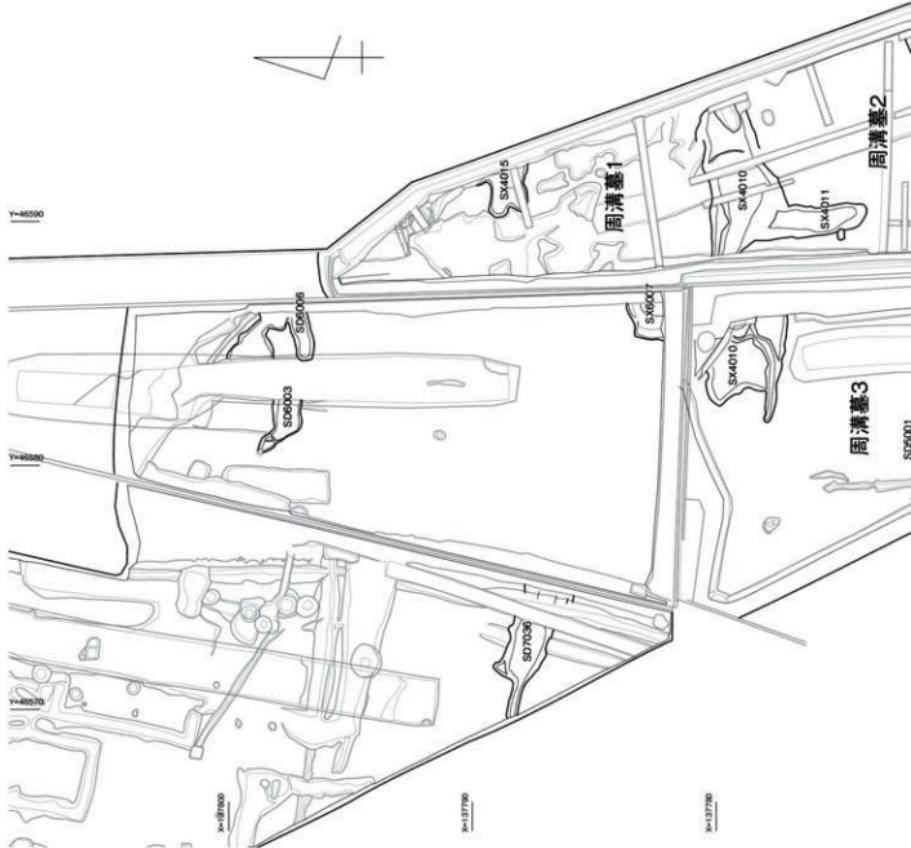
Y=13770

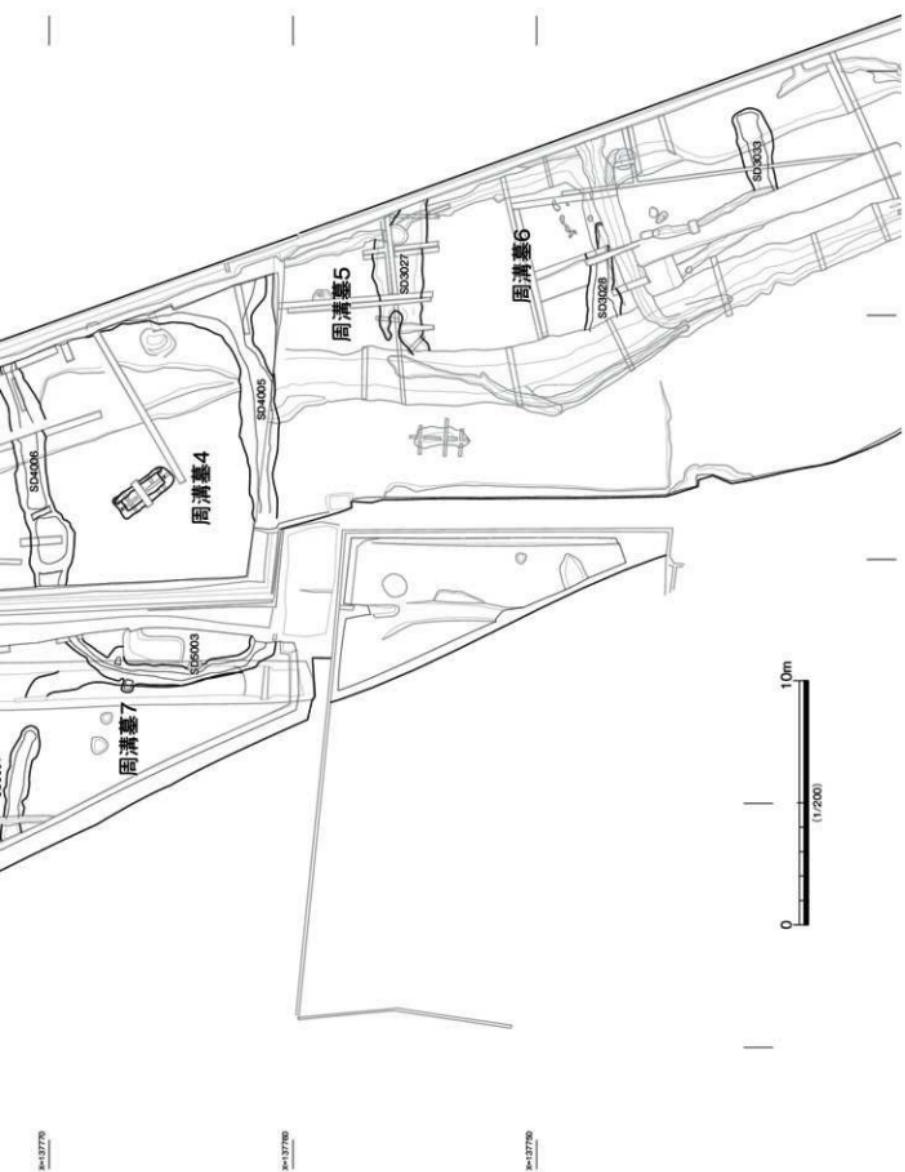


周溝墓1

周溝墓2

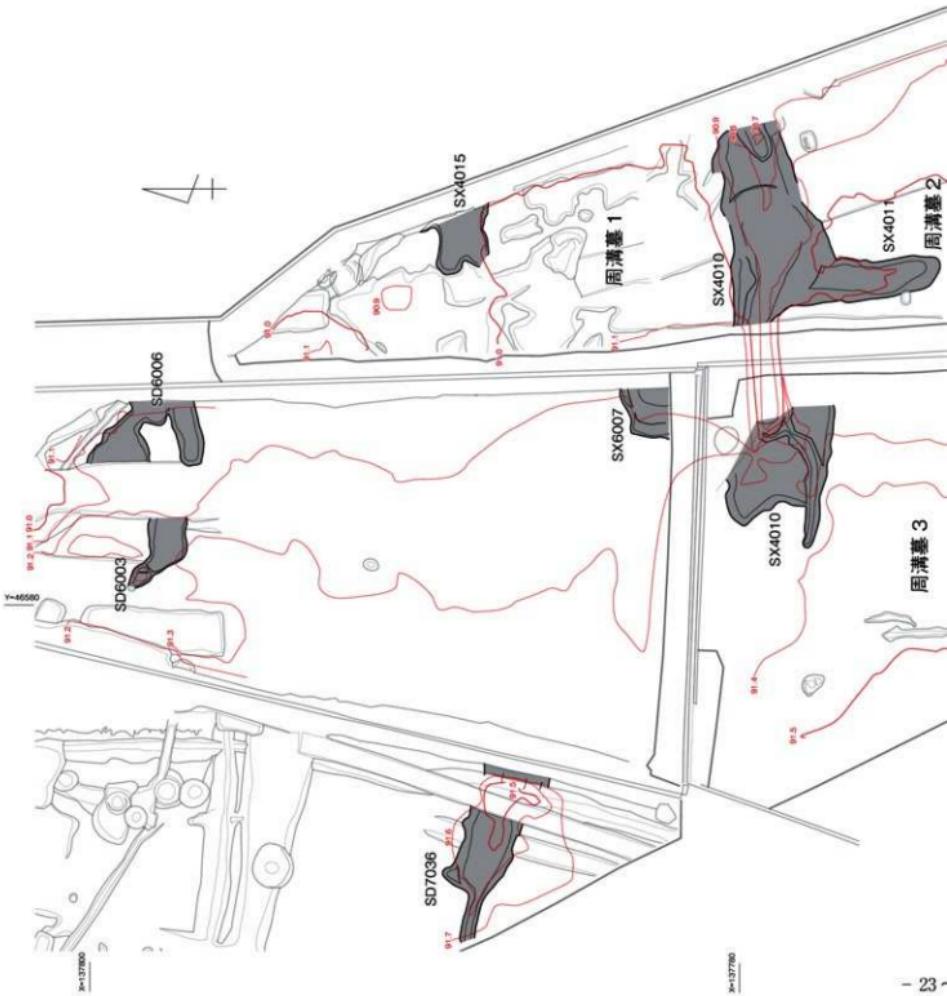
周溝墓3





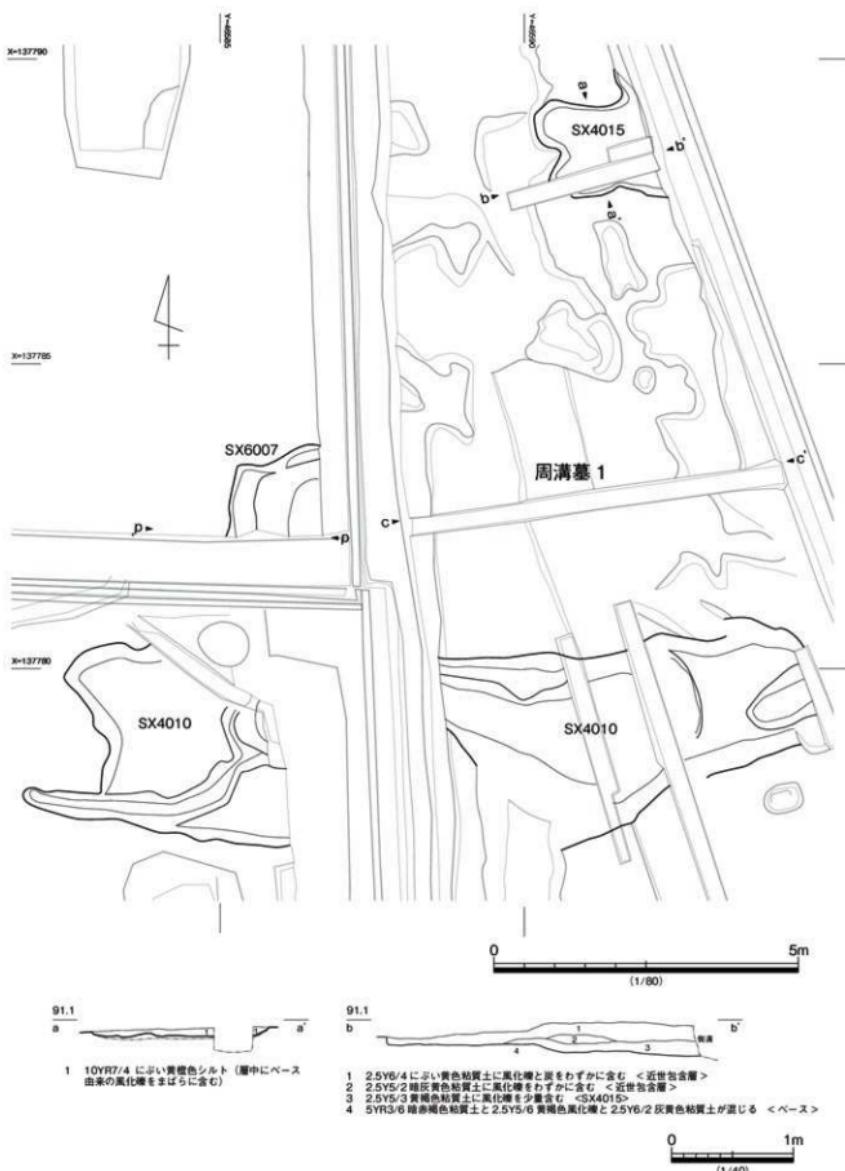
第15図 周溝墓配置図 (1/200)

Y=46500

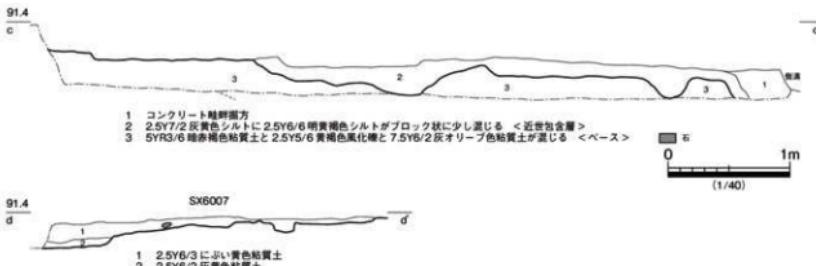




第16図 畠溝墓等高線図(1/150)



第17図 周溝墓1 (SX4010・SX4015・SX6007) 平・断面図 (1/80・1/40)



第18図 周溝墓1 (SX4010 · SX4015 · SX6007) 断面図 (1/40)

10.50m以上、南北5.88mである。区画内の標高は4区側で91.05m、5区側で91.20～91.44mである。

北側を画するのはSX4010の西半部である。SX4010の周溝墓3部分の延長は7.65m、幅3.08m、深さは5～8cm程度で、中央からやや南寄りに幅0.44m、深さ10cm程度の筋がある。溝の底のレベルは、筋状の部分で91.13～91.37m、調査区東北隅付近の落ち込み部分が90.83m、その他が91.23～91.27mである。SX4010より北西側では区画施設は検出されていないが、北西側は斜面上部に相当し、削平による消失の可能性もある。SX4010のうちSX4011より東側部分と西側部分に掘削時期に差があるかは不明である。SX4010南東部付近、周溝墓3の北東隅で弥生土器壺が出土した。供獻にかかる土器の可能性があろう。SD4011を挟んで周溝墓2の北西隅付近でも供獻と考えられる土器が出土している。

SD5001は検出長4.64m、幅0.88m、深さ8cmを測る。底のレベル91.36～91.46mで、西から東へ傾斜する。SD5001は東端で南へ向きを変える。溝の遺存状態は非常に悪いが、SD5001の形状は周溝墓7を意識したものと考えられ、周溝墓3は周溝墓7より新しいと考えられる。周溝墓2との前後関係は不明である。

主体部は検出されなかった。削平によるものと考える。

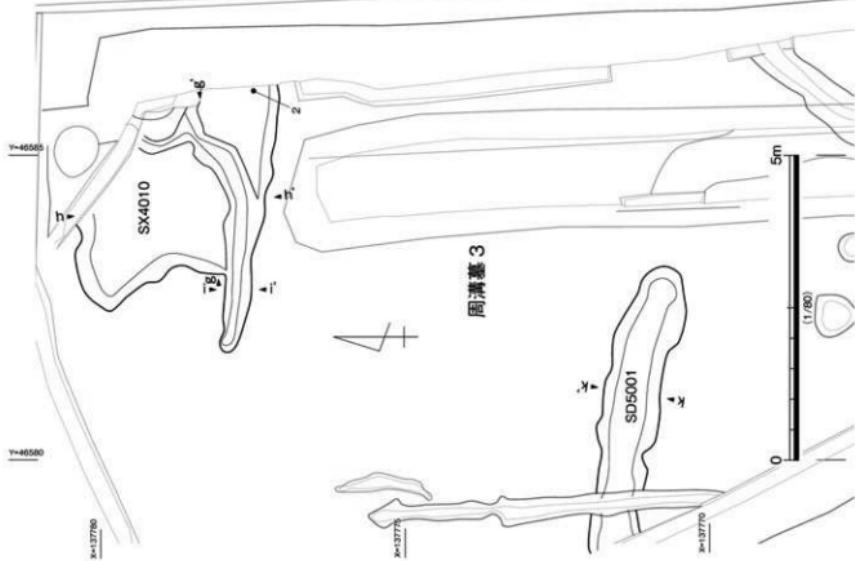
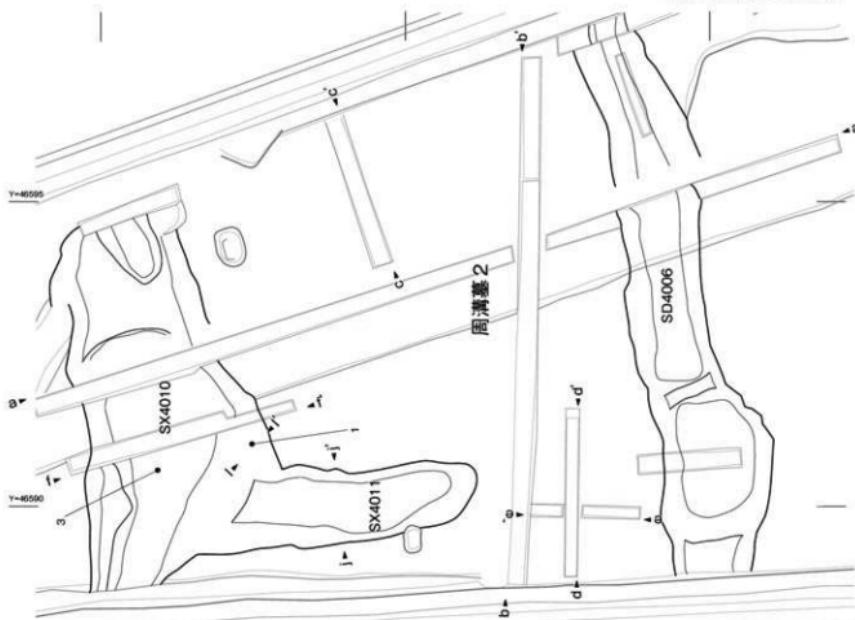
2はSX4010のうち、周溝墓3に属する位置で出土した。弥生土器広口壺。口縁部内面に斜め方向のヘラ描きを施す。弥生時代中期後半新段階頃。

遺構の時期は、出土遺物により弥生時代中期後半新段階頃と考えられる。

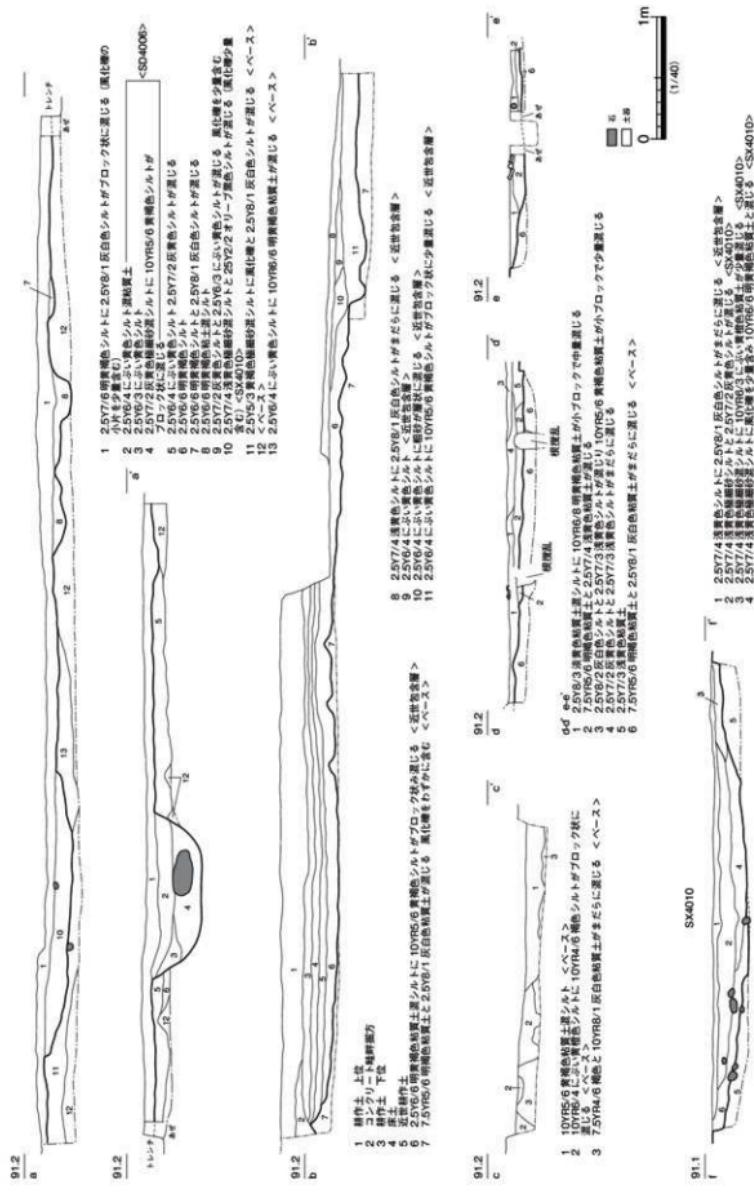
周溝墓4 (SD4005 · SD4006 · SD5003 · ST4009) (第23～29図)

周溝墓2の南側に位置する。SD4006により周溝墓2と、SD5003により周溝墓7と、SD4005により周溝墓5と接する。区画の規模は、溝の内側で東西14.03m、南北8.18m、区画内の標高は90.93～91.44mで、西から東、南から北へ傾斜する。

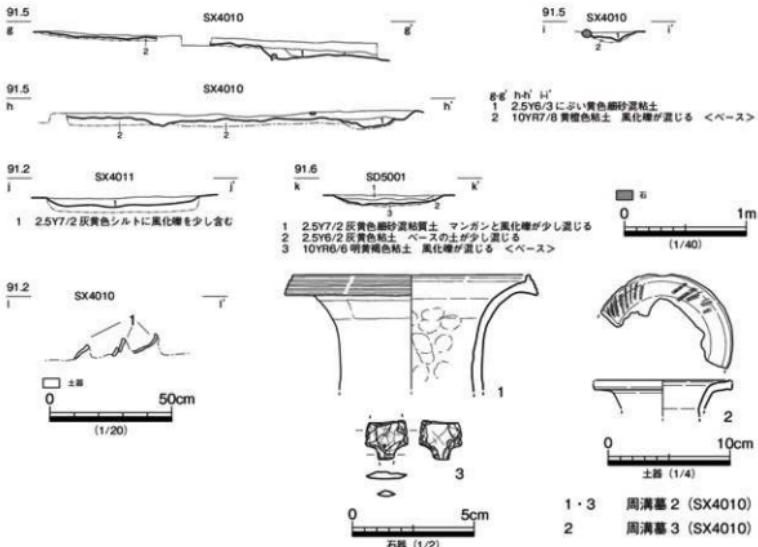
SD4006は北側を画する。検出長9.27m、幅1.03～1.71m、深さ約30cmを測る。東壁土層により、SD4005より古い。SD4006は、中央付近で北へやや膨らむ形状で、周溝墓2への意識のほうが強く、もともとは周溝墓2のために掘削したのであろう。4区の西寄り部分でわずかに南へ屈曲し、この屈曲部はSX4011の延長部に相当する。この部分は梢円形に掘りくぼめられており、溝を埋め戻したように、ベースブロックが埋土上半に堆積する。周溝墓2の造営時点では溝であったものを、周溝墓4の造営に際して埋め戻して陸橋とした可能性も考えられるかもしれない。SD4006の東半部、周溝墓2と接する



第19図 周溝墓2 (SX4010 · SX4011 · SD4006) 周溝墓3 (SX4010 · SX4011 · SD4006) 平面図 (1/80)



第 20 図 周溝基 2 (SX4010・SX4011・SD4006) 周溝基 3 (SX4010・SX4011・SD5001) 断面図 1 (1/40)



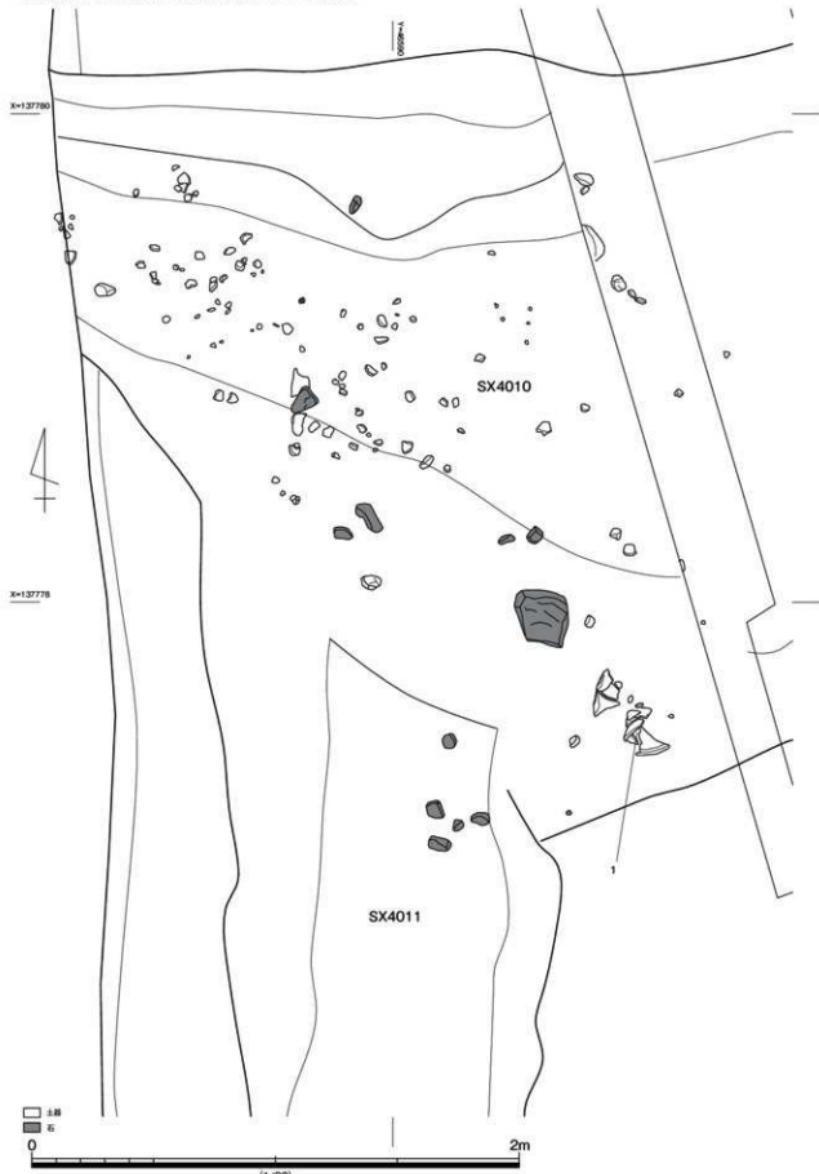
第21図 周溝墓2 (SX4010・SX4011・SD4006) 周溝墓3 (SX4010・SX4011・SD5001)
断面図2 (1/40・1/20)・出土遺物 (1/4・1/2)

部分の溝の底からは、20～30cm大の礫が出土した。厚さ4～8cmのベースブロックを多く含む層の上面付近から出土しており、墳丘から溝の中へ転がり落ちたものと考えられる。

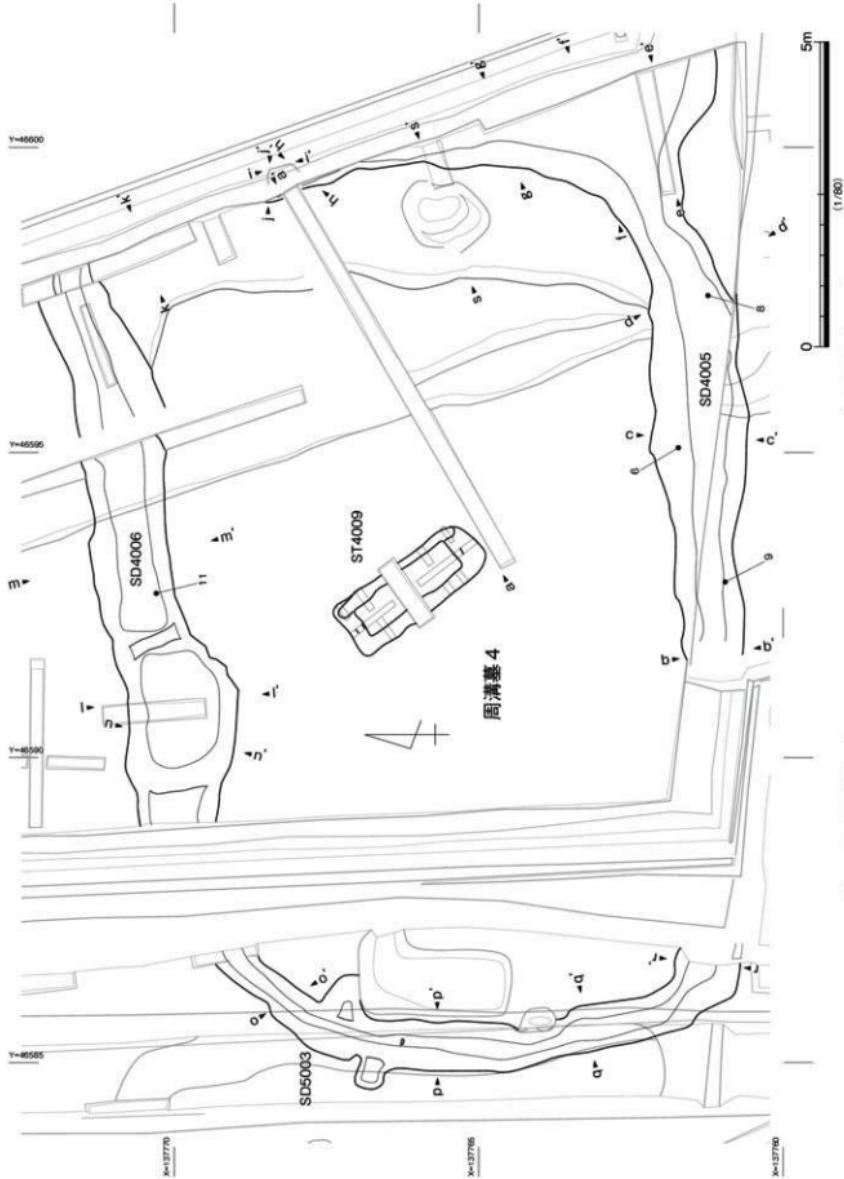
SD4005は、東端で北へL字状に屈曲するもので、南・東側を画する溝である。周溝墓5との境となる溝で、東端部分では幅広くなっている。北へ屈曲する流れのほか、南へ屈曲し、周溝墓5を画すと考えられる。形状から周溝墓4と周溝墓5の双方を意識して掘削されたと考えられる。検出長は東西部分が10.00m、南北部分が5.85m、幅0.94～1.35m、深さは西側では23～30cm程度だが、東側では51cmを測る。溝の底のレベルは90.42～90.84mで、西から東へ傾斜する。中央付近で10cm程度の小礫が散乱した状態で検出した。墳丘側から落ち込んだものと考えられる。

SD5003は西側を画する溝である。検出長8.65m、幅0.64～0.79m、深さ15～26cmを測る。溝の底のレベルは概ね91.11～91.24mで、西側が高く、北東・南東側がやや低い。周溝墓7を画するSD5001とは重複する位置関係であるが、SD5001は遺存状態が非常に悪く、前後関係は不明である。

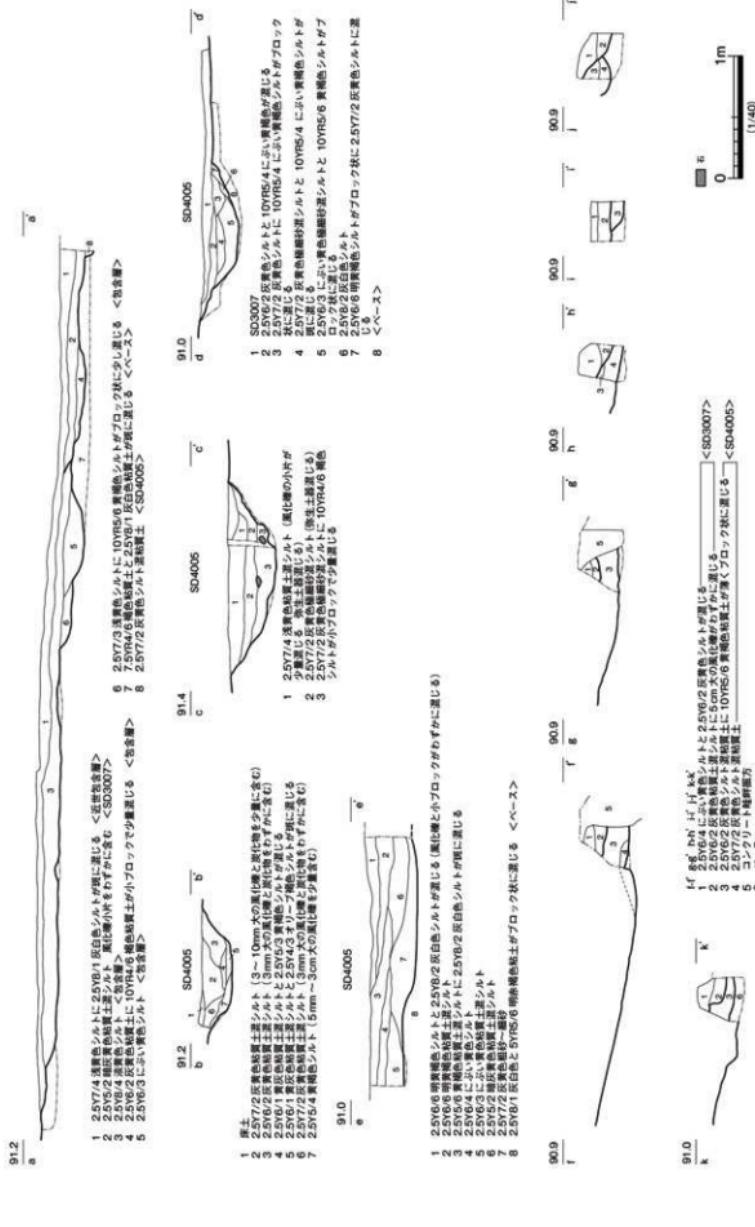
ST4009は周溝墓4の主体部と考えられる土坑である。長軸2.56m、幅は北側が1.01m、南側が0.91mで、北側がやや広い。深さは13cm程度、主軸方位はN37.22°Wで、周溝墓の主軸方位とは異なる。棺痕跡はほとんど残らなかったが、木棺掘方痕跡から、長辺に長側板、短辺は長側板の端部よりも内側に入つて短側板を設置したと考えられる。棺側板の掘方は幅15～20cm、深さは10～15cm程度である。木棺の北側小口の幅は57.6cm、南側小口の幅は55.06cm、東側の長側板の長さは244.6cmであった。西側長側板の痕跡は北・南端部がはっきりしない。木棺の内法は長さ185.7cm、幅51.7cmであった。a-a'方向北半の棺内埋土部分のトレンチから、褐色で劣化の進んだガラス玉が1点出土した。その他は土器の小



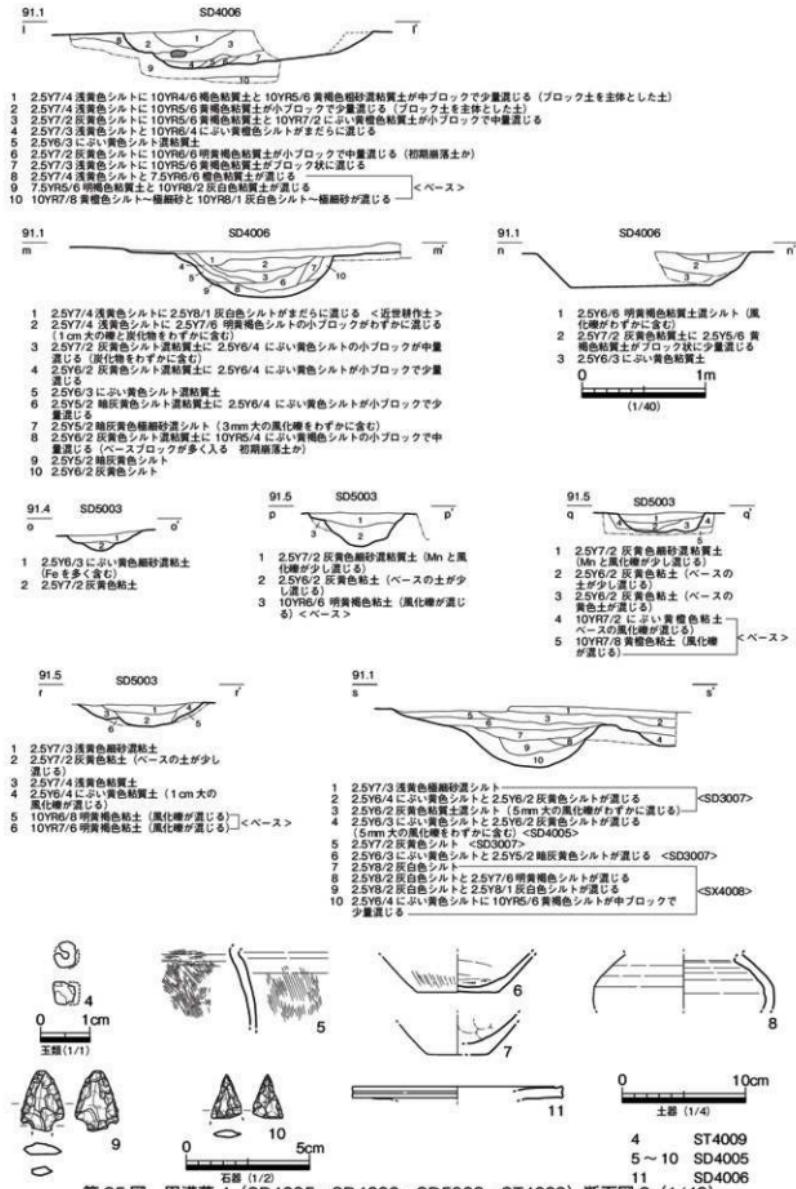
第22図 周溝墓2 (SX4010 · SX4011) 遺物出土状況 (1/20)



第23図 周溝墓4 (SD4005・SD4006・SD5003・ST4009) 平面図 (1/80)

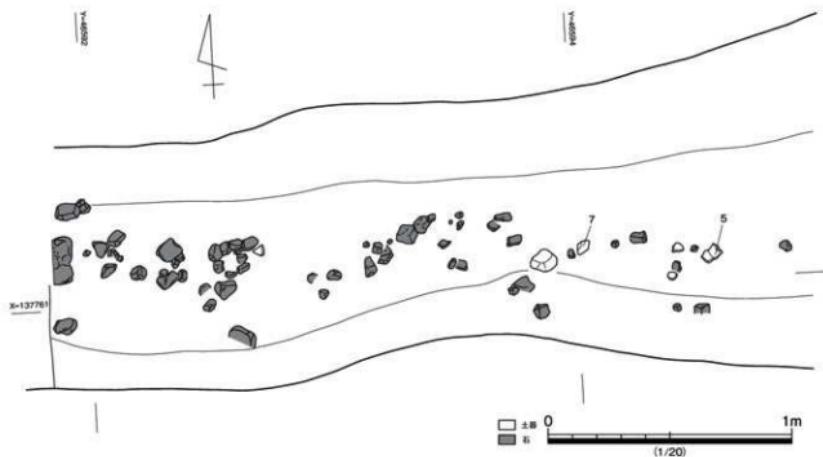


第24図 周溝壁4 (SD4005 - SD5003) 断面図1 (1/40)

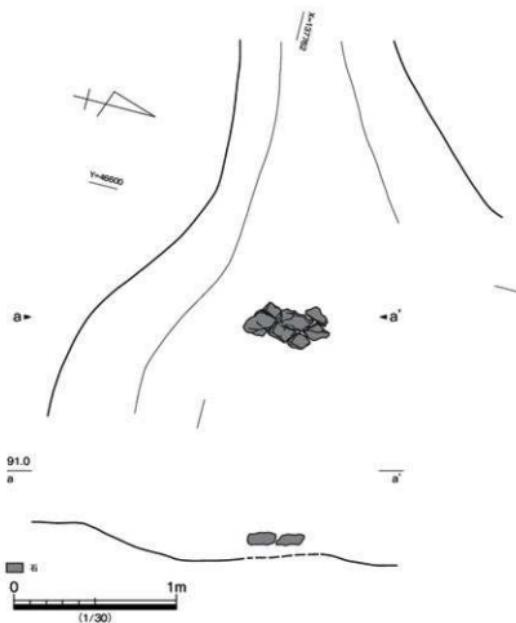


第25図 周溝基4 (SD4005・SD4006・SD5003・ST4009) 断面図2 (1/40)

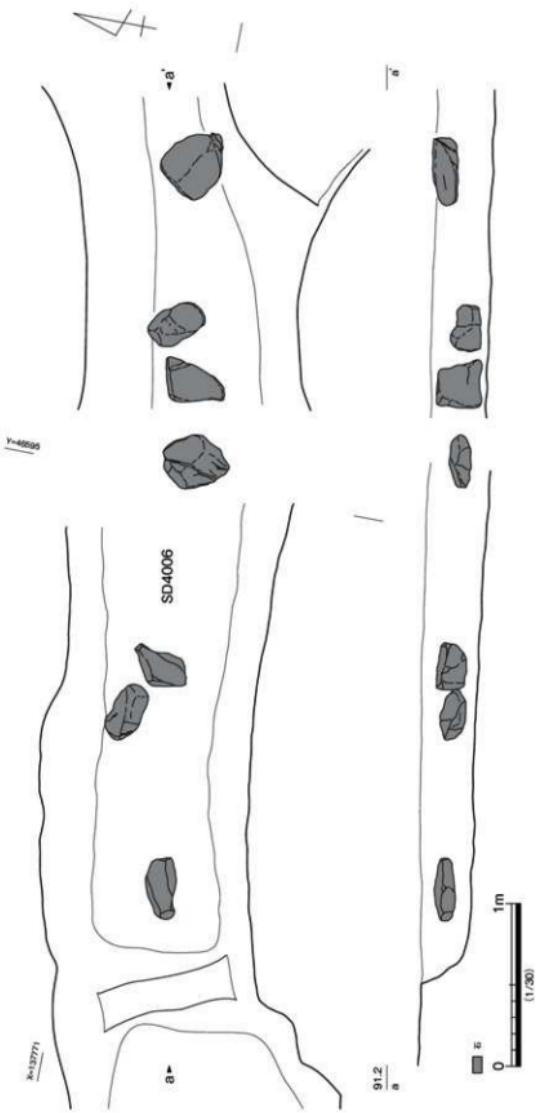
・出土遺物 (1/1・1/4・1/2)



第26図 周溝墓4 (SD4005) 遺物・石出土状況1 (1/20)



第27図 周溝墓4 (SD4005) 遺物・石出土状況2 (1/30)



第28図 周溝墓4 (SD4006) 遺物・石出土状況3 (1/30)

破片を除いて遺物は出土しなかった。

4は主体部の北半部、棺内埋土から出土したガラス玉。褐色を呈し、中央に穿孔がある。外面は滑らかでなく、劣化が進む。蛍光X線分析の結果、もとは青緑色を呈しており、アルカリ珪酸塩ガラスと確認された。化学組成の特徴から、ソーダ石灰ガラスに属する可能性が高い（第4章第6節参照）。5～10はSD4005から出土した。5は土師器壺。8世紀代。6・7は弥生土器底部。いずれも平底を呈する。8は須恵器短頸壺体部か。8世紀代。5・8は上面に堆積する層からの混入と考えられる。9・10はサヌカイト製石鏡。ともに下部は欠損する。9は有茎式。11はSD4006から出土した。弥生土器広口壺。弥生時代後期後半古段階頃。周溝墓2と共有する溝であるが、遺物の時期や、周溝墓4寄りで出土していることから、周溝墓4に関わる遺物と考える。

遺構の時期は、SX4010よりやや新しい弥生時代後期後半古段階頃と考えられる。

周溝墓5（SD4005・SD3027）（第30図）

周溝墓4の南側に位置する。北側はSD4005、南はSD3027で区画され、東側はSD4005が東端部で南へやや南へ膨らんでおり、東へはそれほど延びず、南へ屈曲して東側を区画すると考えられる。西側は検出しておらず、近世以降の溝SD3007により削平されると考える。区画内の規模は、溝の内側で南北3.95m、東西5.20m程度、区画内の標高は90.79～90.85mである。

SD4005については、周溝墓4で既述したが、形状は、周溝墓4側（北肩）、周溝墓5側（南肩）とも意識した形状であり、両者に前後関係はないように見える。SD3027は周溝墓6を意識した形状であり、周溝墓5は周溝墓6より後に築造されたと考えられる。

SD3027の詳細については周溝墓6で記述する。

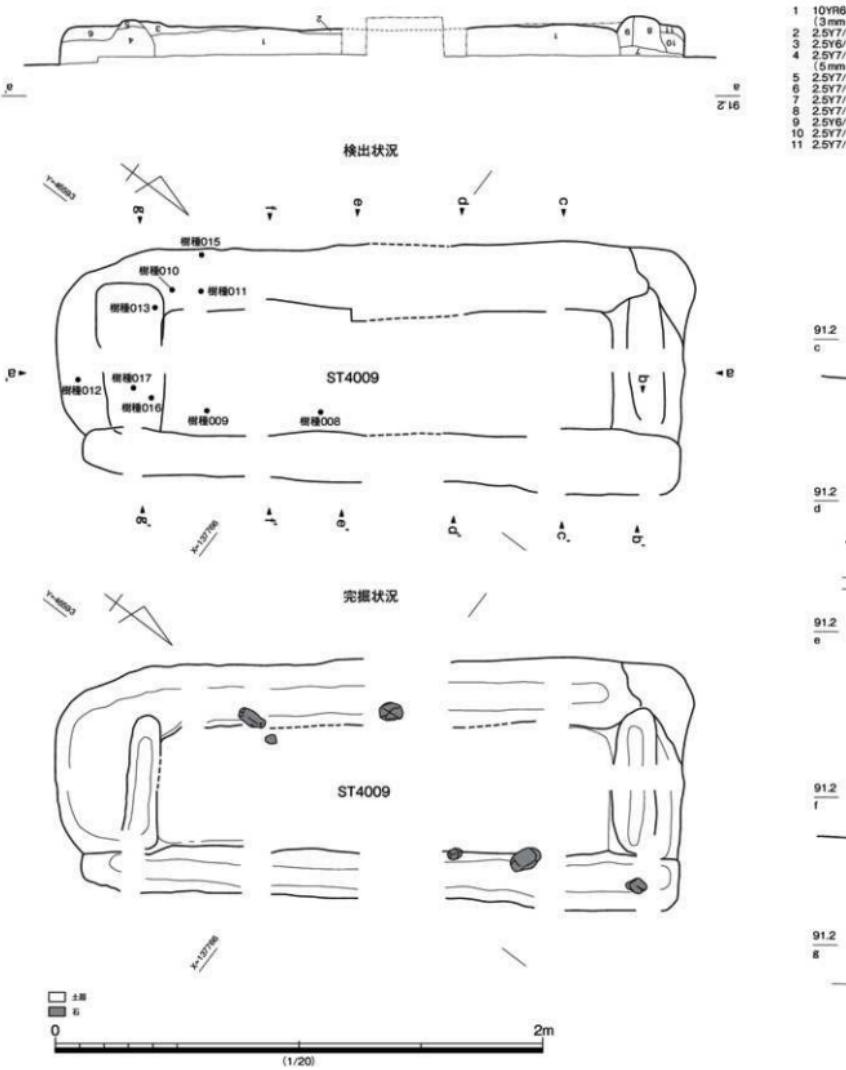
周溝墓6（SD3027・SD3028）（第31～34図）

周溝墓5の南側に位置する。北側はSD3027、南側はSD3028により区画され、東側は調査区外へ延びる。西側は検出しておらず、近世の溝であるSD3007により、SD3028東半部は近世の溝SD3004により削平される。SD3027は検出部分の西端付近で二股に分かれ、いずれも南側へ屈曲しておりそれほど西へは伸びないと考えられる。また、SD3027の北肩は北へ膨らんでおり、周溝墓6の区画を意識したものと考えられる。区画の規模は溝の内側で南北6.79m、東西7.79m程度、区画内の標高は91.00～91.08mである。

SD3027は南側の検出長5.85m、北側は5.14m、幅は、分岐部分より東は1.92～2.14m、分岐部より西では南側の筋は0.85m、北側の筋は0.48m、深さは15～19cmを測る。底のレベルは分岐部より東は概ね90.69mであるが、分岐後は南側の筋のレベルは90.82m、北側の筋は90.77mで、急に上昇する。溝の西端付近、周溝墓の北西隅では土器、礫の集中部が認められた。土器は埋土の上部から出土しており、埋没過程で周囲から落ち込んだものと考えられる。

SD3028は検出長4.02m、幅1.34m、深さ9cmを測る。底のレベルは90.99～91.07mで、西から東へ傾斜する。

12～20はSD3027から出土した。12～19は弥生土器。12・13は壺。12は広口壺で、頸部に斜め方向の板状圧痕を施す。13は口縁端部を平らにし、頂部に凹線を施す。14～19は壺底部。20はサヌカイト製石鏡。四基式。21・22はSD3028から出土した。同一個体の可能性がある。21は広口壺の体部。



第29図 周溝墓4(ST4009)

4) にびい黄褐色シルトに 2.5YB/1 灰白色粘質土と 7.YRS/6 明褐色粘質土の小ブロックを中量含む
大の堆と桿材の可能性のある変化物を少量含む) < 桩内崩落土 >

3) 黄褐色粘質土に 10YR/6 黄褐色粘質土が混じる < 初期浸入土 >

4) 黄褐色粘質土に 2.5Y7/4 淡褐色粘質土が混じる < 初期浸入土 >

5) 黄褐色粘質土に 2.5Y7/4 淡褐色粘質土が混じる < 初期浸入土 >

6) 黄褐色粘質土に 10YR/6 黄褐色粘質土がブロック状に混じる < 10mm 大の風化塊を多量含む >

7) 黄褐色粘質土、桿材の腐朽した残存か? < 南矩側板面方 長側板面方 >

8) 黄褐色粘質土に 10YR/6 黄褐色粘質土がわずかに混じる < 南矩側板面方 長側板面方 >

9) 黄褐色シルトに 7.5YR/6 明褐色粘質土がブロック状で少量混じる < 北矩側板面方に伴う崩落土 >

10) 黄褐色粘質土に 10YR/6 黄褐色粘質土が混じる < 南矩側板面方 長側板面方 >

11) 黄褐色粘質土に 2.5Y7/4 淡褐色粘質土が混じる < 南矩側板面方 >

12) 黄褐色粘質土と 2.5Y6/4 にびい黄褐色粘質土が混じる < 北矩側板面方 >

13) 黄褐色粘質土と 2.5Y6/4 にびい黄褐色粘質土が混じる < 北矩側板面方 >



- b' 1 2.5Y7/3 淡褐色シルト混粘質土に 2.5Y7/2 灰白色シルトが混じる
(3mm 大の風化塊をわずかに含む) < 東長側板面方 長側板面方 >
2 2.5Y6/3 にびい黄褐色粘質土 < 北矩側板面方 >

- c' 1 10YR6/4 にびい黄褐色シルトに 2.5YB/1 灰白色粘質土と 7.YRS/6 明褐色粘質土の小ブロックを中量含む
(3mm 大の堆と桿材の可能性のある変化物を少量含む) < 桩内崩落土 >
2 2.5Y7/3 にびい黄褐色粘質土に 7.YRS/6 明褐色粘質土が小ブロックで少量混じる
< 西長側板面方 長側板面方 >
3 2.5Y7/3 淡褐色シルト混粘質土に 2.5Y7/2 灰白色シルトが混じる (3mm 大の風化塊をわずかに含む)
< 西長側板面方 >



- d' 1 10YR6/4 にびい黄褐色シルトに 2.5YB/1 灰白色粘質土と 7.YRS/6 明褐色粘質土の小ブロックを中量含む
(3mm 大の堆と桿材の可能性のある変化物を少量含む) < 桩内崩落土 >
2 2.5Y7/3 淡褐色粘質土に 10YR/6 黄褐色粘質土が混じる < 初期浸入土か? >
3 2.5Y7/3 淡褐色シルト混粘質土に 2.5Y7/2 灰白色シルトが混じる (3mm 大の風化塊をわずかに含む)
< 西長側板面方 >
4 2.5Y6/3 にびい黄褐色粘質土に 7.5YR/6 明褐色粘質土が小ブロックで少量混じる
< 西長側板面方 長側板面方 >
5 2.5Y7/2 灰白色シルトと 2.5Y6/4 にびい黄色シルトが混じる < 西長側板面方 長側板面方 >



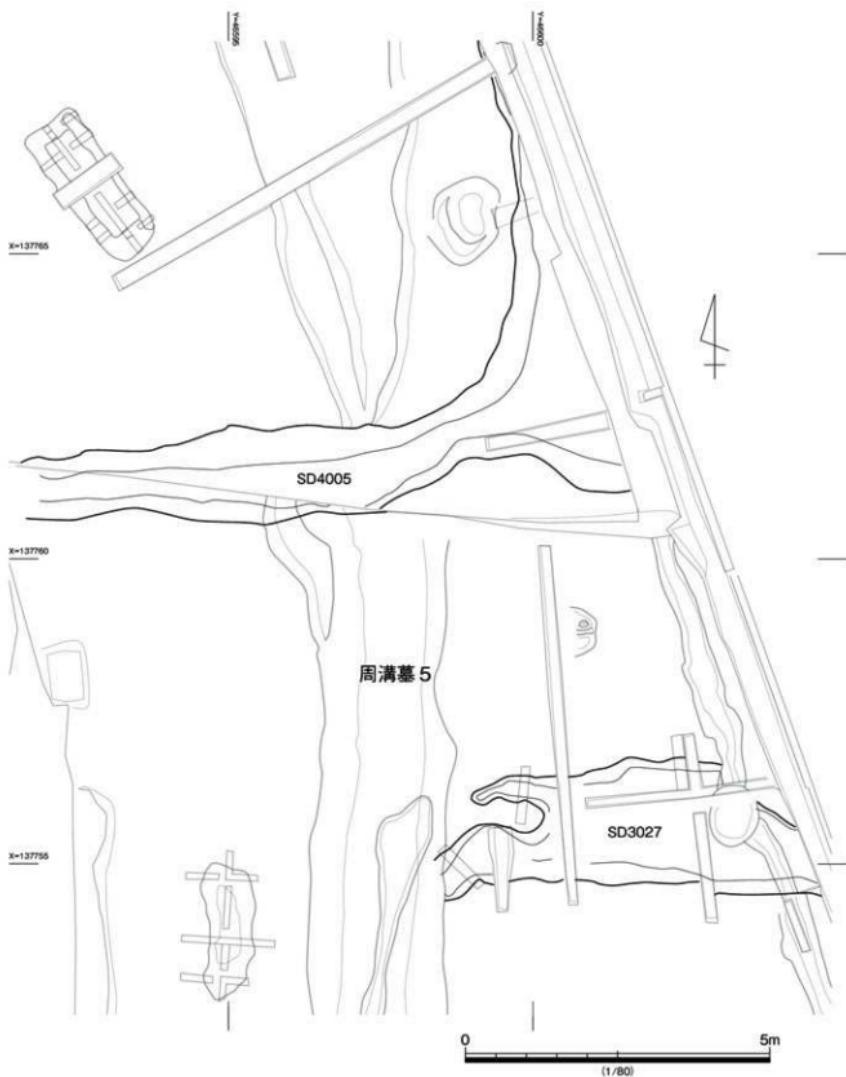
- e' 1 10YR6/4 にびい黄褐色シルトに 2.5YB/1 灰白色粘質土と 7.YRS/6 明褐色粘質土の小ブロックを中量含む
(3mm 大の堆と桿材の可能性のある変化物を少量含む) < 桩内崩落土 >
2 2.5Y7/3 淡褐色シルト混粘質土に 2.5Y6/4 にびい黄色シルトがまだらに混じる < 初期浸入土か? >
3 2.5Y7/2 灰白色シルトと 2.5Y6/4 にびい黄色シルトが混じる < 西長側板面方 長側板面方 >
4 2.5Y6/3 にびい黄褐色シルト混粘質土に 2.5Y7/2 灰白色シルトが混じる
(3mm 大の風化塊を多量含む) < 西長側板面方 長側板面方 >
5 2.5Y7/3 淡褐色シルト混粘質土に 2.5Y7/2 灰白色シルトが混じる
(3mm 大の風化塊をわずかに含む) < 西長側板面方 長側板面方 >



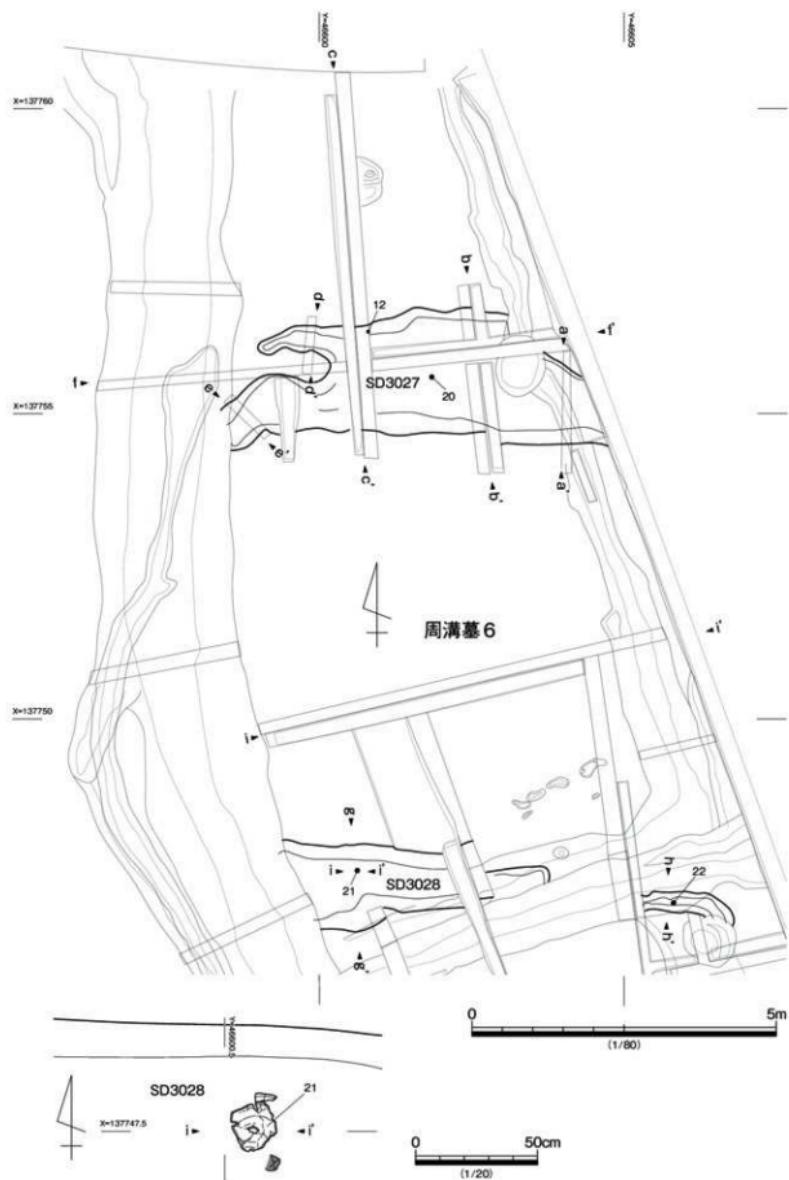
- f' 1 2.5Y7/3 淡褐色シルトに 2.5YB/1 灰白色粘質土と 10YR/4 にびい黄褐色粘質土の小ブロックを中量含む
(3mm ~ 5cm 大の風化塊をわずかに含む) < 西長側板面方 長側板面方 >
2 2.5Y7/2 灰白色シルト (5mm 大の風化塊をわずかに含む) < 西長側板面方 長側板面方 >
3 2.5Y6/6 明褐色シルトと 2.5Y7/2 灰白色シルトが混じる
< 西長側板面方 >
4 2.5Y7/1 灰白色シルトと 2.5Y6/4 にびい黄色シルトが混じる < 西長側板面方 長側板面方 >
5 10YR/4 にびい黄褐色シルトに 2.5YB/1 灰白色粘質土と 7.YRS/6 明褐色粘質土の小ブロックを中量含む
(3mm 大の堆と桿材の可能性のある変化物を少量含む) < 桩内崩落土 >



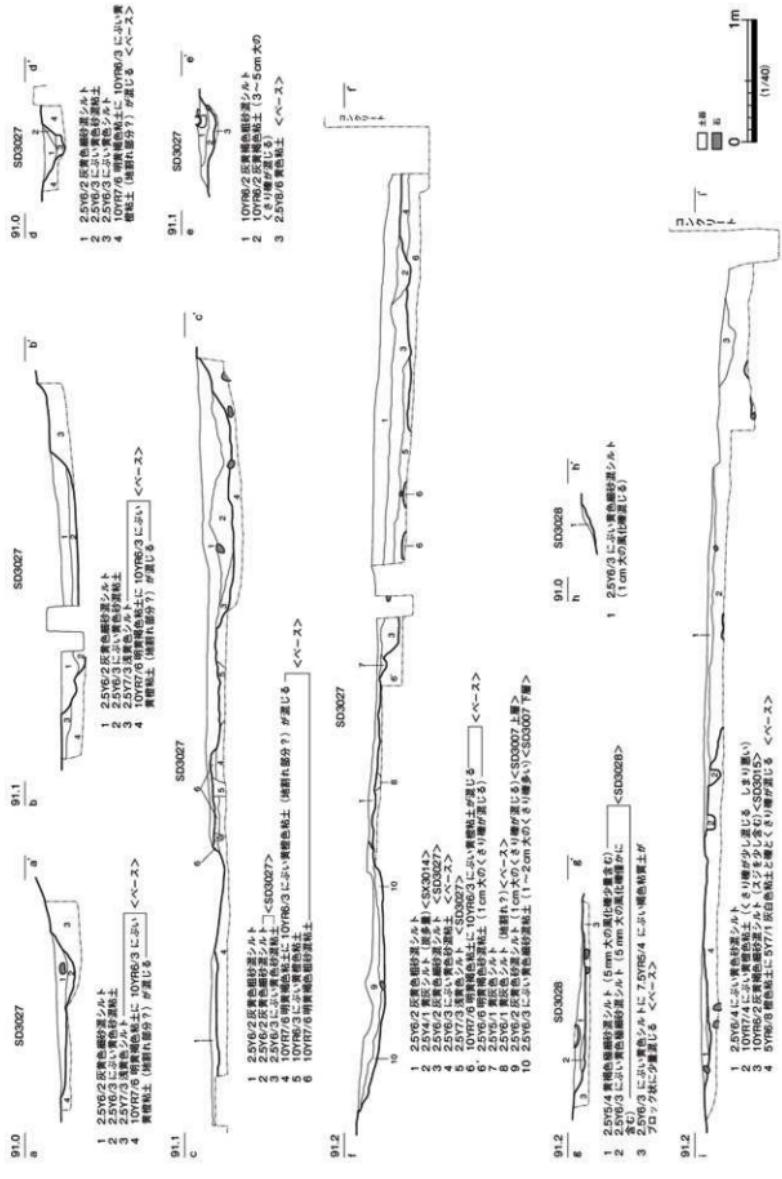
- g' 1 2.5Y6/6 明褐色シルトと 2.5Y7/2 灰白色シルトが混じる
(1cm ~ 3cm 大の風化塊を少含む) < 東長側板面方 長側板面方 >
2 2.5Y7/2 灰白色シルトに 10YR/6 黄褐色粘質土と 10YR/7/6 明褐色粘質土がブロック状に混じる
(5mm ~ 10cm 大の風化塊を多量含む) < 南矩側板面方 長側板面方 >



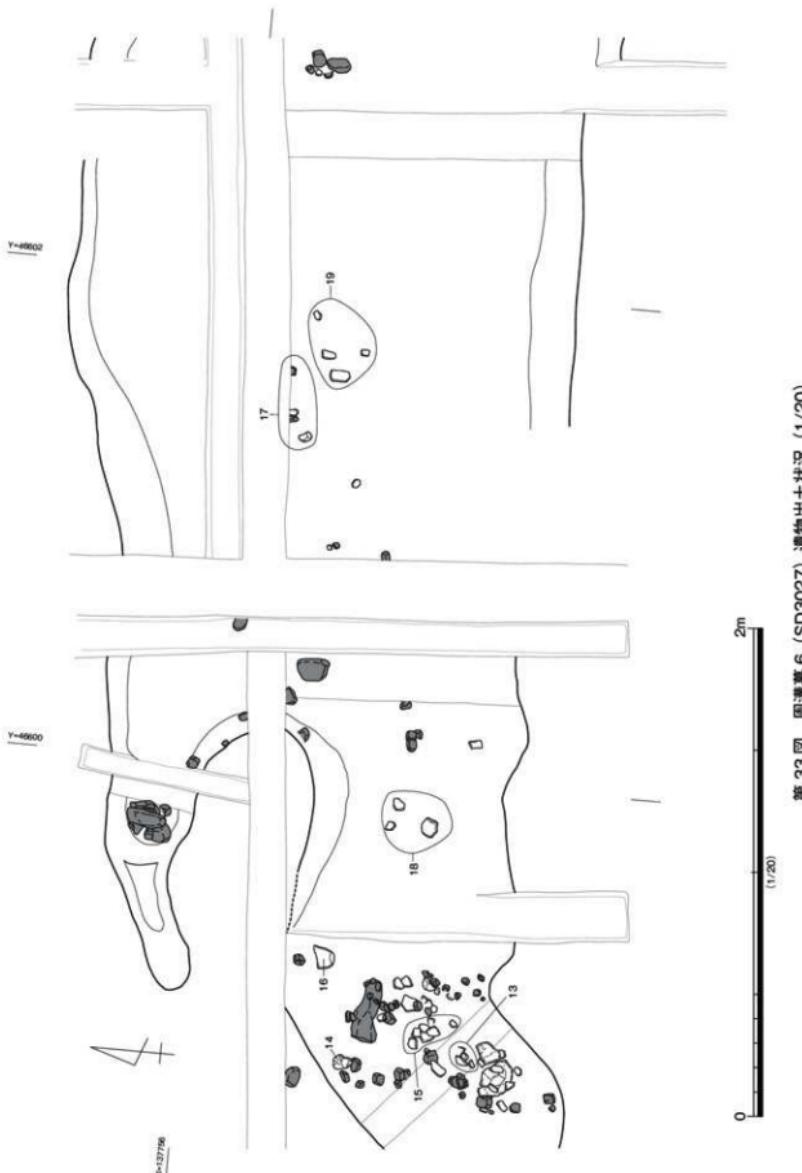
第30図 周溝墓5（SD4005・SD3027）平面図（1/80）



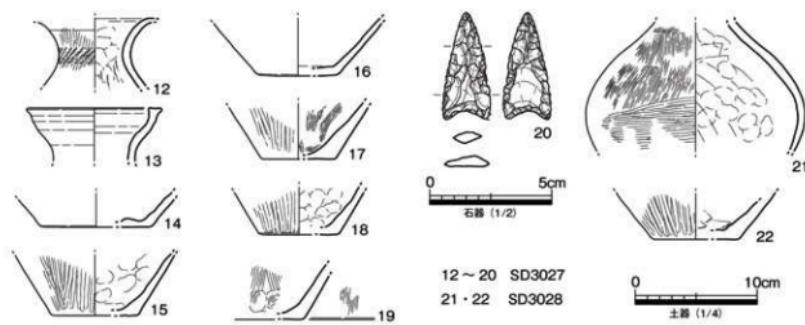
第31図 周溝墓6 (SD3027・SD3028) 平面図 (1/80)・遺物出土状況 (1/20)



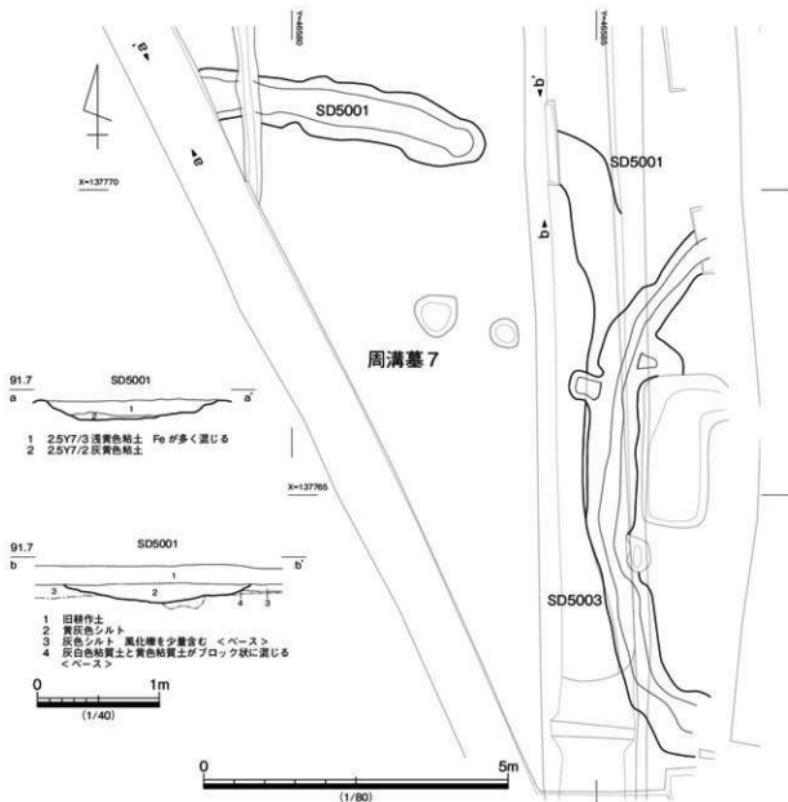
第32図 周溝墓6 (SD3027・SD3028) 断面図 (1/40)



第33図 周溝墓6 (SD3027) 遺物出土状況 (1/20)



第34図 周溝墓6 (SD3027・SD3028) 出土遺物 (1/4・1/2)



第35図 周溝墓7 (SD5001・SD5003) 平・断面図 (1/80・1/40)

12と同様の形態になると考えられる。22は壺底部。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半段階頃と考えられる。

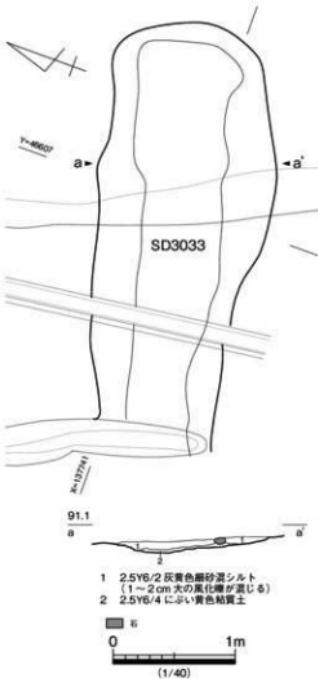
周溝墓7（SD5001・SD5003）（第35図）

周溝墓4の西側、周溝墓3の南側に位置する。東側・北側は、屈曲する溝SD5001で画され、西側・南側は調査区外と考えられる。SD5001はSD5003と重複する部分が多いが、前後関係を把握することはできなかった。北側を画するSD5001は周溝墓7を意識した形状であり、周溝墓7は周溝墓3に先行すると考えられる。区画の規模は、溝の内側で南北9.32m程度、東西6.62m以上、区画内のレベルは91.46～91.47mである。東側を画するSD5001はわずかに溝のラインが検出できたのみで、埋土はほとんど確認できなかった。

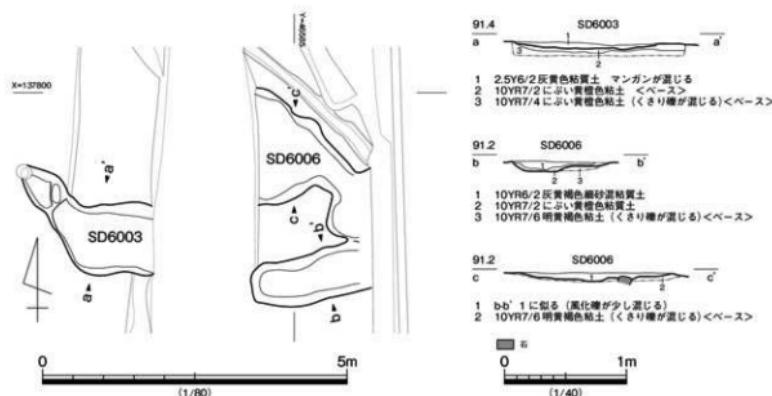
北側を画するSD5001は検出長4.50m、幅0.90m、深さ7cmを測る。溝底のレベルは91.36～91.46mで、西から東へ傾斜する。やや北東側へ膨らむ形状である。埋土中からはサスカイト片が出土した。

東側を画するSD5001は、北から21.8mの位置でSD5003と合流する。幅1.52m、深さは16cmを測る。溝底のレベルは91.36～91.46mである。

遺構の時期は、周溝墓3より古いと考えられ、弥生時代中期後半段階以前と考えられる。



第36図 SD3033 平・断面図 (1/40)



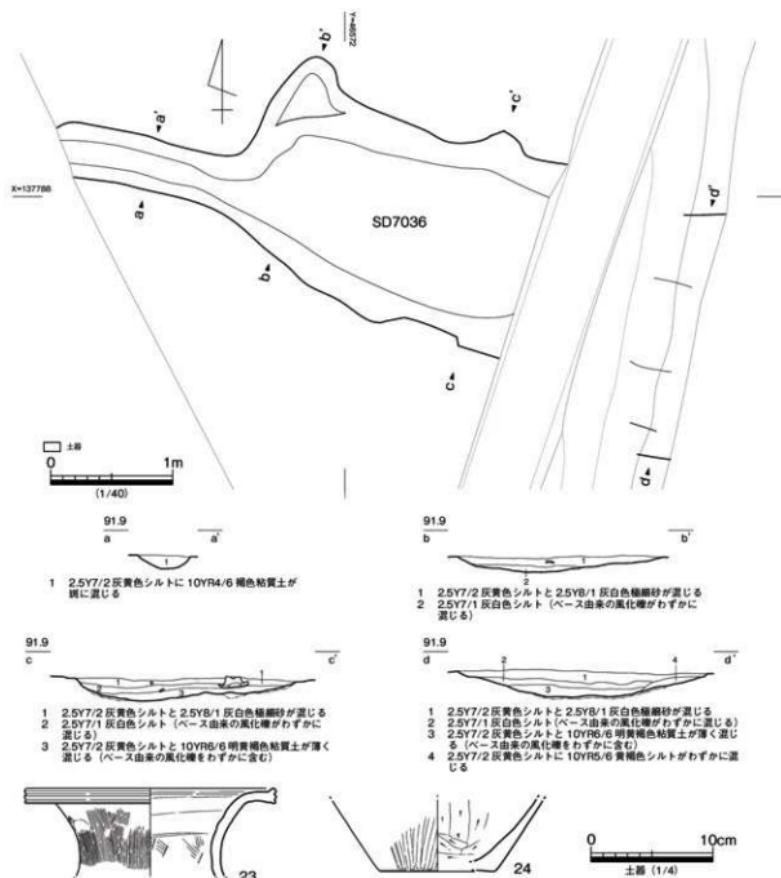
第37図 SD6003・SD6006 平・断面図 (1/80・1/40)

②溝

SD3033（第36図）

3区中央付近で検出した東西方向の幅広い落ち込み状の遺構である。西側ではSD3032により、東側ではSK3003により掘り込まれる。検出長3.54m、幅1.51m、深さ9cmである。埋土中からは遺物は出土しなかった。

遺構の時期は明らかではないが、周溝墓6を構成するSD3028から南へ5.70mの距離で、方向もほぼ揃う。弥生時代の周溝墓を構成する溝である可能性がある。



第38図 SD7036 平・断面図 (1/40) 出土遺物 (1/4)

SD6003・SD6006（第37図）

6区北端で検出した。異なる遺構番号が振られたが、同一遺構と考えられる。東西方向を向き、西端部分でわずかに北へ屈曲する。溝の中央付近で二又になり、溝の幅が広がる。検出長6.33m、幅は東端部で1.97m、最大幅3.45m、西側屈曲部付近で1.17m、深さ4～9cmである。溝の底のレベルは91.04～91.28mで、西から東へ傾斜する。南側の溝の方が深く、本来は南側の筋が本来の溝の流路と考えられる。埋土中からは、弥生土器小片が出土した。

周溝墓1の北側に位置し、周溝墓を構成する東西方向の溝と同方向の溝である。周溝墓1の北側を画するSX4015からの距離は約10mである。SX4015とSX4010との距離と比べればやや広いが、溝の方向や弥生土器が出土したことから、周溝墓を構成する溝の可能性もある。

遺構の時期は明らかではないが、周溝墓群と同じ弥生時代中期後半～後期後半頃としておく。

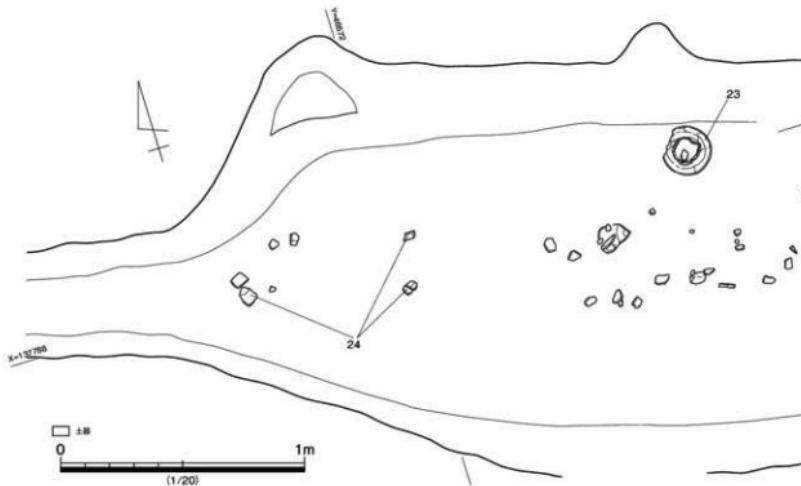
SD7036（第38・39図）

7区南端付近で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外へ延び、東側の6区では検出できなかった。6区は削平のため、検出面が低かったことに挙る可能性もある。溝の中央付近から東側では幅が急に広くなる。検出長5.20m、西部の幅は0.42m、東部の幅は2.03m、深さは西部で11cm、東部で18～21cm、溝の底のレベルは91.52～91.62mで、西から東へ傾斜する。埋土中からは、弥生土器広口壺、壺底部が出土した。

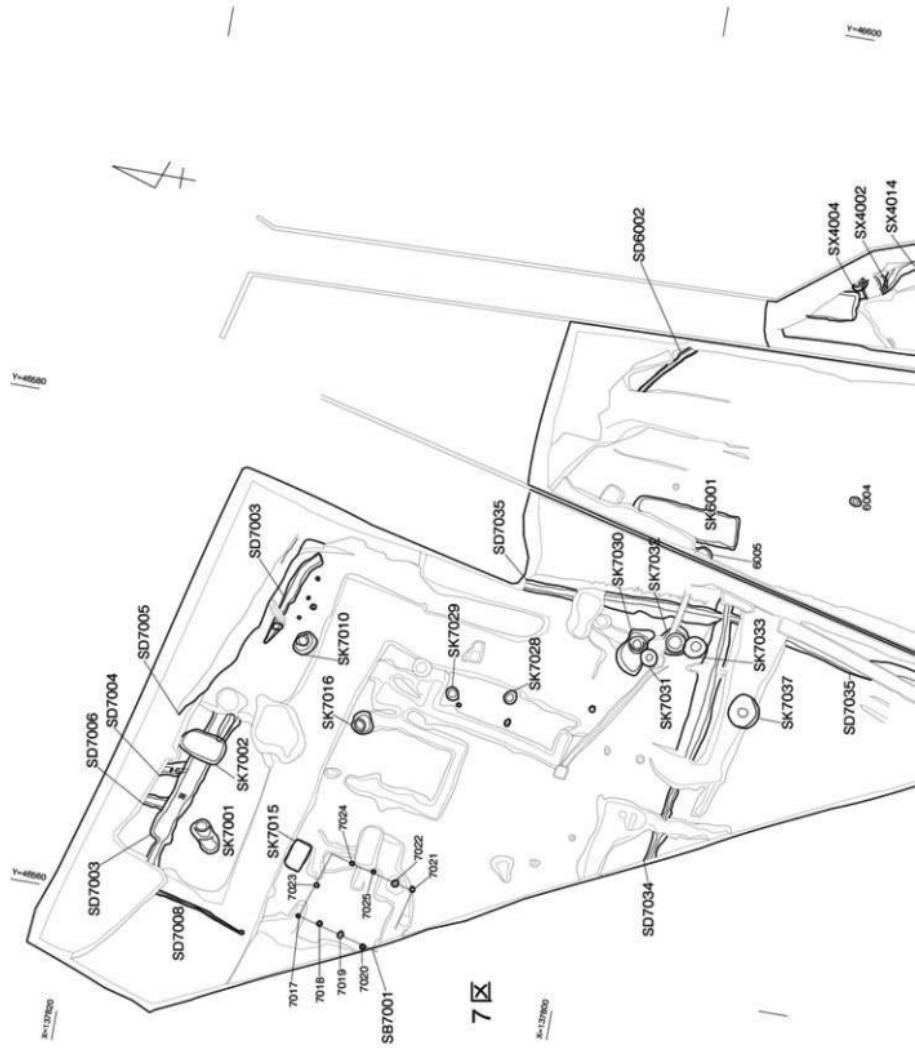
溝の方位は、他の周溝墓を構成する東西方向の溝と概ね同じであり、周溝墓を構成する溝とも考えられるが、周囲では他に同様の溝が検出されなかつたので、溝として報告する。

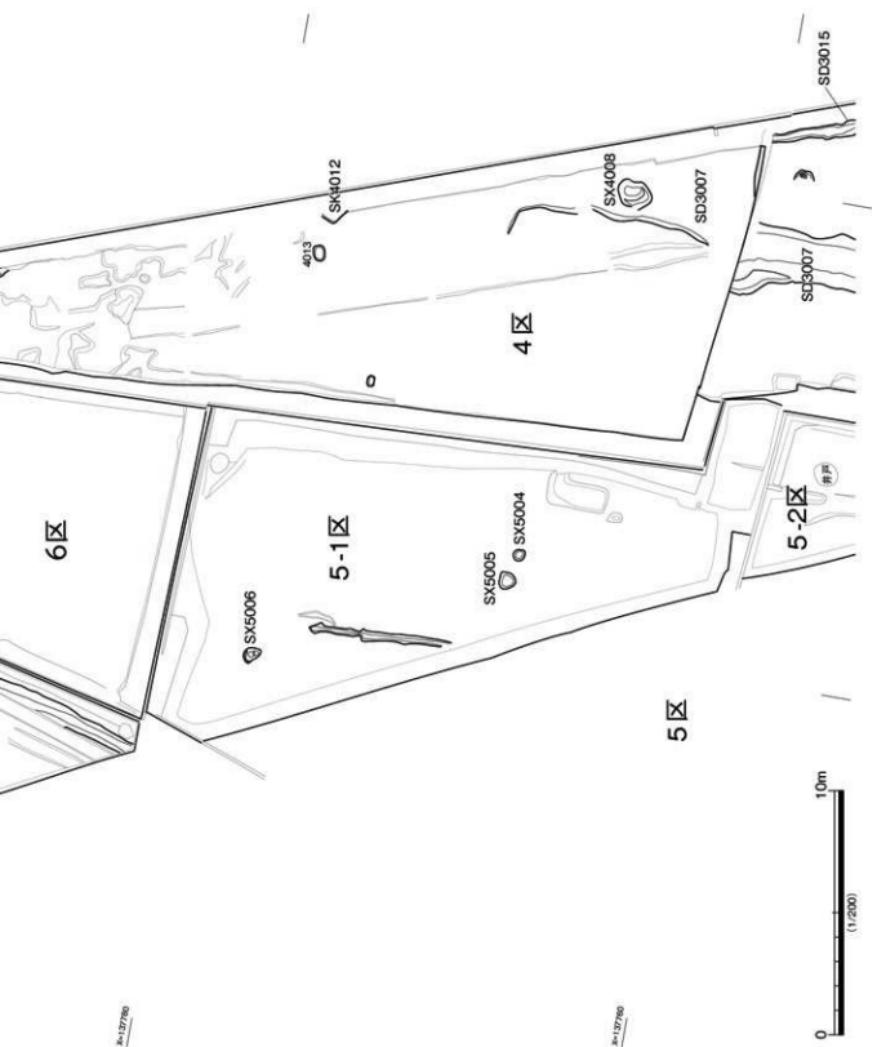
23は弥生土器広口壺。口縁端部には凹線が巡る。24は壺底部。

遺構の時期は弥生時代中期後半新段階～後期前半古段階頃と考えられる。

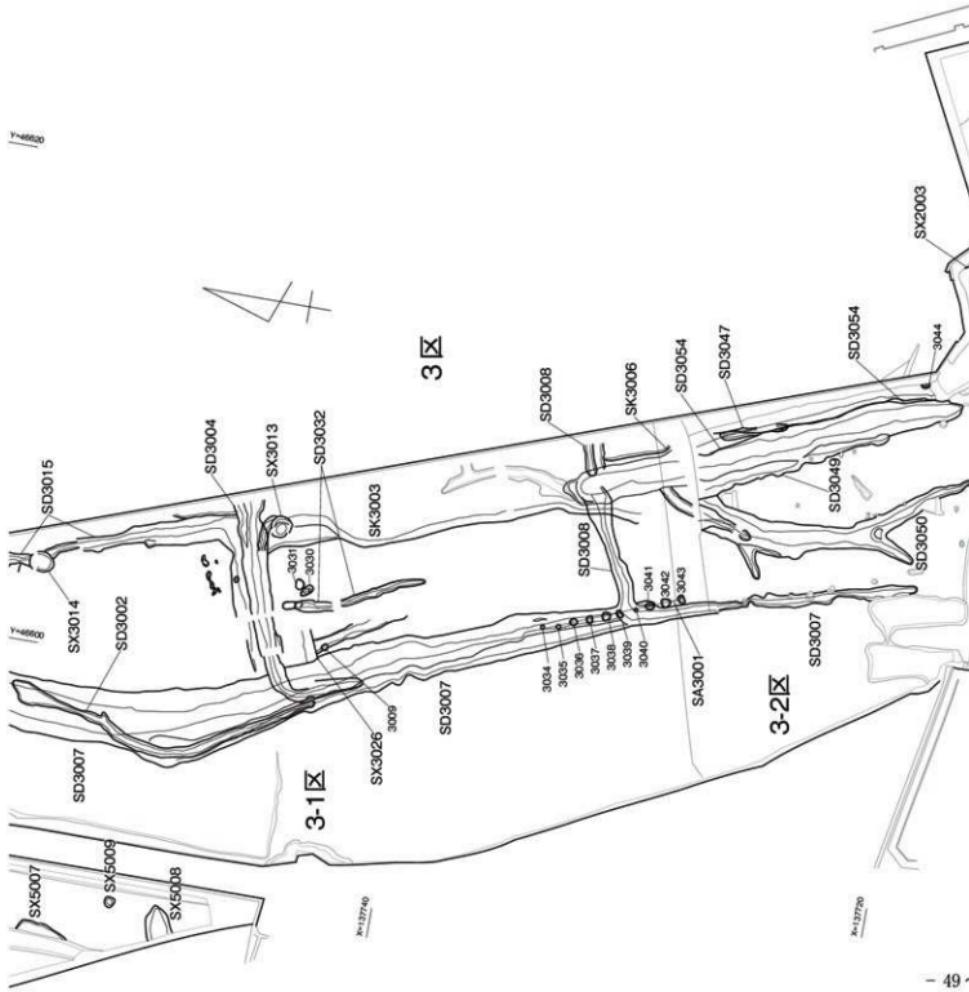


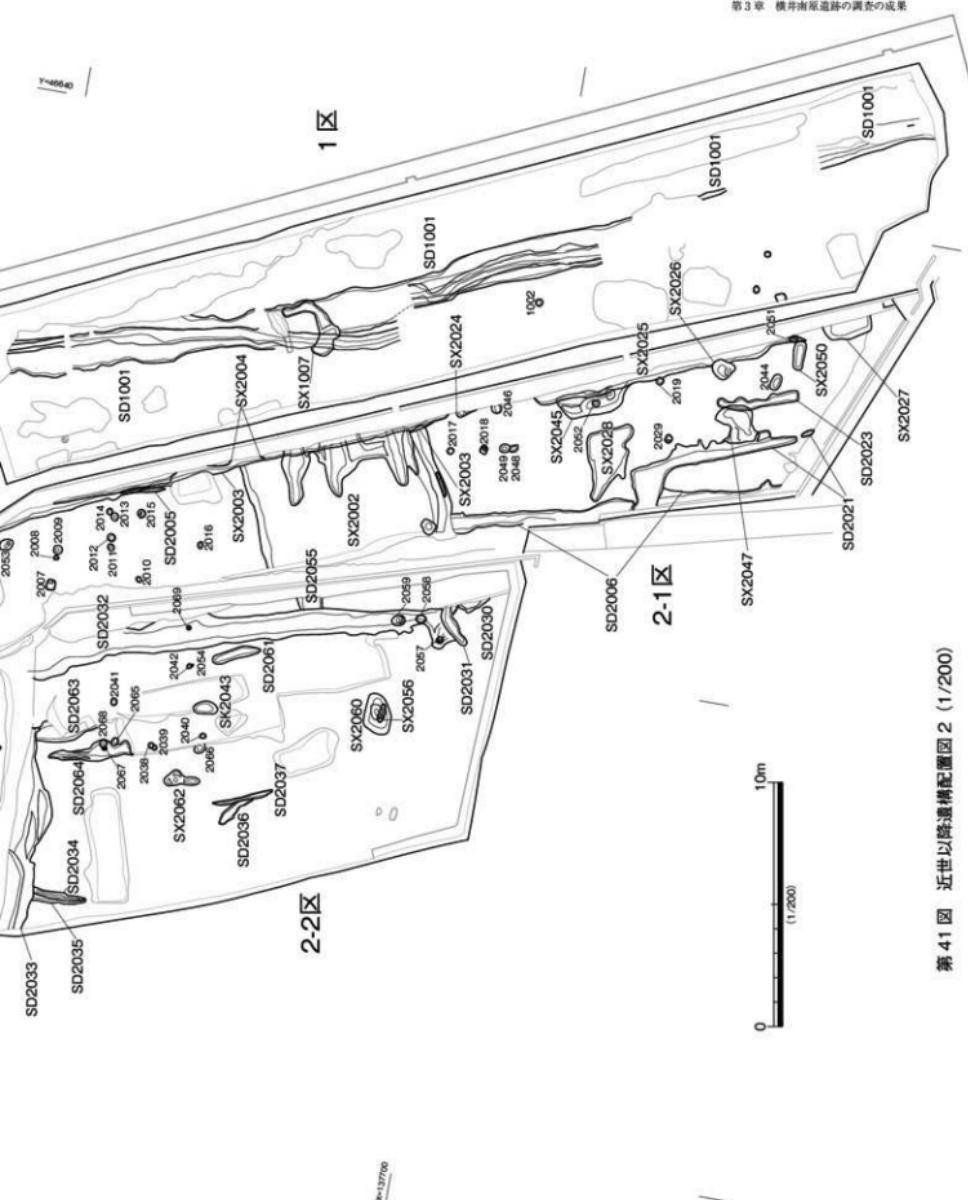
第39図 SD7036 土器出土状況 (1/20)





第40図 近世以降遺構配置図 1 (1/200)





第41圖 近世以降遺構配置圖2(1/200)

2 近世以降・時期不明の遺構・遺物（第40・41図）

おもに溝群と落ち込みを検出した。溝群は水田開発に伴うものと考えられ、現状の地割に沿う。調査地の西半は削平によりほとんど遺構は認められなかったが、東半では、等高線に沿う南北方向の溝とそれに直交・分岐する東西方向の溝を検出した。7区以外の土坑・落ち込みとしたものはいずれも浅いもので、遺物はほとんど含まなかった。

7区は宅地撤去後の調査であったが、大型壺を埋めた土坑が多く、近代以降の宅地での壺の設置状況を垣間見ることができる。

また、北側では、旧尾池の汀線にかかる落ち込みを検出した。調査前は埋め立てられていたが、平成10年香南町管内図によれば、尾池は7区北側まで伸びており、その状況を発掘調査で確認することができた。

1～3区の溝群からは、近世以降の陶磁器とともに須恵器が一定量出土した。周辺に古代集落または窯跡の存在が予想される。

小規模な遺構については出土遺物に恵まれず、遺構の時期の判別が難しいものもあったが、弥生時代の周溝墓群を除けば当地の開発が18世紀後半以降であることから、時期が明らかではない遺構はこの項で報告する。

①掘立柱建物・構列

SB7001（第42図）

7区北西部で検出した掘立柱建物である。桁行4間（3.0m）、梁間2間（2.9m）と考えられるが、北東隅・南西隅・南側梁間中央の柱穴は攪乱により検出できなかった。面積は8.7m²、主軸方位はN164°Eで、周囲の地割と概ね同じである。柱間は、桁行は0.89～1.05m、梁間は1.45mである。柱穴は概ね円形で直径15.6～25.7cm、深さ10cm程度である。柱穴の埋土中からは遺物は出土しなかった。

柱穴埋土や周辺の状況から、遺構の時期は近代以降と考えられる。作業小屋のような簡易な建物であったと考えられる。

SA3001（第43図）

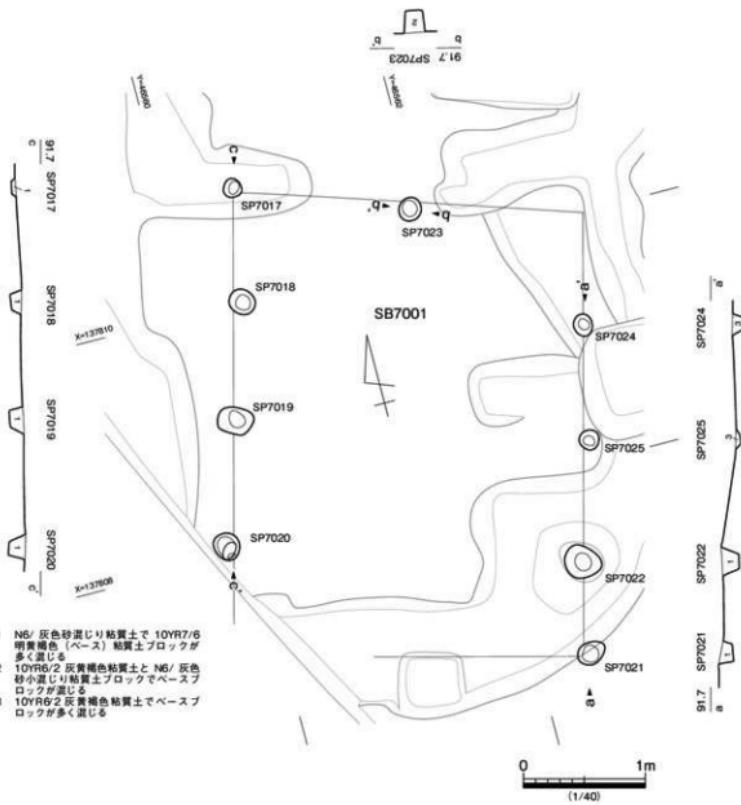
3区南部で検出した。10穴を検出した。延長5.83mで、柱間は0.51～0.75m、主軸方位はN21.44°Wである。柱穴は円形または不整形円形で、円形のものは直径15.5～34.7cm、不整形のものは長軸31.4～36.0cm、短軸20.8～25.7cm程度で、深さはいずれも6～12cm程度である。北側8穴はSD3007と完全に重複し、SD3007の掘削後に検出した。南側2穴はSD3007よりやや東へ位置する。

遺構の時期は、SD3007より古いくことから、18世紀後半頃以前である。

②土坑・落ち込み

SX1007（第44図）

1区中央やや北寄りで検出した。SD1001と重複し、SD1001掘り下げ後に検出した。東西方向の不整形の土坑状の遺構の東端から北方向へ溝状遺構が延びる形状で、周囲の地割と同じ方位を示す。北側の溝状遺構部分では幅0.39m、深さ5.4cm程度で、土坑状遺構部分は長軸1.37m、短軸0.60m、深さ24cmを測る。遺構検出状況からSX2002へ連続する可能性がある。埋土からは須恵器蓋・壺片が出土した。



第42図 SB7001 平・断面図 (1/40)

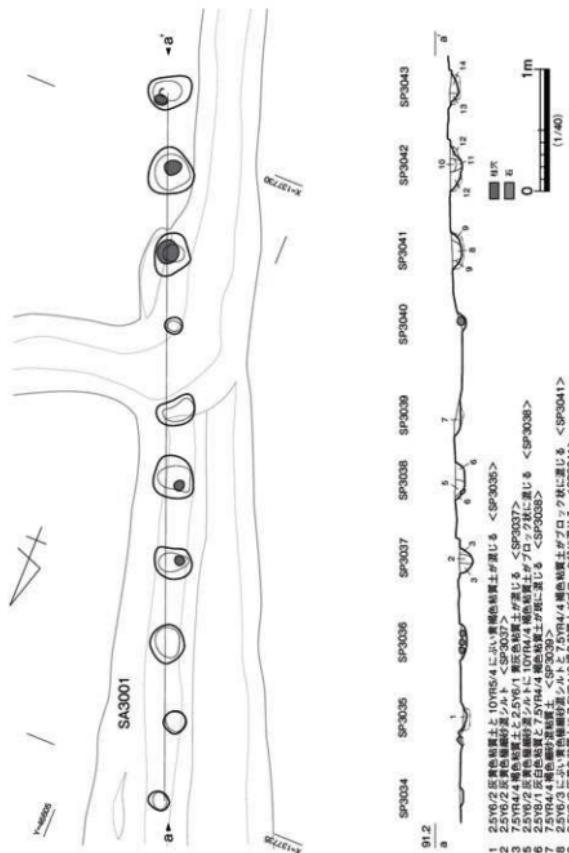
25は須恵器蓋。摘みが付くもので、中心部分は器高が下がる。8世紀後半～末頃。

出土遺物は須恵器片のみであったが、遺物量が少ないと、周辺の近世以降の遺構からも須恵器が多く出土することから、古代の遺構とは言い切れない。周辺に確実な古代の遺構がないこと、SX2002へ連続する可能性があることを考えあわせ、近世以降の遺構と考えられる。

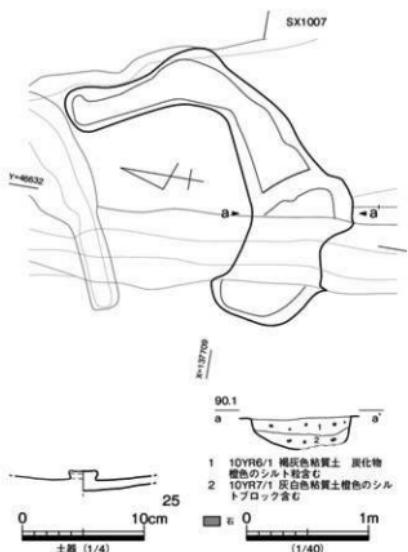
SX2024（第45図）

2-1区中央東端付近で検出した。東南側は調査区外へ延びる。幅0.25m、深さ21cmで、延長0.44mを検出した。SX2004、SX2025と同じ遺構の一部の可能性が考えられる。埋土中からは須恵器小片がわずかに出土したのみであった。

遺構の時期は、SX2004、SX2025との連続性から近世以降と考えられる。



第43図 SA3001 平・断面図 (1/40)



第 44 図 SX1007 平・断面図 (1/40)
・出土遺物 (1/4)

SX2026 (第 45 図)

2-1 区南東端付近で検出した。SX2025 を掘り込む。不整円形で、長軸 0.92m、短軸 0.78m、深さ 16cm で、南端付近は直径 26.5cm、深さ 15 cm の範囲でピット状に掘り窪む。埋土中からは滅失した須恵器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、SX2025 を掘り込むことから、近世以降と考えられる。

SX2027 (第 45 図)

2-1 区南東端で検出した。SX2025 の延長上に位置する。北東側は調査区外へ延びる。隅丸長方形の浅い落ち込み状の遺構で、南北方向は 1.97m、東西方向は 0.70m 以上、深さ 13 cm 程度、主軸方位は現地割方向に近い。埋土は SX2002 に類似する。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、SX2002 との埋土の類似から、近世以降と考えられる。

SX2028 (第 45 図)

2-1 区南部で検出した。北辺と東辺はほぼ直角をなすが、南西側は遺構のラインが不明瞭で不定形の浅い落ち込み状の遺構である。長軸 2.76m、短軸 1.94m、深さ 8cm 程度である。東側 0.68m の位置に SX2045 と対し、SD2021、SX2025 とともに区画を形成した可能性もある。埋土中からは磁器片、培塿片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物から 18 世紀後半頃と考えられる。

SK2043 (第 45 図)

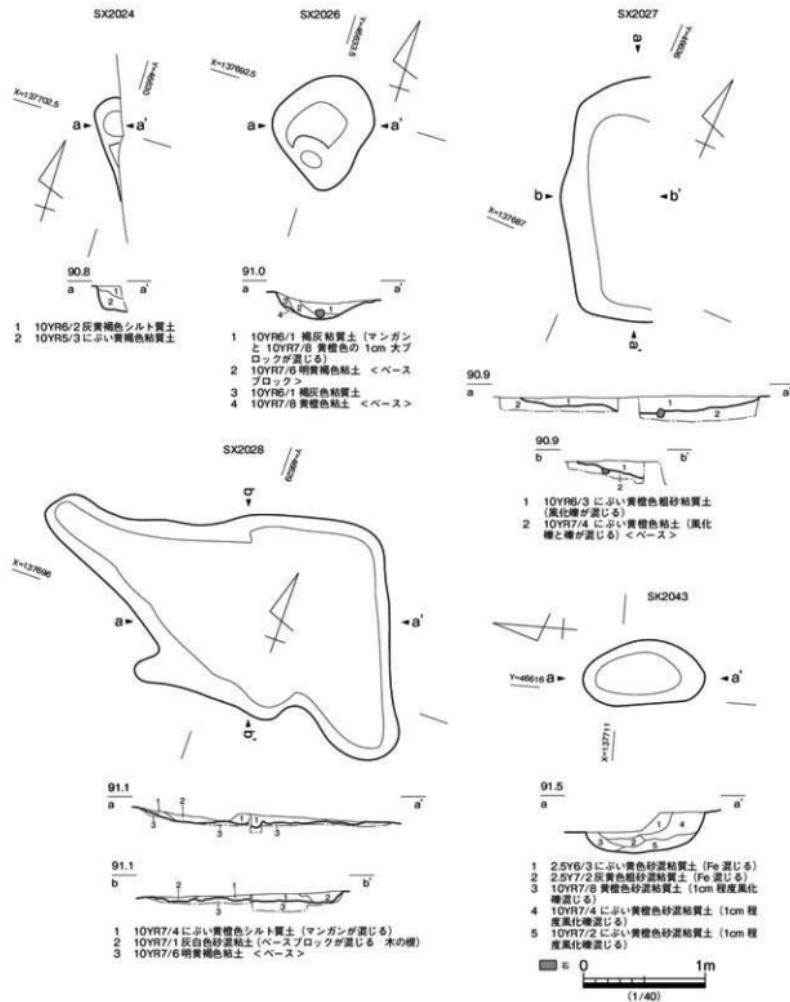
2-2 区中央部付近で検出した。楕円形で長軸 1.00m、短軸 0.51m、深さ 30cm を測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、近世遺構の埋土に類似することから、近世以降と考えられる。

SX2045 (第 46 図)

2-1 区南東部で検出した。東側は SX2025 に掘り込まれる。また、SP2052 に掘り込まれる。長軸 2.77m、短軸 0.89m の不整形で、深さは 14cm 程度を測る。南部には直径 41.5cm、深さ 10cm 程度のピット状の落ち込みがある。0.68m 西側に位置する SX2028 とは、位置関係から関連する遺構の可能性がある。埋土中からは出土遺物はなかった。

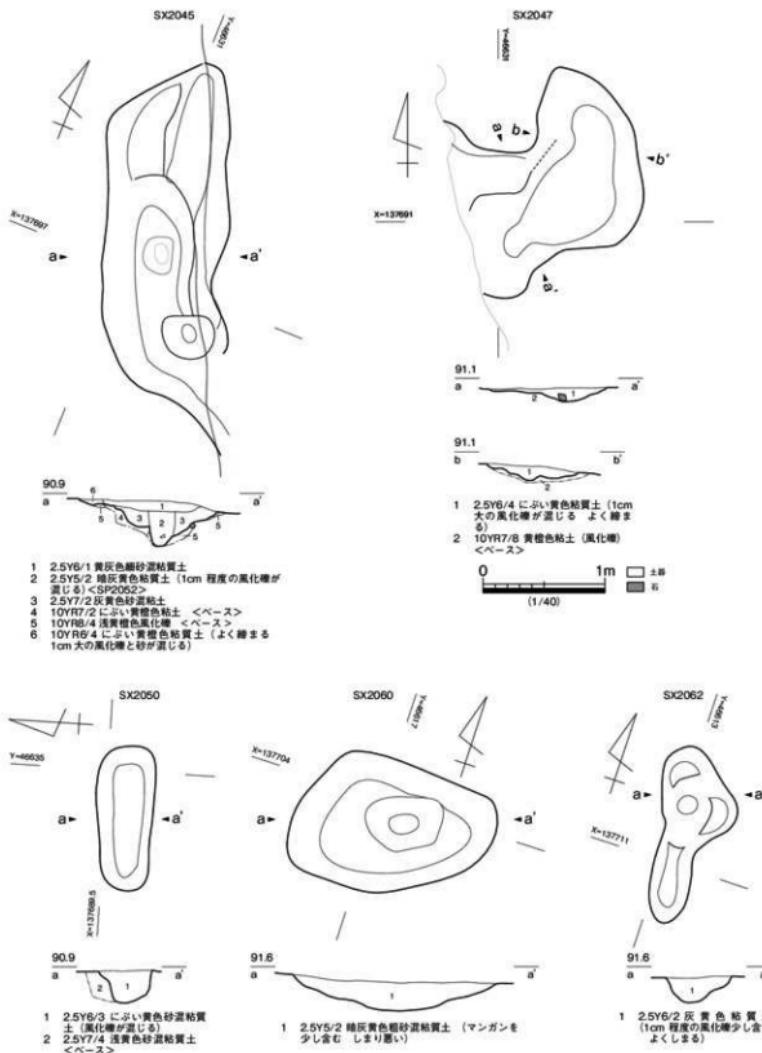
SX2028 と関連する可能性を考えれば、18 世紀後半頃と考えられる。



第45図 SX2024・SX2026・SX2027・SX2028・SK2043 平・断面図 (1/40)

SX2047 (第46図)

2-1区南部で検出した浅い落ち込み状の遺構である。SD2021により西側、SD2023により東側では検出していない。不整形で長軸1.76m、短軸1.05m、深さは最大で10cm程度を測るが、底部にはやや凹凸が認められる。形状や埋土から自然の落ち込みと考えられる。埋土中からは出土遺物はなかった。



第46図 SX2045・SX2047・SX2050・SX2060・SX2062 平・断面図 (1/40)

遺構の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

SX2050（第46図）

2-1区南部で検出した。長楕円形で長軸1.17m、幅0.45m、深さ26cmを測る。SD2023・SD2021の南端部分から屈曲して東へ延びるような位置関係である。埋土中からは出土遺物はなかった。埋土がSX2047と類似し、同様の時期・性格のものであろう。

遺構の時期は、埋土から近世以降と考えられる。

SX2060（第46図）

2-2区南部で検出した不整円形の遺構である。長軸1.73m、短軸1.16m、深さ15cmを測り、中央付近はわずかに窪む。木の根痕を除去後に検出した。埋土の綺麗度は悪い。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、埋土と周辺の状況から近世以降としたい。

SX2062（第46図）

2-2区中央付近で検出した。不整形で、中央部分付近はピット状に窪む。長軸1.46m、幅は、ピット状に窪む部分が0.59m、南側では0.33m、深さは窪む部分は23.6cm、南側の溝状部分は6.5cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、埋土と周辺の状況から近世以降としたい。

SX3013（第47図）

3区中央付近東寄りで検出した土坑である。東側が高い段掘り状を呈する。円形で直径0.92m、深さは、1段高い北側が23.2cm、南側は29.7cm程度である。土層断面により周溝墓の一部であるSD3028より新しく、SK3003より古い。近接する近世の溝SD3004とは直接の前後関係はないが、SD3004に切り込まれるSK3003の下面で検出しており、SD3004より古い。下層には炭をわずかに含む。埋土からは弥生土器、須恵器、磁器小片、鉄器片が出土した。

26は鉄釘。角釘と考えられる。

遺構の時期は、磁器片が出土したことから近世以降である。

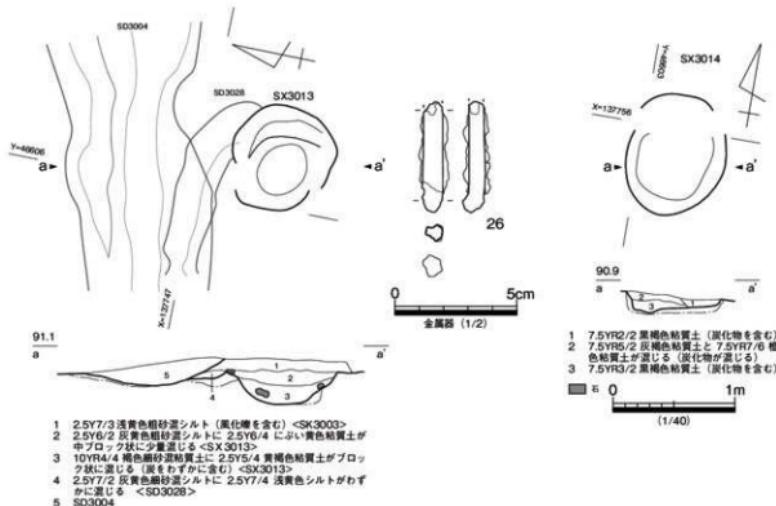
SX3014（第47図）

3区北端付近で検出した。楕円形で長軸0.79m、短軸0.59m、深さ16cm程度を測る。SD3015の上面で検出した。埋土中からの出土遺物はなかった。

近世の遺構であるSD3015の上面で検出されたことから、遺構の時期は近世以降である。

SX4002（第48図）

4区北端で検出した。東側は調査区外へ延び、西側は、平面図では擾乱により削平されるが、断面図によれば遺構の上端が確認できる。楕円形を呈すると考えられ、南北1.07m、東西0.73m以上、深さは35cm程度で東へ傾斜する。SX4004、SX4014と重複し、これらよりも新しい。埋土中からは磁器片が出土した。



第 47 図 SX3013・SX3014 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/2)

遺構の時期は、出土遺物から近世以降である。

SX4004（第 48 図）

4 区北端で検出した。東半部は調査区外へ延びる。楕円形と考えられ、長軸 0.68m 以上、短軸 0.41m 以上、断面は西側が 1 段高い段状を呈し、深さは南西側の 1 段高い部分が 22.4cm、北東側の深い部分が 33.9cm である。遺構の切り合い関係により SX4002 より古い。埋土中からは近世陶器片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

SX4008（第 48 図）

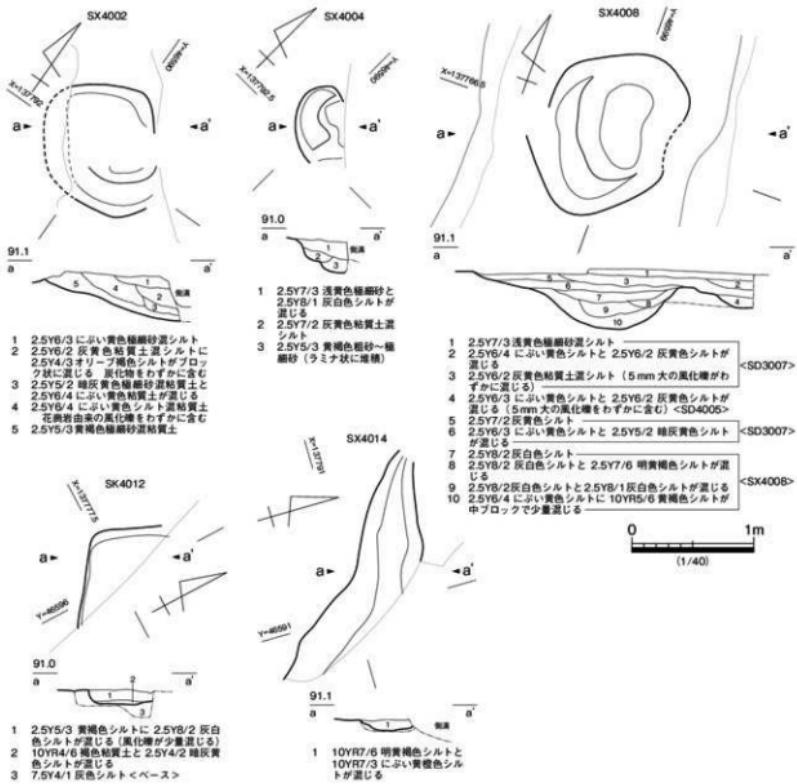
4 区南東隅付近で検出した。楕円形を呈し、南西側が 1 段高い段掘り状を呈する。長軸 1.47m、短軸 1.00m、深さは南西側が 21.5cm、北東側が 31.8cm を測る。土層断面図から、SD3007 より古いことがわかる。

埋土中からは出土遺物はなかったが、埋土が近世包含層と類似することから、遺構の時期は、近世以降と考えられる。

SK4012（第 48 図）

4 区中央付近東端で検出した。隅丸方形と考えられるが、東半部は調査区外へ延びる。1 辺 0.84m 以上、深さ 8.8cm を測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は埋土と周辺の状況から近世以降と考えられる。



第48図 SX4002・SX4004・SX4008・SK4012・SX4014 平・断面図 (1/40)

SX4014 (第48図)

4区北端付近で検出した。溝状を呈し、東部は調査区外へ延び、西部はSX4002により消失する。1.48m分を検出した。幅は0.19～0.53m、深さ9cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は埋土と周辺の状況から近世以降と考えられる。

SX5004 (第49図)

5-1区中央やや南寄り、SX5005の東側約0.58mの位置で検出した。隅丸方形を呈し、一辺0.48m、深さ6cm程度である。遺構内は10cm大程度の礫により充填されており、深さは概ね礫の大きさの1/2程度と考えられる。埋土中からはサスカイト製石鎌が1点出土しただけであるが、遺構の時期を示さないと考えられる。

27はサスカイト製石鎌。上端部・下端部とも欠損し、基部の形状は不明である。

遺構の時期は不明であるが、周辺の状況などから近世～近代と考えられる。

SX5005（第49図）

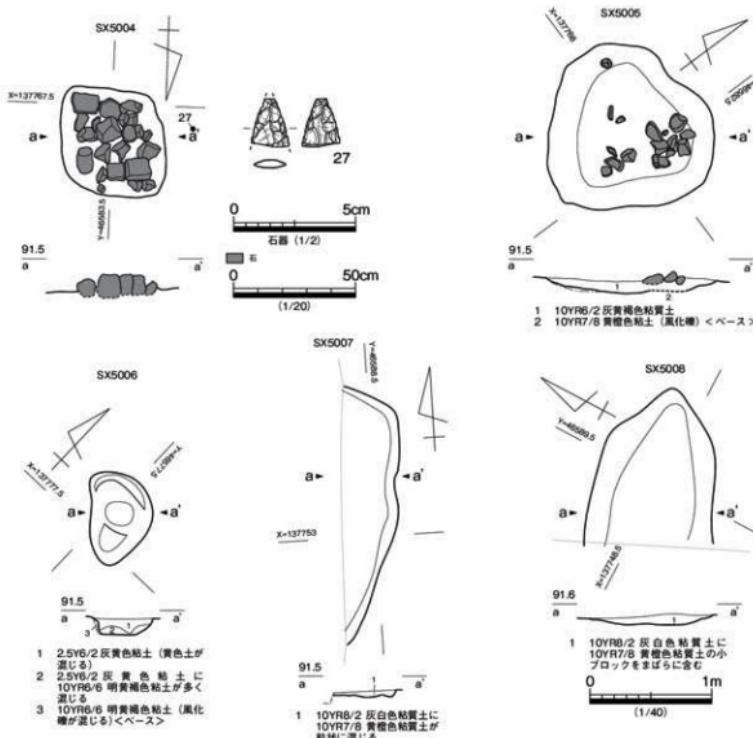
5-1区中央やや南寄り、SX5004の西側約0.58mの位置で検出した。不整円形を呈し、軸長は0.69m、深さ8.4cmを測る。埋土中からは、SX5004よりやや小さい5～10cm大の礫が散乱していた。SX5004と類似する遺構と考えられる。

遺構の時期は、埋土の類似性からSX5004と同様近世～近代と考えられる。

SX5006（第49図）

5-1区北部で検出した。不整円形で、中央部分が深い。長軸0.77m、短軸0.49m、深さは中心部分が21.5cm、北・南側の1段浅い部分は19.9cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、埋土から近世以降と考えられる。



第49図 SX5004・5005 平・断面図 (1/20)・出土遺物 (1/2)、SX5006・5007・5008 平・断面図 (1/40)

SX5007 (第49図)

5-2区中央付近で検出した、浅い落ち込み状遺構である。西側は攪乱により消失する。不整形を呈し、長軸2.13m、短軸0.47m、深さは6cm程度である。埋土はSX5008に類似する。埋土中からは須恵器片が出土した。

遺構の時期は、周辺の状況から近世以降と考えられる。

SX5008 (第49図)

5-2区南端部付近で検出した。概ね東西方向の深い溝状遺構である。検出長1.21m、幅1.06m、深さは10cm程度で、埋土はSX5007に類似する。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、周辺の状況から近世以降と考えられる。

SK6001 (第50図)

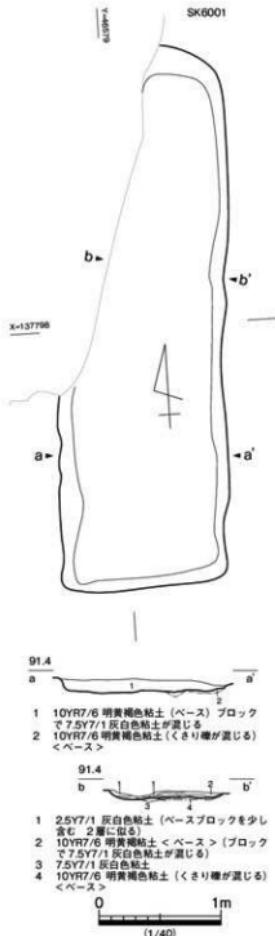
6区北部で検出した。長方形を呈すると考えられるが北西部は調査区外へ延びる。長辺4.40m、短辺1.28m、深さは10cm程度である。埋土中にはベースブロックを含み、最終的には人為的に埋め戻されたと考えられる。粘土取り痕の形状に似るものと考えられる。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、埋土や周辺の状況から近世以降と考えられる。

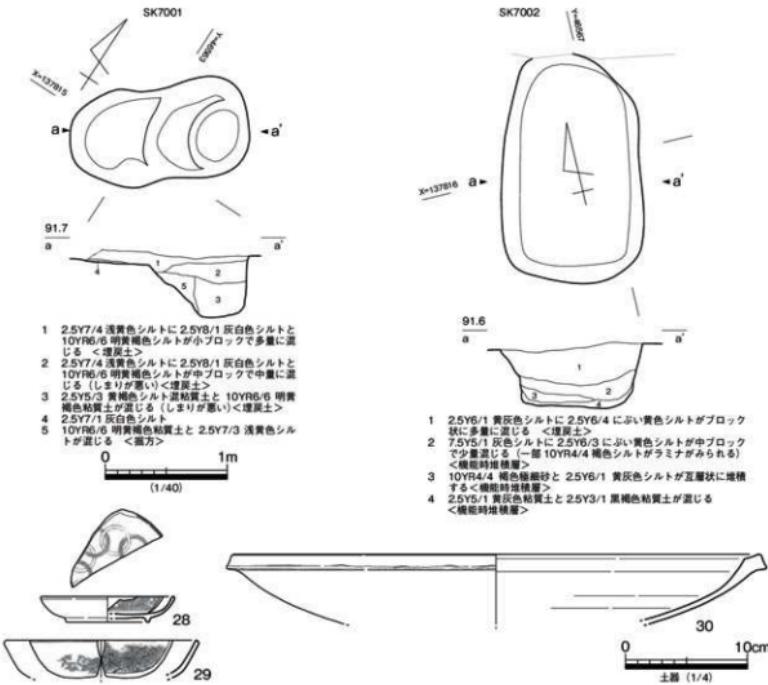
SK7001 (第51図)

7区北部で検出した。楕円形の土坑である。断面の形状は、北東側はほぼ直立するが、南西側は傾斜が認められ、南西半部は浅い。長軸1.46m、短軸0.72m、深さは深い部分が50cm、浅い部分は10cmである。土坑の本体は北東半部の中場から下の部分（長軸0.81m）と考えられる。埋土中からは出土遺物はなかったが、周囲の状況や断面形状から直径42cm程度の甕が据えられていた可能性が考えられる。南西側の断面が傾斜するのは、甕を取り出した際のものとも考えられ、北東側の円形土坑の部分に甕を据え、廃棄時に甕を取り出す際に南西側を掘り下げたと考えられる。

遺構の時期は、周囲の状況から近代以降と考えられる。



第50図 SK6001 平・断面図 (1/40)



第 51 図 SK7001・7002 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)

SK7002 (第 51 図)

7 区北部で検出した。隅丸長方形で、長軸 1.88m、短軸 1.09m、深さは 53cm、断面形状は逆台形である。埋土の上半部にはベースブロックが多量に混ざり、最終的には人為的な埋め戻しによるものと考えられる。遺構の切り合ひ関係により SD7003 より新しい。埋土中からは磁器皿、土師質土器焰烙が出土した。

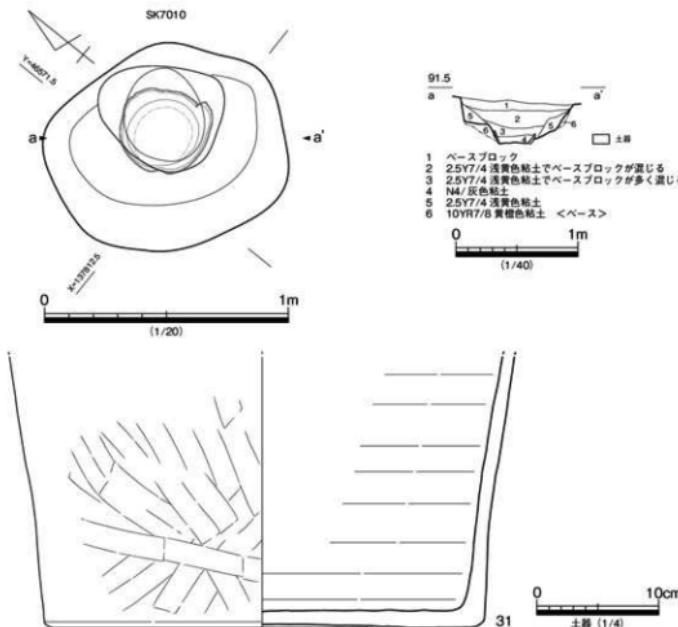
28・29 は磁器皿。28 は銅板転写により緑色に発色する釉で文様を描き、口縁端部には口銷を施す。29 は内外面に呉須により文様を施す。30 は土師質土器焰烙。外型成型によるもの。19世紀末以降。

遺構の時期は、出土遺物により 19世紀末以降と考えられる。

SK7010 (第 52 図)

7 区北部で検出した。楕円形で、長軸 0.98m、短軸 0.84m、深さは 35cm である。遺構の底部には、底径 36cm 程度の土師質土器甕が高さ 12 ~ 20cm 程度残されていた。断面観察から、もとは直径 40cm 程度の土師質土器甕を埋納した土坑であったものを、土坑の上部を掘削して甕の上半部を取り出した後、埋め戻しを行ったと考えられる。埋土中からは埋められた甕以外は出土しなかった。

31 は土師質土器甕。近世以降。



第52図 SK7010 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4)

遺構の時期は、出土遺物により近世以降である。

SK7015（第53図）

7区北部で検出した。長方形で、長辺122m、短辺0.77m、深さは22cm程度、断面形状は箱形を呈する。埋土上半部にはベースブロックが混じり、埋め戻しによったと考えられる。埋土中からは近世以降の焼瓦が出土した。

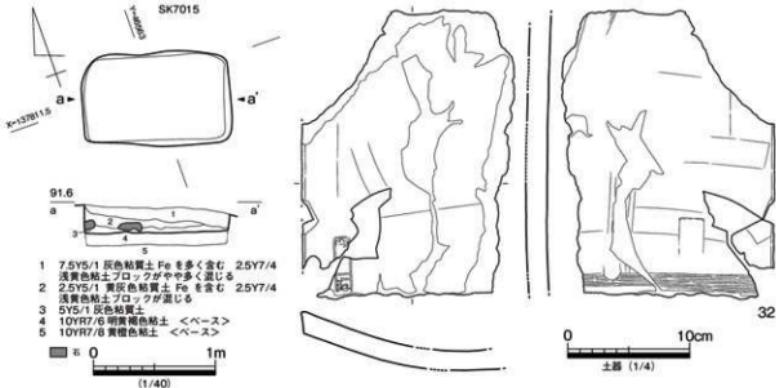
32は平瓦。凹面側には長方形で囲われた刻印が認められたが、遺存状態が悪く判読できなかった。凹面側の端部には横方向の刻み目が施される。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降と考えられる。

SK7016（第54図）

7区北部で検出した。不整円形で、長軸0.90m、短軸0.86m、深さ20cmを測る。断面形状は、北西側がピット状に深い段掘り状を呈する。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、周辺の検出状況や遺構の埋土から、近代以降と考えられる。



第53図 SK7015 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)

SK7028（第55図）

7区中央部付近で検出した。円形に近い楕円形で、長軸0.57m、短軸0.48m、深さ17cmを測る。土坑内には陶器壺の下半部が埋められていた。壺は底径23cm程度、残存部の最大径が39cm程度で、壺の大きさは土坑の大きさとほぼ同じで、土坑は壺の大きさに合わせて掘削されたと考えられる。壺の上半部は削平され失われたと考えられる。埋土中からは、壺の他、近代のものとされる銭貨が出土したが、摩滅が著しく銭種は不明である。

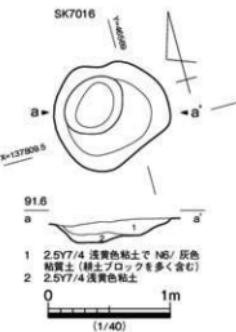
33は陶器壺。外表面とも赤茶色の鉄釉を施し、内面には砂目積み痕が残る。34は銭貨。中心に円形の孔がある。銭種は不明であるが、孔の大きさ・形状や全体の大きさから現在も使われる50円玉の可能性が高い。現在使用される50円玉は、昭和42年に使用が開始される。

遺構の時期は出土遺物により昭和後半以降と考えられる。

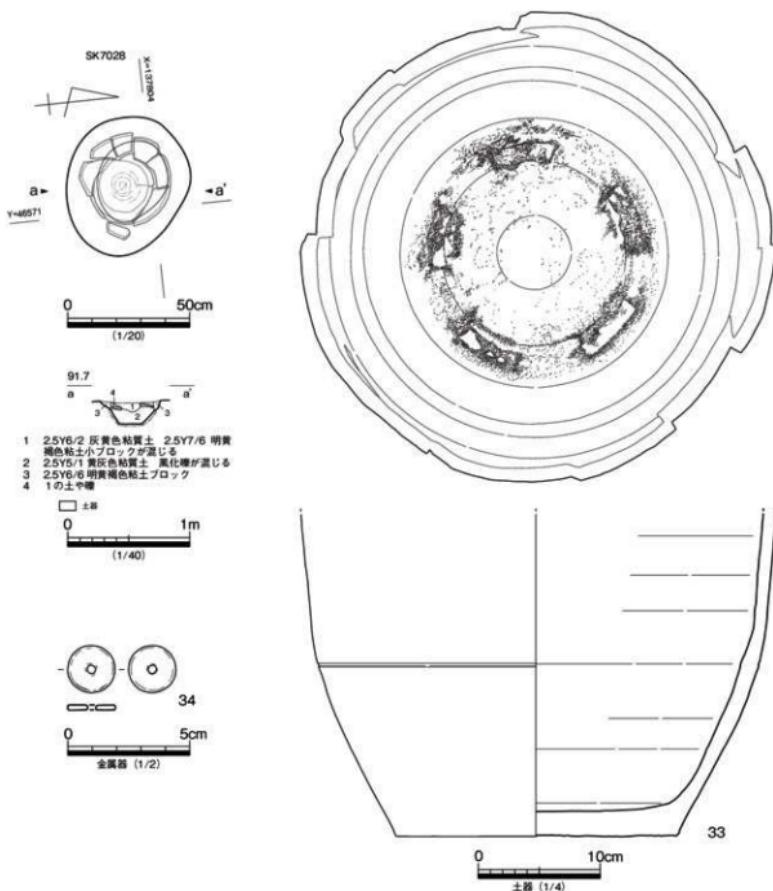
SK7029（第56図）

7区中央付近、SK7028の北側約187mで検出した。ほぼ円形で、直径0.48～0.56m、深さ20cmである。埋土中からは底径32cm、胴部残存部最大幅44cm程度の土師質土器壺が高さ15cm程度残されていた。土坑の大きさは壺の大きさとほぼ一致し、土坑は壺の大きさに合わせて掘削されたものと考えられる。土坑内の埋土はしまりが悪く、もともとはほとんど土の堆積はなかったと考えられる。埋土中からは釘、土師質土器壺口縁部片が出土した。

35・36は土師質土器壺。35は埋められていたもの。底部にはハケが施される。36は口縁部小片。35と同一個体かどうかは不明である。37は鉄釘。断面の丸い近代以降のもの。



第54図 SK7016 平・断面図 (1/40)

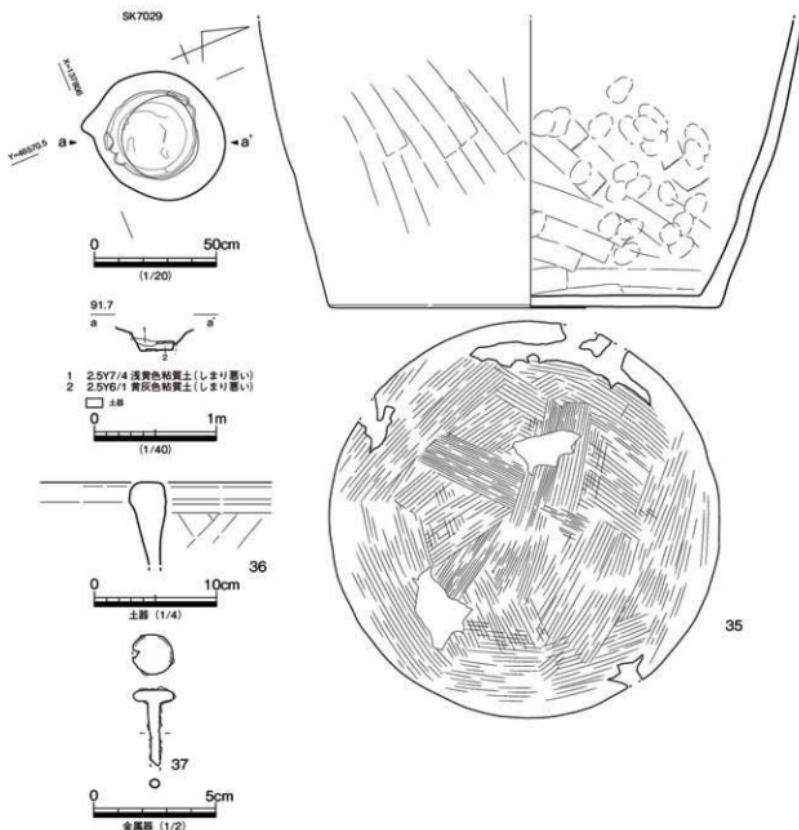


第55図 SK7028 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4・1/2)

遺構の時期は、出土遺物により近代以降と考えられる。

SK7030（第57・58図）

7区南部で検出した。不整形の土坑の内部に円形の土坑を掘削する。不整形の部分は長軸1.87m、短軸0.82m、深さは13cm程度、円形の部分は直径0.70～0.74m、深さ68cmで、内部には底径36cm程度の土師質土器壺が35cm程度の高さまで残されていた。土坑の円形部分は土師質土器壺の大きさにほぼ合わせて掘削されている。断面観察から、円形部分の方が後から掘削されており、最初に広めに浅く掘削



第 56 図 SK7029 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4・1/2)

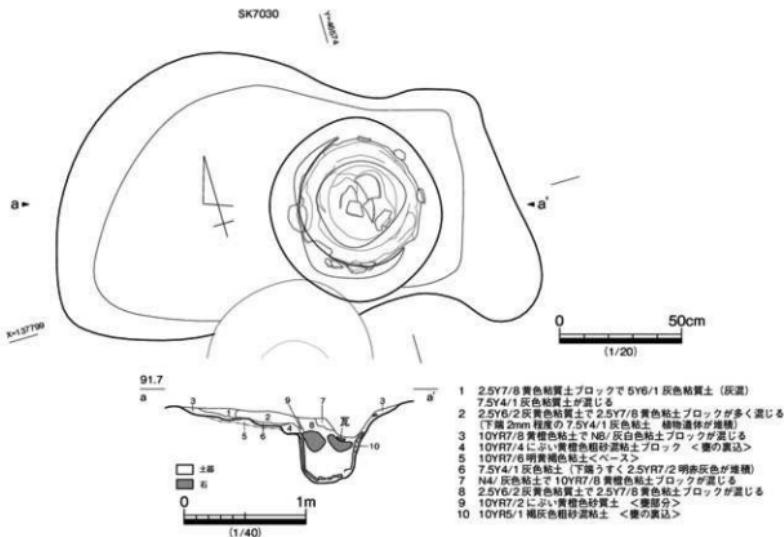
したのちに壺を設置するために大きさに合わせて掘削したと考えられる。廃棄時には、壺は放置したまま埋め戻している。壺は高さ 46cm を測り、完形に近い形で復元されており、上部は割れて壺の内側に投棄されたのであろう。壺の埋戻土からは焼瓦片が出土した。

38 は土師質土器壺。底部はハケ、体部は内外面とも板ナデにより成形し、口縁端部は内側を玉縁状にする。

遺構の時期は、出土遺物と周囲の状況から、近代以降と考えられる。

SK7031（第 59 図）

7 区南部、SK7030 の南西に接して検出した。遺構の切り合い関係により、SK7031 が新しい。円形で、



第 57 図 SK7030 平・断面図 (1/20 · 1/40)

直径 0.66m、深さ 53cm を測る。土坑内には底径 36cm 程度の壺が設置され、高さ 20cm 程度残されていた。土坑の大きさはほぼ壺の大きさと同じで、壺の大きさに合わせて掘削されたと考えられる。土坑内からは設置された壺以外の出土遺物はなかった。

39 是土師質土器壺。底部外面はハケで調整し、体部は内外面とも板ナデで調整する。

遺構の時期は、出土遺物や周囲の状況から、近代以降と考えられる。

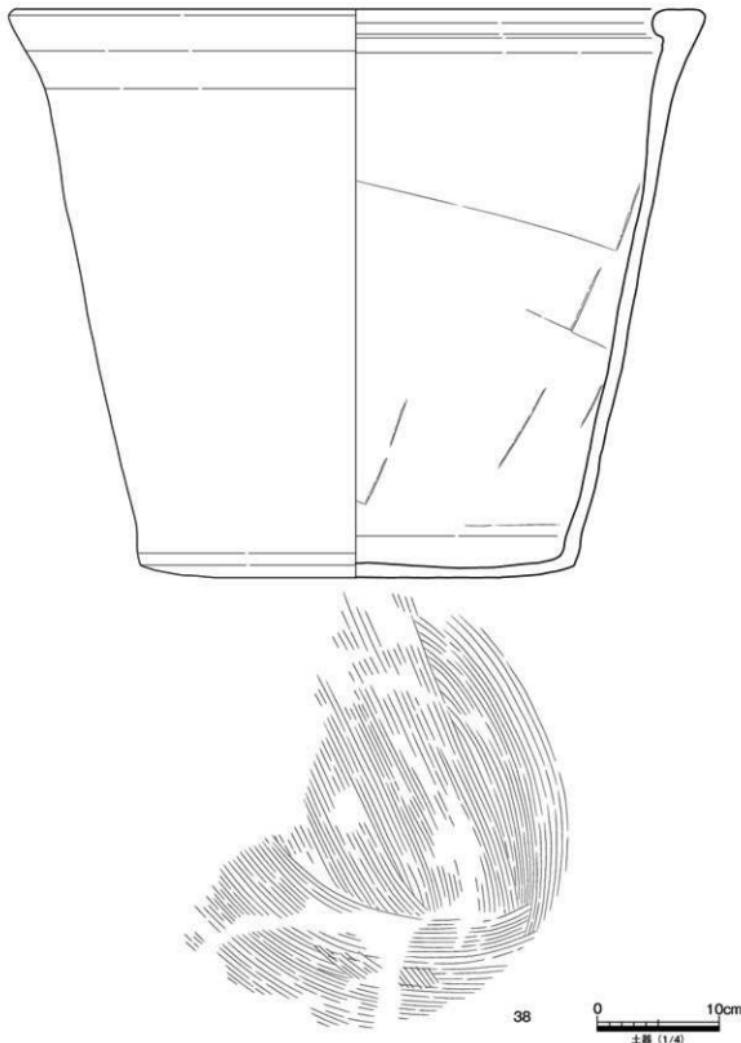
SK7032 (第 60 図)

7 区南部、SK7031 の南側に接して検出した。北側の一部は擾乱で、南側の一部は SK7033 により消失する。円形の土坑と考えられ、直径 1.16 ~ 1.20m、深さ 58cm を測る。中心の直径約 79cm 部分は深く、断面形状は箱型を呈し、その外側の断面形状は浅い皿状を呈する。埋土中から出土遺物はなかったが、土坑の形状から、底径 50cm 程度の壺を設置したものと考えられる。

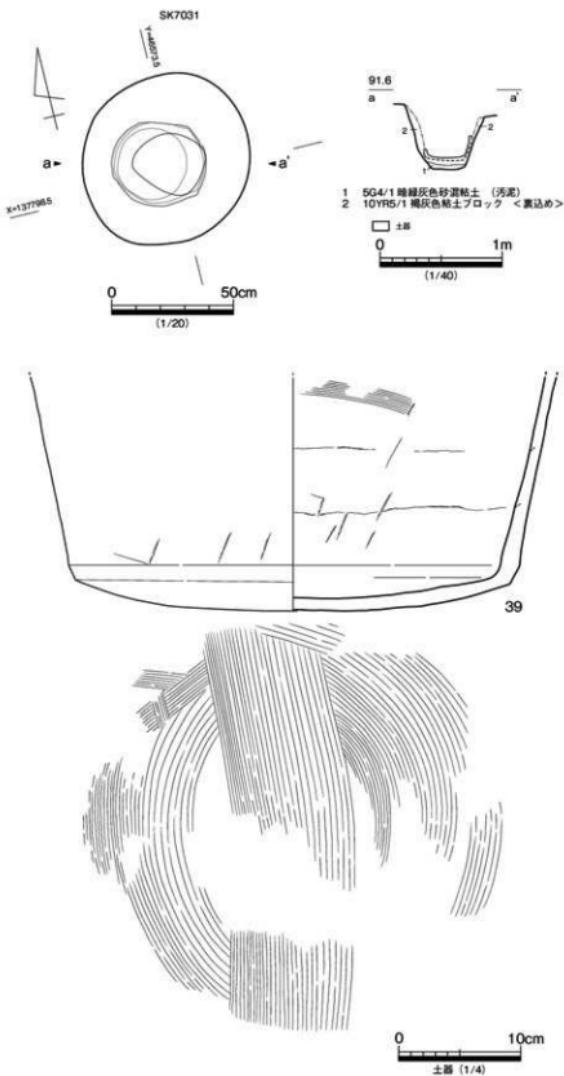
遺構の時期は、周囲の状況から、近代以降と考えられる。

SK7033 (第 60 · 61 図)

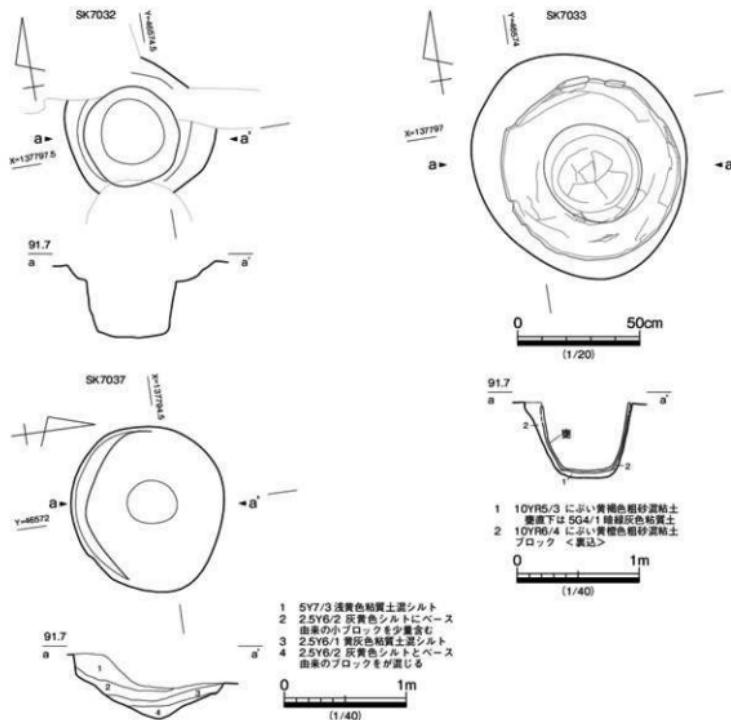
7 区南部、SK7032 の南に接して検出した。SK7032 との遺構の切り合い関係により、SK7033 の方が新しい。円形で、直径 0.86 ~ 0.91m、深さ 62cm を測る。土坑内には、底径 45cm の壺が高さ 59cm 程度残されていた。土坑は壺の大きさには合わせて掘削されたと考えられる。埋土中からは、設置された壺以外の出土遺物はなかった。



第58図 SK7030 出土遺物 (1/4)



第59図 SK7031 平・断面図 (1/20・1/40)・出土遺物 (1/4)



第 60 図 SK7032・SK7033・SK7037 平・断面図 (1/40・1/20)

40は土師質土器壺。底部外面と体部外面下部はハケ、内面は指押さえ痕が顕著に残る。31・35・38・39とは製作技法がやや異なる。

遺構の時期は、出土遺物や周囲の状況から近代以降と考えられる。

SK7037 (第 60 図)

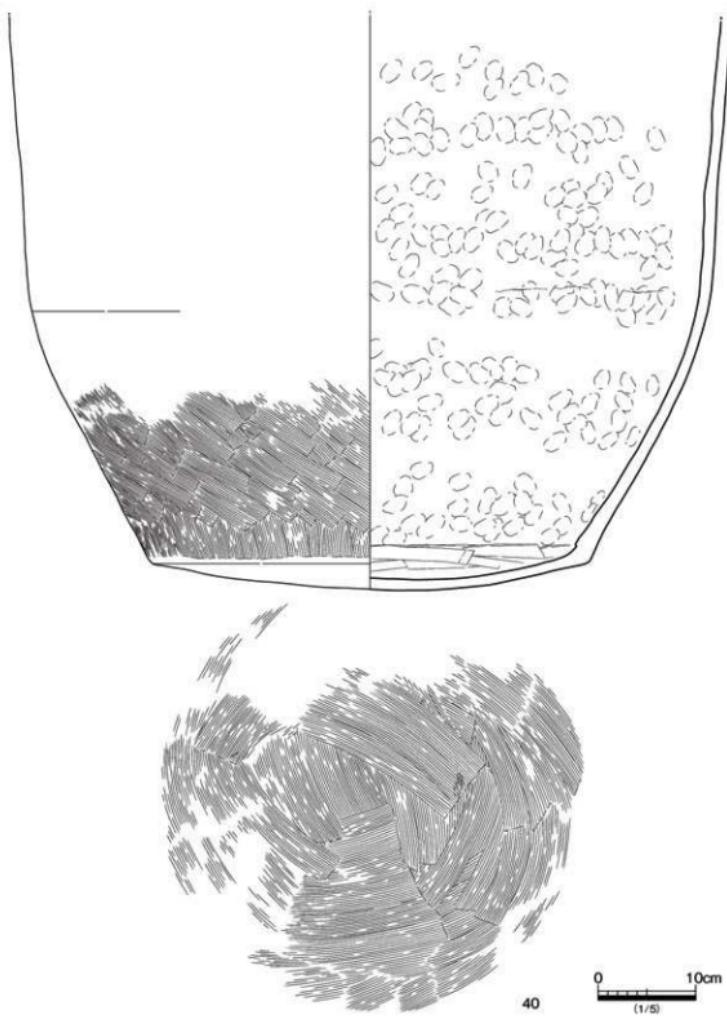
7区南部で検出した。円形の土坑で直径1.27～1.34m、深さ54cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、周囲の状況から近代以降と考えられる。

③溝

SD1001 (第 62・63 図)

東側の尾池に接する1区中央付近で、調査区の長辺とはほぼ同じ方向で検出した。溝は1区より北側へも続くと考えられるが、後世の掘削により遺構は消失していることが試掘調査により判明している。調



第61図 SK7033出土遺物 (1/5)

査区北半部の東側には擾乱が広がり、尾池の開削の影響が考えられる。

延長 37.92m、幅は概ね 1.49 ~ 1.70m、深さ 17cm 程度である。1 区の中程でやや西へ蛇行するが、主軸方位は N24.11° W でほぼ周辺の地割と同方向で、等高線の方向とも合致する。埋土中からは陶器刷毛目唐津碗や陶胎染付椀、瀬戸美濃系腰錦椀、見込みに蛇の目釉剥ぎを施す磁器椀、土師質土器焙烙などの破片とともに須恵器片が相当量出土した。

41 は弥生土器底部小片。42 ~ 49 は須恵器。42 は杯。46 は高台付杯小片。47 ~ 48 は蓋。49 は壺口縁部。43・44 は 8 世紀前半～中頃、42・48 は 9 世紀前半～中頃、45・49 は 9 世紀後半頃と考えられ、概ね 8 ~ 9 世紀の須恵器が出土した。50 は磁器皿。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。51 は磁器小皿。52 は陶器擂鉢。53 は陶器鉢。内外面に明黄褐色の釉を掛ける。54 は鉄滓。

遺構の時期は、出土遺物により 18 世紀後半頃と考えられる。須恵器は、後述する他の近世以降の遺構からも出土しており、周辺から相当量の流入があったと考えられる。

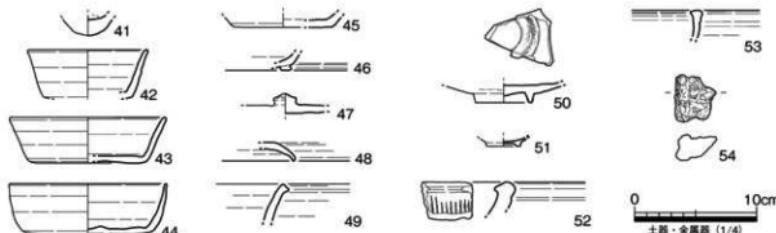
SX2002・SD2031・SD2055（第 64 図）

SX2002 は 2-1 区中央付近を東西方向へ延びる幅広い溝状遺構である。東半部では、15cm 程度を全体に掘り窪めたところ、SX2002 の外側のラインと同じ方向の 4 条の溝状遺構を検出した。西半部で検出できなかったのは、もともと標高の高い西側は削平されたためと考えられ、西側を削平する以前に掘削されたのであろう。

SX2002 の検出長 4.33m、幅 7.69m、深さ 10cm で、東半部の溝状の部分は概ね幅 0.52 ~ 0.61m、深さ 6 ~ 17cm である。断面観察により、南北方向に直交する SX2004・2005 より古い。

SD2031 及び SD2032 の南端付近の西へわずかに屈曲する部分についても SX2002 の延長である可能性がある。SD2031 は 2-2 区東南端付近で検出した東西方向の溝で、西側では削平のため検出していない。SX2002 内の溝状遺構のうち最も南側の溝の延長上にある。検出長 0.46m、幅 0.93m、深さ 11cm を測る。SD2031 の掘削は SD2032 より後に行っており、SD2032 より古いと考えられる。

SD2055 は 2-2 区東端付近で検出した東西方向の溝である。西側では削平のため検出していない。検出長 1.65m、幅 0.43m、深さ 10cm を測る。SX2002 の最も北側の溝状部分の延長と考えられる。



第 62 図 SD1001 出土遺物 (1/4)

Y=46630

Y=46635

Y=46640

Y=46645

90.4
a

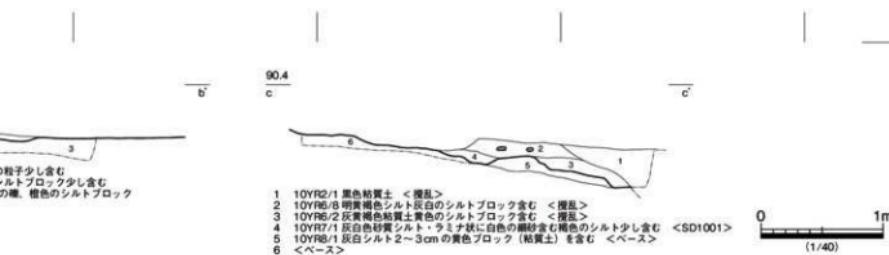
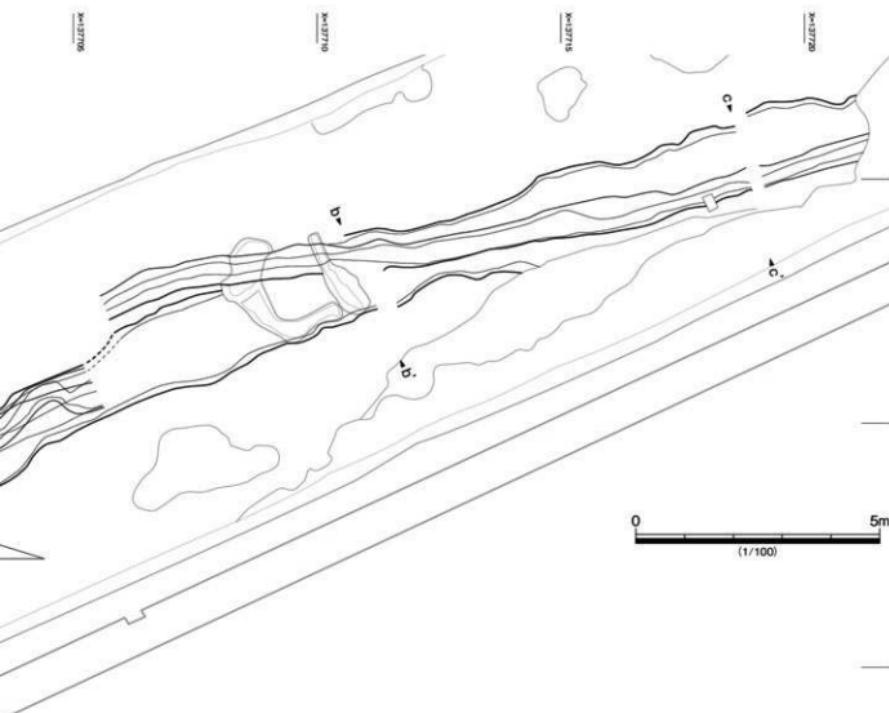
90.4
b



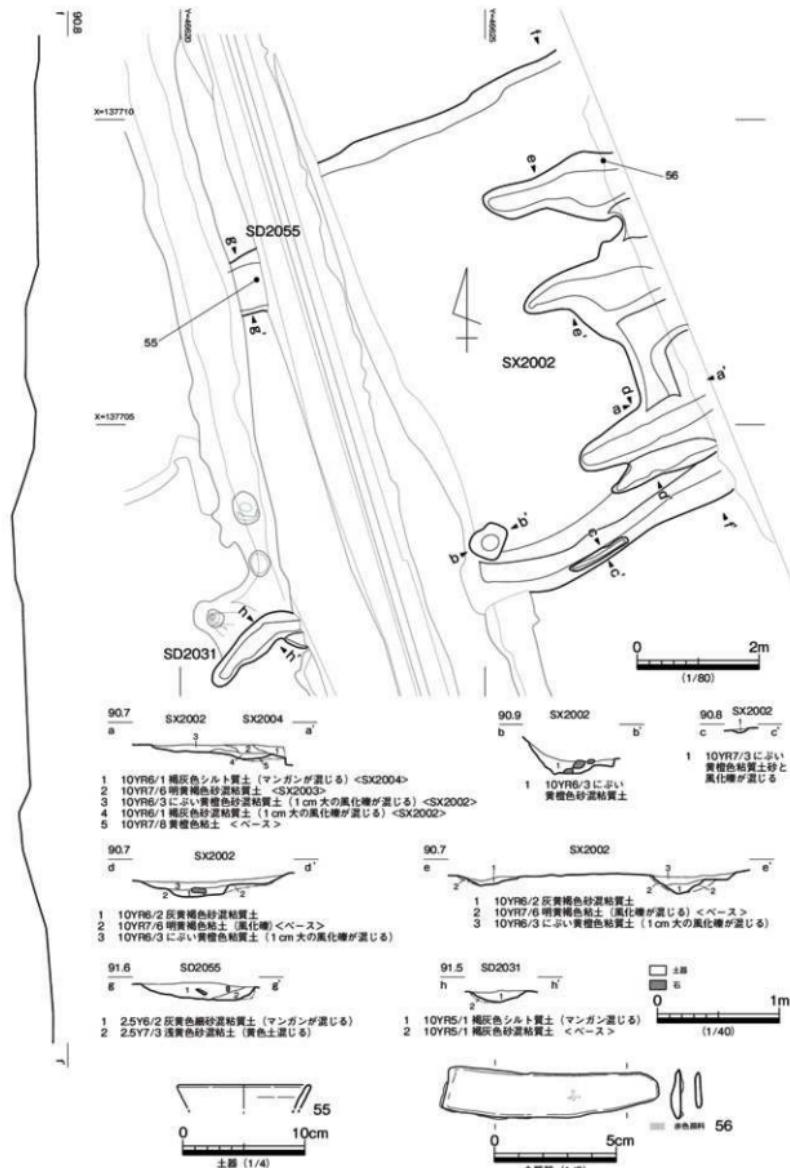
- 1 10YR7/1 灰白色砂質シルト2~5cmの黄色細砂をブロック状に含む
- 2 10YR4/2 灰黃褐色シルト1cmの大黄色シルト1cmの褐色粒含む
- 3 10YR6/2 灰黃褐色粘質土1~2cmの橙色ブロック含む褐色のシルト少しある <ベース>
- 4 <ベース>
- 5 10YR7/1 灰白色シルト橙色のシルトブロック少し含む<ベース>

- 1 10YR7/1 灰白色砂質シルト褐色のシルト
- 2 10YR6/2 灰黃褐色粘質土黄色のシルト
- 3 10YR7/1 灰白色シルト10cm 大黄色シルト
- 4 <ベース>

第63図 SD1001 平・



断面図 (1/100・1/40)



第64図 SX2002・SD2031・SD2055 平・断面図 (1/80・1/40)・出土遺物 (1/4・1/2)

SX2002 からは須恵器杯・甕、陶器陶胎染付椀・擂鉢、磁器椀、SD2031 からは須恵器甕、土師質土器焰焰、SD2055 からは須恵器杯・甕小片等が出土した。

55 は SD2055 から出土した。須恵器杯口縁部。9世紀代と考えられる。56 は SX2002 から出土した。刀子。

遺構の時期は、SX2002 から 18世紀後半代の遺物が出土することから、18世紀後半と考えられる。当遺跡では、近世の遺構から須恵器が共存する場合が多くみられることから、55 は混入と考えられる。

SX2003・SX2004・SD2005（第 65 図）

2-1 区東端、調査区東壁にはほぼ沿って検出した。工事前の地割では地境になっており、その名残と考えられる。SX2003 と SX2004 はほぼ重複して検出した。遺構の切り合い関係から SX2003 が古い。

SX2003 はおもに調査区北寄りで検出し、中央部付近では東側の調査区外へ延びる。検出長 17.18m、幅 0.45m 以上、深さ 8cm を測り、主軸方位は周囲の地割と同じく N22.93° W である。埋土中からは摩滅した須恵器、陶胎染付等が出土した。

SX2004 は調査区北半部で検出した。検出長 16.44m、幅 0.28m 以上、深さ 4cm を測り、主軸方位は SX2003 や周囲の地割と同じく N22.80° W である。検出位置や遺構埋土が同じであることから、SX2025 へ連続する可能性が高い。埋土中からは土師質土器焰焰が出土した。

埋土の色調の違いから SX2003 と SX2004 に分けたが、土層の違いによるもので同一の溝の可能性も考えられる。

SD2005 は、SX2003 の西肩に沿って検出した小溝で、検出長 1.83m、幅 0.18m、深さ 2cm を測る。遺構の切り合い関係により、SX2003 より新しい。SX2004 との前後関係は不明である。埋土中からは出土遺物はなかった。

57 は SX2004 から出土した。土師質土器焰焰。口縁部小片。18世紀後半頃。

遺構の時期は出土遺物により 18世紀後半以降と考えられる。

SX2025（第 66 図）

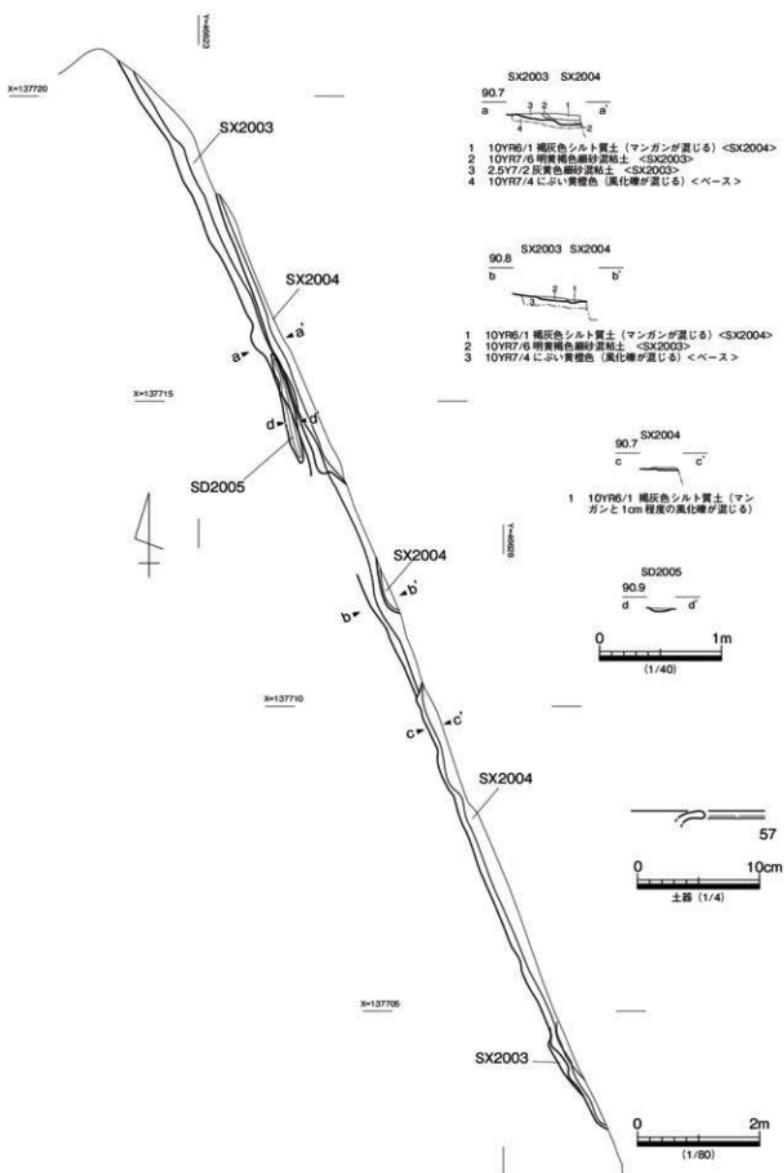
2-1 区東端部南半で検出した。北側の SX2003・SX2004 とは約 3.5m の間隔をあけて南側へ連続する位置関係である。検出長 11.24m、幅 0.47m、深さ 6cm、主軸方位は N23.10° W である。埋土は SX2004 に類似する。埋土中からは遺物は出土しなかった。

遺構の時期は、SX2003・2004 と同様 18世紀後半以降と考えられる。

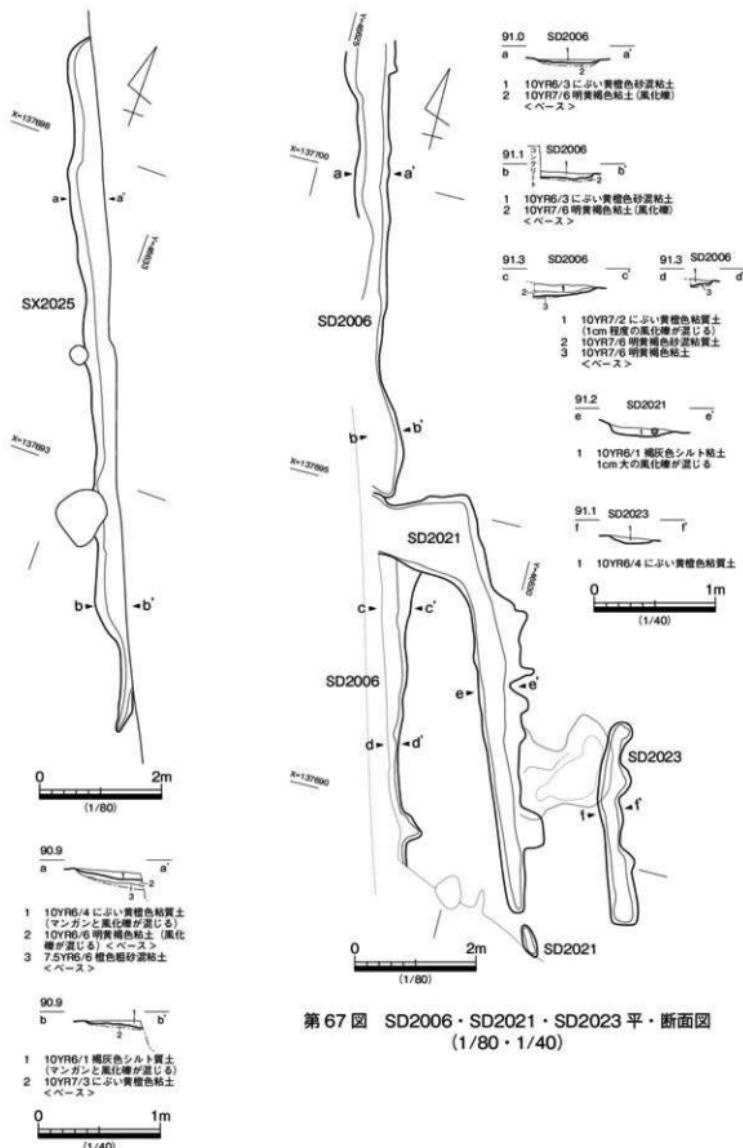
SD2006（第 67 図）

2-1 区西端南半付近で検出した南北方向の溝である。調査区の西端で、工事前の地境に当たる。SX2025 の西側約 5m に位置する。検出長 13.65m、幅 0.47m 以上、深さ 4cm で、主軸方位は N16.08° W である。検出部分の中程で SD2021 に掘り込まれ、北端部分では SX2002 により消失する。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、SX2002 より古いものの、周辺の遺構検出状況と考えあわせ、他の溝群とそれほど変わらない 18世紀代以降としたい。



第65図 SX2003・SX2004・SD2005 平・断面図 (1/80・1/40)・出土遺物 (1/4)



第66図 SX2025平・断面図
(1/80・1/40)

SD2021（第67図）

2-1区西南部で検出した。SD2006の1.24m東側で検出した南北方向の溝で、南から7.7mの位置で西へ屈曲し、SD2006を切る。また、溝の南寄りでSX2047を切る。溝の底のレベルは溝の南端から屈曲部付近まではほぼ同じであるが、西へ屈曲する部分はやや低い。南北方向部分で検出長7.7m、幅0.52m、深さ7cm、主軸方位はN24.07°Wである。東西方向部分は、検出長1.33m、幅0.77m、深さ10cmを測る。断面形状からは、高い側をカットして段を設ける段状遺構であったとも考えられる。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、遺構の切り合い関係によりSD2006より新しい。周辺の状況から近世以降としたい。

SD2023（第67図）

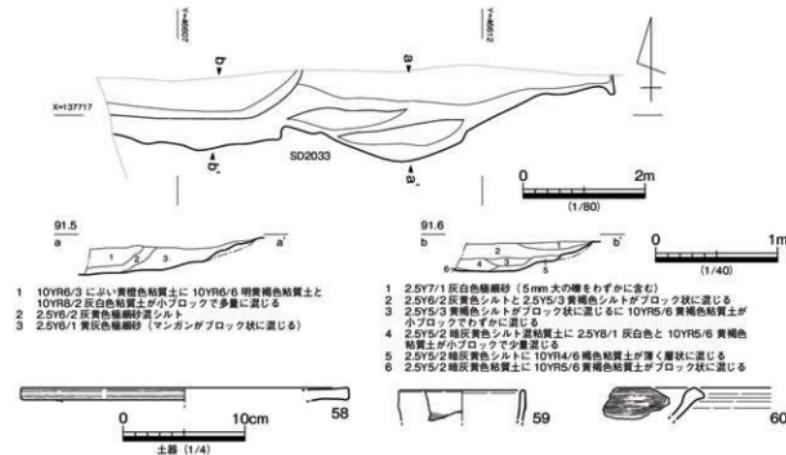
2-1区南端付近中央寄り、SD2021の東側1.40m付近で検出した南北方向の溝である。溝の北半部でSX2047を切る。検出長13.66m、幅0.32m、深さ4cm、主軸方位はN16.08°Wである。埋土中からは土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、周辺の溝群と同様で近世以降であろう。

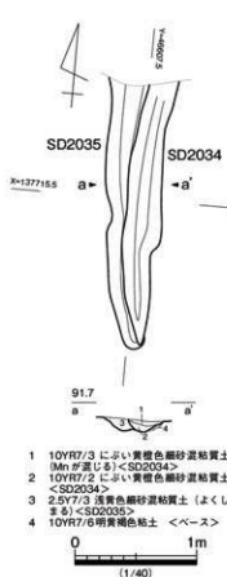
SD2033（第68図）

2-2区北端で検出した東西方向の段状遺構である。調査直前まで地境に相当したことが工事用図面等からわかる。検出長8.41m、幅1.09m、深さ21cm、主軸方位はほぼ真東西方向である。埋土はブロック土を多く含むもので、調査直前に人為的に埋められたものであろう。遺構の西端付近でSD2034・2035を切る。埋土中からは弥生土器壺、須恵器甕、陶器椀、土師質土器焰烙などが出土した。

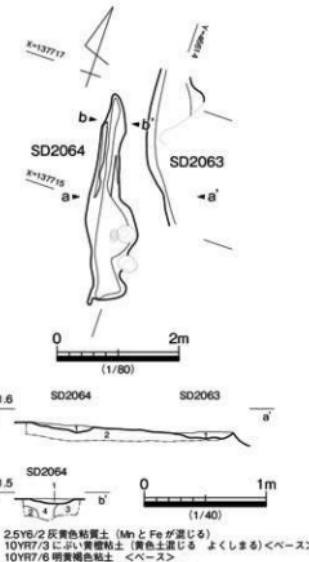
58は弥生土器広口壺口縁部。周溝墓4と概ね同時期の弥生時代後期後半頃と考えられ、周溝墓から



第68図 SD2033平・断面図(1/80・1/40)・出土遺物(1/4)



第69図 SD2034・SD2035 平・断面図 (1/40)



第70図 SD2063・SD2064 平・断面図 (1/80・1/40)

の混入であろう。59は陶器椀。瀬戸美濃産の腰錫椀。18世紀後半～19世紀頃。60は土師質土器焰焰。外型成型によるもので19世紀末頃。

遺構の時期は、出土遺物により19世紀末以降と考えられる。

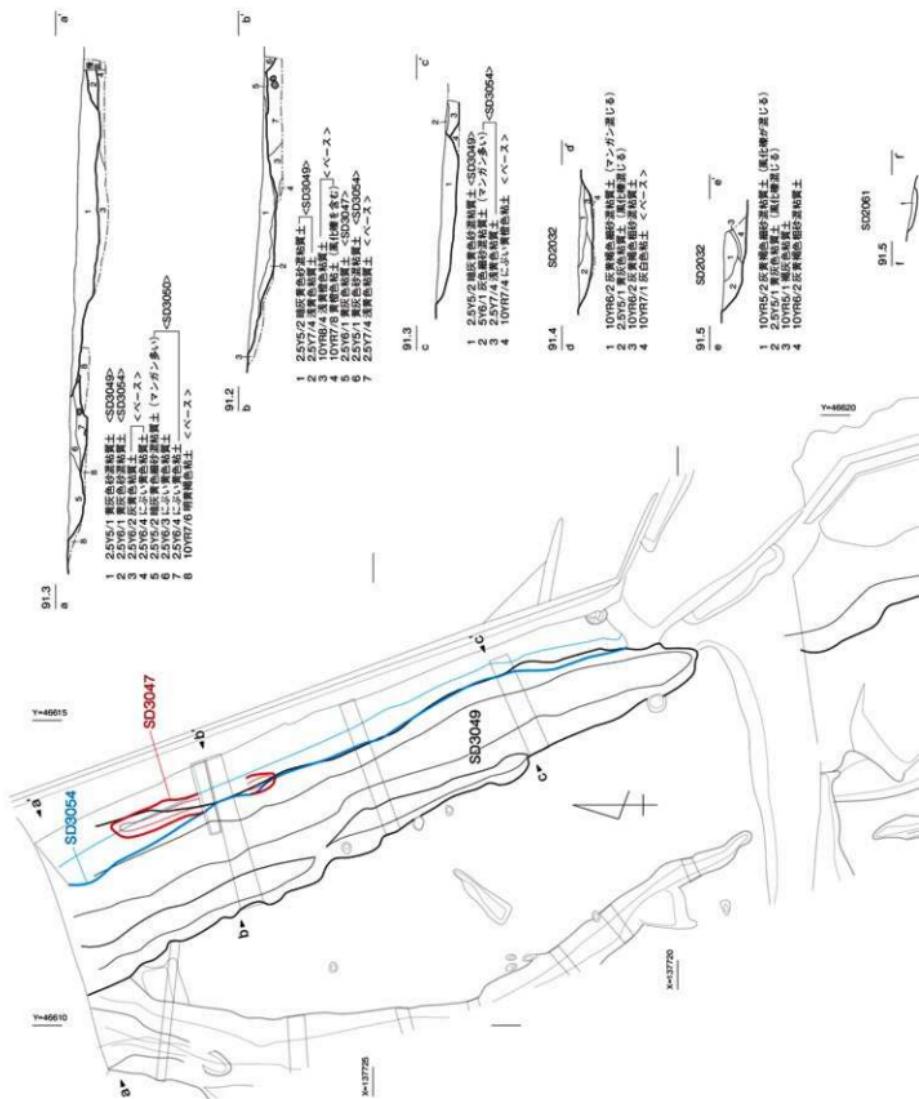
SD2034・SD2035（第69図）

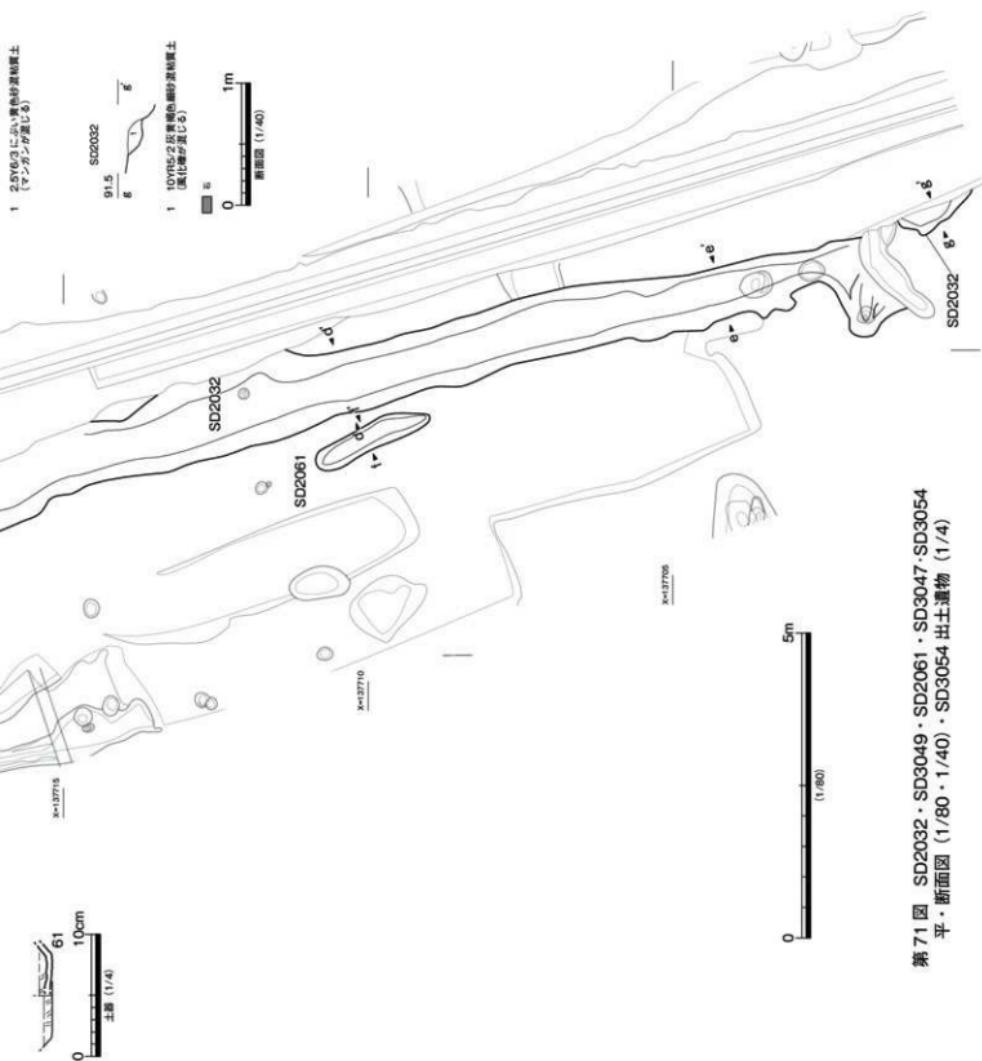
ともに2-2区北西端付近で検出した南北方向の溝である。ともにSD2033に切られる。SD2034は検出長2.10m、幅0.28m、深さ9cm、SD2035は検出長2.15m、幅0.20m以上、深さ10cm、主軸方位はとともに概ねN2°Wである。遺構の断面観察により、SD2035が古いが、埋土にはほとんど差はない、時期差はそれほど認められないであろう。位置関係や埋土から、SD3050の南端で西南方向へ分岐する部分の南側の延長部の可能性がある。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、周囲の他の遺構と近い近世以降と考えられる。

SD2063（第70図）

2-2区北端中央付近で検出した南北方向の溝である。東肩及び南側は削平により消失する。検出長2.42m、幅0.90m以上、深さ5cm、主軸方位はN23.01°Wである。位置関係からSD3050の延長部の可能性があろう。埋土中からは摩滅した須恵器小片、土器小片が出土した。





第71圖 SD2032・SD3049・SD2061・SD3047・SD3054
平・断面図 (1/80・1/40)・SD3054 十溫物 (1/4)

遺構の時期は SD3050 と同じく近世以降と考えられる。

SD2064（第 70 図）

2-2 区北端中央付近で検出した南北方向の溝である。SD2063 の芯々距離で 0.96m 西側で検出した。検出長 3.35m、幅 0.33 ~ 0.79m、深さ 6cm である。南側は削平により消失する。埋土は SD2063 と共に、同時期に機能したと考えられる。SD2063 と同じく、SD3050 の延長部の可能性がある。埋土中からは須恵器蓋小片、土器小片が出土した。

遺構の時期は SD2063・SD3050 と同じ近世以降と考えられる。

SD2032・SD3049・SK3003・SD3015（第 71 ~ 74 図）

調査区東端に沿う溝で、等高線に沿う南北方向の溝である。22 区から 3-2 区で検出した。調査時の遺構名を踏襲したため異なる遺構番号となっているが、同一の溝である。検出長は 64m 程度に及ぶ。基幹水路としての役割を果たしたと考えられる。便宜上、2-2 区で検出 - SD2032、3-1 区で検出 - SD3049、3-2 区（SD3004 より南） - SK3003、3-2 区（SD3004 より北） - SD3015 としている。

最も南側の SD2032 は、検出長 17.36m、幅 1.08m、深さ 12 ~ 19cm、主軸方位は N15.56° W である。遺構の切り合い関係により SD2055 より新しい。遺構の南端付近では、わずかに西側へ屈曲して消失する形状であるが、2 区南壁の土層断面から、SD2032 は調査区南端まで連続し、床土を掘り込むことがわかる。屈曲部分で西側へ分岐する可能性が考えられる。埋土中からは摩滅した須恵器甕等の小片、瀬戸美濃産陶器腰錫椀、陶胎染付片、刷毛目唐津片等が出土した。

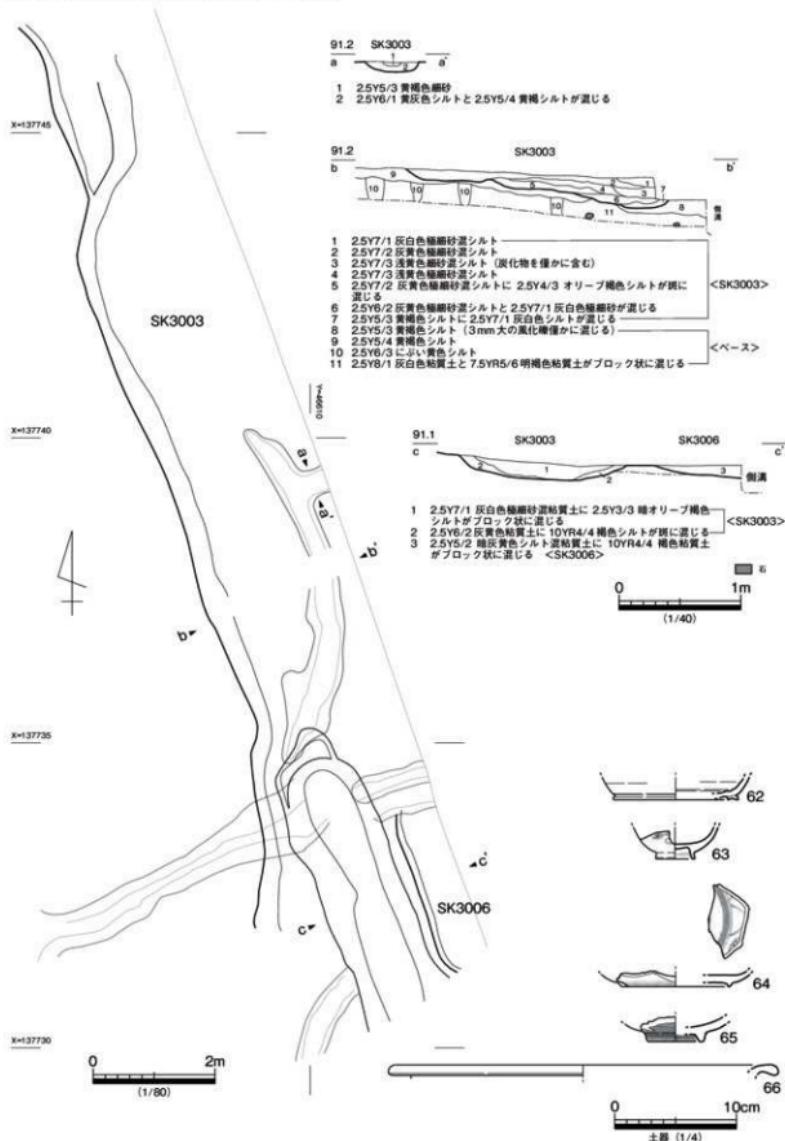
SD2032 の北へ連続する SD3049 部分は、検出長 11.23m、幅は北端付近で 2.16m、深さ 16cm 程度、主軸方位は N22.34° W で、西肩は緩い段状を呈する。北端付近で SD3050 を掘り込む。遺構の切り合い関係により、東側に接する SD3054 より新しく、SD3054 の後継の溝と考えられる。

SD3049 の北へ連続する SK3003 は、3 区東端部で検出した。検出長 7.83m、幅 2.56m 以上、深さ 13 ~ 18cm で、主軸方位は N 20.98° W である。北端付近では、SX3013 断面図から、直交する SD3004 より古く SX3013 より新しいことがわかる。南側では、直交する溝 SD3008 を検出した。遺構の切り合い関係により、SK3003 が新しいが、時期差はそれほどない可能性があろう。埋土中からは須恵器杯片など摩滅した須恵器、瀬戸美濃産腰錫椀など近世陶器片などが出土した。

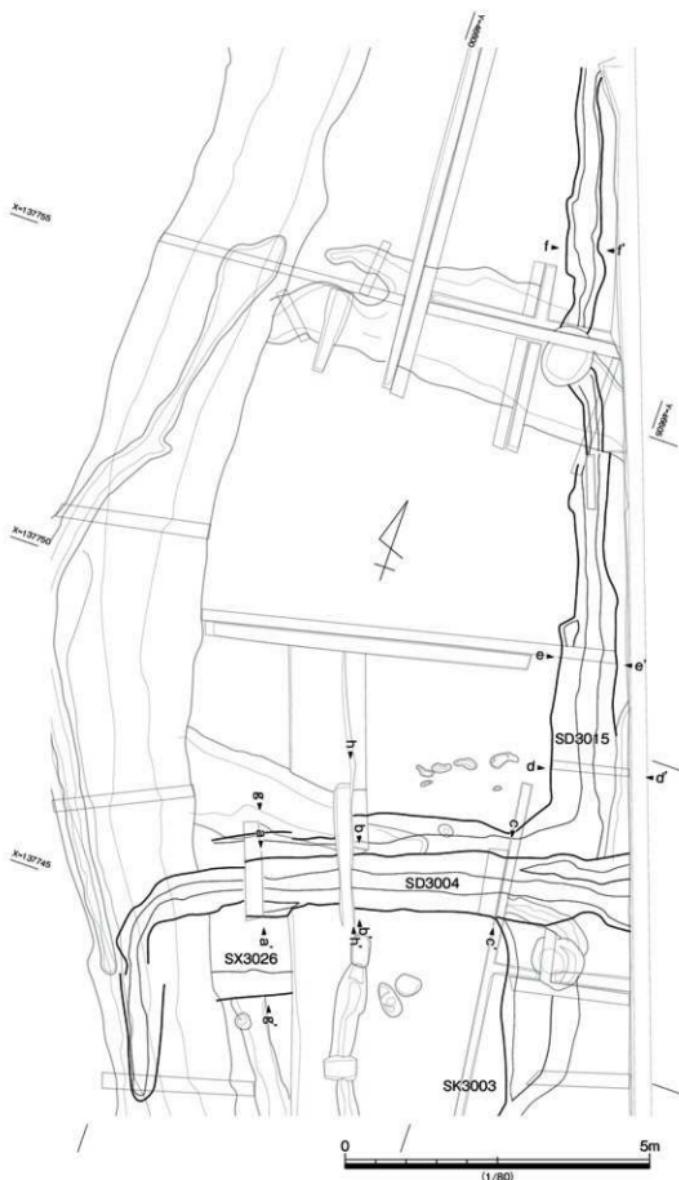
SK3003 の中央部付近で、SK3003 を掘り下げた後に、検出長 5.93m、幅 0.48 ~ 0.59m、深さ 9cm の範囲で砂層・シルト層から成る小規模な流路を検出した。位置関係から SK3003 の一部とした。埋土中からは須恵器小片が出土した。

SK3003 の北側へ連続する SD3015 は、3 区北東隅から調査区東端にはば沿って検出した。北端から 12.59m 付近で西へ屈曲し、6.47m で SD3007 により消失する。幅 0.95m、深さ 14cm 程度、主軸方位は南北部分が N18.89° W、東西部分が W6.28° S である。西へ屈曲した後の東西方向の部分は SD3004 と重複し、これより古い。SD3004 の前身の溝と考えられる。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト製石錫片が出土した。

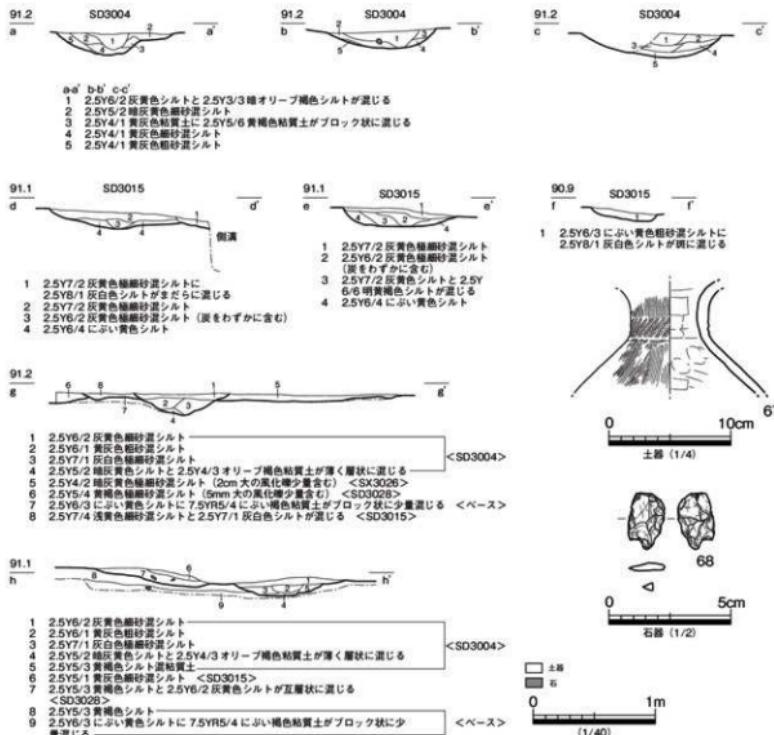
62 ~ 66 は SK3003 部分より出土した。62 は須恵器高台付杯。8 世紀後半 ~ 9 世紀前半頃。63 は磁器椀。64 は磁器皿。65 は陶器椀。体部下半に濃い茶色の釉を掛ける。瀬戸美濃産腰錫椀。66 は土師質土器焰口縁部。内面は型作りで外面に指押さえ痕が残るものと考えられる。18 ~ 19 世紀頃。67・68 は



第72図 SK3003・SK3006 平・断面図 (1/80・1/40)・SK3003 出土遺物 (1/4)



第73図 SK3003・SD3004・SD3015 平面図 (1/80)



第74図 SD3004・SD3015断面図(1/40)・SD3015出土遺物(1/4・1/2)

SD3015から出土した。67は弥生土器広口壺。頸部に板材により斜め方向に圧痕を施す。弥生時代後期前半頃。68はサヌカイト製石鎌。凹基式。未完成品。

SD3015は、周溝墓6を構成するSD3028を掘り込んでおり、67・68はこれに由来するものと考えられる。遺構の時期は、他の溝と同様18世紀後半以降と考えられる。

SD3054（第71図）

3-2区で検出した。調査区東端部で、溝の西肩はSD3049に接し、東肩は調査区外へ延びる。遺構の切り合い関係からSD3049より古い。北側のSK3006へ連続すると考えられ、南側には連続する遺構は認められない。検出長9.80m、幅0.77m以上、深さ30cm、主軸方位はN23.1°Wである。埋土中からは須恵器片が出土した。

61 須恵器杯。内外面には火薙が認められる。9世紀後半～10世紀前半頃。

埋土中からは古代の須恵器が出土しただけであったが、遺構の位置関係や近世以降の遺構から須恵器

が一定量出土することから、遺構の時期は近世以降としたい。

SK3006（第72図）

SK3006はSK3003の東南隅で検出した落ち込みである。東部は調査区外へ延びる。長軸2.70m、幅0.73m以上、深さ9.5cm、N 20.65°Wである。SK3003を掘削後に検出しており、SK3003より古いと考えられる。また、SD3008には切られて検出しており、SK3006（SD3054）- SD3008 - SK3003の順に掘削されたと考えられる。南側では、位置関係や底のレベルからSD3054へ連続する可能性がある。埋土中からは須恵器壺片、近世以降の焼瓦片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降と考えられる。

SD3047（第71図）

3-2区で検出した小溝である。SD3049とSD3054の間でこれらに沿うように検出した。断面観察によりこれらより古い。検出長2.77m、幅0.37m、深さ20cmを測る。埋土中からは土器小片が出土ただけであった。

遺構の時期は、SD3049・SD3054より古いが、周辺の状況から近世の遺構であろう。

SD2061（第71図）

2-2区東寄り中程で検出した南北方向の溝状以降である。東側約0.39m（芯々距離では0.99m）には基幹水路と考えられるSD2032がある。検出長2.02m、幅0.38m、深さ5cm、主軸方位はN23°Wである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、周囲の他の遺構と同様近世以降と考えられる。

SD3004（第73・74図）

3-1区中央付近で検出した東西方向の溝で、SD3007と重なる部分では、SD3007と方向を同じくして南へ屈曲する。南北方向の溝SK3003・SD3015と直交し、これらを繋ぐような位置関係である。遺構の切り合い関係によりSD3007・SK3003・SD3015より新しい。SD3015の西へ屈曲する部分とは溝の北肩で重複する。SD3015の後継の溝とも考えられる。検出長は、東西方向部分が7.98m、SD3007と重なる部分は3.35mである。幅は0.93m程度、深さ20cm程度、主軸方位は東西方向部分でE19.73°Nである。埋土中からは須恵器壺片、磁器片、刷毛目唐津碗、腰錆椀などの陶器片、土師質土器焙烙片などが出土した。

遺構の時期は、出土遺物により19世紀頃と考えられる。

SD3002・3007（第75～77図）

4区南部東端から3区の中央部南端付近で検出した南北方向を向く溝である。3-2区南端から1.71mで削平により消失する。南半部では周辺地割と同じ方向を示すが、南から33.25m付近で緩く東へ屈曲し、屈曲後18.87m付近で東側の調査区外へ延びる。検出した北端付近では西へ屈曲する。しかし、調査時は包含層と認識し、周溝墓4の検出に努めたため、周溝墓の区画溝SD4006・SD4005の上面で検出することはできず、遺構の東肩は明らかではない。幅2～3m程度、深さ22cm程度であるが、南側ほど

削平が著しく、残存状況は悪い。主軸方位は南半部では N19.04° W、北半部では N3.03° E である。3-1 区北から約 15m で直交して東へ向く SD3004・SD3015 が重複し、遺構の切り合い関係により SD3004 より古く SD3015 より新しい。3-1 区南から 11.8m では SD3008 が東へ直角に分岐する。南端付近では、SD3007 の埋土の下部から構状遺構 SA3001 を検出した。埋土からは須恵器蓋、壺片、陶器擂鉢、土師質土器羽釜・焰烙等が出土した。

SD3002 は SD3007 の屈曲部付近で検出した溝状遺構である。SD3007 の平面形状都に合わせて中程で屈曲する。延長 13.5m、幅 0.34m、深さ 4cm を測る。SD3007 の最終埋没部分または SD3007 埋没後に小規模に再掘削されたものと考えられる。埋土中からは遺物は出土しなかった。

69～77 は SD3007 から出土した。69～73・77 は a-a'～c-c' 間の上層から出土した。69～73 は須恵器。69 は壺肩部。70～72 は高台付壺底部。73 は高台の付かない壺底部。須恵器は概ね 9 世紀後半～10 世紀前半頃。74 は土師質土器羽釜。南端付近、SD3008 と合流後の位置で出土した。75 は土師質土器焰烙。a-a' 断面のやや北側、上層で出土した。内面型作りで、外面には指頭痕が顯著に残る。18 世紀後半。76・77 はサメカイト製石鎌。76 は凹基式。北端付近で出土した。層位は不明。77 は有茎式。

須恵器が一定量出土しているものの、18 世紀後半の遺物が出土していることから、遺構の時期は 18 世紀後半頃と考えられる。当時の基幹水路の一つと考えられる。

SD3008（第 75・77 図）

3-1 区南から 2.93m の位置で検出した東西方向の溝である。SD3007 から直角に屈曲し東へ向き、SK3003 と重なる。SK3003 の下部で検出した。SD3007 の西側で検出しなかったことから、SD3007 とは同時併存と考えられる。東西方向部分の検出長は 21.62m、幅 0.70m 程度、深さ 28cm、主軸方位は N68.38° E である。埋土中からは須恵器小片、磁器小椀、土師質土器焰烙が出土した。

78 は磁器小椀。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降と考えられる。SD3007 と同時併存と考えれば、18 世紀後半頃と考えられる。

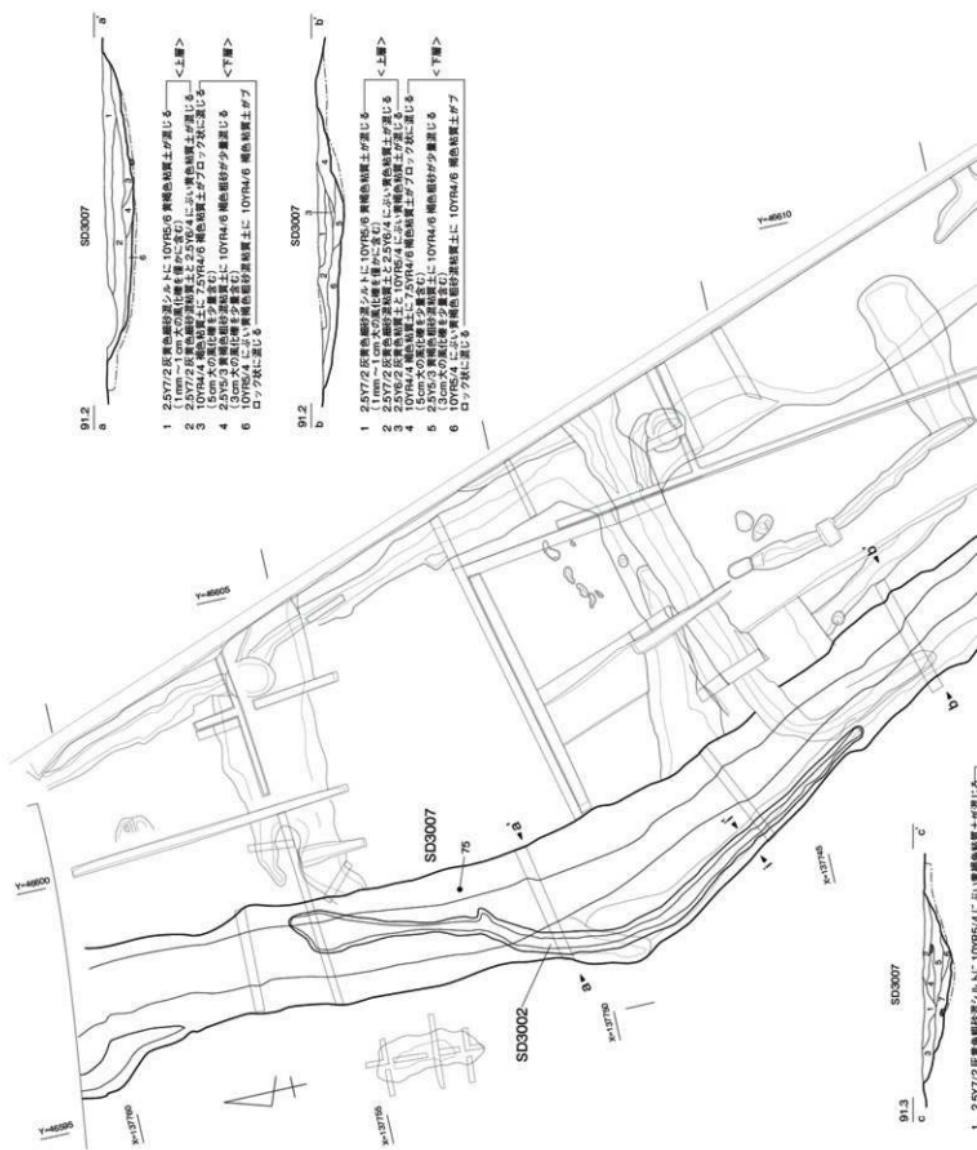
SD3032（第 78 図）

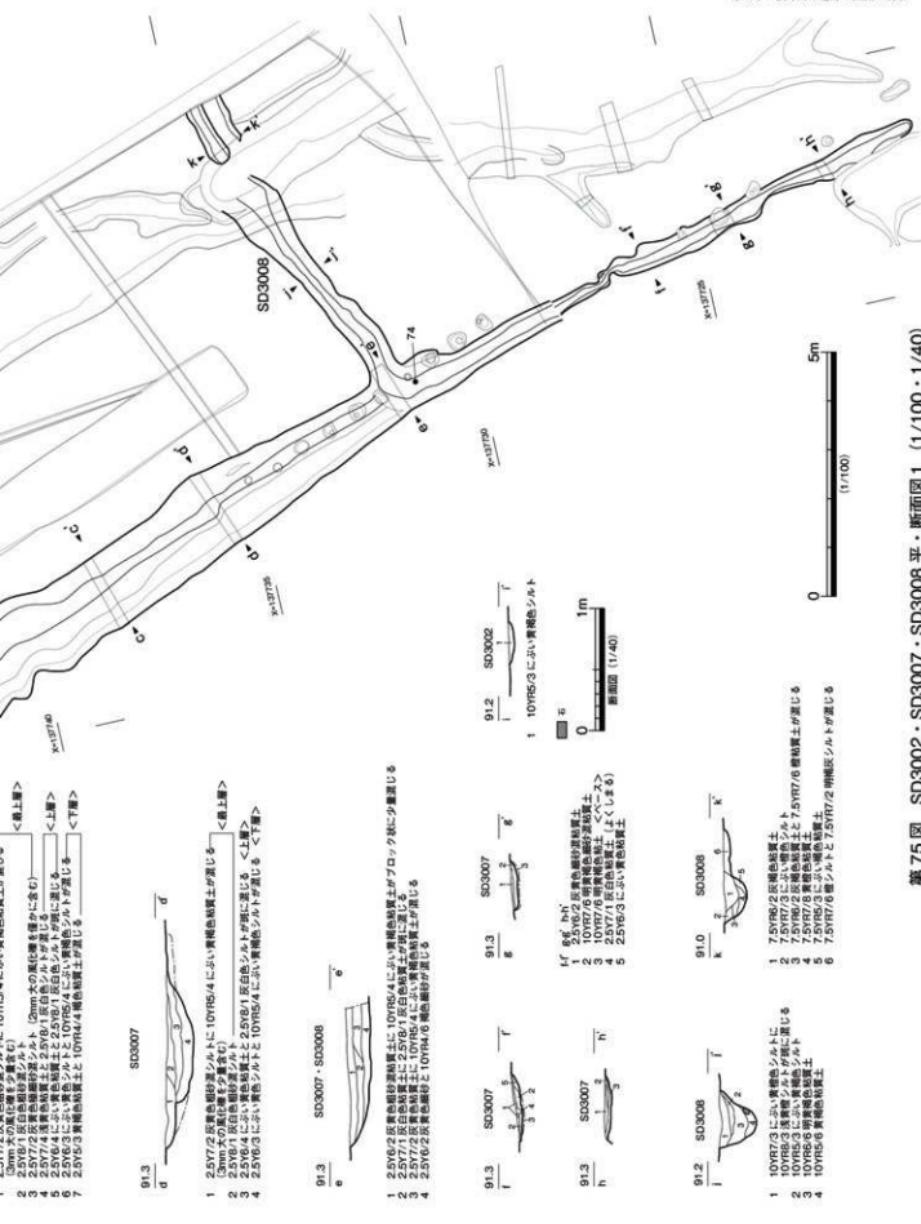
3-1 区中央付近で検出した南北方向の溝である。SD3007 と SK3003 の中間付近で検出した。これらと同方向の小規模な溝である。検出長 5.49m、幅 0.33m、深さ 8cm、主軸方位は N20.3° W であるが、SD3007 と同様溝の中程で西へやや膨らむ緩い弧を描く。遺構の南端で SD3033 を掘り込む。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は周囲の状況から近世以降と考えられる。

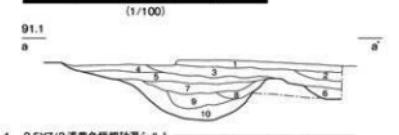
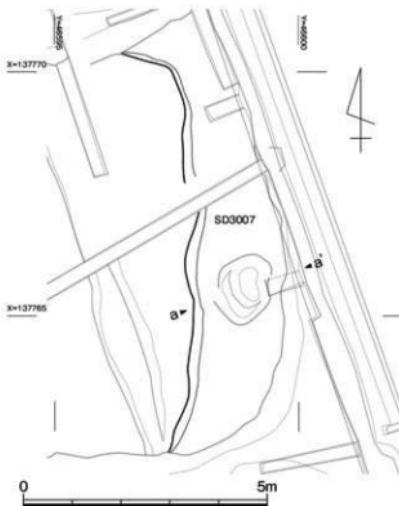
SD3050（第 79・80 図）

3-1 区東南端付近から 3-2 区東部で検出された。3-1 区と 3-2 区では検出幅が異なるのは、3-1 区側は検出面が低いことによる。概ね南北方向を向くが、中程で西へ膨らみ、弧を描く。途中、5m 程度の間隔を置いて南西方向へ分岐し、1.4～1.7m 程度で消失する。検出長 13.67m、幅 1.4m 程度、深さ 14cm 程度である。3-1 区南端部付近で調査区東端に位置する南北方向の溝 SK3003 により消失する。埋土中からは、須恵器蓋、壺片など須恵器片が目立ったが、最上層部分から磁器椀小片が、また、土管状の土師質土器





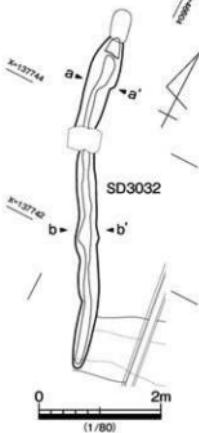
第75図 SD3002・SD3007・SD3008平・断面図 1 (1/100・1/40)



1. 2.5Y7/3 深黄色細縫砂質シルト
2. 2.5Y8/4 に深い栗色シルトと 2.5Y8/2 灰褐色シルトが混じる
3. 2.5Y8/2 灰褐色粘土質土シルト (5mm 大の風化塊がわずかに混じる)
4. 2.5Y7/2 灰褐色シルト
5. 2.5Y8/3 に深い栗色シルトと 2.5Y8/2 細縫栗色シルトが混じる
6. 2.5Y8/3 に深い栗色シルトと 2.5Y6/2 灰褐色シルトが混じる (5mm 大の風化塊をわずかに含む) <SD4005>
7. 2.5Y8/2 灰白色シルト
8. 2.5Y8/2 灰白色シルトと 2.5Y7/6 深褐色シルトが混じる
9. 2.5Y8/2 灰白色シルトと 2.5Y8/1 灰白色シルトが混じる
10. 2.5Y8/4 に深い栗色シルトと 10YR6/6 黄褐色シルトが中プロックで少量混じる

<SD3007>

第76図 SD3007 平・断面図 2 (1/100・1/40)



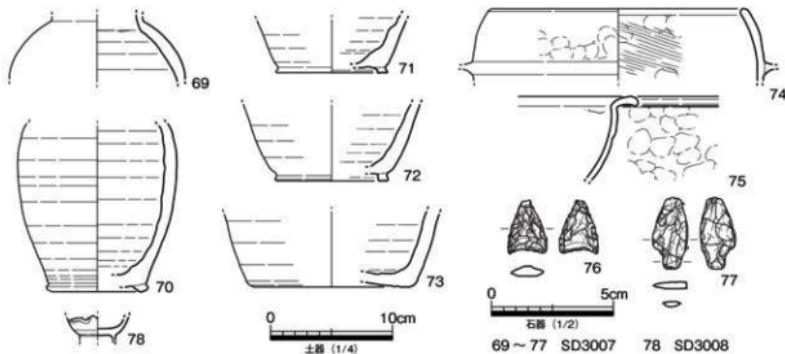
91.1

a-a'

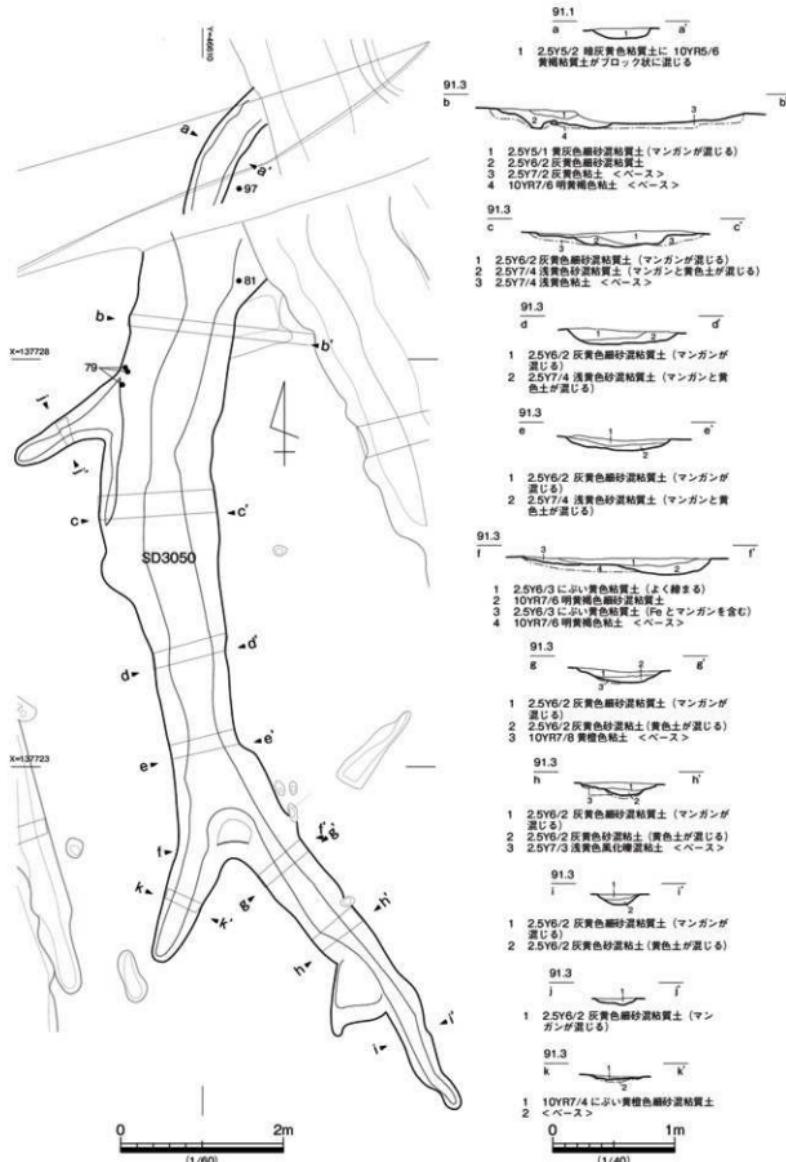
1. 2.5Y6/3 に深い栗色砂質シルト (1cm 程度の塊とくさり繊維を含む)
2. 10YR6/6 明黄色粘土 <ベース>



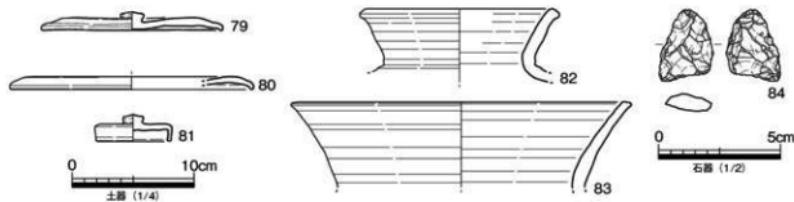
第78図 SD3032 平・断面図 (1/80・1/40)



第77図 SD3007・SD3008 出土遺物 (1/4・1/2)



第79図 SD3050 平・断面図 (1/60・1/40)



第80図 SD3050 出土遺物 (1/4・1/2)

が出土した。

79～83は須恵器。79・80は蓋。81は短頸壺の蓋。82は壺。83は壺。須恵器は概ね8世紀後半～9世紀前半頃と考えられる。84はサヌカイト製石鉢。下部は欠損する。

埋土中からは須恵器が多く出土したが、少量ではあるが近世へ下る遺物が出土したことや、他の近世遺構からも須恵器が多く出土することから、近世以降の遺構としたい。溝の方向性や遺構の切り合い関係から、近世の中では最も古い時期と考えられる。

SD6002（第81図）

6区東半北端で検出した。検出長2.76m、幅0.21m、深さ4cm、主軸方位はN48.46°Wである。尾池の汀線に沿う方向で、6区西半部分では検出していない。埋土中からは磁器片が出土した。尾池に関わる溝状の落ち込みと考えられ、SD7003と同一遺構の可能性がある。

遺構の時期は、出土遺物から近世以降である。

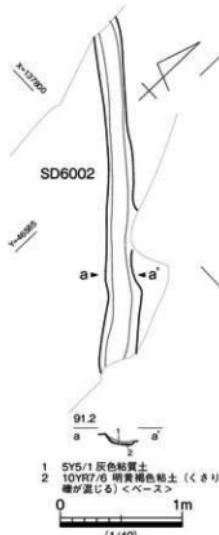
SD7003（第82図）

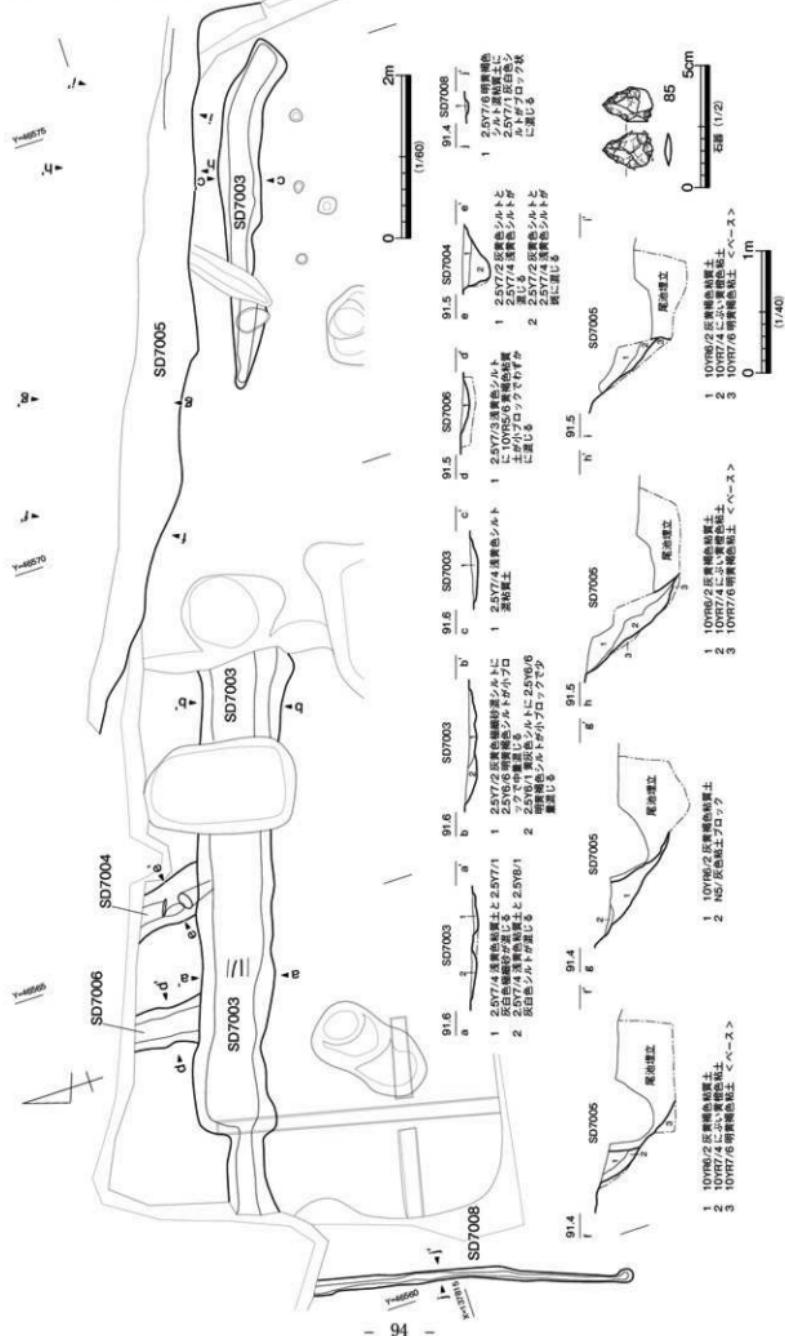
7区北端付近で検出した東西方向の溝状遺構である。中程でいたん途切れるものの、検出長14.39m、幅0.86m、深さ4～8cm、主軸方位はN71.57°Wである。平成10年に作製された香南町（現高松市香南町）管内図によると、尾池がこの付近まで及んでおり、尾池の汀線に沿う溝状遺構と考えられる。SD6002へ続く可能性もある。埋土中からはサヌカイト製石鉢の未製品（85）が出土しただけであった。

遺構の時期は近世以降と考えられる。

SD7004・SD7006（第82図）

7区北端付近で検出した南北方向の小規模な溝状遺構である。南端部でSD7003と重複し、これに切られるが、SD7003より南では検出しておらず、概ね同時併存と考えられる。SD7004は検出長0.74m、幅0.44m、深さ23cm、SD7006は検出長0.80m、幅0.47m、深さ6cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

第81図 SD6002 平・断面図
(1/40)



第 82 圖 SD7003 - 7004 - 7005 - 7006 - 7008 平 - 斷面圖 (1/60 - 1/40) - 出土遺物 (1/2)

遺構は尾池への流れ込みと考えられ、遺構の時期は近世以降と考えられる。

SD7005（第82図）

7区東部北端で検出した。溝の南肩とした部分を検出し、溝の北肩の尾池の掘り込みにより不明である。延長8.83mを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

旧尾池の汀線に關わる落ち込みと考えられ、遺構の時期は近世以降と考えられる。

SD7008（第82図）

7区西北端付近で検出した溝状遺構である。検出長3.88m、幅0.13m、深さ2.4cmで、SD7003には直交する。埋土中から出土遺物はなかった。7区の宅地の關わる遺構と考えられる。

遺構の時期は、周囲と同様近世以降と考えられる。

SD7034（第83図）

7区南寄りで検出した東西方向の溝である。7区の東端付近でSD7035と直交するが、両者に切り合い関係は認められない。検出長11.30m、幅0.89m、深さ5cm、主軸方位は概ねN83.14°Wであるが、溝の中程でやや南へ膨らみ緩い弧を呈する。隣接する6区では検出されなかった。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、SD7035と同時期であることから、近世以降である。

SD7035（第84図）

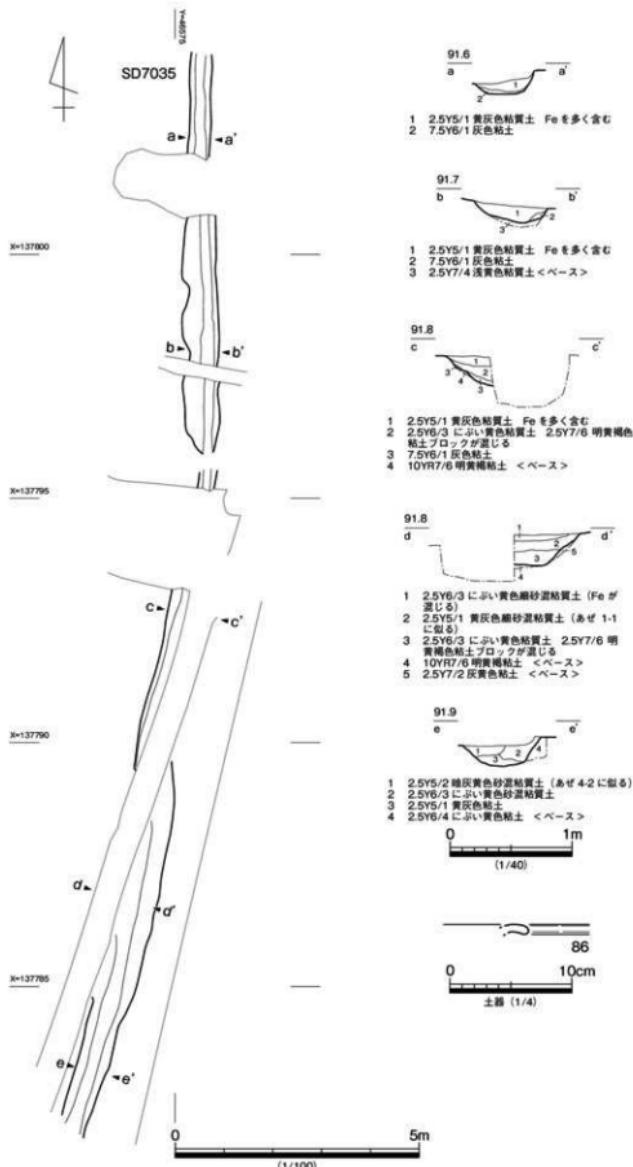
7区東端を調査区に沿って検出した。概ね南北方向を示すが、南寄り部分ではやや西へ振る。地境にはほぼ合致する溝である。調査区南寄りでSD7034と直交し、両者に切り合い関係は認められない。北から8.82mで擾乱により消失し、擾乱の南側で主軸方位が異なる溝を検出したが、ともに地境に沿っており、位置関係や規模から同一の溝と考えられる。検出長は擾乱部分を除き12.58m、幅0.72m、深さ16~24cm、主軸方位は擾乱より北側ではN17.72°W、擾乱より南側ではN16.78°Eである。埋土中からは須恵器小片、土師質土器焙烙片が出土した。

86は土師質土器焙烙。口縁端部小片。18世紀後半~19世紀代。

遺構の時期は、出土遺物により18世紀後半~19世紀代と考えられる。



第83図 SD7034 平・断面図 (1/80・1/40)



第 84 図 SD7035 平・断面図 (1/100・1/40)・出土遺物 (1/4)

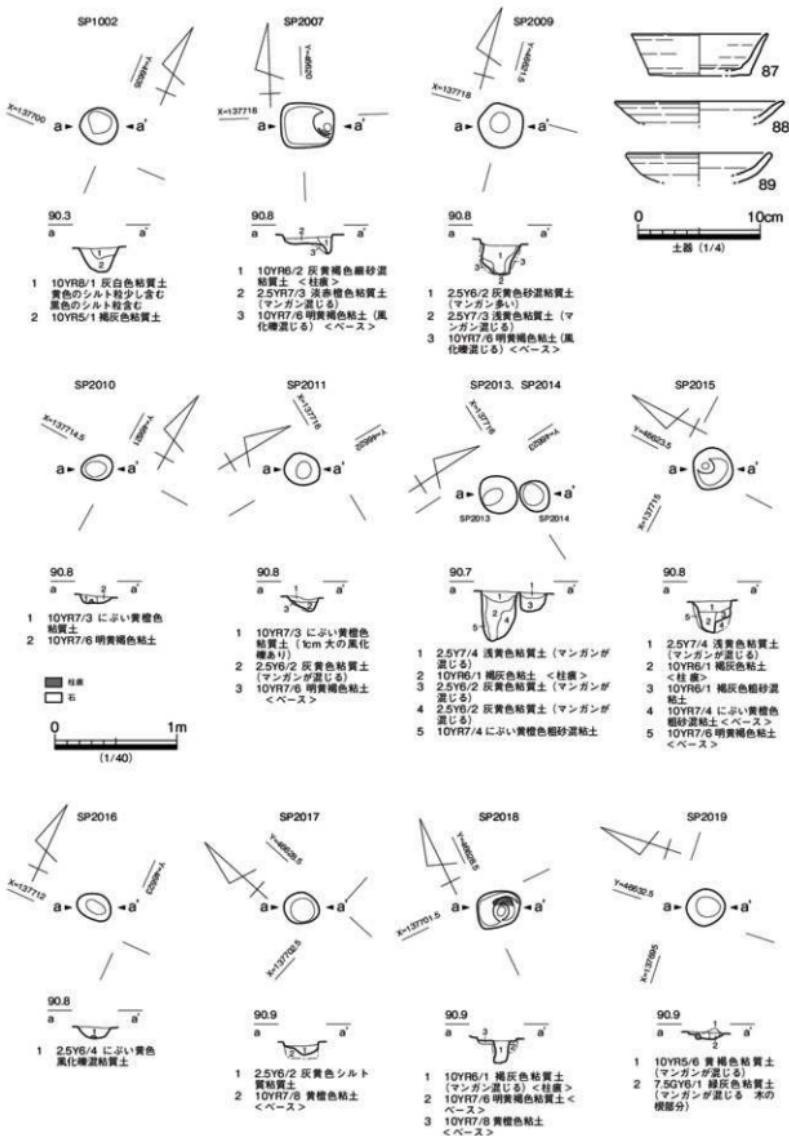
④柱穴（第85～88図）

柱穴は5区以外での調査区で検出した。報告書では、調査時に図面を作成したものについて掲載した。柱穴内からの出土遺物や遺構の切合い関係から時期が推測できるものもあるが、大半は時期は不明である。

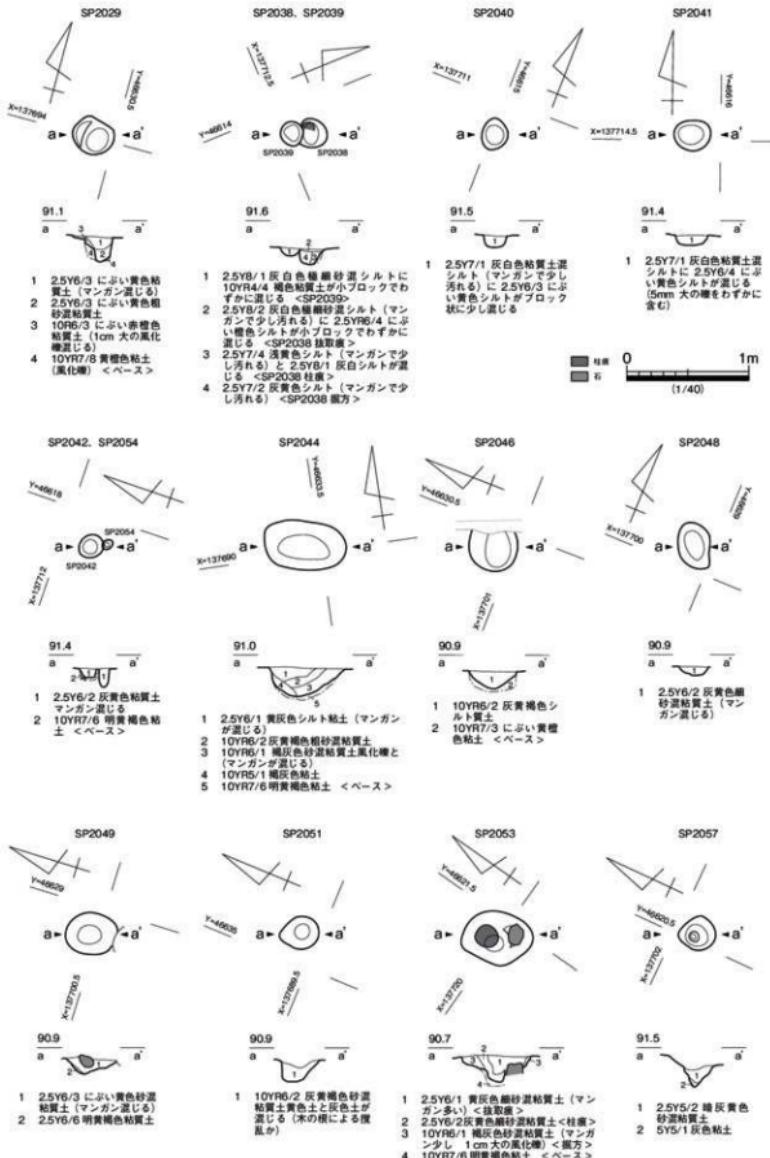
詳細は第1表で記載する。

第1表 柱穴一覧

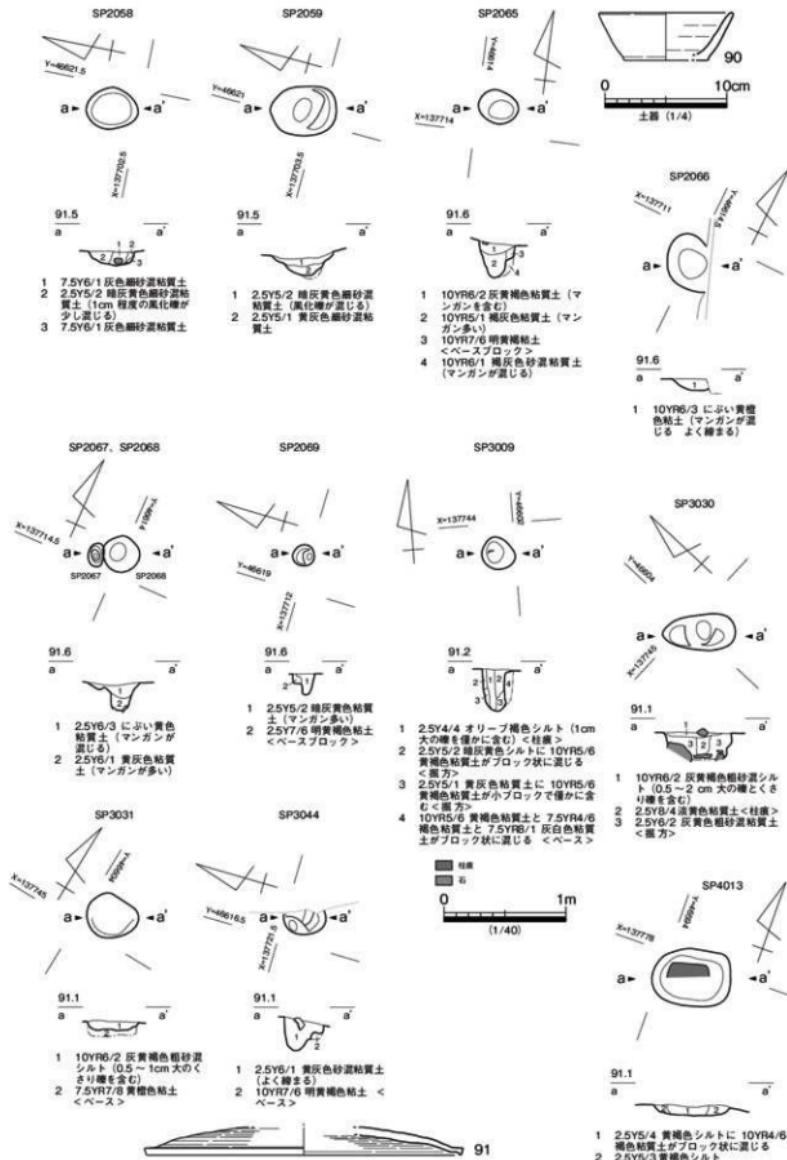
柱穴番号	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	掲載遺物	その他出土遺物	遺構の切合い関係	時期
1002	円形	31	-	20			-	
2007	隅丸方形	44	36	16			-	
2009	円形	37	-	27	87(須恵器・杯) 88(須恵器・杯) 89(土師質土器・皿) 10世紀後半～ 11世紀中頃		-	
2010	楕円形	26	20	7			-	
2011	円形	29	-	11			-	
2013	円形	33	-	41	須恵器片		-	
2014	楕円形	27	24	15			-	
2015	円形	35	-	26	土師質土器片		-	
2016	楕円形	29	21	10			-	
2017	円形	29	-	11			-	
2018	隅丸方形	37	29	21			-	
2019	円形	32	-	6		SX2025(近世)を切る	近世以降	
2029	楕円形	33	28	21			-	
2038	円形	25	-	14		SP2039に切られる		
2039	円形	20	-	7		SP2038を切る		
2040	楕円形	26	22	10			-	
2041	楕円形	30	25	8			-	
2042	円形	21	-	7			-	
2044	楕円形	67	40	24			-	
2046	楕円形	40	33	15			-	
2048	楕円形	40	27	7		SP2049を切る		
2049	楕円形	43	34	13		SP2048に切られる		
2051	不整円形	33	27	18		SX2025(近世)に切られる		
2053	不整円形	59	45	21			-	
2054	円形	9	-	15			-	
2057	不整円形	31	28	22		SD2032に切られる		
2058	楕円形	42	34	12		SD2032に切られる		
2059	楕円形	54	40	20		SD2032に切られる		
2065	楕円形	31	27	30	90(須恵器・杯) 10世紀後半		SD2064(近世)を切る	近世以降
2066	楕円形	49	36	9			-	
2067	楕円形	19	13	6			SP2068とは同時並存 SD2064(近世)とは不明	
2068	円形	30	-	23		土師質土器(近世?)片	SP2067とは同時並存 SD2064(近世)とは不明	
2069	円形	18	-	17			SD2032(近世)に切られる	
3009	円形	27	-	34				
3030	楕円形	60	30	26			-	
3031	楕円形	43	37	7			-	
3044	楕円形	35	20	26	91(須恵器・蓋) 8世紀後半		SD3054(近世)に切られる	
4013	楕円形	65	47	8			-	
6004	楕円形	47	36	20			-	
6005	楕円形	73	29	39			-	



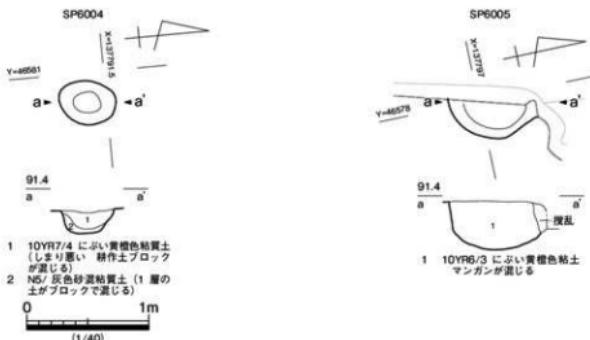
第 85 図 柱穴平・断面図 (1/40)・出土遺物 1 (1/4)



第86図 柱穴平・断面図2 (1/40)



第 87 図 柱穴平・断面図 (1/40)・出土遺物 3 (1/4)



第88図 柱穴平・断面図4 (1/40)

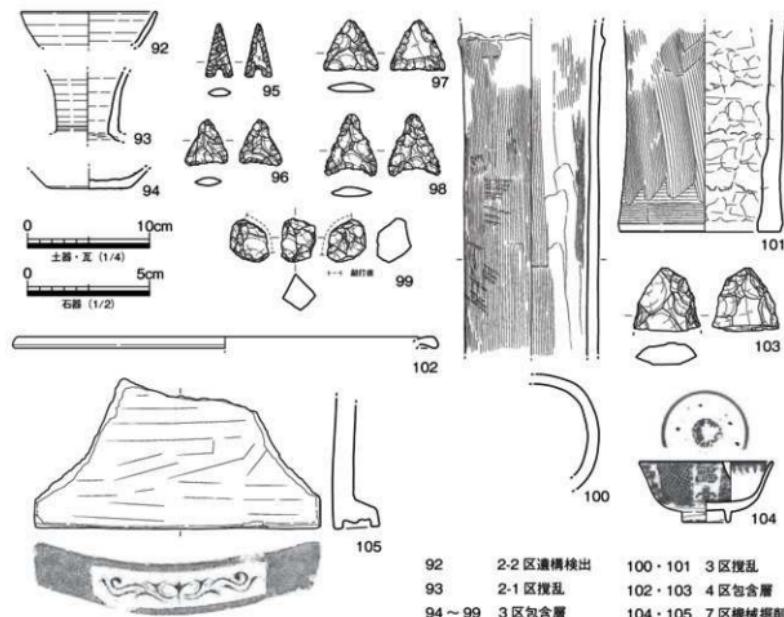
3 遺構外から出土した遺物（第89図）

92・93は2区から出土した遺物。92は2-2区遺構検出時に出土した須恵器杯。8世紀後半～9世紀代頃。93は2-1区と2-2区の境の擁壁掘方から出土した須恵器長頸壺。9世紀後半頃。

94～101は3区で出土した遺物。94～99は遺構面上面から出土した。94は土師質土器杯。13世紀代。95～98は石鐵。いずれもサヌカイト製。95・98は凹基式、96・97は平基式である。99は火打石の剥片。チャート製。100・101は攪乱から出土した土管。外面は縦方向のハケ、内面は100は縦方向のハケや削り、101は指捺えが観察できる。

102・103は4区で出土した遺物。いずれも遺構面上面の包含層掘り下げ時に出土した。102は土師質土器焙烙小片。18世紀後半～19世紀代。103は石鐵。サヌカイト製。下部は欠損する。

104・105は7区機械掘削中に出土した。104は磁器碗。型紙刷りにより施文する。施文はコバルトにより発色させる。明治時代以降。105は軒平瓦。瓦当には近世唐草文を施す。凹面は横方向のナデを施し、凸面は調整痕がみられない。



第89図 その他出土遺物 (1/4・1/2)

92 2-2区遺構検出
93 2-1区擾乱
94~99 3区包含層

100・101 3区擾乱
102・103 4区包含層
104・105 7区機械掘削

第4章 横井南原遺跡の自然科学分析

第1節 炭化材の樹種同定・土器胎土分析・ガラス玉類の蛍光X線分析・種実同定

文化財調査コンサルタント株式会社

奥中亮太・渡邊正巳

1.はじめに

本報告は、香川県埋蔵文化財センターの委託により、横井南原遺跡内において出土した炭化材、土器、ガラス玉、種実を対象に実施した諸分析の報告書である。また、横井南原遺跡は香川県高松市香南町に所在し、高松平野の南西縁を区切る丘陵末端の緩斜面上に位置する。

2. 試料について

香川県埋蔵文化財センターより採取・保管されていた試料から、分析試料の御提供を受けた。各分析に用いた試料の詳細を第2～8表に、分析結果と共に示す。

3. 分析方法

(1) 炭化材の樹種同定方法

提供を受けた仕様書に従い走査電子顕微鏡下での観察を行い、樹種同定を行った。当初提供を受けた試料（007～014）の多くで炭の劣化が進んでおり、十分な同定結果が得られなかった。このため、追加試料（015～018）の御提供を受けた（御提供を受けた試料は土塊で、008、018には複数の個体が含まれていた。このため、枝番を付けて対応した。）。

(2) 土器胎土分析方法

提供を受けた仕様書に従い観察用薄片を作成し、偏光顕微鏡下で観察を行った。

砂粒の計数は、メカニカルステージを0.5mm間隔で移動させ、細縫～中粒シルトサイズの粒子を対象として、ポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。薄片観察結果の呈示は、松田ほか（1999）に従い、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフとして示した。

(3) ガラス玉類の蛍光X線分析方法

実体顕微鏡観察後、提供を受けた仕様書に従い蛍光X線分析を行った。分析装置はエスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA1200VX を使用し、ノンスタンダードF P法による半定量分析を行った。

(4) 種実同定方法

提供を受けた試料は、水洗済みの2試料であった。提供を受けた試料を対象に、実体顕微鏡下で観察を行った。同定に際し現生標本のほか、浅野（1995）、石川（1994）、徳永（2004）、中山ほか（2000）などの文献を参考にした。

4. 分析結果

(1) 炭化材の樹種同定結果

樹種同定結果を第2表に示す。以下に、記載を行うとともに、代表的な試料（下線）の電子顕微鏡写真を第90・91図に示す。

1) コナラ属（アカガシ亜属）*Quercus* (sub. *Cyclobalanopsis*) sp.

試料番号（センター管理番号）：014 (KNY2-土 0116)

記載：中庸で円形ないし梢円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが発達し、周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帶状柔組織を形成している。放射組織は同性で、低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織がある。以上の組織上の特徴から、コナラ属（アカガシ亜属）と同定した。

2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料番号（センター管理番号）：007 (KNY2-T0001)、012 (KNY2-T0017)、013 (KNY2-T0018)、015 (KNY2-T0015)、016 (KNY2-T0020)、017(KNY2-T0021)、018-1 (KNY2-土 0126)、018-2 (KNY2-T0126)

記載：記載を行った試料の年輪幅は広いが、多くの試料は狭い。環孔材で大きい円形ないし梢円形の道管が単独でやや密に、多列配列する。孔圈外の小道管は放射状ないし火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔である。また、道管内腔にはチロースが認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列する。放射組織は平伏細胞からなる単列同性型（一部試料では、単壁孔で円形ないし長円形の道管放射組織間壁孔が観察できた）。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

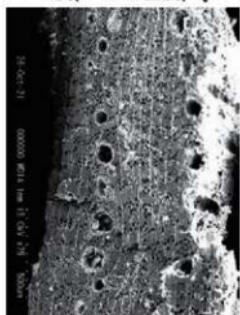
3) クリ（あるいはシイノキ属）*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. (or *Castanopsis* sp.)

試料番号（センター管理番号）：010 (KNY2-T0010)

記載：横断面の良好な観察試料が得られなかった。大きい梢円形の道管が単独で存在するが、配列の状態が観察できなかった。孔圈外の小道管火炎状に配列する傾向が認められた。道管せん孔は単せん孔である。また、道管内腔にはチロースが認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。放射組織は平伏細胞からなる単列同性型であるが、道管放射組織壁孔は観察できなかった。以上の組織上の

第2表 樹種同定結果一覧

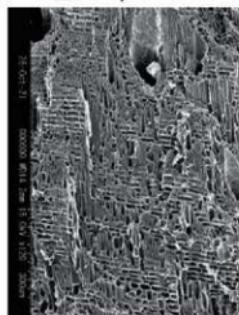
試料番号	センター管理番号	遺構名	種類	樹種同定結果
樹種 007	KNY2-T0001	ST4009 トレンチ1 棚内埋土	炭化材	クリ
樹種 008-1	KNY2-T0005	ST4009 ⑩棚内埋土 W4002	炭化材	広葉樹 A
樹種 008-2	KNY2-T0005	ST4009 ⑪棚内埋土 W4002	炭化材	広葉樹 A
樹種 009	KNY2-T0007	ST4009 ⑫棚内埋土 W4004	炭化材	広葉樹 B
樹種 010	KNY2-T0010	ST4009 ⑬西長側板 W4005	炭化材	クリ or シイノキ属
樹種 011	KNY2-T0014	ST4009 ⑭西長側板掘方 W4007	炭化材	広葉樹 B
樹種 012	KNY2-T0017	ST4009 ⑮南短側板掘方 W4010	炭化材	クリ
樹種 013	KNY2-T0018	ST4009 ⑯南短側板掘方 W4011	炭化材	クリ
樹種 014	KNY2-土 0116	ST4009 ⑰東長側板掘方	炭化材	アカガシ亜属
樹種 015	KNY2-T0015	ST4009 ⑱西長側板掘方 W4006	炭化材	クリ
樹種 016	KNY2-T0020	ST4009 ⑲南短側板掘方 W4013	炭化材	クリ
樹種 017	KNY2-T0021	ST4009 ⑳南短側板掘方 W4014	炭化材	クリ
樹種 018-1	KNY2-土 0126	ST4009 ㉑南短側板掘方	炭化材	クリ
樹種 018-2	KNY2-土 0126	ST4009 ㉒南短側板掘方	炭化材	クリ

コナラ属(アカガシ亜属) *Quercus* (sub. *Cyclobalanopsis*) sp.:014(KNY2-土0116)

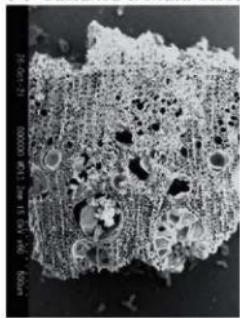
横断面



接線断面



放射断面

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. :012(KNY2-T0017)

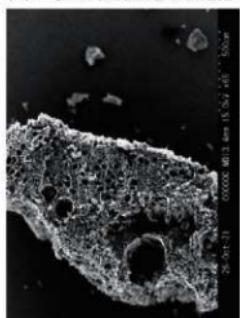
横断面



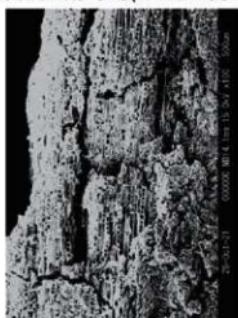
接線断面



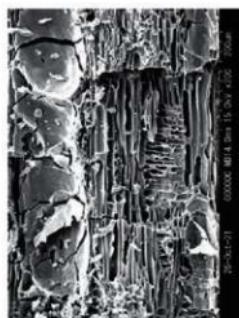
放射断面

クリ? Cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. :010(KNY2-T0010)

横断面



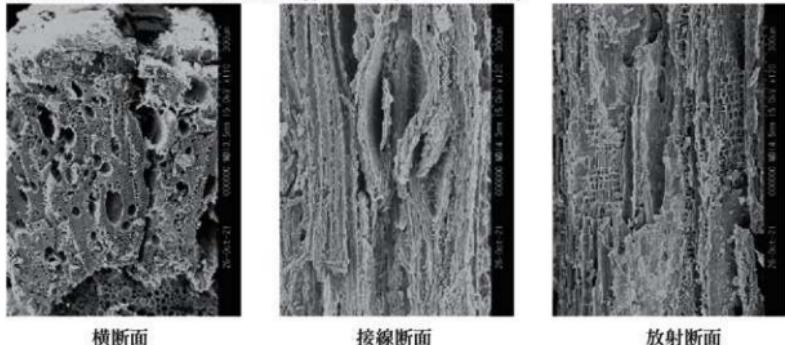
接線断面



放射断面

第90図 樹種同定顕微鏡写真 1

広葉樹Aタイプ broadleaved tree A-type:008-2(KNY2-T0005)



第 91 図 樹種同定顕微鏡写真 2

特徴から、クリのほかシノキ属の可能性があることから、クリ（あるいはシノキ属）とした。

4) 広葉樹 A タイプ broadleaved tree A-type

試料番号（センター管理番号）: 008-1 (T0005)、008-2 (T0005)

横断面が得られたものの體を含むもので、組織が未分化であった。このため、道管配列が分からなかった。放射組織は 1 ~ 2 列で長細胞を含むが、十分な観察ができなかった。以上の組織上の特徴から属レベルでの同定が困難なことから、一括して広葉樹 A タイプとした。

5) 広葉樹 B タイプ broadleaved tree B-type

試料番号（センター管理番号）: 009 (T0007)、011 (T0014)

記載：試料の状態が悪く、横断面の観察ができなかった。また、得られた接線、放射断面の状態も悪く、009 では道管の存在のみ認めることはできたが、その他の組織の状態を観察することができなかつた。一方 011 では、単列同性の放射組織も認めることができた。2 試料が異なる種である可能性はあるが、組織上の特徴から属レベルでの同定が困難なことから、一括して広葉樹 B タイプとした。

(2) 土器胎土分析結果（土器胎土の類型化）

分析結果を第 3 ~ 6 表、第 92 ~ 94 図に示し顕微鏡観察の状況を第 95 図に示す。

第 3 表 土器胎土分析結果一覧

試料番号	遺跡名	報文番号	注記番号	遺構番号	器種	胎土
1	横井南原遺跡	14	KNY2 D0070	SD3027	弥生土器 壺	A1
2		12	KNY2 D0099	SD3027	弥生土器 壺	A1
3		21	KNY2 D0100	SD3028	弥生土器 壺	A2
4		6	KNY2 D0104	SD4005	弥生土器 壺	A2
5		5	KNY2 D0128	SD4005	弥生土器 壺	A1
6		11	KNY2 D0106	SD4006	弥生土器 壺	A3
7		23	KNY2 D2029 D2010	SD7036	弥生土器 壺	B
8		2	KNY2 X0042	SX4010	弥生土器 壺	A2
9		1	KNY2 X0015	SX4010	弥生土器 壺	A1
10			KNY2 T0011	ST4009	弥生土器 体部	A4

第4表 薄片観察結果(1)

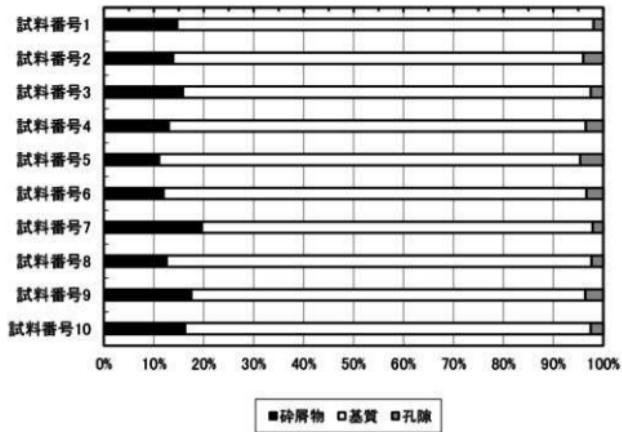
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成										その他	合計				
		鉱物片					岩石片										
石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	酸化鉄結核	
1	細繙																0
	極粗粒砂	2												1	1		4
	粗粒砂	4	2	1									1		1		9
	中粒砂	3	1											2	1		7
	細粒砂	5	2	3									1				13
	極細粒砂	10	1	1	1												13
	粗粒シルト	4		2													6
	中粒シルト	1															1
	基質																301
	孔隙																7
2	備考	基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイトなどによって埋められる。黒雲母、ジルコンあり。															
	細繙																0
	極粗粒砂																0
	粗粒砂	1											1				2
	中粒砂	3															3
	細粒砂	4	3	2									3	1	1	3	17
	極細粒砂	4	3	2													9
	粗粒シルト	6															6
	中粒シルト	1															1
	基質																225
3	孔隙																11
	備考	基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイトなどによって埋められる。無色透光性～淡褐色の火山ガラスあり。角閃石あり。緑簾石？あり。															
	細繙																0
	極粗粒砂	1	1											1			3
	粗粒砂	3	3	2									1	1	2	4	16
	中粒砂	3	1	1											3		8
	細粒砂	4		3									2				9
	極細粒砂			1													1
	粗粒シルト																0
	中粒シルト	1															1
4	基質																196
	孔隙																6
	備考	基質は、粘土鉱物、セリサイトなどによって埋められる。無色透光性～淡褐色のバブル型火山ガラスあり。															
	細繙																0
	極粗粒砂			1										1			2
	粗粒砂	3	3	1									1	3	5		16
	中粒砂	2	1	2									2	3			10
	細粒砂	2	1			1							1				6
	極細粒砂			1													1
	粗粒シルト	1															1
5	中粒シルト	1															1
	基質																238
	孔隙																10
6	備考	基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイトなどによって埋められる。															

第5表 薄片観察結果（2）

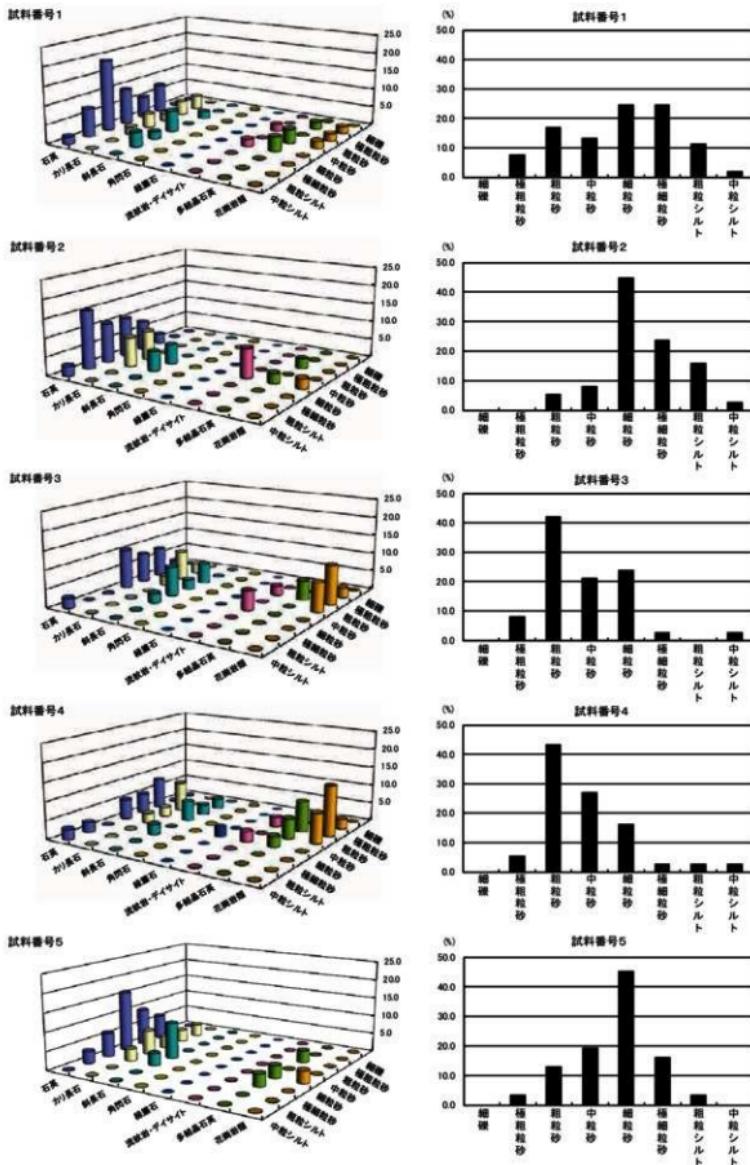
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成										その他	合計				
		鉱物片					岩石片										
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	達致岩・ダイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス
5	細繩																0
	極粗粒砂		1														1
	粗粒砂	2	1												1		4
	中粒砂	3	1													2	6
	細粒砂	5	2	3								1		1	1	1	14
	極細粒砂	2	1	1										1			5
	粗粒シルト	1															1
	中粒シルト																0
	基質																236
	孔隙																13
6	備考	基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイトなどによって埋められる。無色透光性のバブル型火山ガラスあり、清澄な斜長石、斜方輝石、ジルコンあり。															
	細繩																0
	極粗粒砂	1													1		2
	粗粒砂	6	2											2	1		11
	中粒砂	6										3	1				10
	細粒砂	4	1									1	1	1	1		8
	極細粒砂	3	1											2			6
	粗粒シルト	2															2
	中粒シルト																0
	基質																276
7	孔隙																11
	備考	基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイトなどによって埋められる。無色透光性のバブル型火山ガラス、單斜輝石、弱酸化角閃石あり。															
	細繩																0
	極粗粒砂														1		1
	粗粒砂	1	3	2				1		1	1	5	4	8			25
	中粒砂	4	3		2			1	1	1	1	1	1	3			17
	細粒砂	2	1	1		3		1									8
	極細粒砂	1				4	2										7
	粗粒シルト	1				3	1										5
	中粒シルト					2											2
8	基質																259
	孔隙																7
	備考	基質は、粘土鉱物、微細な角閃石および黒雲母などによって埋められる。無色透光性のバブル型火山ガラス、ジルコンあり。黒雲母は屈曲しているものが散見される。															
	細繩											1			1		0
	極粗粒砂														1		2
	粗粒砂	3		1						2	1	2	4				13
	中粒砂	3										1			1		5
	細粒砂	1	2	1									1	1			6
	極細粒砂	2	1														3
	粗粒シルト	3															3
8	中粒シルト																0
	基質																216
	孔隙																6
	備考	基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイト、炭質物などによって埋められる。無色透光性～淡褐色のバブル型火山ガラスあり。															

第6表 薄片観察結果（3）

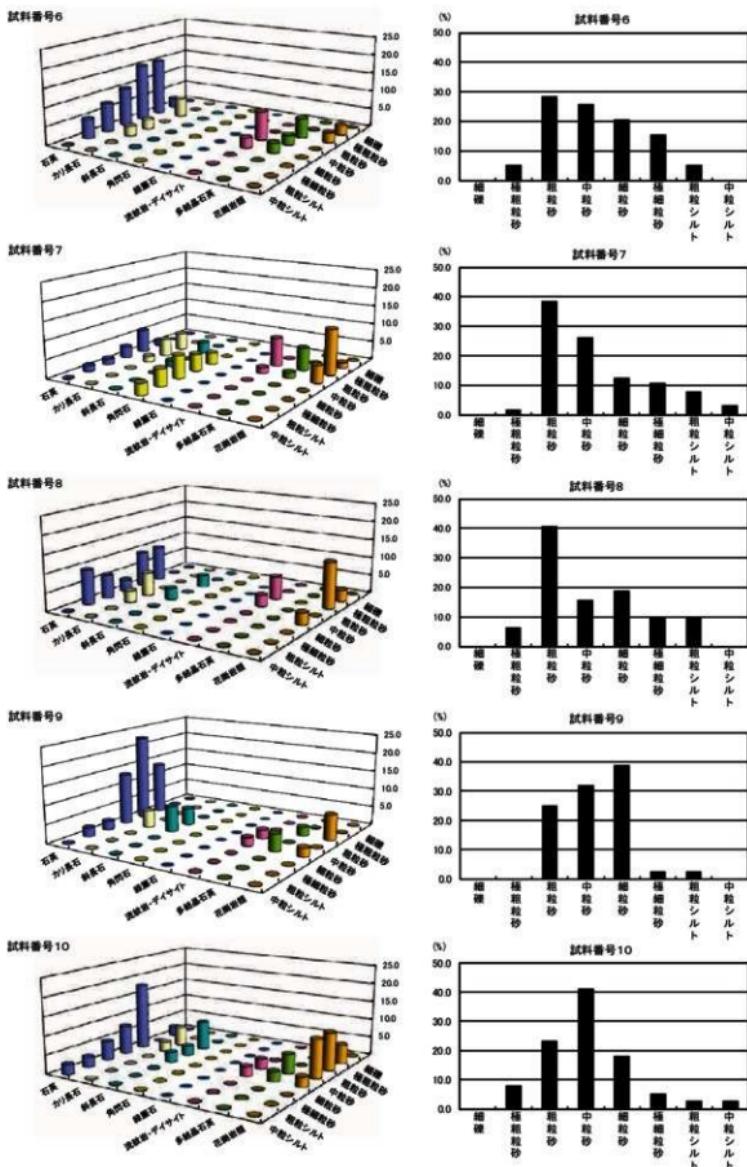
試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成											合計									
		鉱物片					岩石片					その他										
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	チヤート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	酸化鉄結核				
9	細繙																	0				
	極粗粒砂																	0				
	粗粒砂	6																	0			
	中粒砂	10	2	2															11			
	細粒砂	6	2	3															14			
	極細粒砂	1																	1			
	粗粒シルト	1																	1			
	中粒シルト																			0		
	基質																			198		
	孔隙																			9		
備考		基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイト、炭質物などによって埋められる。無色透光性～淡褐色のバブル型火山ガラスあり。																				
10	細繙																			0		
	極粗粒砂	1																			3	
	粗粒砂	2	3																	9		
	中粒砂	7	1	1																	16	
	細粒砂	3																			7	
	極細粒砂	2																			2	
	粗粒シルト	1																			1	
	中粒シルト	1																			1	
	基質																			195		
	孔隙																			6		
備考		基質は、粘土鉱物、珪長質鉱物、セリサイト、炭質物などによって埋められる。斜方輝石、角閃石あり。																				



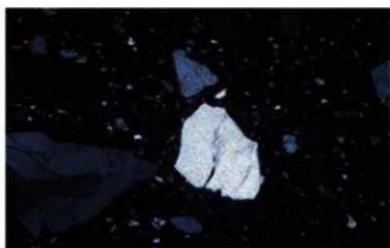
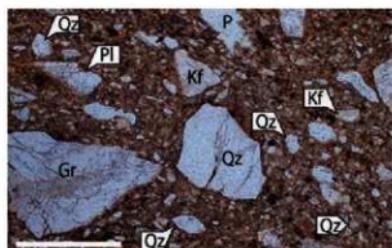
第92図 碎屑物・基質・孔隙の割合



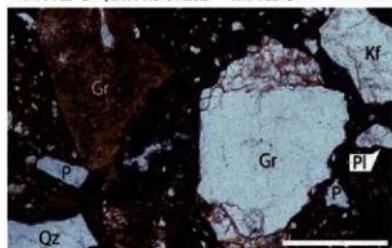
第93図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成（1）



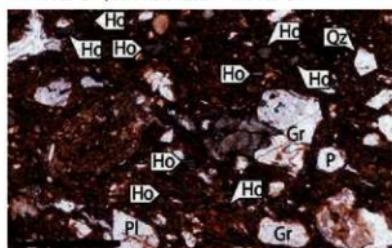
第94図 碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成（2）



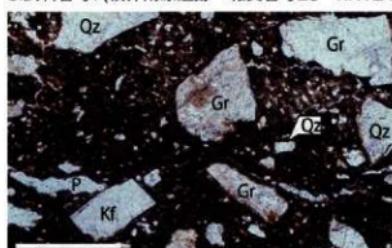
1.試料番号1(横井南原遺跡 報文番号14 KNY2 D0070 SD3027 弥生土器 壺)



2.試料番号4(横井南原遺跡 報文番号6 KNY2 D0104 SD4005 弥生土器 壺)



3.試料番号7(横井南原遺跡 報文番号23 KNY2 D2029 D2010 SD7036 弥生土器 壺)



4.試料番号10(横井南原遺跡 KNY2 T0011 ST4009 弥生土器 体部)

Qz:石英.Kf:カリ長石.Pi:斜長石.Ho:角閃石.Gr:花崗岩.P:孔隙.

写真左列はオープンニコル、写真右列はクロスニコル。

スケールバーは0.5mm

第95図 胎土薄片顕微鏡写真

碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合では、試料番号7が20%を示しており最も高いが、他の試料は15%前後の値を示し、有意な差とは言えなかった。

碎屑物を構成する鉱物及び岩石の種類を見ると、ほぼ全試料で石英の鉱物片が多く、少量の花崗岩類の岩石片を伴い、少量又は微量のカリ長石や斜長石の鉱物片及び流紋岩・デイサイトや多結晶石英の岩石片を含むという特徴が見出せる。一方試料番号7は、角閃石の鉱物片が比較的多く含まれ、他の試料とはやや異なる特徴を有した。このことから、試料番号7以外の試料の胎土をA類とし、試料番号7の胎土をB類とした。

A類を詳細に検討すると、細粒砂径の石英鉱物粒が多い組成(A1類)、粗粒砂径の花崗岩類岩石片が多い組成(A2類)、粗粒砂径の石英鉱物粒が多い組成(A3類)、中粒砂径の石英鉱物粒と花崗岩類岩石片が多い組成(A4類)に細分できた。A1類には試料番号1、2、5、9の4点が分類され、A2類には試料番号3、4、8の3点が分類され、A3類は試料番号6、A4類は試料番号10の各試料がそれぞれ分類される。

(3) ガラス玉類の蛍光X線分析結果

分析試料の概要を第7表に、実体顕微鏡写真を第96図に示す。また、蛍光X線分析による半定量分析結果を第8表に示す。

1) 実体顕微鏡観察結果

ガラス中に気泡が多くみられた。劣化が激しく、表面の亀裂や変色がみられた。

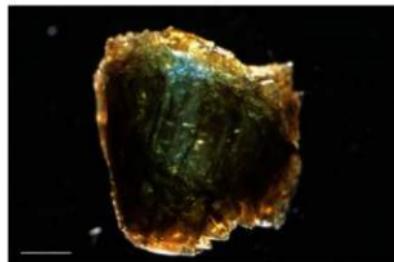
2) 蛍光X線(半定量)分析結果

第7表 分析試料の概要

試料番号	色調	注記番号	報文番号	調査区	遺構名	法量(cm,g)			
						直径	孔径	厚さ	重量
5	青緑?	T0003	4	4区	ST4009	0.45	0.11	0.45	0.08

第8表 蛍光X線(半定量)分析結果

試料番号	色調	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO
5	青緑?	3.16	82.68	1.25	0.22	0.57	1.77	0.34	3.24	2.74	0.08
試料番号	CuO	ZnO	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	MoO ₃	SnO ₂	BaO	PbO	推定接法 (mass%)
5	2.83	0.02	0.01	0.03	0.01	0.03	0.01	0.01	0.97	0.02	引伸?



透過光、スケールは1mm

第96図 ガラス玉の実体顕微鏡写真

分析の結果、アルカリ金属とケイ素 (SiO_2) を主成分とするアルカリ珪酸塩ガラスに属するガラスと確認された。検出できた元素は、アルミニウム (Al_2O_3)、ケイ素 (SiO_2)、リン (P_2O_5)、硫黄 (SO_3)、カリウム (K_2O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO_2)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe_2O_3)、コバルト (CoO)、銅 (CuO)、亜鉛 (ZnO)、ルビジウム (Rb_2O)、ストロンチウム (SrO)、イットリウム (Y_2O_3)、ジルコニウム (ZrO_2)、モリブデン (MoO_3)、スズ (SnO_2)、バリウム (BaO)、鉛 (PbO) の合計 20 元素であった。

(4) 種実同定結果

御提供を受けた 2 試料について実体顕微鏡下で観察し、以下の特徴を有した。分析結果を第 9 表に示し、第 97 図に示した。

第 9 表 種実同定結果

試料番号	注記番号	遺跡名	遺構番号 内容	分類名
1	土 0014	横井南原遺跡	ST4009 トレンチ (ff 断面) 掘方	シダ類胞子嚢?
2-1	土 0059	横井南原遺跡	3 区 ベース埋土中	シダ類胞子嚢?
2-2	土 0059	横井南原遺跡	3 区 ベース埋土中	シダ類胞子嚢?

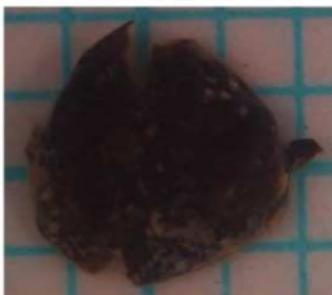
シダ類(あるいは藻類)の胞子嚢(あるいは大胞子)?



001 (土 014)



002-1(土059)



002-2(土059)

背後は 1mm 方眼

第 97 図 種実同定写真

1) シダ類（あるいは藻類）の胞子嚢（あるいは大胞子）？

試料No.2-1、2の2試料は球形で上下の突起が認められ、いずれの膜も単層で薄い褐色を呈する。光沢がなく、少し固いビニールのようなべらべらした質感を持つ。シダ類（あるいは藻類）の胞子嚢（あるいは大胞子）のほか、これらの「根（相当器官）」に生ずる球状の器官の可能性もある。

試料No.1は破損して長球状を示し、色調も暗褐色を示すが、突起が2か所に認められるなどNo.2-1、2と同様の特徴を有している。このことから、No.2-1、2と同様にシダ類（あるいは藻類）の胞子嚢（あるいは大胞子）のほか、これらの「根（相当器官）」に生ずる球状の器官の可能性もある。

5. 土器材料の採取地に関して

横井南原遺跡周辺の丘陵地や低地を構成する堆積物は、主に香東川水系の河川によってもたらされた碎屑物により構成されていると考えられる。香東川は、讃岐山脈を水源とし、扇状地性の高松平野を形成して瀬戸内海に流下する河川である。日本の地質「四国地方」編集委員会（1991）や牧本ほか（1995）などの地質記載を参照すれば、上流域の讃岐山脈北麓は、白亜紀後期に形成された領家帯の花崗岩類が広く分布する。領家帯の花崗岩類は、主に角閃石・黒雲母花崗閃緑岩により構成されているため、香東川下流域の堆積物には、角閃石の鉱物片と石英及び斜長石の鉱物片が相対的に多く含まれていると考えられ、堆積物中に残存する岩石片のほとんどは花崗岩類と推定される。

分析試料（胎土）は鉱物種と岩石種による分類で、A類とB類に分けることができた。いずれの分類も、花崗岩類の岩石片や花崗岩類に多く含まれる鉱物類が主体であり、上述した香東川下流域の地質要素と一致する。すなわち、今回の試料とされた土器の材料には、香東川下流域に分布する堆積物が用いられたと可能性が高い。

A類とB類との違いについて、材料採取地のより局地的な地質要素の違いに由来すると考えられる。したがって、B類土器（試料No.7）の材料採取地は、A類土器の材料採取地とは異なっていた可能性が高いと考えられる。また、A類を細分したA1～A4類までの違いも、異なる材料採取地と捉えることができる。一方で、近接した範囲内に材料採取地がありながらも、材料採取以後、素地土を調整する段階まで含めた土器製作者集団の違いなどに由来する可能性も指摘できる。

現時点では、A類とB類の材料採取地やA類の製作者集団などについて具体的な言及をすることはできない。しかし、周辺域における土器の出土地や土器の調整痕なども含めた情報を有する試料の分析事例を今後蓄積することにより、土器の製作と使用の状況について、より具体的に明らかにしていくことが期待できる。

6. ガラス玉類に関して

(1) 製作技法について

実体顕微鏡観察の結果、気泡が多く観察され、孔に対して平行に伸びた気泡列が観察された。ガラスを管状に引き伸ばした後、管を切って製作する引き伸ばし法（管切り法）により製作されたと推定される。

劣化が激しく、表面の亀裂や変色がみられるが、ガラス内部は青紺色の残る箇所が認められ、元は青紺色のガラス玉であったと考えられる。

(2) ガラスの種類について

古代のガラスについては、肥塚・田村・大賀（2010など）や、中井・阿部ら（白瀧ほか、2012など）

により、詳細に分類されている。

またガラスは、日本列島において弥生時代より出現する。弥生時代の主なガラスは鉛バリウムガラスとカリガラスであり、弥生時代後期頃からソーダ石灰ガラス、アルミニナソーダ石灰ガラスが少量出現するようになる。古墳時代以降は、ソーダ石灰ガラス、アルミニナソーダ石灰ガラスが多量に流通する一方、カリガラスは少量の流通となり、鉛バリウムガラスの流通は途絶える。

今回分析したガラス玉は、ルビジウム (Rb_2O) とジルコニウム (ZrO_2) が比較的少なく、ストロンチウム (SrO) が比較的多いなどの特徴により、基礎ガラスはソーダ石灰ガラス ($Na_2O-CaO-SiO_2$ 系) に属すると考えられる。なお、主成分のひとつであるナトリウム (Na_2O) は検出されなかつたが、風化の影響を受けやすい元素である点や、蛍光 X 線での感度の悪い元素である点を考慮して、上述の他の元素の組成よりソーダ石灰ガラスと判断した。

青紺色の発色については、コバルトイオンが大きく影響していると推定される。今回分析したガラス玉は、マンガン (MnO) がかなり多く、バリウム (BaO) がやや多く、鉛 (PbO) が少ないという特徴がみられる。これは、紺色系のカリガラスと共に通する特徴で、着色原料のコバルト鉱石の特徴と考えられる。

$Na_2O-CaO-SiO_2$ 系のソーダ石灰ガラスは、西アジアやエジプトなど地中海周辺地域でみられ「西方のガラス」と呼ばれる（肥塚、2003 など）。さらに、 $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系のソーダ石灰ガラスには、ナトリウム源にナトロンと呼ばれる天然ソーダを使用したと推定されるマグネシウム (MgO)、カリウム (K_2O) の少ないタイプと、ナトリウム源に植物灰を使用したと推定されるマグネシウム (MgO)、カリウム (K_2O) の多いタイプに分類されており（加藤ほか、2005 など）、日本の $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系のソーダ石灰ガラスにおいても両者の存在が明らかとなっている（田村ほか、2011）。今回分析した $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系のソーダ石灰ガラスについては、マグネシウム (MgO)、カリウム (K_2O) が少ないと、引き伸ばし法で製作されており、田村ら（2011）によるところのナトロン主体タイプに当たると考えられる。

7. まとめ

横井南原遺跡発掘調査に伴い実施した自然科学分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 炭化材の樹種同定の結果、アカガシ亜属、クリ、クリ？、その他広葉樹（樹種不明）から成ることが分かった。
- (2) 土器胎土分析の結果、A、B 類に 2 分できた。さらに、A 類は A1 ~ A4 に細分することができた。何れも、横井南原遺跡の所在地する香東川水系起源の原材料を用いたと考えられる、A、B 類の違いは生産地（原料採取地）の違いを示している可能性が高いが、A1 ~ A4 類の違いは、人為的な要素考える必要がある。
- (3) 蛍光 X 線分析の結果、ガラス玉はアルカリ珪酸塩ガラスと確認された。化学組成の特徴から、ソーダ石灰ガラスに属する可能性が高い。
- (4) 種実同定の結果、3 試料ともに「種実」ではなく、シダ類（あるいは藻類）の胞子嚢（あるいは大胞子）と考えられた。

引用文献

- 浅野貞夫（1995）新装版 原色図鑑 芽ばえとたね・植物3種／芽ばえ・種子・成植物-. p.278, 国農村教育協会.
- 石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑, p.326, 石川茂雄図鑑刊行委員会.
- 加藤慎啓・沢田貴史・保倉明子・中井 泉・真道洋子（2005）ポータブル蛍光X線分析装置によるエジプト・ラーヤ遺跡出土ガラスの考古化学的研究, 日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集, 250-251.
- 肥塚隆保（1997）日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究, 132p, 東京藝術大学博士学位論文.
- 肥塚隆保（2003）日本出土ガラスから探る古代の交易—古代ガラス材質の歴史的変遷—, 沢田正昭編「遺物の保存と調査」: 145-158, クバプロ.
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦（2010）古代ガラスと考古科学 材質とその歴史的変遷, 月刊文化財, 566, 13-25.
- 作花済夫・境野照雄・高橋克明編（1975）ガラスハンドブック, 1072p, 朝倉書店.
- 白瀧絢子・阿部善也・タンタラカーン・クリアンカモル・中井 泉・池田朋生・坂口圭太郎・後藤克博（2010）熊本県の古墳から出土したガラスピーズの考古化学的研究, 日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集, 254-255.
- 白瀧絢子・阿部善也・K. タンタラカーン・クリアンカモル・中井 泉・池田朋生・坂口圭太郎・後藤克博・荒木隆宏（2012）熊本県出土の古代ガラスの考古化学的研究, 考古学と自然科学, 63, 29-52.
- 田村朋美・高妻洋成・肥塚隆保（2011）日本出土ソーダ石灰ガラス製玉の種類とその変遷, 日本文化財科学会第28回大会研究発表要旨集, 120-121.
- 田村朋美・高妻洋成（2012）弥生・古墳時代のナトロンガラス製玉類の考古化学的研究, 日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集, 24-25.
- 徳永桂子（2004）日本どんぐり大図鑑, p.156, 偕成社.
- 中井 泉編（2005）蛍光X線分析の実際, 242p, 朝倉書店.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑, p.641, 東北大学出版会.
- 日本の地質「四国地方」編集委員会（1991）日本の地質8 四国地方, p.266, 共立出版.
- 牧本 博・利光誠一・高橋 浩・水野清秀・駒澤正夫・志和龍一（1995）20万分の1地質図幅「徳島」, 地質調査所.
- 松崎真弓・白瀧絢子・池田朋生・中井 泉（2012）非破壊オンライン分析による日本出土の古代ガラスの流通に関する考古化学的研究, 日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集, 374-375.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高（1999）瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による-, 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 山根正之（1989）はじめてガラスを作る人のために, 195p, 内田老鶴圖.

第5章 横井南原遺跡のまとめ

第1節 周溝墓について

①構築順序について

3～6区で周溝墓1～7を検出した。いずれの場合も溝を隣接する周溝墓と共有する。SD4006・SD4005以外は遺存状態が悪く、底付近の埋土しか残らなかったと考えられる。溝の共有関係を確認すると

SX4010 - 周溝墓1・2・3

SX4011 - 周溝墓2・3

SD4006 - 周溝墓2・4

SD5003 - 周溝墓4・7

SD5001 - 周溝墓3・7

SD4005 - 周溝墓4・5

SD3027 - 周溝墓5・6

となる。

この中で、4区東壁断面から、SD4006はSD4005より古く、周溝墓2は周溝墓4に先行することがわかる。SD5003とSD5001の関係は、平面精査では明らかではなかったが、断面に見えるSD5001の埋土とそれに近接する部分のSD5003の埋土が異なることから、SD5001を破壊してSD5003を掘削した可能性が考えられると思う。SD5001部分よりSD5003部分の方が15cm程度深いことも周溝墓4のために溝を再掘削したためと考えられよう。ただし、SD5003が先行し、SD5001は周溝墓7を画するためにSD5010へ繋げるために掘削したとも考えられ、確実なところは不明である。

溝の平面形状からは、

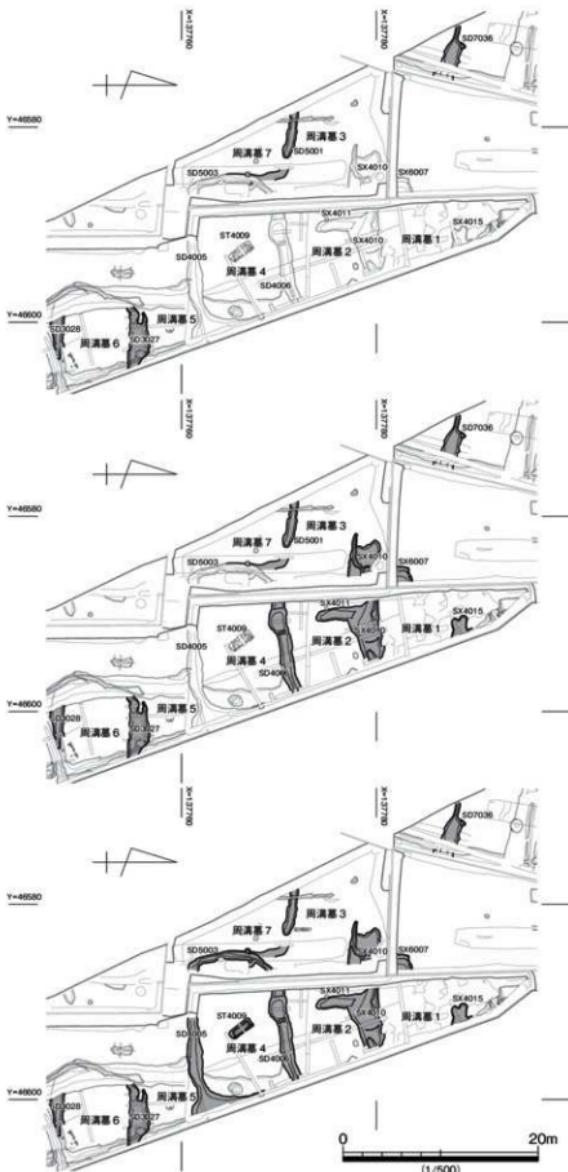
- ・SD5001は周溝墓7を意識しており、周溝墓7は周溝墓3に先行すると思われる。
- ・SD3027は周溝墓6を意識しており、周溝墓6は周溝墓5に先行すると思われる。
- ・SD4005は東端が南と北両側へ広がっており、周溝墓4と周溝墓5を同時に意識していることが窺える。

周溝墓1と周溝墓2の関係、周溝墓2と周溝墓3の関係は、SX4010の5・6区部分が4区部分と同時並存か時期差があるかによると考えられるが、それは明らかにはできなかった。同時並存であれば、周溝墓1～3は同時期に築造したと考えられ、5・6区部分を後に付け足したとすれば、周溝墓2より周溝墓1・3は後出することになる。SX4010（5区部分）・SX6007とは調査区がまたがることもあり、連続性は不明瞭であるが、遺構深度や全体の形状、埋土から同時並存としても違和感はないと思われる。周溝の年代については、出土遺物から、

- ・SX4010・4011（周溝墓2・3）は、弥生時代中期後半新段階
- ・SD2027・2028（周溝墓6）は弥生時代中期後半中段階
- ・SD4006（周溝墓2・4）は弥生時代後期後半古段階
- ・SD7036は弥生時代中期後半中段階

以上を考えれば、

周溝墓6・7→周溝墓1・2・3→周溝墓4・5



第98図 周溝基変遷図 (1/500)

第10表 横井南原遺跡周溝墓一覧

遺跡名	東西	南北	主導方位	墳丘部分 (標高)	墳丘部分 (標高) 植定面積	SX4010 (4.4K)	SX4011 (5.0K) (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SX4005 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD4006 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD5003 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD5010 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD3027 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	
周溝墓 1	①~ ②7.28~ ③9.49	N35°W	9.00	4097~	9094~9095 1.78 /7.60	9077~9078 1.46 /10.9~18.4 /20	SX4010 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SX4011 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SX4005 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD4006 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD5003 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD5010 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)	SD3027 (標高) 幅(m) 幅出長(m) /幅(m) /深さ(cm)
周溝墓 2	①5.86~ ②6.28 ③8.69	N18.16°W	90.92~ 91.08	4200~	9077~9079 1.54~342 /15.5~21.5	90.94~90.99 1.49 /1.23 /5	90.94~90.99 1.23 /5	90.95~90.73 7.45 /1.03~1.27 /30	90.95~90.73 7.45 /1.03~1.27 /30	91.26~91.46 4.64 /0.88 /8	91.11~91.24 8.65 /0.64~0.79 /15~26	90.69 4.83 /1.92~2.14 /15~19	90.69 4.83 /1.92~2.14 /15~19
周溝墓 3	①11.91 ②12.54	①5.99 ②6.66	N5.29°W	91.20~ 91.44	7465~	91.23~91.37 7.65 /3.08 /5~8	90.94~90.99 4.49 /1.23 /5	90.47~90.84 15.86 /0.94~1.25 /23~51	90.55~90.90 9.27 /1.03~1.71 /30	91.11~91.24 8.65 /0.64~0.79 /15~26	90.69 4.83 /1.92~2.14 /15~19	90.69 4.83 /1.92~2.14 /15~19	
周溝墓 4	①13.98 ②15.29 ③9.32	N 7.94°W	91.44	105.201~	90.93~ 90.85	90.7~ 90.85	2202~		90.47~90.58 4.35 /0.97 /28.4				
周溝墓 5	④(4.63)~ ⑤8.70	N7.72°W	91.44										
周溝墓 6	①6.91 ②8.41	N23°E	91.00~ 91.20	4224~									
周溝墓 7	①5.58~ ②6.39~ ③11.27	N0.17°W	91.46~ 91.47	3602									

①周溝の外側上端間の距離 ②周溝の芯と周溝の距離 () は周溝を検出していない場合

となろう。周溝墓群は周溝墓1～3・7と周溝墓6の2グループに分かれていたものを最後に周溝墓4・5が繋いで最終形態となったと思われる。

このことから、順次1方向へ墓域を広げていくのではなく、当初はやや独立気味に築造されたものが周溝墓4および周溝墓5の築造により繋がった様子が窺える。

周溝墓4は、平面規模が他よりも若干大きいことに加え、周溝の深さ、溝底の標高も他の周溝に比べ低く、他の周溝より深く掘削されている。SD5003は先行するSD5001を再掘削したと考えられる。SD4005、SD4006でのみ溝底部から川原石が出土しており、墳丘を飾ったことが考えられる。他の溝は後世の削平のため溝底部はわずかしか残らず、他の周溝墓も同様であった可能性もあろうが、少なくとも周溝墓4を構成する周溝が最も深かったことは確かであり、周溝墓4が他より卓越した存在であったのではないか。周溝墓4が出土土器からも周溝墓群のはば最終時に築造されたと考えられる。周溝墓群は、最終時期に最も立派な周溝墓が出現したのであろう。

②土器供獻等について

周溝の中で、土器を供獻した可能性があるものは周溝墓2西北隅、それに西接する周溝墓3北東隅、周溝墓6北西隅で認められ、いずれも壺である。弥生時代中期後半頃の周溝墓の一部は、コーナーに壺を供獻していたようである。

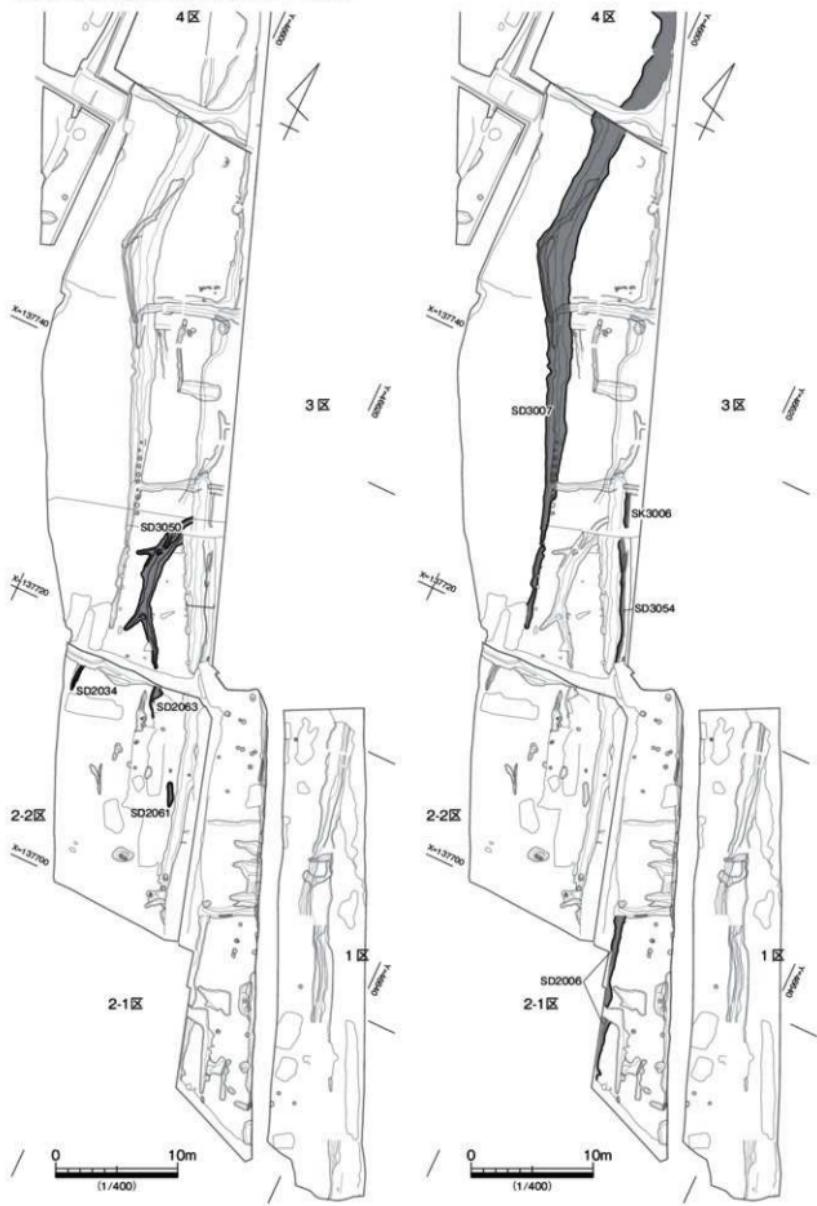
最も規模が大きかったと考えられる周溝墓4では、供獻を想定させる土器は出土していないが、周溝墓2と共有するSD4006からは人頭大の川原石が出土している。周溝墓4でのみ何らかの理由で墳丘に川原石を使用したのであろう。

第2節 近世の溝群について

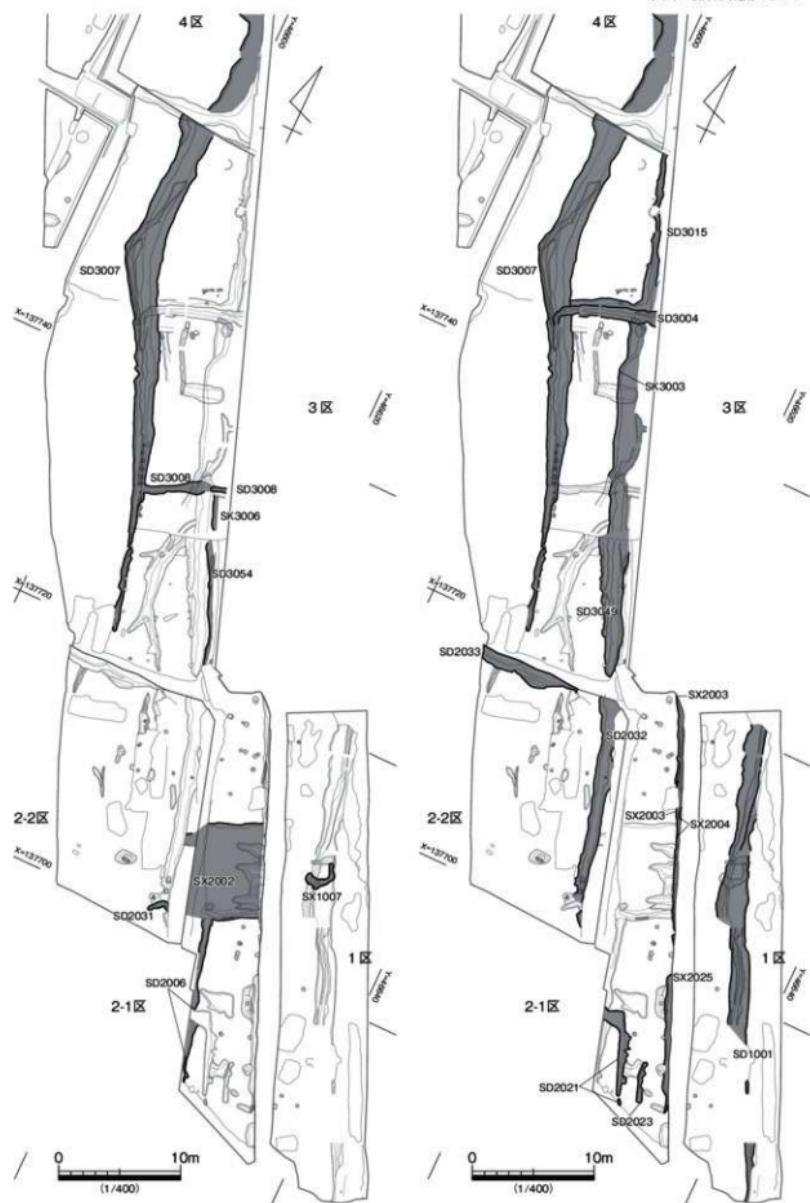
①溝の変遷

1区～4区南半にかけて近世の溝群を検出した。南北方向の溝は、延長距離が長いものでは、西からSD3007、SD3015/SK3003/SD3049/SD2032（現地境に同じ）、SX2003-SX2004/SX2025（現地境に同じ）、SD1001があるほか、SD3049とはほぼ同位置でこれに切られるSD3054、SD3054の南延長上で検出した、SX2002に切られるSD2006、SD3054の北側の延長上と考えられ、SK3003の東側に接するSK3006、小規模なものにSD2021、SD2023がある。SD3007は直線的に伸びず途中で西へ膨らむ形状であるが、これは地形に沿うものと考えられる。SD3007からSD1001までの東西幅18mの間に4～6m間隔で大きく4条の溝を検出したことになる。SD3007から西は概ね旧耕作土の直下にベースが検出され、後世の削平を受けたと考えられる。東西方向の溝はSD3004、SD3008、SD2033（現地境に同じ）、SX2002がある。概ね15m間隔で、南北方向の溝群より間隔が疎らである。斜面上に位置し、南北方向が等高線の方向、東西方向が等高線に直交する方向であるため、南北方向の溝群は延長距離が長く、溝間の距離が狭いこのような配置となる。南北方向の溝が基幹水路的な役割を果たしたのに対し、これらの東西方向の溝は補助的な役割であったと考えられる。

SD3050は、検出した溝群とはやや方位が異なり、南東から中ほどで緩く屈曲しながら北東へ進む。その間には南西方向から合流する溝が2か所で認められた。SD3007等の溝群とはやや流路方向が異なるが、近世以降の出土遺物が認められることや、周辺の開発が近世以降と考えられることから、開発初



第99図 近世溝群の変遷 1 (1/400)



段階のものと考える。SD3007が同様に溝の途中で西へ膨らんでいることから、SD3050も地形の影響を受けたと考えられる。

SD3007は、遺構の切り合い関係によりSD3004・SD3008より古い。しかし、両溝ともSD3007と同位置で南へ屈曲しており、地形の傾斜から考えれば、SD3007掘削後、南から東側の低地へ水路を分岐させたものであろう。概ねSD3007と同時並存であったと考えられる。

SD3015/SK3003/SD3049/SD3032は現地境に沿う溝で、SD3008より新しく、SD3004より古い。SD3049の東側に接してSD3054を検出した。遺構の切り合い関係からSD3054はSD3049の前身の溝と考えられる。SD3054はSD2006とは距離があくものの直線状に位置し、同一の溝の可能性がある。ともにSD3015/SK3003/SD3049/SD2032の前身の基幹水路としての役割を果たしたと考えられる。遺構の切り合い関係から、SD2006はSD2021・SX2002よりも古い。

SX2003・SX2004/SX2025は西肩をわずかに検出しただけであるが、現地境とほぼ同一の溝である。両者は、埋土の差により異なる遺構としたが、同一の溝の可能性もある。東西方向の幅広い遺構SX2002より新しい。

SD1001は現地割のほぼ中央に位置する。SX1007を切るが、SX1007は位置関係からSX2002と同一である可能性が考えられ、SD1001はSX2002より新しい。SD1001はSX2003・SX2004/SX2025と同時期であろう。

これらの遺構の前後関係から、

①SD3050 → ②SD3007（南北）・SK3006/SD3054/SD2006（南北） → ③SD3007（南北）・SK3006/SD3054/SD2006（南北）・SD3008（東西）・SX2002/SX1007（東西） → ④SD3007（南北）・SD3015/SK3003/SD3049/SD2032（南北）・SD3004（東西）、SX2003・SX2004/SX2025（南北）・SD2033（東西）・SD1001（南北）が考えられる。

SD3004・SD3008はSD3007を掘削した後にSD3007から東側への低地へ流れ込むように南から東へ屈曲しており、位置を少しづつ変えながら東側の低地へ水を流入させたのであろう。

この中で、調査直前の地割に沿う溝は、東西方向のものはSD2033、南北方向のものはSD3015/SK3003/SD3049/SD2032とSX2003・SX2004/SX2025である。溝の形状からも、SD3007に連れて掘削されたことが窺える。

工事直前の地割と同じ溝である東西方向の溝SD2033は、南北方向の基幹水路との切合い関係がなく、遺構の前後関係は不明である。埋土中からは腰錫碗や外型作りの土師質土器焙烙などが出土し、溝の開削は19世紀末頃と考えられる。

②遺構の時期

出土遺物から時期が推測できる溝は、SD3007が18世紀後半頃（様相7）、SK3003・SX2004が19世紀代（様相8）、SD2033が19世紀末頃（様相9）と考えられる。

SD3050は18世紀後半の溝群に先行するものである。

本格的な開発は18世紀後半頃のSD3007の開削（②の時期）を初めとして南北方向の溝が掘削され、その後、適宜東西方向の溝が掘削されたと考えられる。近世以降に開発が進む様子は上道池東遺跡でも認められる。この周辺一帯の開発は18世紀代に本格化されたと考えられる。

<参考文献>

香川県教育委員会 2014 「県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 太田原高洲遺跡Ⅰ」
岡山県古代吉備文化財センター 1993 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87 みそのお遺跡」

第6章 上道池東遺跡の調査の成果

第1節 調査の方法

調査は1区から実施した。表土は重機により掘削し、遺物包含層から下部は人力により掘削した。平面図はCubic「遺構くん」2021により作成し、必要に応じて手描きの図面を作成した。断面図は手描きにより作成した。

報告書の記載については、遺構・遺物の説明は、本調査として実施した1～3区をまとめて概ね時代順に記述し、予備調査から本調査へ切り替えた4～7区については調査区ごとに記述した。

遺構番号は、混乱を避けるため、1～3区については調査時の遺構番号を踏襲し、4区～7区については、4桁の遺構番号とし、4桁目を調査区の番号、下3桁を調査時の遺構番号とした。

第2節 1～3区の調査

1 土層

1～3区を通じて、以下の第1～5層に分類した。

第1層 現耕作土 第2層 昭和後期の造成土 第3層 近代～昭和30年代頃の旧耕作土 第4層 近世耕作土・床土（18～19世紀前半の遺物を含む） 第5層 中世堆積層（7世紀後半～13世紀代の遺物を含む） 第6層 ベース

調査地は、南から延びる開析谷の西斜面に相当し、もとは東から西へ傾斜する斜面であった。土層は斜面の耕地化を進める過程を表している。

調査区中央付近では等高線に沿って南北方向の溝群を検出した。溝群より東は斜面上部に相当し、耕地化の際に上面を著しく掘削したため、現耕作土（1層）直下でベースを検出した。この面を田1面とする。溝群から西ではベースの上面に第2～5層の包含層が堆積する。この面を田2面とする。溝群から西側16.4m付近までは第2～4層がおおむね水平堆積し、ベースは緩やかに西へ傾斜する。田2面では第4層が形成された時期にも水田造成のため土地の削平が行われたと考えられる。それ以西では第5層（～13世紀代）の堆積が認められ、ベースは西へ強く傾斜する。鋤溝や牛蹄跡はSD06・07より西ではほとんど検出されていない。

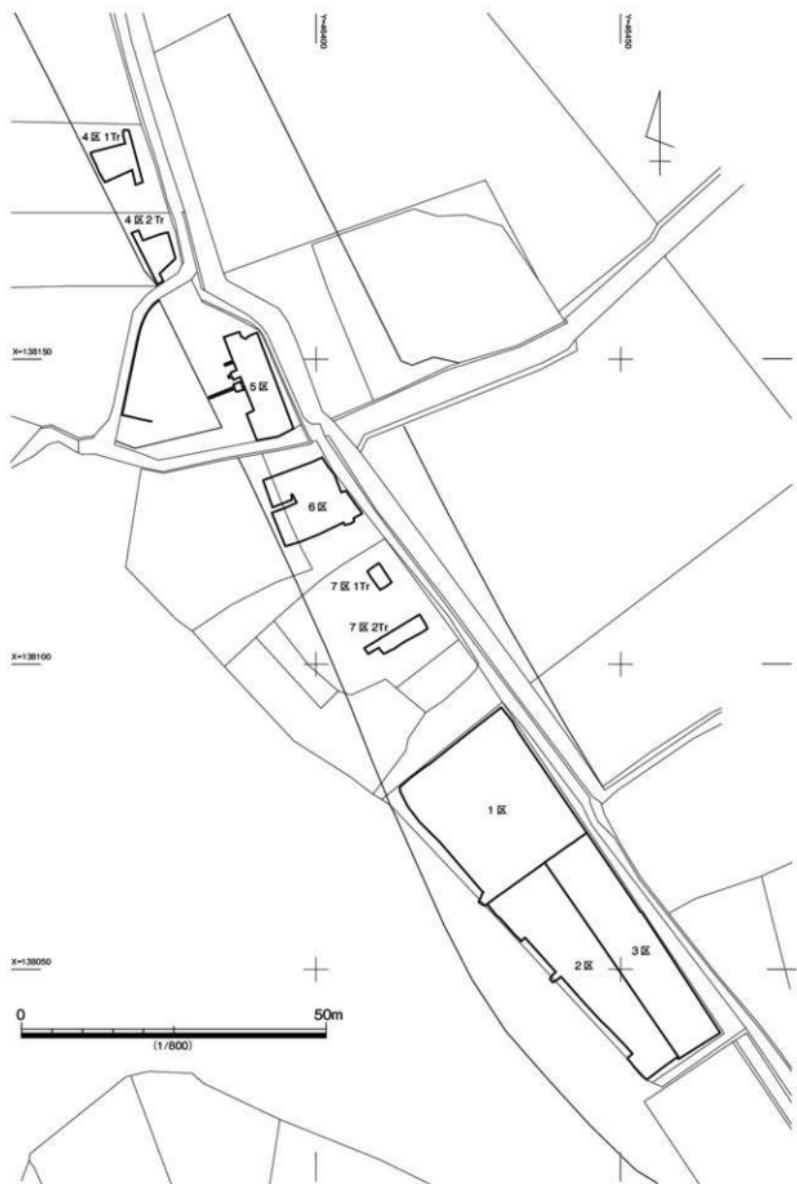
第2～5層を通して7世紀後半頃の須恵器片が出土し、特に第4・5層では多量に出土した。第4・5層では、7世紀後半代の須恵器が多数を占めるが、第4層では19世紀前半の遺物、第5層では13世紀代の遺物がわずかに出土している。7世紀後半代の遺物は包含層の時期を示すものではなく、周辺からの流入と考えられる。

土層断面の位置は、第102・103図の中に示した。

① 1区南壁（第104図）

1区と2区の境の1区側で断面図を作成した。

田1面では表土直下でベースを検出した。ベースの標高は86.1m程度である。田2面では第2～5層が堆積する。東から8.5～16.3m付近まではベースは85.8～85.6mと徐々に下がり、第2～4層は厚さ



第101図 調査区割図 (1/800)

30～50cm程度が堆積し、緩やかに西へ傾斜する。それより西では、第5層の堆積が認められる。ベースは西へ強く傾斜し、最深部の標高は85.3mで、第5層の厚さは20～30cmである。SD02・04～07は第3層との分層ができず、溝の埋土は第3層の窪み部分と捉えられた。検出面は第4層上面である。鋤溝群は、溝群と同様第3層の下部、第4層を掘り込み面として検出した。SK04はベース上面で検出した。

② 1区あぜ（第105図）

1区中央付近西半部で東西方向の断面図を作成した。東から西への傾斜は1区南壁より緩やかで、田2面でのベースの標高は85.4～85.6mである。第5層の堆積は10cm程度で、第5層部分の急激な落ち込みはない。SD02は第3層の窪み部分が相当するため検出面は第4層となる。SD04・SD05は第4層を掘り込む。

③ 2・3区北半部南壁（第105図）

田1面では標高85.9～86.0mで第6層のベースを確認した。田2面では、東から7.5mまでは厚さ10～25cmの第2～4層の堆積が認められる。ベースの標高は概ね85.7mである。東から13.4m以西では、第5層が出現し、厚さ10～20cmを測る。ベースの標高は85.1～85.7mである。SD04・SD06・SD07は第3層の窪み部分が相当し、第4層の上面で検出した。SD05は第4層上面から掘り込まれる。鋤溝は、①1区南壁と異なり、第3層下面と第4層下面で認められている。

④⑤ 2区西壁南半部南端・2区西壁北半部（第106図）

2区西壁南端付近および西壁北半部で断面図を作成した。ベースの標高は85.2～85.4m程度で傾斜はほとんどない。第5層の上面は85.5m、第4層上面は85.6～85.7m、第3層上面は85.8～85.9mで緩やかに北へ傾斜する。第5層の上面で柱穴及びSX01（SF01上面の落ち込み）を検出した。

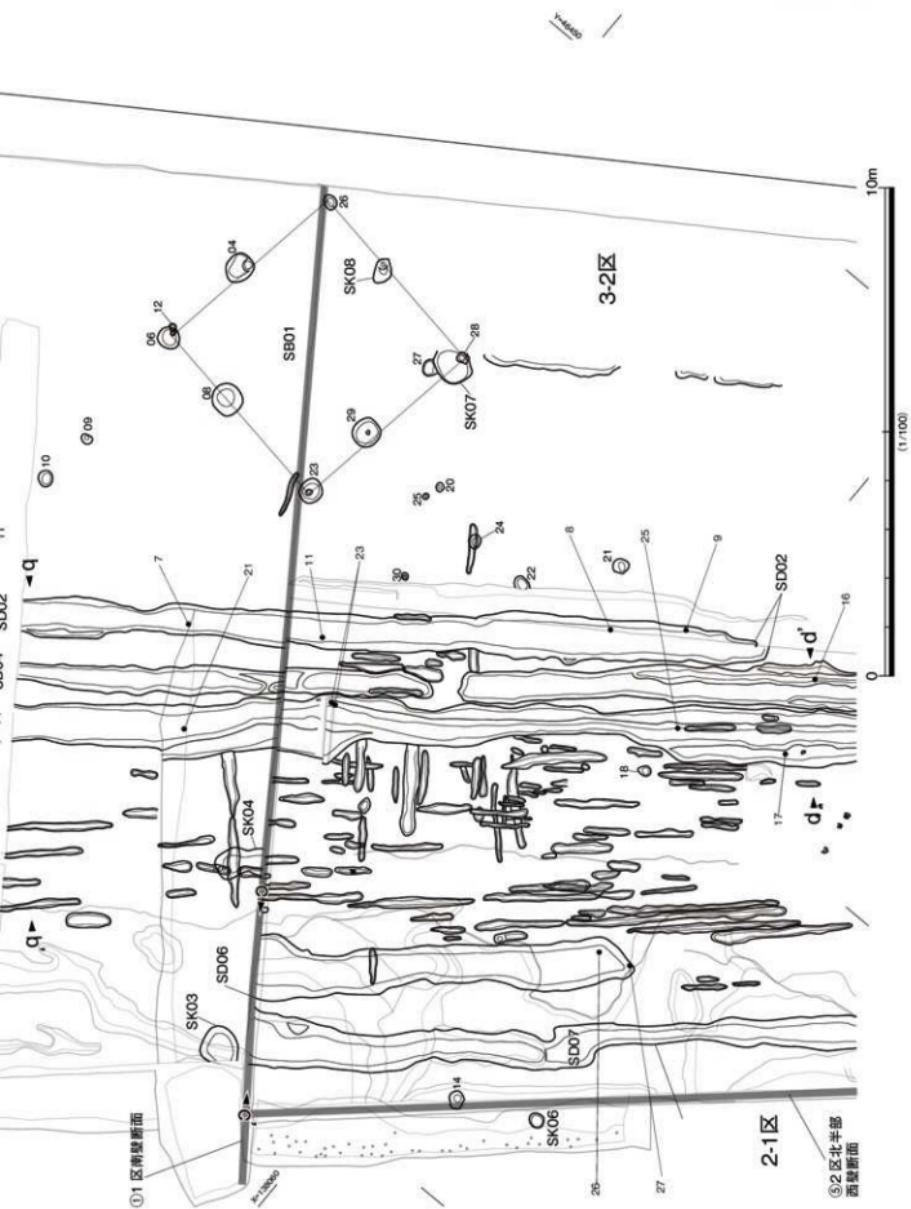
2 遺構・遺物

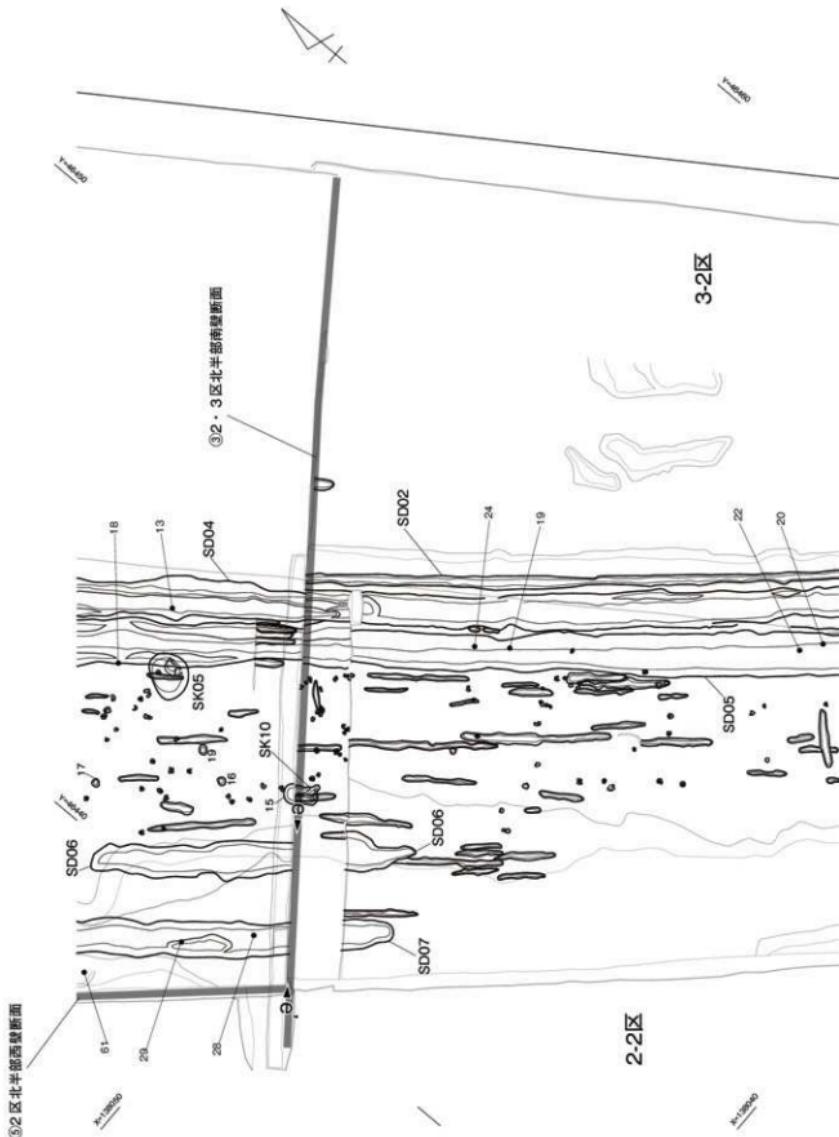
1～3区は、南から延びる開析谷の西斜面に立地する。調査区の東半部（田1面）は耕作土直下で削平されたベースを検出し、西半部（田2面）では古代～近代の遺物包含層が堆積する。田1面と田2面の境で、等高線に沿う南北方向の溝を5条検出した。溝の時期は、第4層（近世耕作土層）を掘り込み、上面に第3層が堆積することから、近世以降で昭和30年代以前と考えられる。また、田1面と田2面の境から西へ約4.5mで検出したSD06・07は、SD01～05と同様第4層上面で検出しており、同時期の溝と考えられ、田2面はさらに2面の水田に分かれると考えられる。鋤溝群や牛蹄跡はこれらの溝の間で検出しており、これらの溝の開削により形成された水田面で鋤溝や牛蹄を伴う耕作が行われたと考えられる。遺構の大半は、削平をあまり受けなかった田2面で検出した。

田2面の包含層中では、おもに第4・5層で須恵器片が多量に出土し、中には焼成不良品や歪みがある破片、複数の破片が溶着する破片が認められた。これらは生産遺跡で廃棄された焼成失敗品の破片と考えられる。調査区内や隣接する上道池では須恵器焼成にかかる遺構は認められなかつたが、遺跡の周辺には複数の古代の須恵器窯跡が知られており、窯跡が近在する可能性はある。

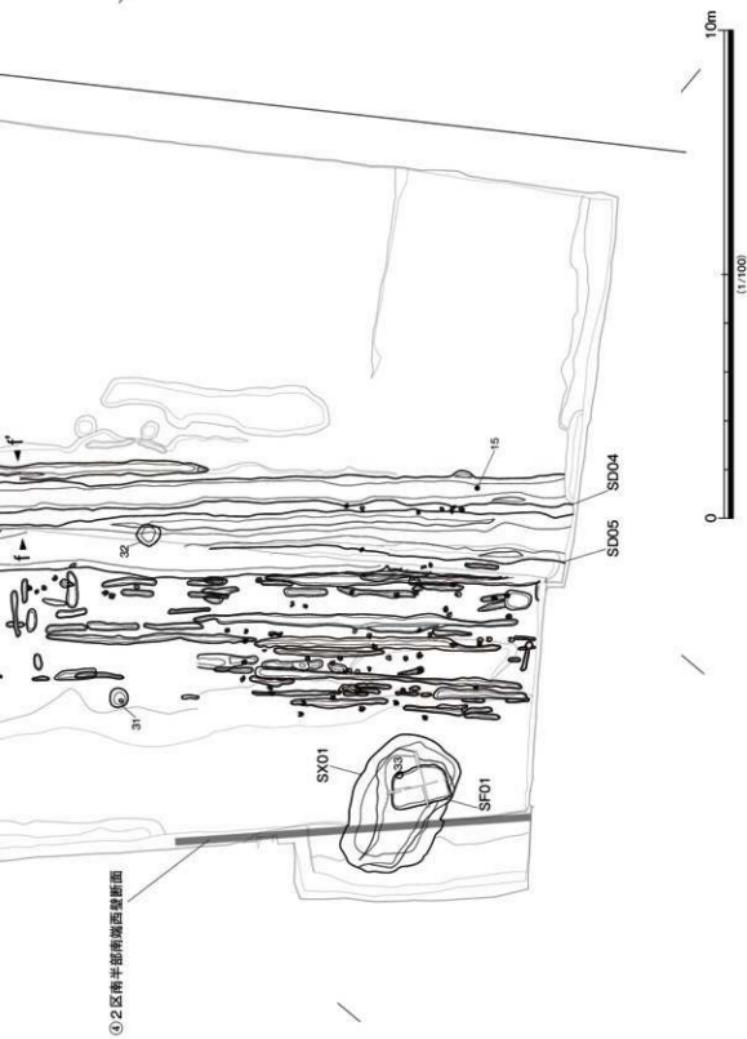
遺構の時期については、出土遺物に加え、基本土層を踏まえて第4層を切り込む遺構は近世以降昭和30年代以前、第5層より掘り込む遺構は中世以降近世以前、田2面でベースを掘り込む遺構は中世以

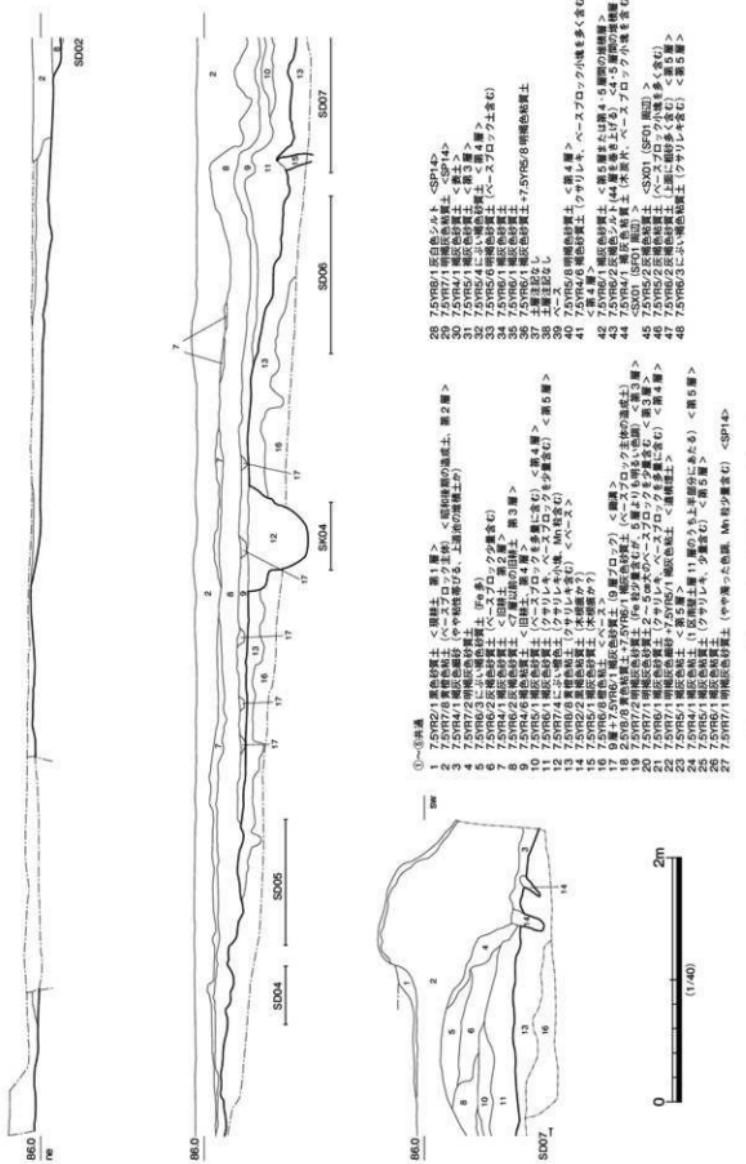




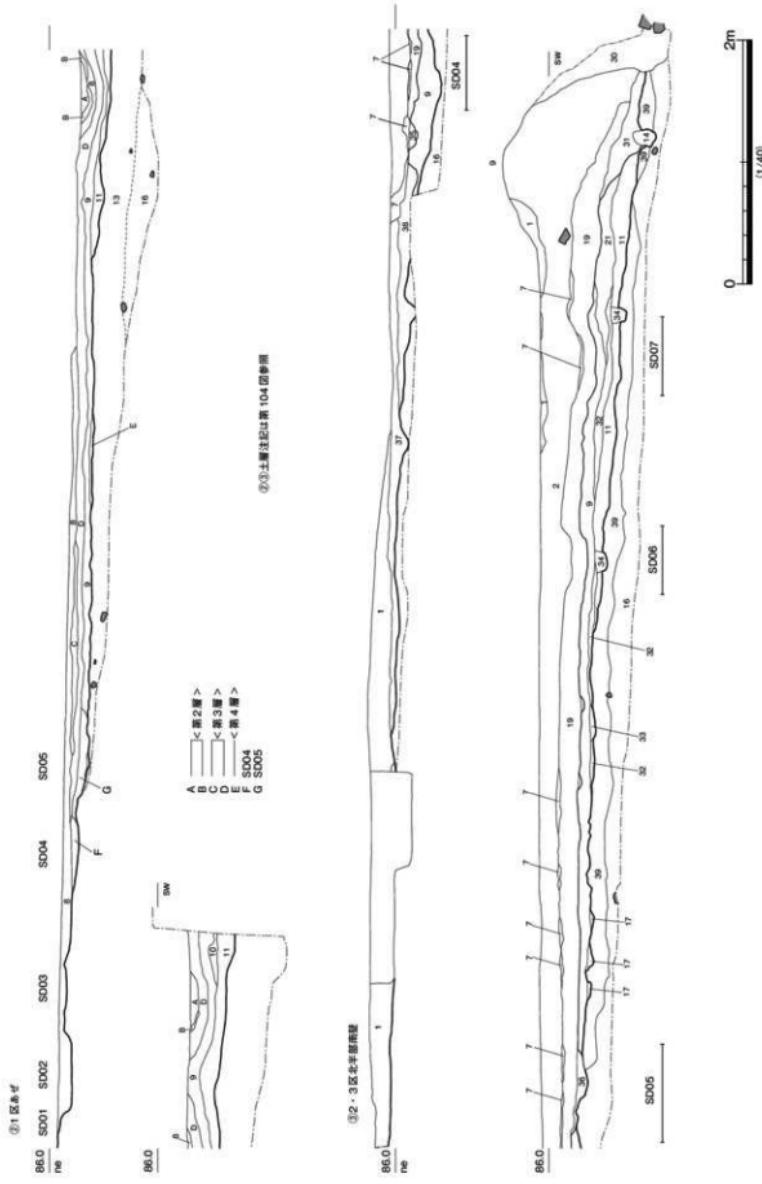


第103図 1～3区連続配置図 2 (1/100)

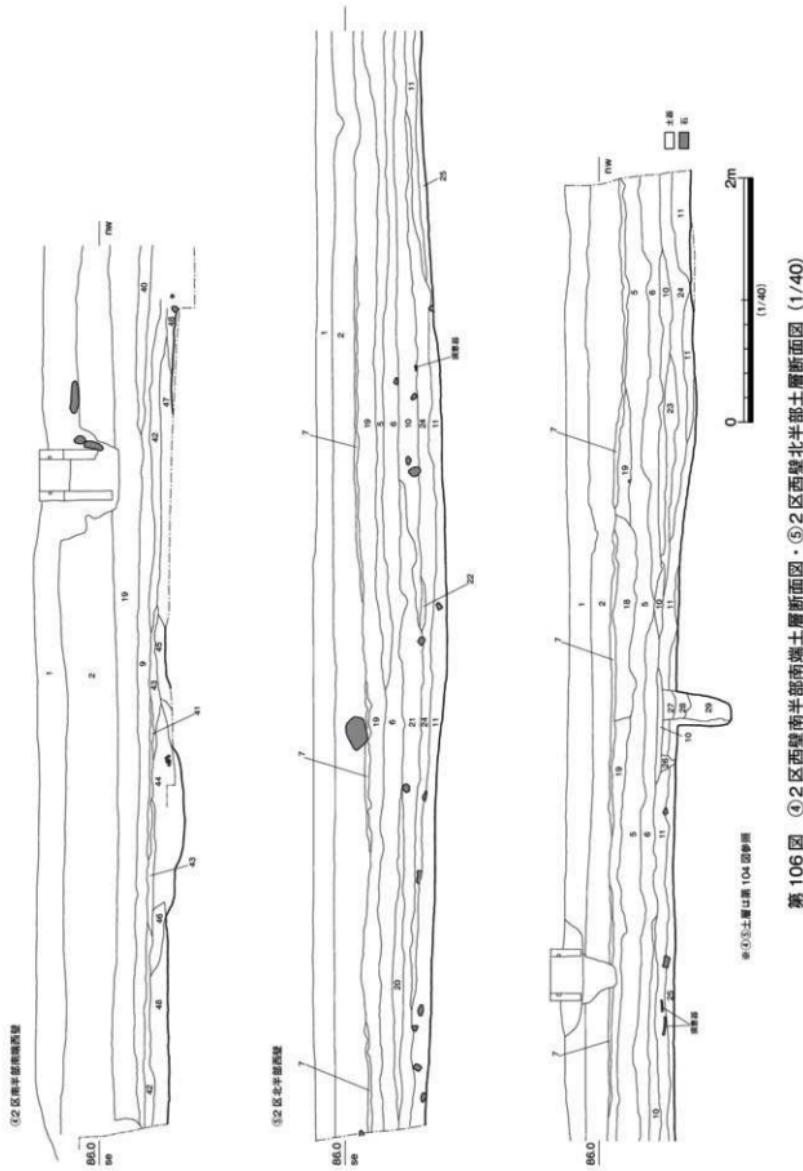




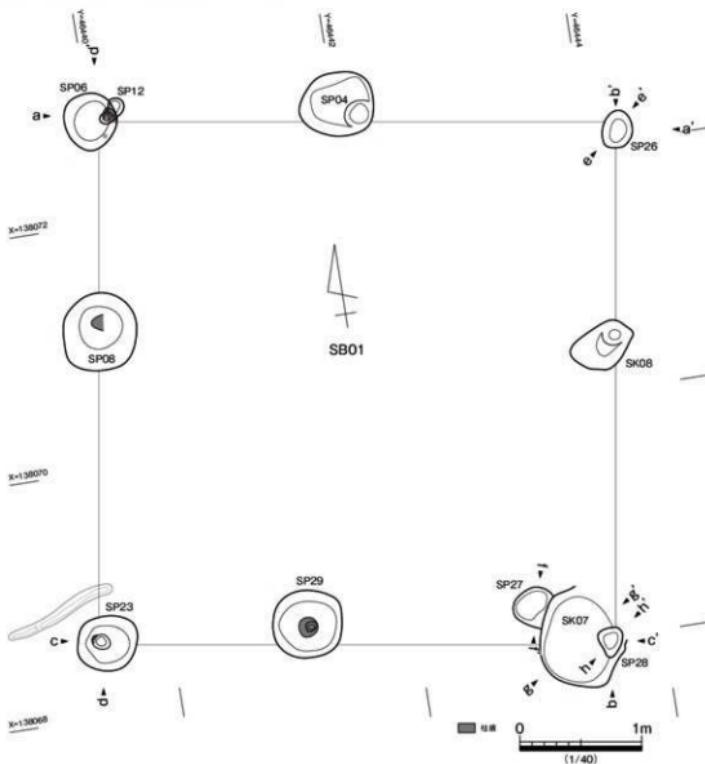
第104図 ①1区南壁土層断面図 (1/40)



第105図 ②1区あぜ土層断面図・③2・3区北半部南壁土層断面図(1/40)



第106図 ④2区西壁南半部端土層断面図・⑤2区西壁北半部土層断面図 (1/40)



第107図 SB01平面図(1/40)

前とする。検出遺構の時期は概ね出土遺物に拠るが、第4層を掘り込む遺構や第4層より上位層で須恵器片が多く出土することから、須恵器のみが出土した遺構については、須恵器を時期決定の根拠にはしない。

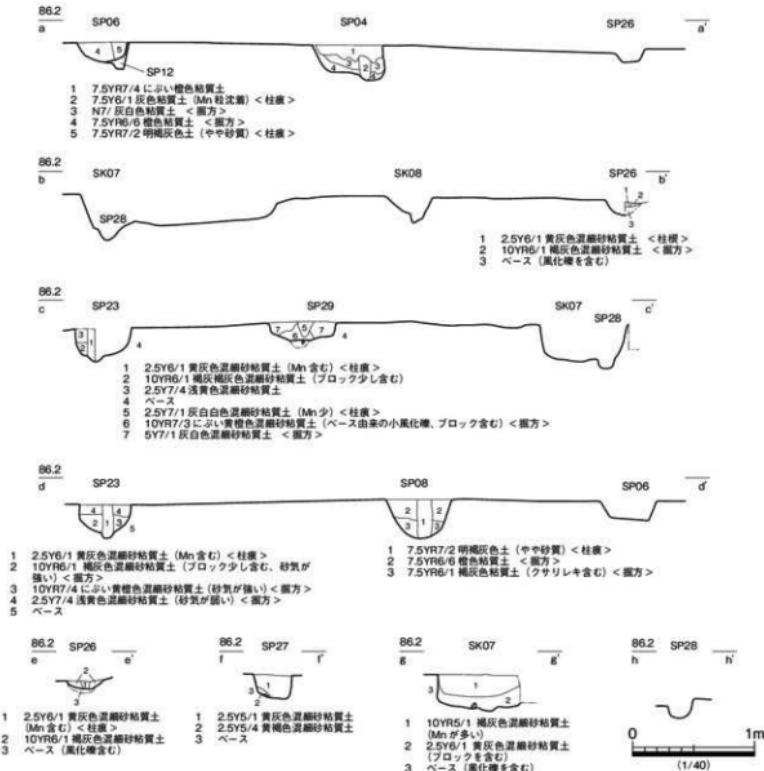
①ベース上面または第5層より検出した遺構・遺物（中世以前）

掘立柱建物

1区 SB01（第107・108図）

1区田1面上の中央付近で検出した。周辺の地割と異なるが、周囲の柱穴の検出状況から掘立柱建物とした。2間×2間の掘立柱建物で、南北4.23～4.37m、東西4.23～4.33m、主軸方位はN8.01°Eで、面積は18.20m²である。柱穴の埋土中からは、須恵器小片、土師質土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は不明であるが、現在の地割と異なることから、SD01～06より古い時期である可能性もあるとを考えられるが、詳細は不明である。



第108図 SB01断面図 (1/40)

土坑

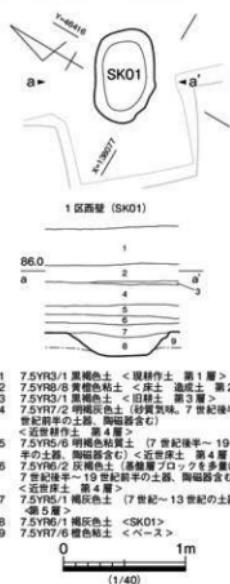
1区 SK01 (第109図)

1区北西端、田2面上で検出した。第5層の下面で検出した。遺構面はベース面である。梢円形で、長軸0.77m、短軸0.49m、深さ26cm、主軸方位はN32.75°Wである。埋土は褐灰色土を呈し、第5層に似るが、色調がやや薄い。埋土中からは出土遺物はなかった。

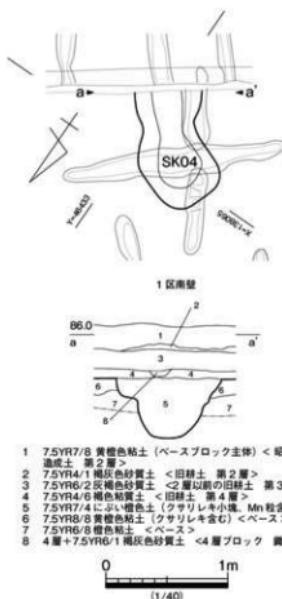
遺構の時期は第5層の下部で検出したことから、13世紀代以前である。

1区 SK03 (第110図)

1区南西端で検出した。田2面上で検出した。不整円形を呈し、西端部分は調査区外へ延びる。軸長は0.75m程度、深さ10cm、主軸方位はN16.72°Eである。埋土は、SK01と同じ褐灰色土を呈する。遺構の標高と周囲のベース上面の標高点の比較から、ベース面で検出したと考えられる。埋土中からは出



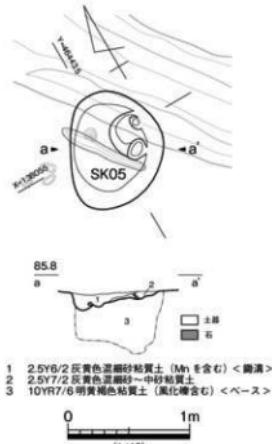
第109図 SK01 平・断面図 (1/40)



第111図 SK04 平・断面図 (1/40)



第110図 SK03 平・断面図 (1/40)



第112図 SK05 平・断面図 (1/40)

土遺物はなかった。

第5層下面、ベース上面で検出したことやSK01との埋土の類似性から、遺構の時期は、SK01と同じ13世紀代以前と考えられる。

1区 SK04（第111図）

1区南端部中央付近で検出した。田2面上で検出した。1区南壁断面図により、第4層の下部で検出したことがわかるが、第5層の堆積がないため、第5層との前後関係は明らかではない。遺構の重複関係により鋤溝より古い。1区南端部分まで検出しているが、2区では検出されていない。長楕円形で、中央やや南寄りでくびれがある。長軸0.95m以上、短軸は広い部分が0.64m、狭い部分が0.41m、深さはくびれた部分付近で10.0cm程度、北側の広い部分で20.3cm程度、南側の広い部分で22.6cm程度である。主軸方位はN40.74°W、埋土はにぶい橙色土（クサリレキ小塊、Mn粒含む）である。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、第4層の下面で検出したことから、近世以前と考えられる。

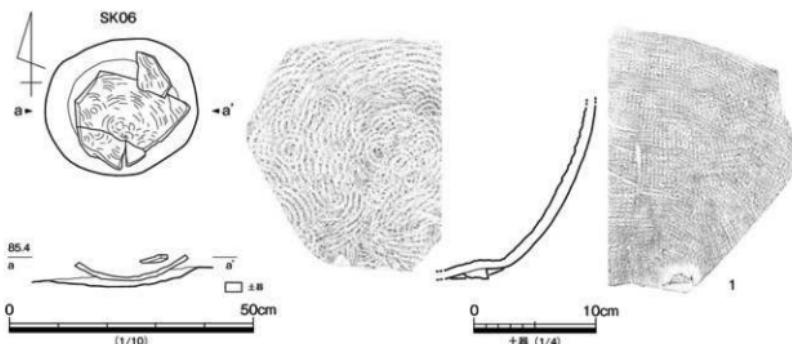
2区 SK05（第112図）

2区中央付近東寄りで検出した。田2面上で検出した。不整円形を呈し、東半部はSD05により壊される。この部分では第5層の堆積は認められない。SD05との前後関係や、SK05上面の標高点と近接する1区南壁断面のレベルの比較から、SK05はベース面が掘り込み面である可能性が高い。長軸0.95m、短軸0.75m、深さは6～13cm程度を測る。中央付近は鋤溝により掘り込まれる。埋土中からは出土遺物はなかった。

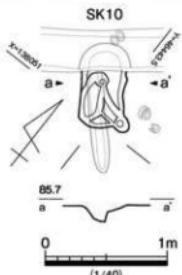
遺構の時期は、第4層である近世以降の包含層の下部から掘り込まれると考えられることから、近世以前と考えられる。

2区 SK06（第113図）

2区北西隅付近で検出した。田2面上で検出した。掘り込み面は不明であるが、検出面のレベルから第5層中と考えられる。断面ポイントの座標の詳細は不明である。おおむね円形で、直径0.30m、深さ



第113図 SK06 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第114図 SK10平・断面図
(1/40)

5cm程度を測る。埋土中からは須恵器壺体部片が、内面を上にして出土した。第5層中の遺物により形成された浅い落ち込みと考えられる。

1は須恵器壺体部。傾きは不詳で実測図の傾きは任意である。内面には青海波文、外面はタタキ後カキ目を施す。7世紀後半～8世紀頃。歪みが著しく、外面には別個体の小破片が溶着する。焼成失敗品と考えられる。

遺構の時期は、第5層に時期である13世紀以前と考えられる。

2区 SK10（第114図）

2区中央付近で検出した。田2面上で検出した。③2・3区北半部南壁断面から、第4層より下面で検出した遺構と考えられる。楕円形を呈し、南半部は細い溝状にやや深い部分がある。遺構の切り合い関係より鉤溝より古いと考えられる。長軸0.69m、短軸0.36m、深さは3～5cm程度、やや深い部分で1cm程度低い。主軸方位はN36.67°Wである。出土遺物は、須恵器壺体部片が出土しただけであった。底部の形状から、木の根痕か耕作に伴う落ち込みの可能性が考えられる。

遺構の時期は、第4層下面で検出したことから近世以前と考えられる。

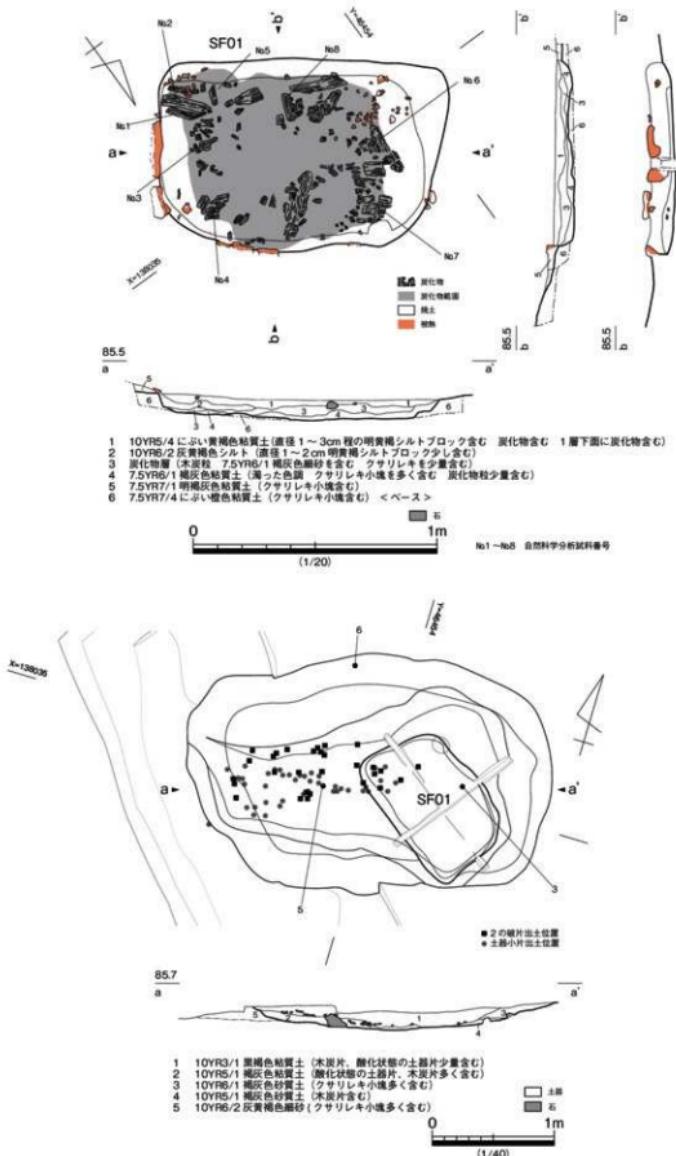
焼成遺構

2区 SF01・SX01（第115・116図）

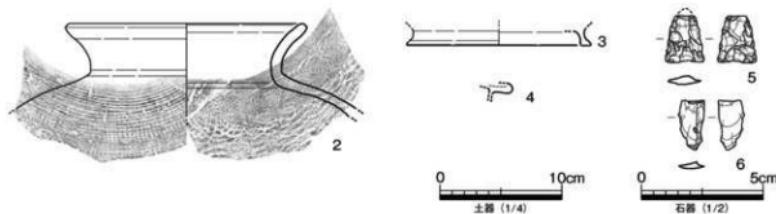
2区南西隅で検出した。SF01の上面の楕円形の落ち込み（調査時の名称はSF01 埋土周辺 以下 SX01）を掘り下げ後に、軸が異なる隅丸長方形のSF01を検出した。SX01の掘り込み面は第5層上面、SF01の掘り込み面はSX01の下面である。第5層との前後関係は明らかではない。

SX01は、2区西壁土層から13世紀代の第5層を掘り込むことがわかる。2段に掘り込まれているよううで、上部の形状は楕円形を呈し、長軸2.95m、短軸1.89m、深さ20cmを掘り込む。埋土は褐色砂質土、灰黄色粘質土（クサリレキ小塊を多く含む）である。下部の落ち込みは、楕円形の落ち込みに沿うように不整形を呈し、東側が楕円形で西側は溝状に細くなる形状である。長軸2.34m、短軸は東側が1.62m、西側が0.85m、深さ20cmを測る。埋土は大半が黒褐色粘質土で、西側の層の下層、1層と2層の境付近に、炭化物や土師質焼成状態の須恵器壺が堆積する。これらの土器片は、SX01の長軸方向のセンターライン付近で筋状に集中して出土した。SX01は、掘り込み面が第5層上面であることから、13世紀以降と考えられる。

SX01埋土を除去した後SF01を検出した。形状は隅丸方形で、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ9cmを測る。主軸方向はSX01とは異なる。断面形状は浅い箱型で、遺構の東南辺と東北辺の南半付近の肩に被熱痕が残る。埋土を5cm程度掘り下げると、厚さ5～10cm程度の炭化物層が検出された。SF01と第5層の関係については、明らかではないが、SX01の埋土から炭化物や木炭が多く出土しており、SX01はSF01と関連する可能性が高い。SF01から出土した木炭について、年代測定及び樹種同定を行った。その結果、樹種は8点中7点がツツジ科スノキ属シャシャンボ、1点がアナ科クリ属クリ、年代は14世紀中頃を示した（第7章参照）。この年代はSX01の13世紀以降の年代と齟齬はなく、両者は関連す



第 115 図 SF01 平・断面図 (1/20)・SX01 平・断面図 (1/40)



第116図 SX01 出土遺物 (1/4・1/2)

る遺構であることが想定できる。SF01の被熱痕は、SX01下部の落ち込みの東奥付近とも考えられる。SF01埋土中からは出土遺物ではなく、焼成遺構であること以外の性格は不明である。

2~6はSX01から出土した。2は須恵器壺。SX01の長軸のセンターラインに沿う位置で小破片となつて散乱していた。おもに内面は土師器の色調で、焼成不良である。3は土師器皿高台部。小片。4は師質土器小片。器種不明。5は石鎌。平基式。サヌカイト製。6はサヌカイト剥片。

遺構の時期は、SX01とSF01が関連する遺構と考え、第5層を掘り込むこと、及び¹⁴C年代測定の結果から、14世紀中頃と考えられる。

②第4層より上面で検出した遺構・遺物（近世以降）、時期不明の遺構・遺物

土坑

1区 SK02（第117図）

1区中央付近やや南寄りで検出した。田1面上で検出した。椭円形を呈し、長軸1.92m、短軸1.04m、深さ7cmを測る。主軸方位は周囲の地割とはほぼ同じでN57.77°Eである。埋土中からは、陶磁器片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降である。

溝

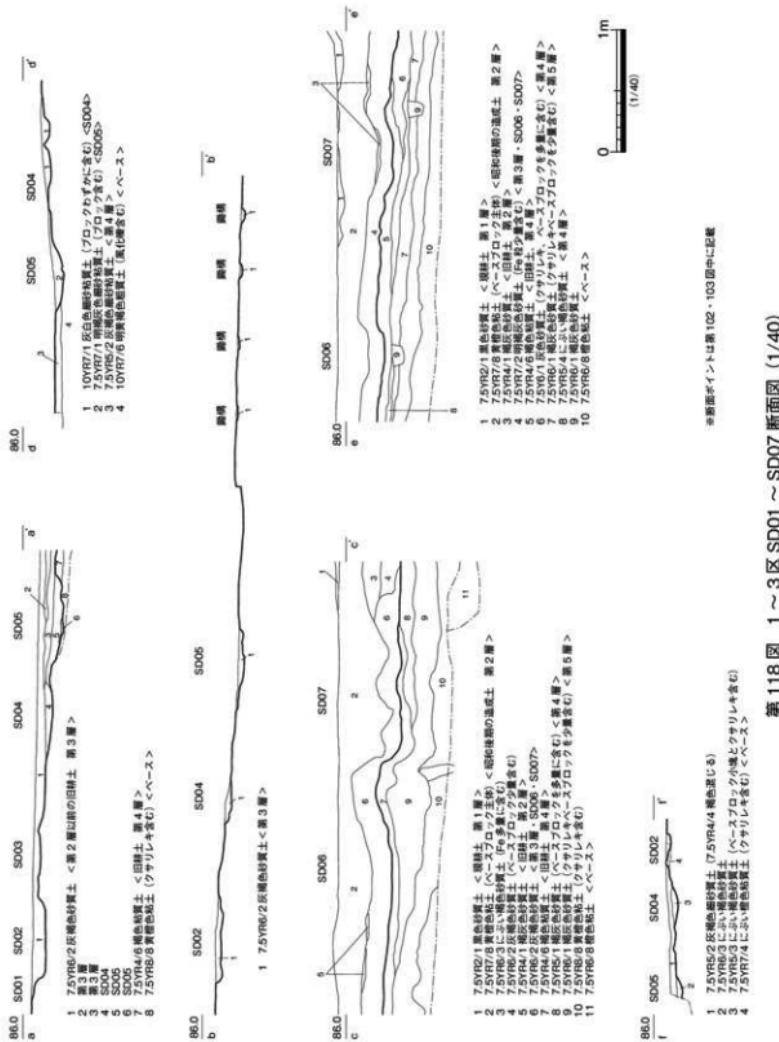
1区～3区では、方位を同じくする溝を7条検出した。SD01とSD03はSD02により大部分が消失するが、他は近接するものの切り合い関係を持たない。埋土はおむね第3層と同一で、第3層の堆積時に埋没したと考えられる。いずれもほぼ同時期の溝と考えられる。

1～3区 SD01～SD05（第102・103・118・119図）

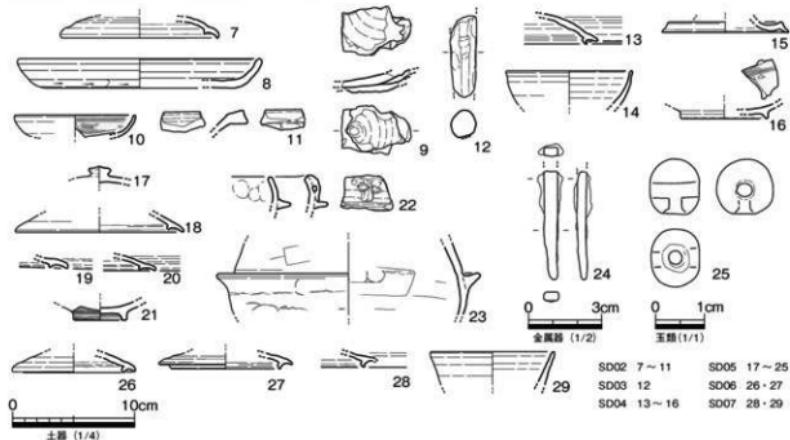
1～3区へかけて検出した南北方向の溝である。田1面と田2面の境となる溝群である。第4層を掘り込む、または第3層の窪み部分である。

SD01はこれらの溝群の中で最も東側で検出した。1区北半部で僅かに検出した。SD02との切り合い関係は断面観察では明らかでは

第117図 SK02 平・断面図
(1/40)



第118図 1～3区 SD01～SD07断面図 (1/40)



第119図 SD02～SD07出土遺物 (1/4・1/2・1/1)

ないが、上面検出での切り合ひ関係から南でSD02により消失することがわかる。検出長4.3m、幅0.2m程度、深さ2.5～3.0cm、主軸方位はN37.2°Wである。埋土中から出土遺物はなかった。

SD02はSD01の西側に接して検出した。北側4.3mまでは東側にSD01、西側ではSD03が接し、これを掘り込む。中央やや南寄りで約6.37m分途切れる。検出長は、途切れた部分を除き約48m、幅0.48～0.93m、深さは概ね西側で2～6cm、東側で4～20cmで南から北へ傾斜する。主軸方位はN38.09°Wであるが、中央付近はやや西へ膨らむ。埋土はおおむね第3層と同一で、第3層の堆積時に埋没する。埋土中からは須恵器、陶器碗、磁器碗・皿、土師質土器羽釜・焰烙等が出土した。

7～11はSD02出土遺物。7～9は須恵器。7は蓋。内側にわずかに返りが付く。7世紀後半(佐藤I-2期)。8は皿。8世紀中頃(佐藤II-2期)。やや厚手で底部外面はハラ削りを施す。9は蓋片2点と杯片1点が重なって溶着した破片。窯跡の焼成失敗品と考えられる。須恵器は下部の第4層以下からの混入品と考えられる。10は磁器皿。内面に染付を描く。11は土師質土器焰烙。外型作りで外面には調整痕を残さない。19世紀末以降。

遺構の時期は、11から19世紀末以降と考えられる。

SD03はSD02の西側に接して検出した。1区北端から検出し、北側15.18mでSD02により消失する。検出長15.71m、幅0.45～0.82m、深さは概ね西側が3～8cm、東側が4～12cmで南から北へ傾斜する。主軸方位はN37.82°Wである。埋土はSD02と同様第3層と同一層である。埋土中からは須恵器、磁器皿、土師質土器足釜などが出土した。

12は土師質土器足釜脚部。13世紀代以降。

SD04はSD02の西0.1～1.56mで検出した。SD03とはほぼ平行し、いったん途切れた後、中央付近から南ではSD02と概ね平行する。検出長622m、幅は0.44～0.97m、深さは西側が1～7cm、東側が3～10cmで南から北へ傾斜し、主軸方位はN40.41°Wである。中央付近でやや東へ膨らむが、概ね直線である。埋土中からは須恵器、磁器碗、陶器、サヌカイト片が出土した。

13～16はSD04出土遺物。13～15は須恵器。13は蓋。歪みがある。口縁部内面の返りはわずかに口縁端部より出る。14は杯。15は高杯脚部。16は磁器皿。須恵器は7世紀中頃～後半頃（佐藤I-1～2）と考えられる。下部の包含層からの混入と考えられる。

遺構の時期は、16より近世以降である。

SD05はSD04の西側0.2～0.3mで検出した。SD04とほぼ平行する。ほぼ直線状を呈する。SD01～05の中では最も規模が大きい。検出長62.27m、幅0.61～1.16m、深さは概ね西側が1.5～6cm、東側が7.5～15.5cm、主軸方位はN40.07°Wである。埋土は、第4層を切り込む場合と、第3層の窪みに堆積する場合があるが、いずれにしても第4層上面で検出した。埋土中からは須恵器、瀬戸美濃産陶器腰錫椀・陶胎染付椀・刷毛目唐津椀、瓦質土器羽釜、水晶玉、釘、サヌカイト製石鑑などが出土した。

17～25はSD05から出土した。17～20は須恵器蓋。17は摘み。焼成不良品で、内面は土師器の色調を呈する。18～20は口縁端部内面に退化した返りが付く。19～20は破片が小さく、傾きはやや不確か。須恵器は7世紀後半（佐藤I-2）と考えられる。21は陶器椀。瀬戸美濃産で腰錫椀。18世紀後半～19世紀初頭。22・23は土師質土器羽釜。22は外耳がつく。24は鉄釘。角釘。25は玉。水晶。孔が3方向に認められる。数珠の先端部分と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物により19世紀以降と考えられる。

これらの遺構は、切り合い関係から多少の時期差はあるものの、出土遺物から、概ね第3層の時期と同様、19世紀後半と考えられる。7世紀後半～8世紀中頃の須恵器が多く出土するのは包含層からの出土傾向と同じである。SD03から出土した中世の遺物は、遺構の時期を示すものではないが、1～3区ではわずかに中世の遺物の出土が認められ、近辺で中世の小規模な開発が行われた痕跡と考えられる。

2区 SD06・SD07（第102・103・118・119図）

2区田2面上で検出した溝である。おおむねSD05と平行する。

SD06は2区北端から南で検出した。SD05の西側4.27mで検出した。北から7.64mでいったん途切れ、4.86m南から再び出現する。検出長は途切れた部分を除き、14.26m、幅0.69～1.02m、深さ4.5～6.5cm程度、埋土は第3層と同一層である。埋土中からは須恵器片が出土した。

26・27は須恵器蓋。口縁端部内面の返りが認められる。7世紀中頃～後半（佐藤I-1～2）。包含層からの混入遺物。

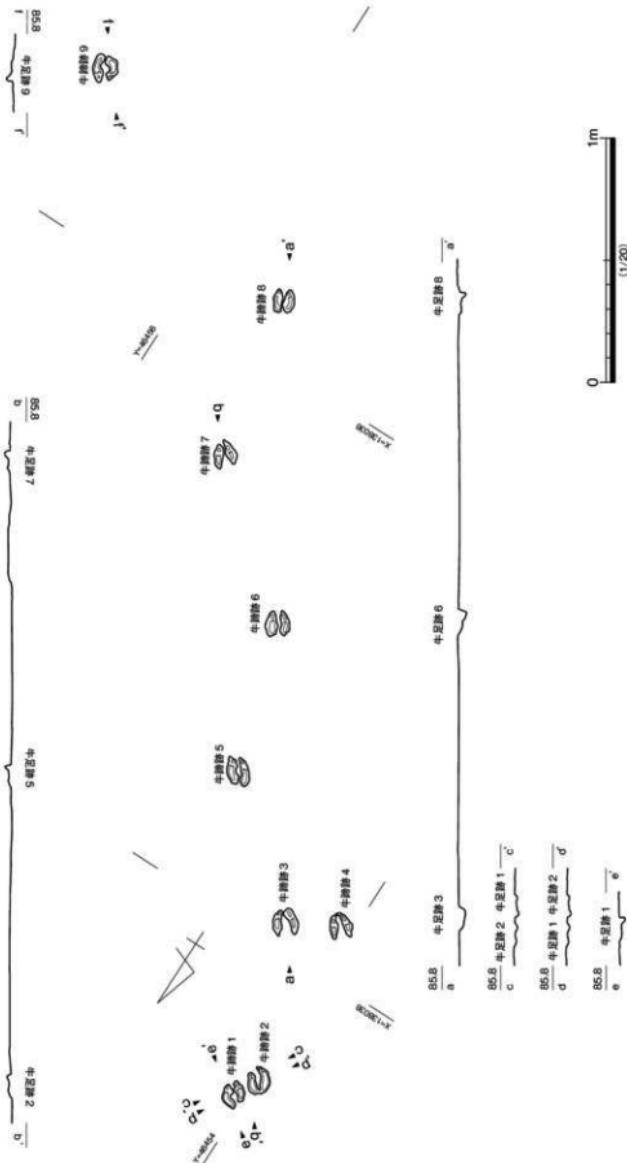
SD07は2区北端から南側で検出した。SD06と平行し、これの約0.9m西側に位置する。検出長18.96m、幅0.34～1.06m、深さは概ね西側で5～8cm、東側で10cm程度である。主軸方位はN40.88°Wである。埋土は第3層と同一層である。埋土中からは須恵器、陶器が出土した。

28・29は須恵器。28は蓋小片。29は杯。7世紀中頃（佐藤I-1）。いずれも混入遺物。

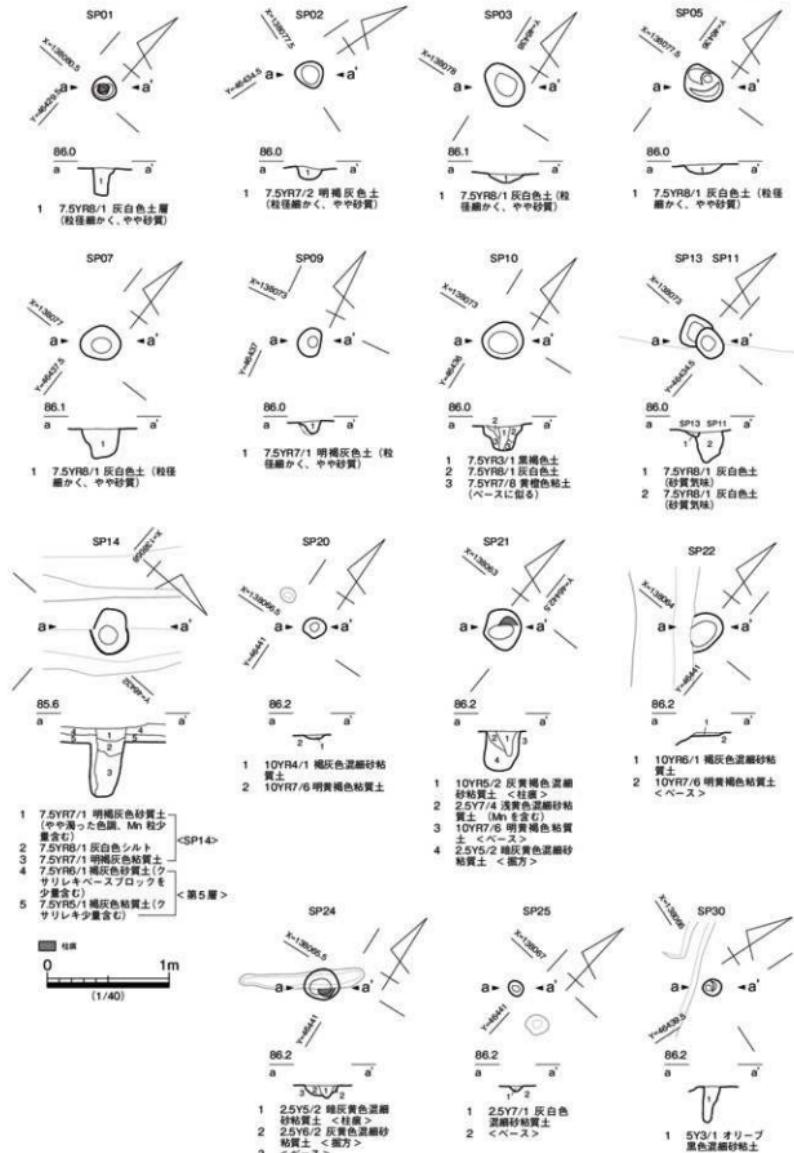
これらの遺構の時期は、遺構の掘り込み面が同一であることから、SD01～SD05と同じく、概ね第3層の時期、18世紀以降頃と考えられる。7世紀中頃～後半を中心とする須恵器が出土する傾向は1～3区に共通する。

鋤溝、牛跡跡（第120図）

鋤溝は、調査区の①・③土層断面図（第104・105図）によれば、4層上面とベース面から掘り込まれる。全部で343条を検出した。大半はSD01～SD05の間で検出された。大半がSD01～SD07と同一面で



第120図 牛跡検出状況 (1/20)



第121図 柱穴平・断面図1 (1/40)

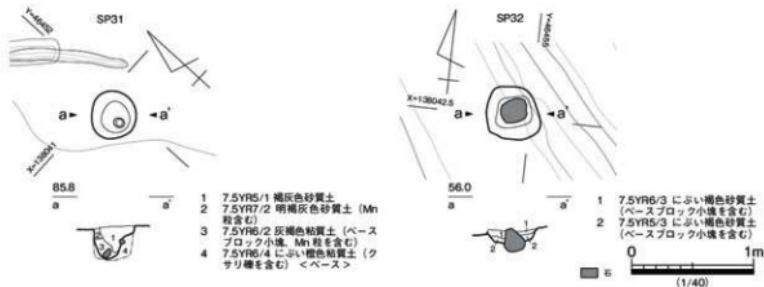
ある4層上面で検出されており、同じ時期に機能したと考えられる。概ねSD01～SD05と同じ方向であるが、2・3区中央付近及び3区南半部中央付近でそれらと直交する鶴溝群が僅かにある。概ね幅14～20cm、深さ2～5cmである。

牛蹄跡は鶴溝付近で検出した。検出面は鶴溝と同じと考えられ、牛耕による耕作に伴うものと考えられる。

鶴溝の埋土中からは須恵器小片のほか、瀬戸美濃産腰錆楕小片が出土した。出土遺物の傾向はSD02～SD07と同様である。遺構の掘り込み面もSD01～SD07と同じであることから、遺構の時期は19世紀後半頃以降、溝群と同時期と考えられる。

③柱穴（第121・122図）

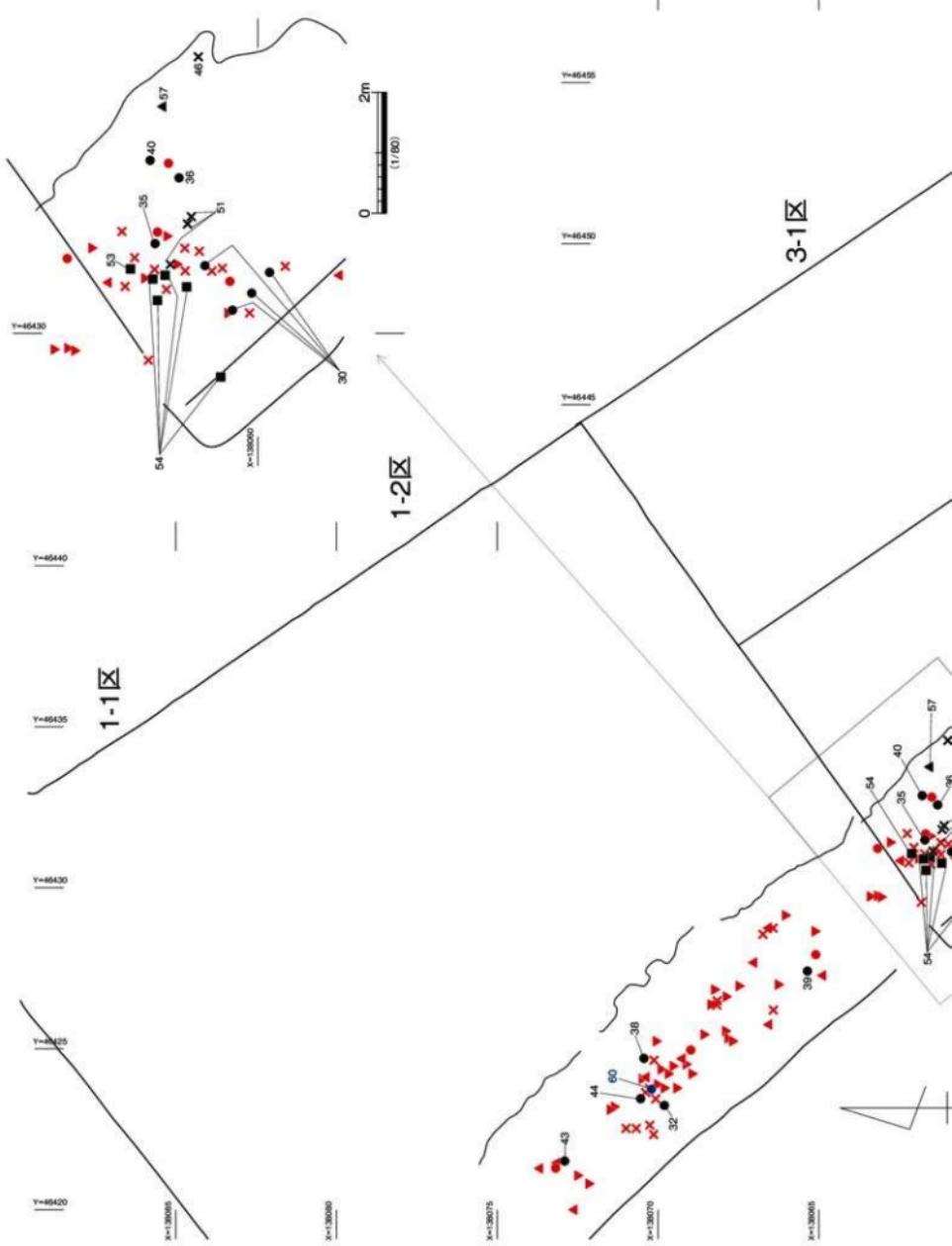
1～3区では柱穴を33穴検出した。田1面では掘立柱建物を1棟復元した。これと柱穴の並びが類似するものもあったが、梁間または桁行の柱間が広すぎることから掘立柱建物とはしなかった（SP02・05・07・09・10・11・13）。

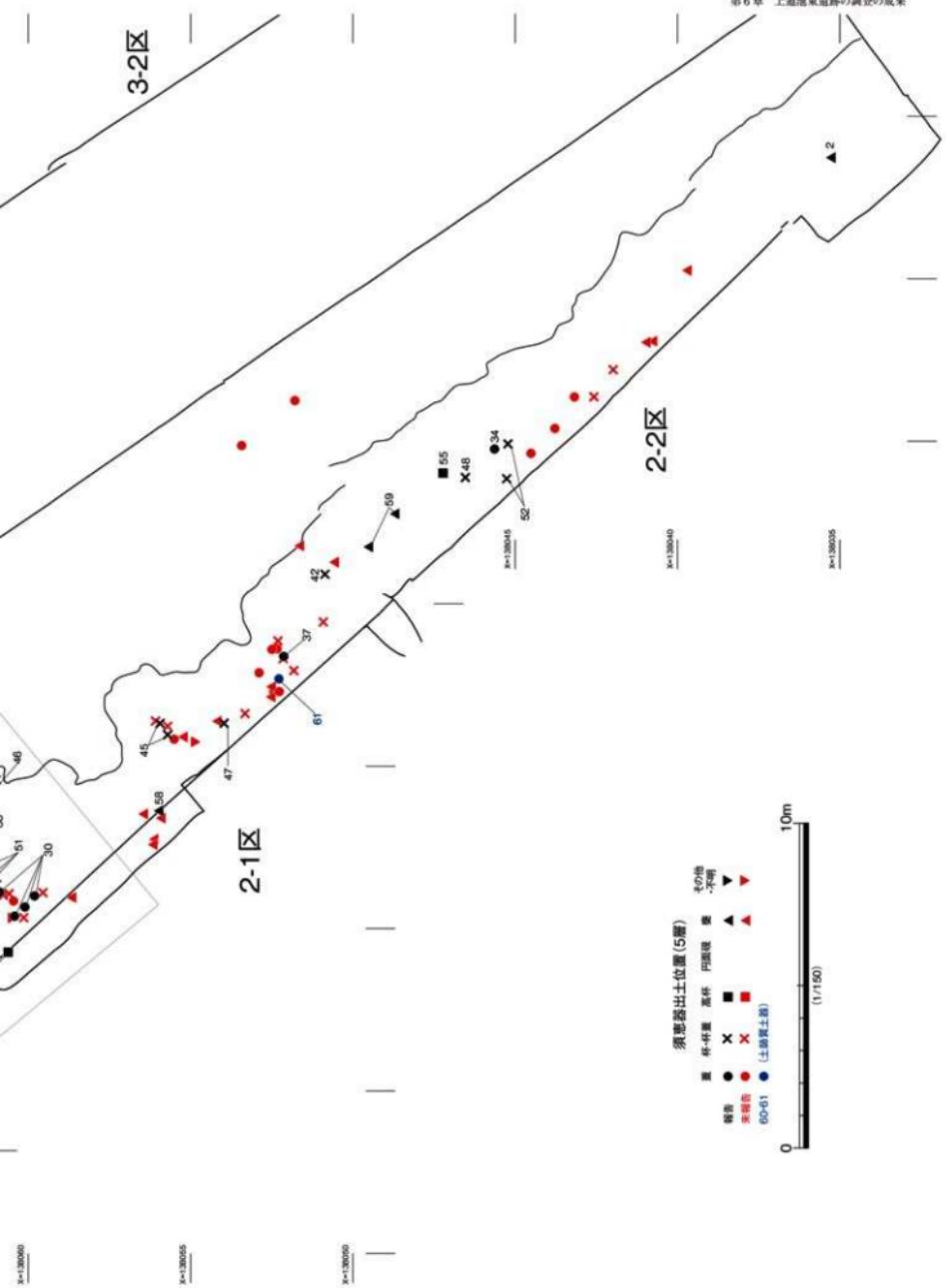


第122図 柱穴平・断面図2(1/40)

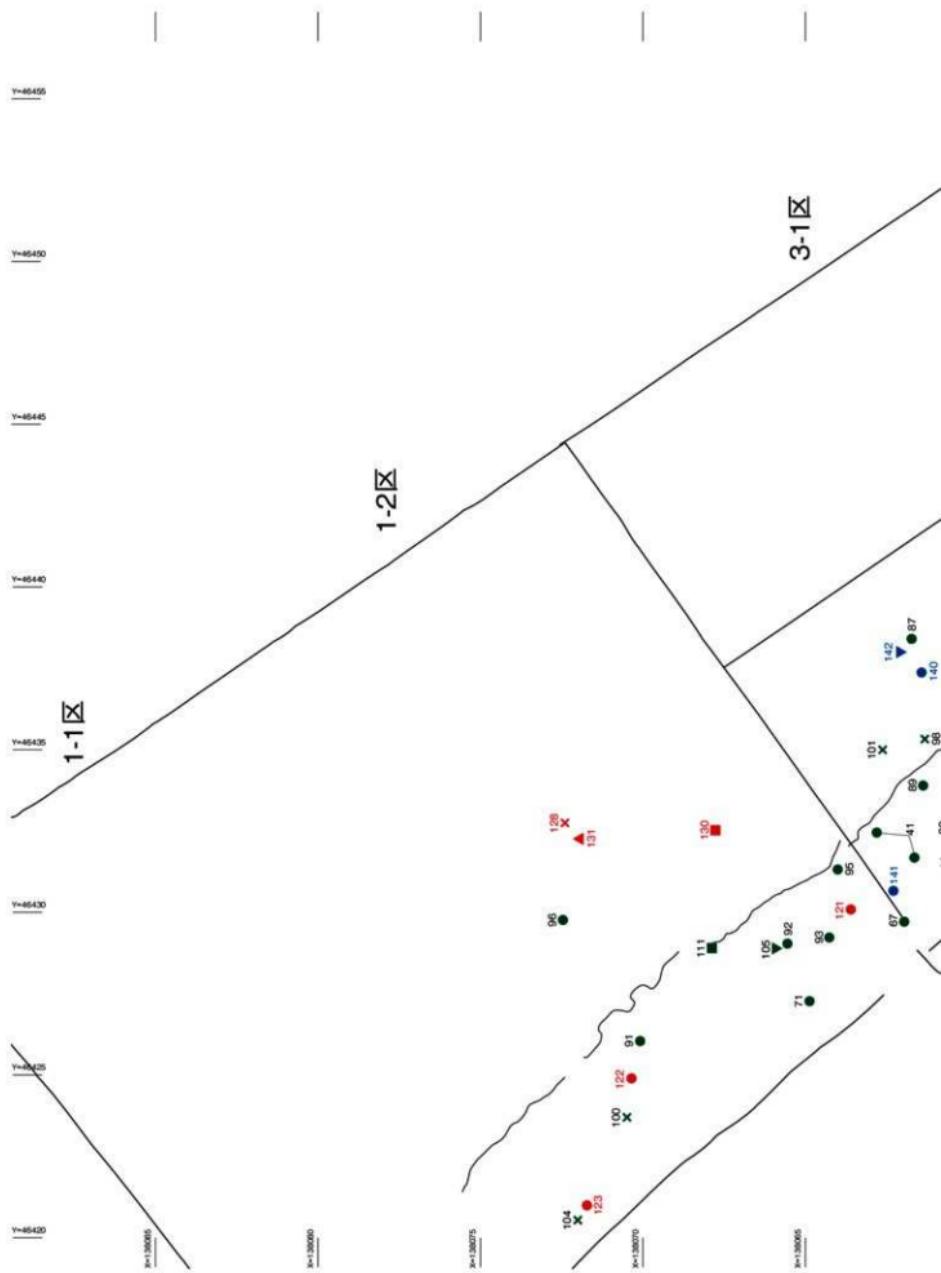
第11表 1～3区柱穴一覧

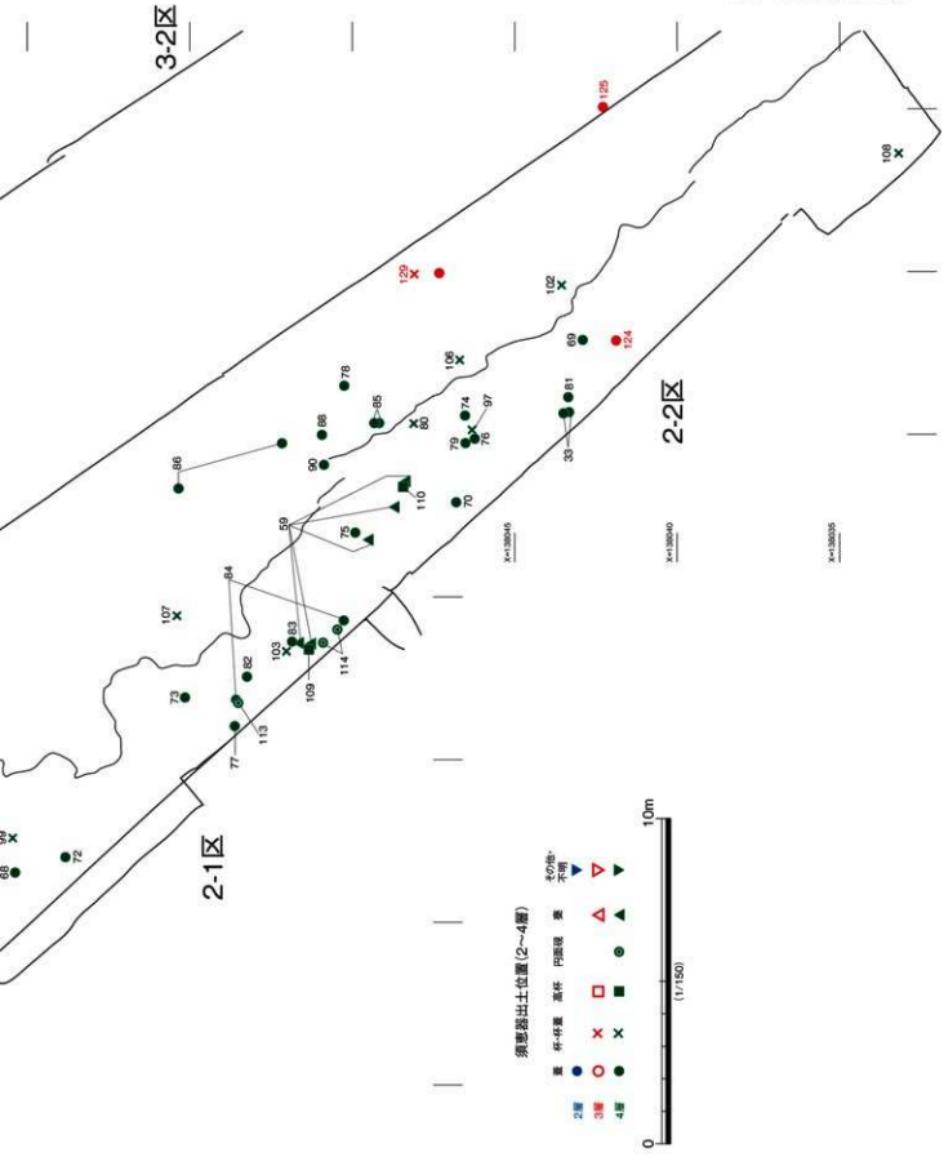
番号	形状	検出場所	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	その他
SP01	円形	田1面	17	—	23	なし	不明	
SP02	円形	田1面	22	—	12	陶器片	近世以降	方形に並ぶ柱穴
SP03	椭円形	田1面	37.0	26.7	7	なし	不明	
SP05	不整形円形	田1面	35	28	7	焼瓦	近世以降	方形に並ぶ柱穴
SP07	椭円形	田1面	32	27	24	焼瓦	近世以降	方形に並ぶ柱穴
SP09	椭円形	田1面	23	19	10	須恵器発	不明	方形に並ぶ柱穴
SP10	円形	田1面	32	—	20	なし	不明	方形に並ぶ柱穴
SP11	椭円形	田1面	23	20	25	なし	不明	方形に並ぶ柱穴
SP13	不整形円形	田1面	22	—	18	なし	不明	SP11に切られる
SP14	椭円形	田2面	36.0	27.8	10	なし	13世紀代以降	5層上面から掘り込み
SP20	円形	田1面	17	—	3	なし	不明	
SP21	円形	田1面	27	—	32	なし	不明	
SP22	椭円形	田1面	28	25	2	なし	不明	西は落ち込みにより消失
SP24	円形	田1面	28	—	10	なし	不明	鶴溝より古い
SP25	円形	田1面	11	—	4	なし	不明	
SP30	円形	田1面	14	—	28	なし	不明	
SP31	円形	田2面	34	—	26	なし	中世以前か	検出はベース面の可能性が高い 隅丸方形に近い 礎石？ SD05より古い
SP32	円形	田2面	31	—	9	なし	中世以前か	





第123図 1~3区第5層須恵器・土師質土器出土位置図(1/150)





第124図 1～3区第2・第3・第4層須恵器出土位置図 (1/150)

柱穴については、断面図を作成しているものを一覧表とともに掲載した。掘立柱建物を構成しない柱穴については、出土遺物が乏しく時期は明らかでない。中世以前の柱穴がある可能性もあるが、時期ごとの記述は難しいので、一括して一覧表で記載する。

④包含層出土遺物

調査区西半部の包含層削削中には多くの須恵器片が出土した。特に第4・5層中から多く出土した。出土した須恵器は、平面的な位置と層位を記録を取り上げた。周辺で須恵器窯跡は確認されていないが、出土遺物の中には数個体が溶着したものや土師器の色調を呈するなど焼成失敗品が含まれており、生産地に由来するものと考えられよう。

出土した須恵器は、小破片が多く、摩耗するものも多くみられた。また、破片は小さく、歪みがあるものが多いので、口径、傾きに正確さが欠ける可能性があるが、図化できるものはできるだけ掲載するようにした。

掲載できなかった破片も含めて、第123・124図に分布図を示した。

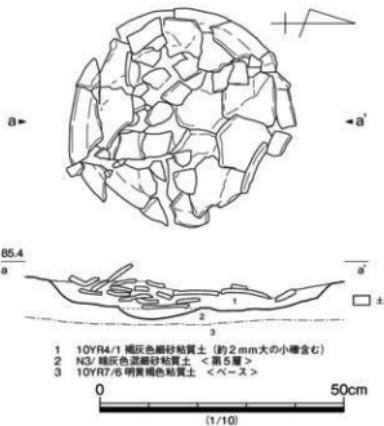
第5層出土遺物（第123・125・126図）

30～66は第5層から出土した。30～59は須恵器。30～44は蓋。37以外は口縁端部に退化した返りが付く。返り部分で接続する。小片が多く、口径はやや正確さを欠く恐れがあるが、30・31の口径が8cm前後である以外は、口径は9～10cmである。摘みは宝珠型のもの（31・38・41）と扁平のもの（39・40）がある。31は歪みが著しい。42は肩部外面に沈線が1条認められる。45～51は杯。45～48は口径10cm程度、50・51は口径16cm程度である。45・48・51は歪みがあり、49は焼成不良である。52は高台付杯。53～56は高杯脚部。55は端部に歪みがある。57～59は甕。59は肩部に円形浮文が付く。須恵器の時期は、49は9世紀後半頃（佐藤III-1期）、50は8世紀前半～中頃（佐藤II-1～2）まで下ると考えられるが、他は7世紀中頃～後半（佐藤I-1～2）頃と考えられる。60・61は土師質土器。60は小皿。61は鍋。外面下半は格子タキ、上半はハケ目を施すが、成型時の指押さえ痕を残す。61の出土状況を第125図に掲載したが、座標の記録がないので出土位置については第123図を参照されたい。62～66は石鎚。いずれもサヌカイト製。下部が欠損する65以外はいずれも凹基式。

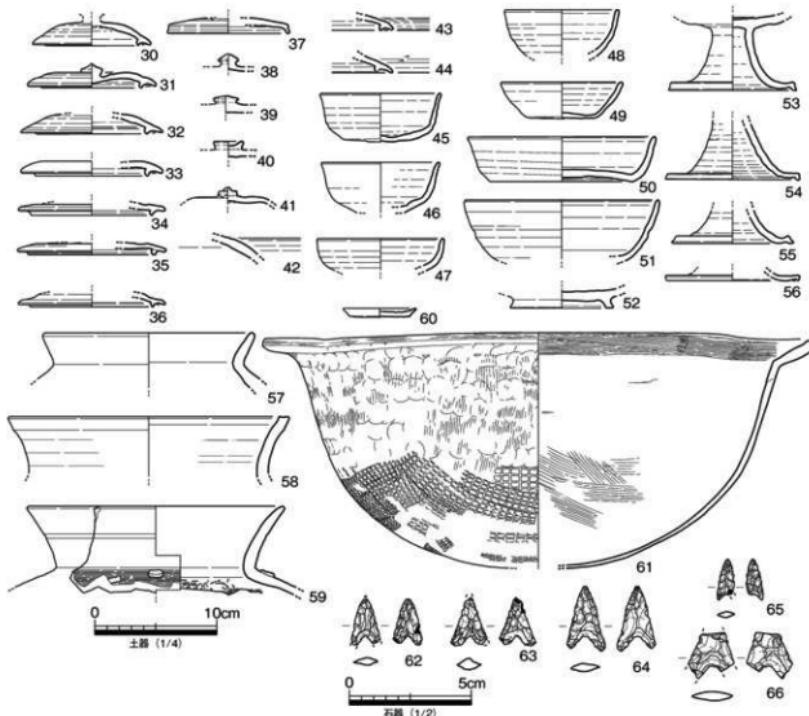
第5層の時期は、60・61である13世紀後半～14世紀前半頃と考えられる。出土する須恵器は、49・50を除けば概ね7世紀中頃～後半頃であった。

第4層出土遺物（第124・127図）

67～119は第4層から出土した。67～114は須恵器。67～96は蓋。口縁端部の残る個体では、87

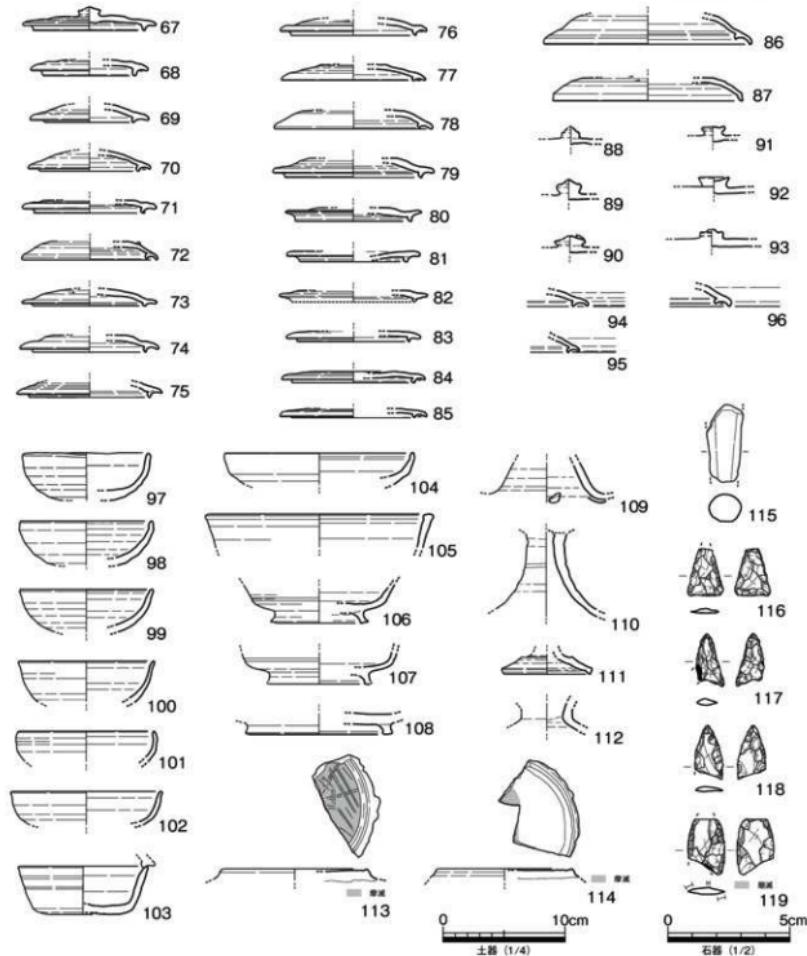


第125図 包含層第5層 土師質土器鍋（61）
出土状況（1/10）



第126図 1～3区第5層出土遺物 (1/4・1/2)

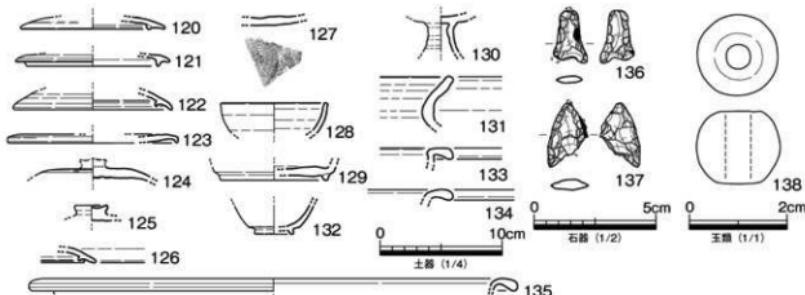
以外は内面に返りを持つ。返り部分が接地するものと口縁端部が接地し、返りは形骸化するものがある。器形は、笠型を呈するものと扁平のものがある。破片が小さく、歪みのある個体も目立つため口径はやや正確さを欠く恐れがあるが、返りが接地するもの（67～71・73～76・79～85）の口径は、返り部分で7.4～8cmのもの（68・70）以外は概ね9～10cm、返りが退化し、外側が接地するもの（72・77・78）は、口径が、概ね外側で11～13cmである。86・87はやや大きい。88～93は摘み。宝珠型（88～90・93）のものと扁平のもの（91・92）がある。69・72・73・79～82・84・85は歪みがある。72・90は外面に粘土小塊が溶着する。97～104は杯。104以外は概ね口径10～11cmを測る。97は歪みが著しい。103は口縁端部に返りの付く蓋口縁部が溶着する。105は鉢か。106～108は高台付杯。109は高杯脚部とした。内面には粘土小塊が溶着する。110は高杯脚部。焼成不良。中央部付近に沈線を巡らせる。111は高杯脚部か。歪みが認められる。112は壺頸部。内外面に自然釉が掛かる。113・114は円面硯か。同一個体の可能性はあるが、直接接合はできなかった。上面はやや摩耗するが、顕著ではない。周縁はやや高い。下面是全面が剥離しており、凹凸を顕著に残す。須恵器の時期は、概ね7世紀中頃～8世紀前半（佐藤I-1～II-1期）頃と考えられる。115は土師質土器足釜脚部。116～119は石鎚。いずれ



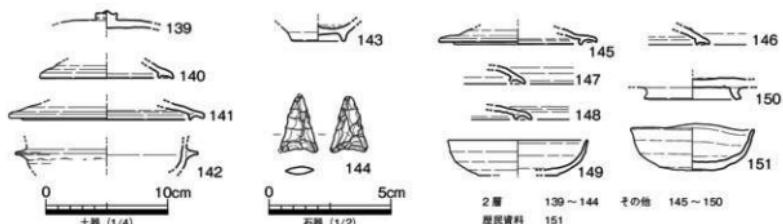
第127図 1~3区第4層出土遺物 (1/4 · 1/2)

もサヌカイト製。116は平基式。117は下部が一部欠損するが凹基式と考えられる。118は下部が欠損、119は下部の一部と上部が欠損するが、残存部分から凹基式と考えられる。

第4層から出土した遺物は大半が須恵器であったが、わずかに陶器（刷毛目唐津）や土師質土器焼成の小片が出土した。これらから、包含層の時期は18世紀代頃と考えられる。出土した須恵器は、7世紀中頃～8世紀前半（佐藤I-1～II-1）頃と考えられる。出土遺物の内容は、近世の陶器が出土する



第128図 1～3区第3層出土遺物 (1/4・1/2・1/1)



第129図 1～3区第2層その他出土遺物 (1/4・1/2)

以外は第5層に類似するものであった。

第3層出土遺物（第124・128図）

120～138は第3層から出土した。120～131は須恵器。120～126は蓋。120～122・126は内面に退化した返りが付く。127は杯底部と考えられる破片。外面にヘラ書きを施す。128は杯、129は高台付杯。130は高杯。131は壺口縁部小片。須恵器の時期は、第4層と同様7世紀中頃～8世紀前半頃（佐藤I-1～II-1）と考えられる。132は陶器碗。京焼風陶器。底部外面は施釉しない。133～135は土師質土器焙烙小片。いずれも内型作りによる器形と考えられる。136・137は石鎌。いずれもサヌカイト製で、下部が欠損するが、残存部分から凹基式と考えられる。138はガラス玉。風化するが、もとは青色を呈していたようである。19世紀以降の溝であるSD05で水晶製数珠が出土したことから、これも同様の数珠と考えられよう。

第3層では須恵器の量はやや少なかった。近世陶磁器の量が増加する。18世紀代の京焼風陶器、19世紀代の土師質土器焙烙が認められる。

第2層出土遺物（第124・129図）

139～144は第2層から出土した。139～141は須恵器蓋。140・141は口縁部内面に退化した返りが認められる。142は須恵器杯身か。焼成不良である。須恵器は概ね7世紀後半（佐藤I-2期）頃と考えられる。143は磁器。壺底部。外面は施釉し、内面は施釉しない。144は石鎌。サヌカイト製。凹基式。

層位不明出土遺物・元瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵資料（歴民資料）（第129図）

145～150は出土層位が不明である遺物。いずれも須恵器。145～148は蓋。146は外面に胎土小塊が溶着する。149は杯、150は高台付杯。須恵器は概ね7世紀後半（佐藤I・2期）頃。151は瀬戸内海歴史資料館から移管された資料。須恵器杯。歪みが著しい。7世紀後半（佐藤I・2期）頃。内面に「香南町 池内字御所原上道池内ニテ採取」と書かれた紙が貼られており、遺跡に隣接する上道池内で採集されたと考えられる。

第3節 4区の調査（第101・130図）

土地は2筆分である。北側が宅地、南側は田であった。北側に1トレンチ、南側に2トレンチをそれぞれ南北方向に設定し、その後適宜幅を広げて調査を行った。

1 土層（第131図）

北側の1トレンチでは、北壁と東壁で土層図を作成した。1層 造成土、2層 耕作土、3層 1～3調査区の第3層または第4層（近世～昭和30年代以前耕作土）に相当する層、4層 耕作によるベースの攪拌層、5・6層 ベースに分けられる。SD4001の掘り込み面は土層図からは明らかではないが、検出面の標高は5層上面に相当し、5層（ベース面）で検出したと考えられる。

南側の2トレンチでは西壁で土層図を作成した。2トレンチでは、4層の堆積は認められず、SD4002はベースの上面である5層上面で検出した。

152は1トレンチ2層から出土した軒平瓦。瓦当面には文様は施されない。近代以降のものと考えられる。

2 遺構・遺物

溝

4区 SD4001（第130・131図）

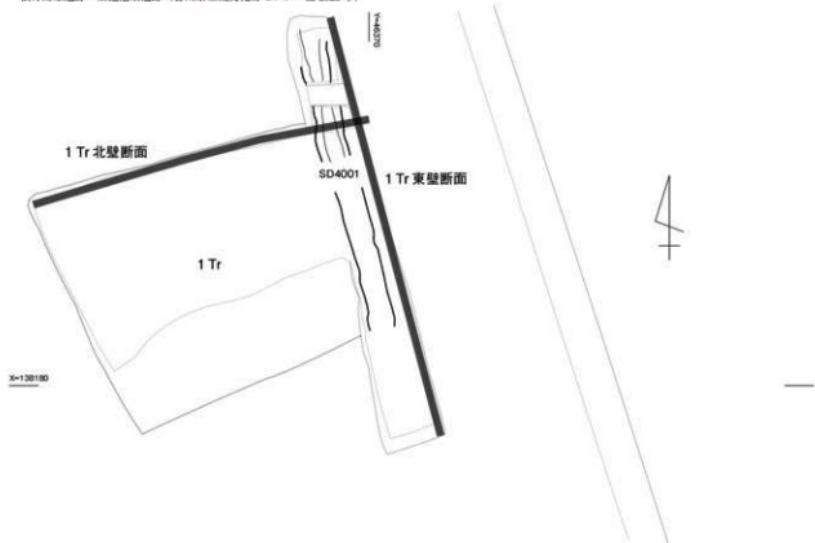
4区1トレンチで検出した南北方向の溝である。調査区北部でのみ検出し、中央部から南部では検出していない。遺構の掘り込み面は、検出面の標高からベース上と考えられる。検出長は262m、幅0.56m、深さ8cm、主軸方位はN10.1°Wで、現道と概ね方向が揃う。2トレンチの延長部では検出していない。埋土中からは須恵器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は昭和30年代以前である。

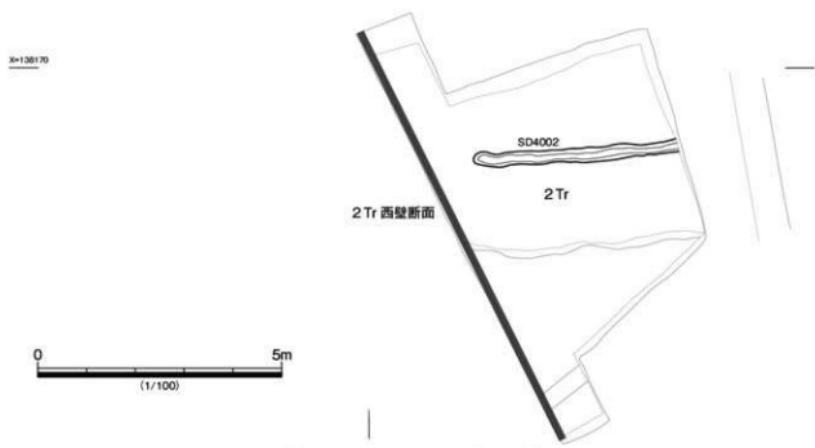
4区 SD4002（第130・131図）

4区2トレンチで検出した東西方向の溝である。調査区やや北寄りで検出した。掘り込み面は近世耕作土の下部、ベース上である。東側は調査区外へ延びる。検出長423m、幅0.28m、深さ6cm、主軸方位はE3.41°Nで、現道の方向とほぼ直交する。埋土中からは出土遺物はなかった。

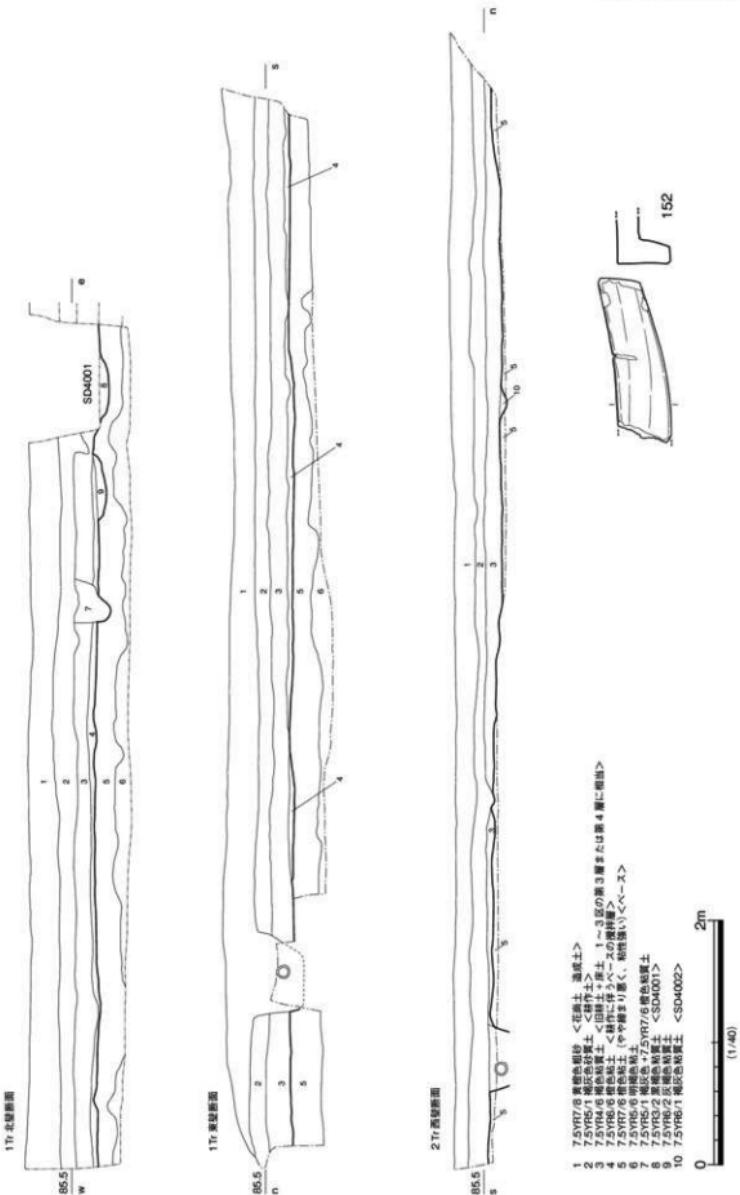
1～3区の3層または4層の下面で検出しており、遺構の時期は昭和30年代以前である。

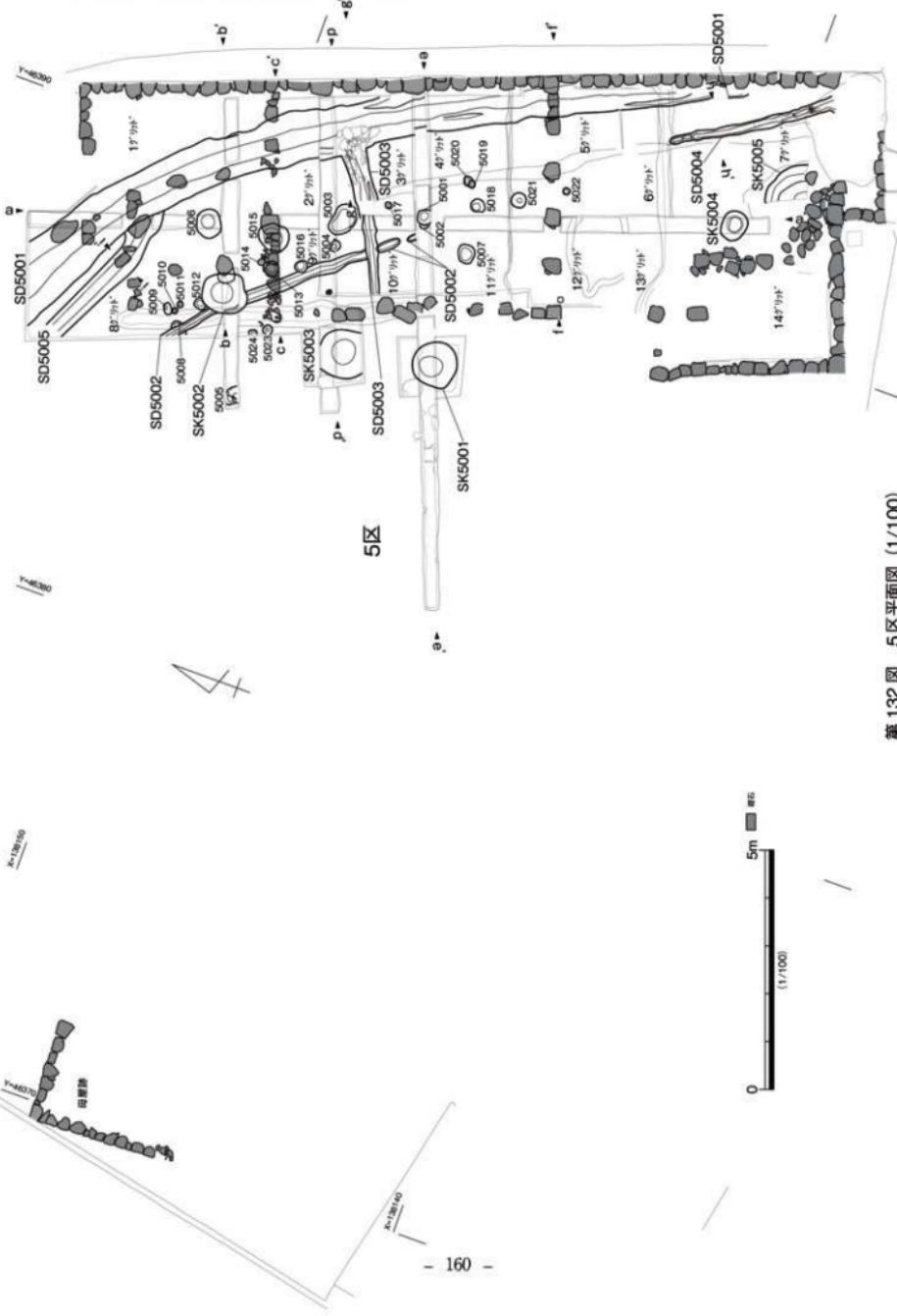


4区

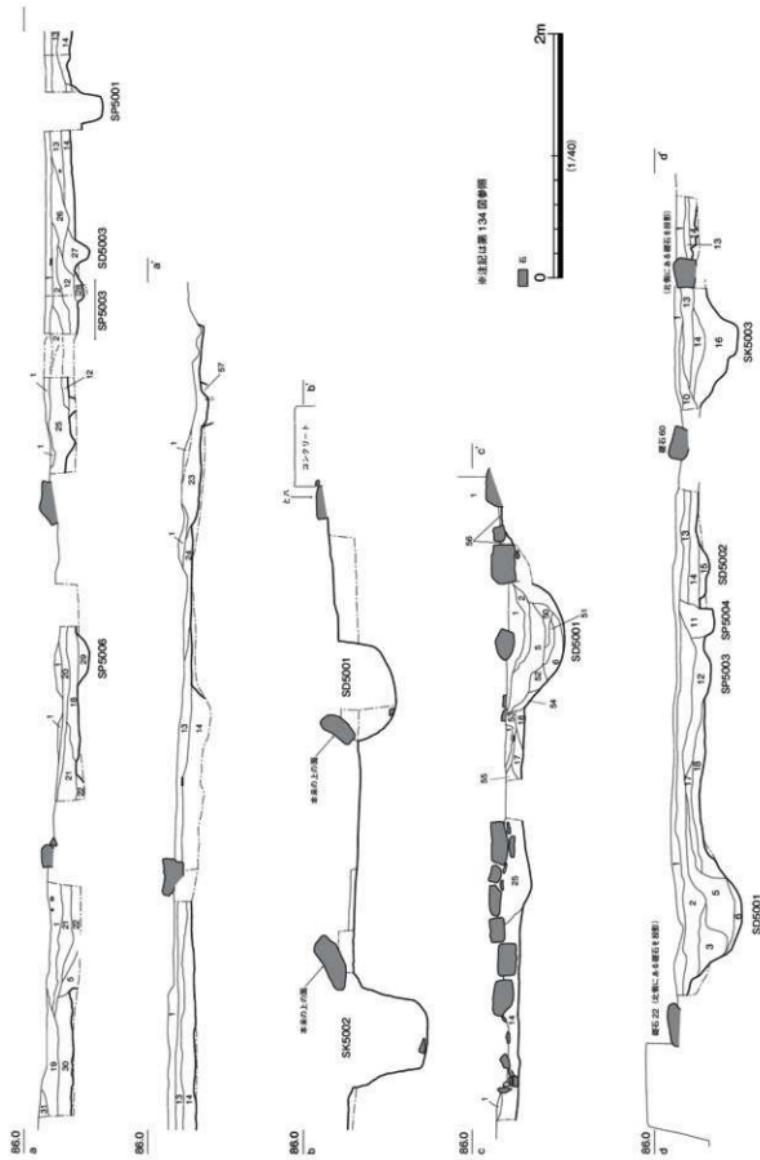


第130図 4区平面図 (1/100)

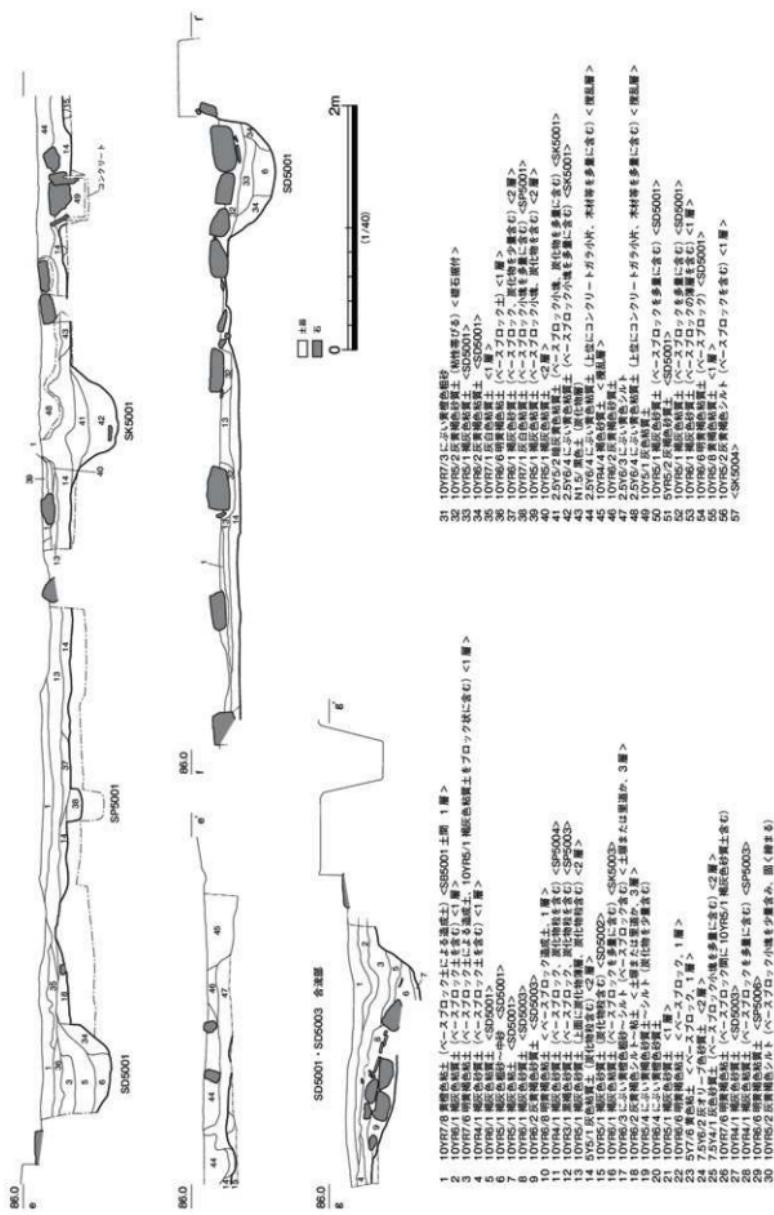




第132図 5区平面図 (1/100)



第133図 5区土層断面図 1 (1/40)



第4節 5区の調査（第101・132図）

5区は、調査の直前まで倉庫として利用された建物があった場所である。

1 土層（第133・134図）

南北方向で1ヶ所、東西方向で5ヶ所の土層図を作成した。土層は大きく3層に分けた。

1層 ベースを多く含む造成土（特に東側のSD5001上面付近で堆積）、2層 ベース、炭化物を多く含む造成土（1層の下面に位置するが、1層の認められないSD5001より西側で広く認められる）、3層 里道または土塀の痕跡と考えられる層（SD5001に西接する位置でのみ認められる層。SD5001の下面に堆積）である。1層は、おもに建物用地を造成するためにSD5001を埋め立てた層、2層も造成した層と考えられが、SD5001の上面に認められないことからSD5001が機能している時に造成されたと考えられる。3層は、SD5001の西側に隣接する位置の下面に堆積することから、SD5001西側に沿う里道と考えられる。

2 遺構・遺物

礎石建物

5区 SB5001（第135～137図）

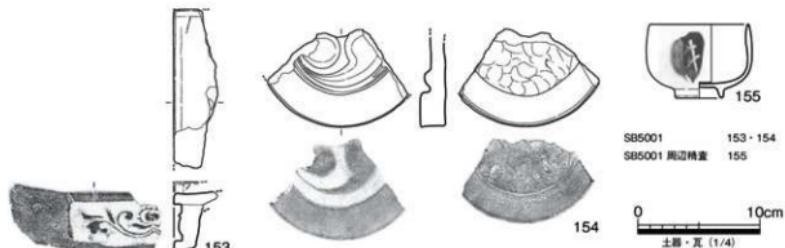
調査区東半部で検出した。1面の上面で検出しており、溝などの遺構を埋め立てて造成した後に建築されたものと考えられる。調査のはば直前まで現存した倉庫である。

調査前の聞き取りによれば、建てられたのは昭和20年代中頃で、南北方向に4分割して、最も北側は床張り、北から2番目は牛や馬の飼料等を置き、南から2番目では牛や馬を飼育し、南端の区画は用途ははっきりしなかったが、南東隅に人間用のお手洗いがあった。牛馬の飼育スペースはコンクリートを貼っていたが、これは当初からではなく、周辺が水の被害に見舞われて以降であった。

調査の結果、外側と内部の間仕切りの石列を検出した。石列は東辺、南東隅を除く南辺と、間仕切りとなる東西方向の石列を2ヶ所で検出し、建物は大きく3区画に分けられていた。北辺・西辺は石列がない部分がある。南辺の東半部、西辺の南端部には張り出しがある。張り出しのある東辺は16.74m、張り出しない西辺14.98m、北辺は5.03m、南辺は6.24m、南辺の張り出し部分の幅3.07m、西辺の張り出し部分の幅3.83mを測る。北側の間仕切りは東辺の北から3.89m、南側の間仕切りは東辺の南から6.98m、主軸方位はN20.93°W、面積は89.15m²である。北側の間仕切りは、一部欠損する石があるものの、石を隙間なく並べるが、南側の間仕切りは、石を中心間の距離で約1mの等間隔に並べる。

北側の区画では、西側の石列が認められず、北側の石列は東辺との取り付き部分から東約1.48m、及び中央付近で検出しただけであった。区画内では、北辺ラインから0.92m南側、東辺から2.23m西側で東西方向に2.44m程度、乱雑ながら石が並ぶ状況が認められる。また、中央付近では、4個の石を、方形に南北0.99m、東西1.89mの位置に配置する。前者は出入り口に関わる場、後者は聞き取り調査であった床張りと関係するかもしれない。

中央の区画は、東辺、北辺には隙間なく、南辺は1m間隔で石を配する。東辺・北辺は壁で覆われていたと考えられる。西辺は部分的にやや疎らな部分があり、北側1.2m程度は石がない。北側は出入り口等に使用されたのであろうか。南側の間仕切りの約1m北側から南側の区画にかけて、コンクリートが認められた。聞き取り調査によれば、牛馬の飼料置き場等に利用されており、南側の石列が1m間隔



第135図 SB5001 出土遺物1(1/4)

で配置されていることと考え併せ、南側の牛馬の飼育場所とは一体となって利用されていたと考えられる。

南側の区画は、東辺、南辺、西辺に石列を並べる。西辺については、北から2m付近まで石を認められず、それより南の石列は西へ張り出し、区画の幅が広がっている。南辺では東半部に張り出しがある。内部にはコンクリートが貼られていた。コンクリートの下部には南北方向に弧を描くように石列が検出された。

東辺の石列には、墨で「と四」～「と九」と番付が書かれたものがあった。また、全体に外側の石列には墨付きが認められ、屈曲部や分岐部分などには墨付きが十字に認められた。墨付きは南辺、西辺の張り出し部、北辺ではおむね全体に残されていたが、石列が崩れ気味の西辺、南側の間仕切り部分にはあまり残されていなかった。

土層図により、SD5001、SD5003、SK5001より新しく、これらの遺構群を埋め戻し、ベースプロック土による造成の後建てられた。当時の基幹水路と考えられるSD5001を埋めて、SD5001部分、及びその少し東側まで、建物用地を広げた様子が窺える。

円座香南線道路改築のための工事用図面に記載された建物は長方形に描かれ、南北方向は東辺の、東西方向は南辺の長さに合致する。北側と中央の区画の西辺については、礎石列のラインの外側に、南側の区画の西辺のラインに合わせて構造物があったようである。

遺構内からは須恵器、型紙刷り磁器碗、土師質土器羽釜、燐瓦、土管などが出土した。

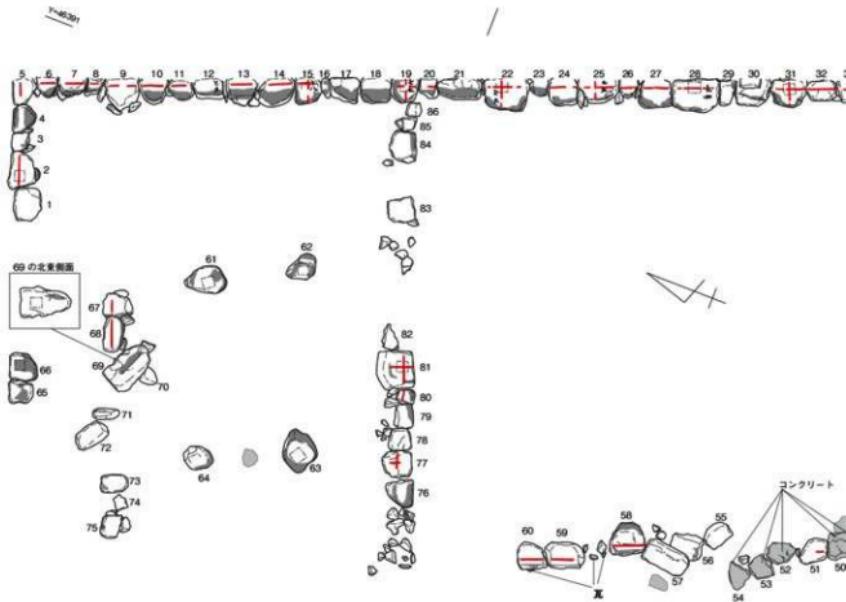
153・154は瓦である。153は軒平瓦。均整唐草文。平瓦の下部に粘土を足して瓦当部分とする。154は軒丸瓦。三巴文で、瓦当裏面下部の周縁部を強くなじ、中心付近は指サエ痕が顕著に残る。155はSB5001の周辺を精査中に出土した。磁器湯呑。口縁端部には口鏽を施す。外面は染付と茶色の色絵で施文する。156・157は礎石。いずれも砂岩製で、建物の東辺で検出した。156は「と六」、157は「と七」の番付が墨書きされ、墨付きが十字に残る。建物の内側・外側とも地面に水平方向に日焼け等による色調の違いが認められる。実測した遺物以外にも番付や墨付きの残る礎石が検出された。

聞き取り調査により、遺構の時期は昭和20年代以降である。

土坑

5区 SK5001 (第138図)

5区中央付近で検出した。2層の下面で検出した。SB5001の基礎である南北に並ぶ石組み状遺構の西



第136図 SB5001 平面

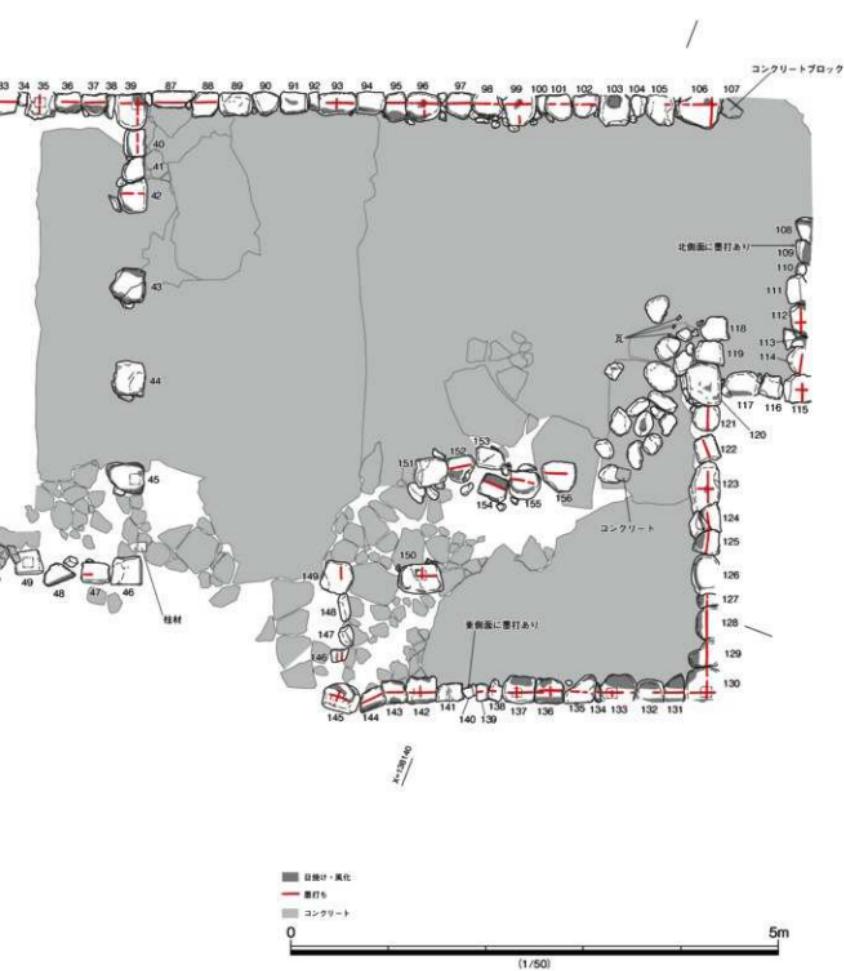
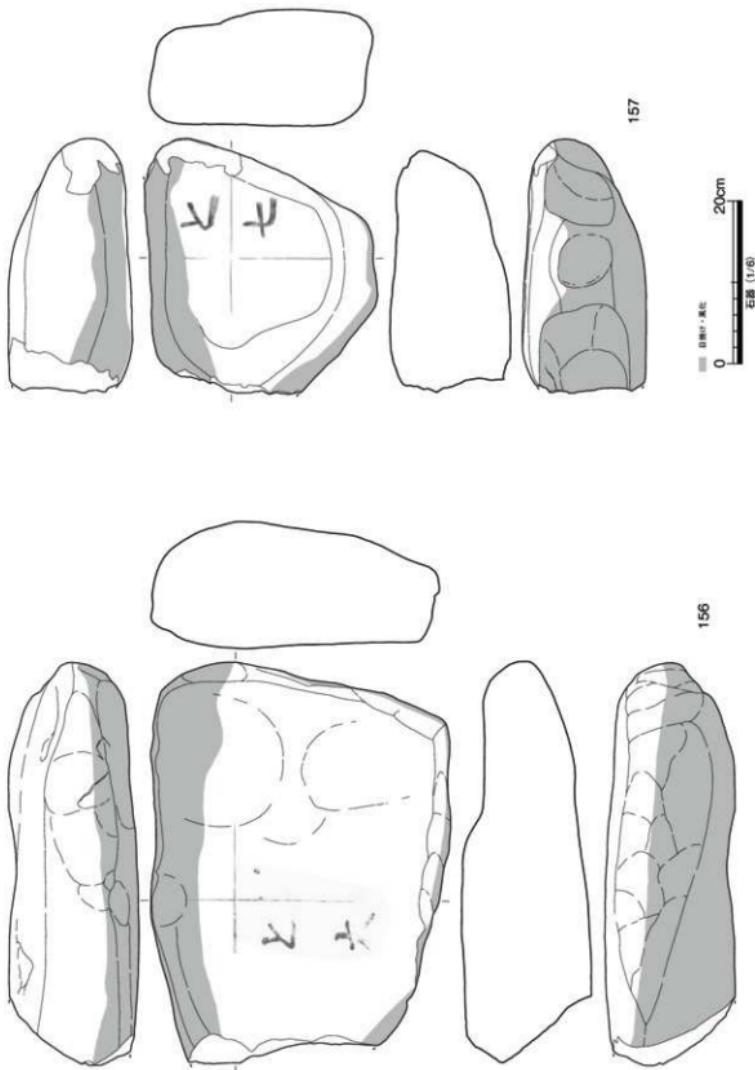
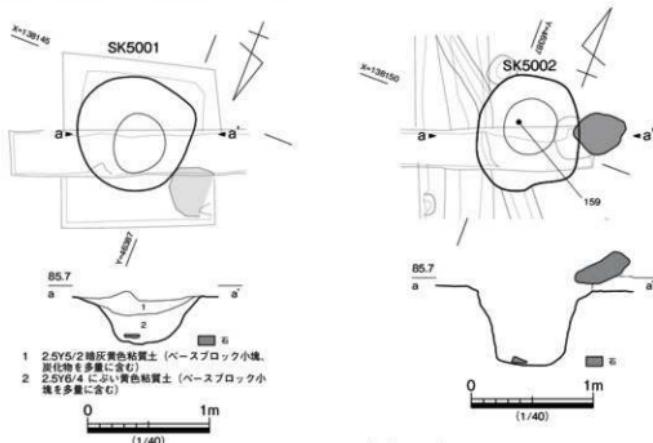


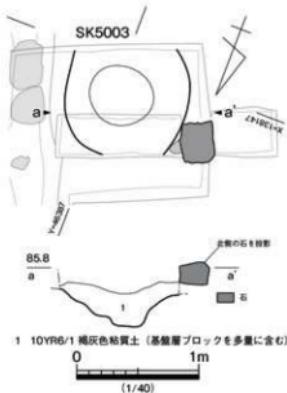
図 磨石出土状況 (1/50)

第137図 SB5001 出土遺物 2 (1/6)





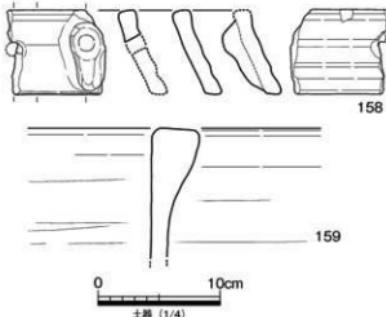
第138図 SK5001 平・断面図 (1/40)



第140図 SK5003 平・断面図 (1/40)

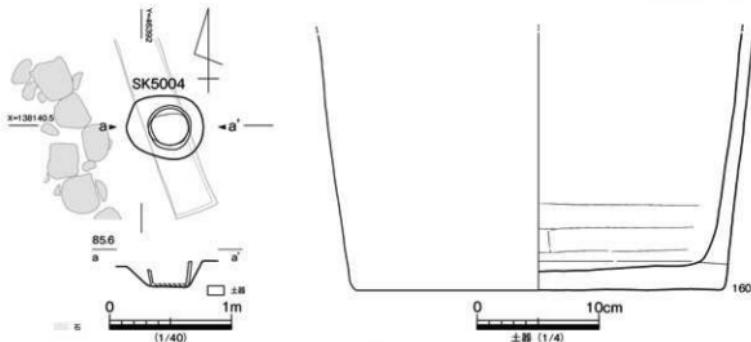
戻されたことを窺わせる。類似した形状のSK5003が北側18mの位置にある。埋土中からは須恵器片、陶磁器片の他、塩ビ片、ガラス片が出土した。

検出層位は異なるものの、日本での塩ビ管の使用が昭和20年代後半以降であることは考えれば、遺構の時期は、古くとも昭和20年代以降で、SK5001埋没後ほぼ時期を置かずに2層による造成があり、SK5001が建造されたと考えられる。



第139図 SK5002 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)

側には接する位置関係であるが、2層による造成前に掘削されるもので、関連はないと考えられる。円形の土坑で、直径0.90m、深さ36.2cm程度である。埋土にはベースブロックを多量に含み、人為的に埋め戻されたことを窺わせる。類似した形状のSK5003が北側18mの位置にある。埋土中からは須恵器片、陶磁器片の他、塩ビ片、ガラス片が出土した。



第141図 SK5004 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)

5区 SK5002 (第139図)

5区北西部で検出した。楕円形の土坑で、長軸0.99m、短軸0.81m、深さ62.3cmである。遺構の切り合ひ関係により、SD5002より新しく、SB5001より古い。埋土中からは軒桟瓦、土師質土器大甕片が出土した。

158は土師質土器。五徳のようなものか。円形に巡り、やや内傾する。隣接して2ヶ所に孔がある。外面には煤が付着する。159は土師質土器大甕口縁部。

遺構の時期は、出土遺物から近代以降と考えられる。

5区 SK5003 (第140図)

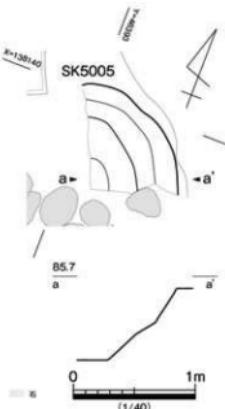
5区中央付近で検出した。SK5001同様2層の下面で検出した。楕円形の土坑で、長軸0.91m、短軸0.88m、深さ42.0cmである。埋土中にはベースブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻されたことをうかがわせる。類似する土坑SK5001の北約18mに位置する。埋土中からは焼瓦、陶磁器片、磁器製人形などが出土した。

遺構の時期は、出土遺物やSK5001と類似する遺構であることから、近代以降である。

5区 SK5004 (第141図)

5区南部で検出した。SB5001の内部に当たる位置である。コンクリートを除去した後に検出した。断面図から1層の下面で検出しており、SB5001より古い。楕円形で、長軸0.61m、短軸0.50m、深さは27.7cm程度である。土坑内には土師質土器甕が埋められていた。上部が削平されていることから、SB5001建造に伴い廃棄されたと考えられる。

160は土師質土器甕。土坑内に設置されたもの。上半部は削平により失われる。

第142図 SK5005 平
・断面図 (1/40)

遺構の時期は、SB5001以前、出土遺物により近代以降と考えられる。

5 区 SK5005（第 142 図）

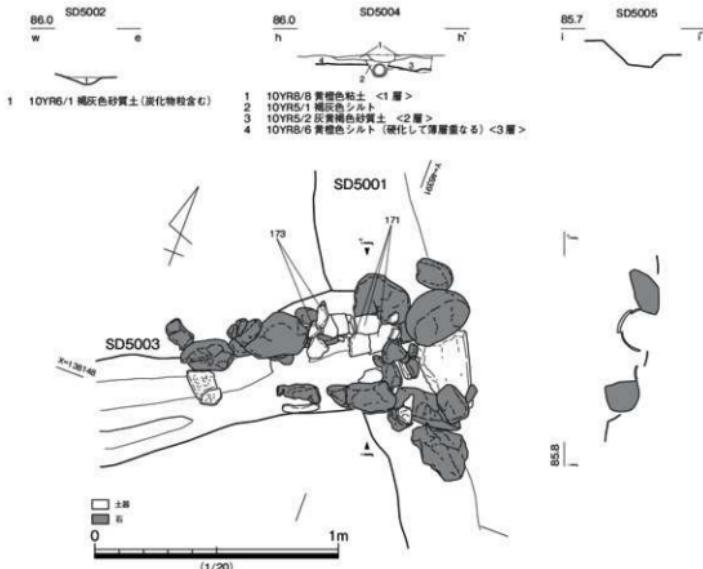
5 区南部で検出した。検出面は不明である。おおむね円形と思われるが、北東部 1/4 程度の検出に留まる。直径 0.85m 以上、深さ 93.5cm 以上を測る。コンクリート、礎石の下部で検出した。埋土中からは焼瓦、素焼き陶器、ガラス片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物により近代以降である。

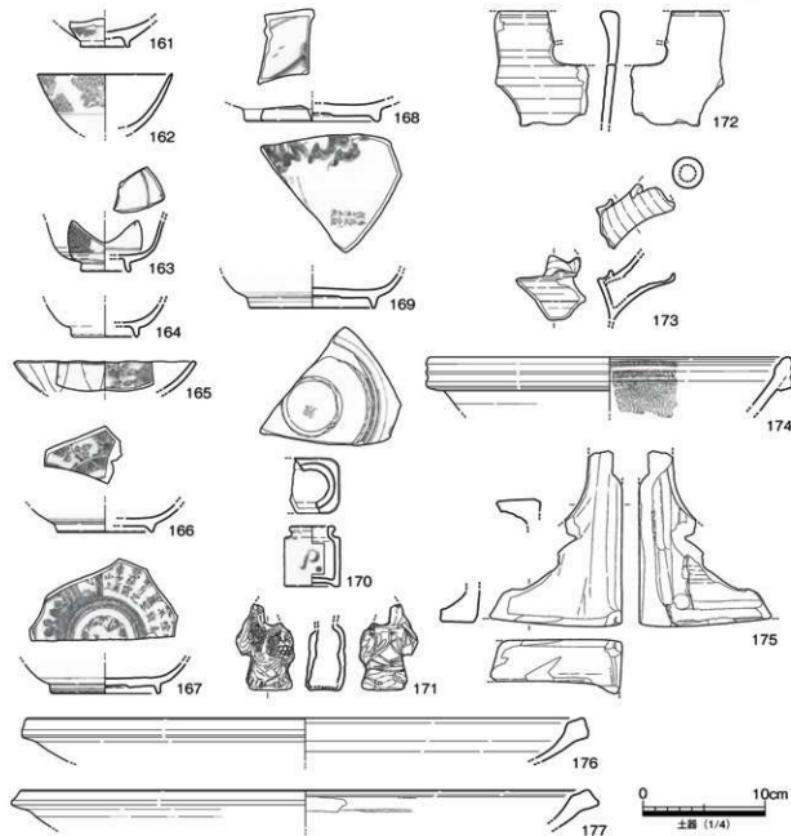
溝

5 区 SD5001（第 132～134・143・144 図）

5 区の南北方向の溝である。1 層の下面、3 層の上面で検出したが、SD5001 部分には 2 層の堆積は認められず、2 層との前後関係は不明である。中央付近から南側は SB5001 の石列と概ね重なる位置で、北部付近で西へ大きくカーブする。検出位置や規模から、当時の基幹水路であったと考えられる。SB5001 の石列の下部で検出した。溝断面の上部～中程付近では上面の造成土により充填されることや、埋土にはベースブロックが多く含まれる部分もあり、SB5001 の造成の際に埋め立てられたものであろう。掘り込み面は、3 層で、里道の東側に掘削された溝と思われる。検出長 15.97m、幅 0.85～0.96m、深さ 40～46cm を測る。中程付近で西側から SD5003 が合流する。断面観察によれば SD5001 が新しいが、SD5003 は SD5001 の東へは続かず、概ね同時併存と考えられる。埋土中からは陶器、型紙刷りの磁器椀、



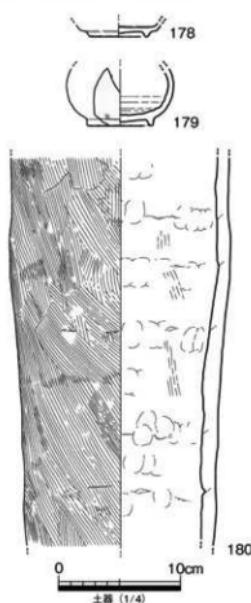
第 143 図 SD5002・SD5004・SD5005 断面図 (1/40)、
SD5001・SD5003 合流部遺物出土状況 (1/20)



第144図 SD5001出土遺物(1/4)

土師質土器行平鍋、磁器人形、燐瓦、ガラス片などが出土した。遺物量が多く、周辺に民家等があることから、溝を埋める際に捨てられたものと考えられる。

161～171は磁器。161～164は椀。161は銅板転写により施文し、文様は緑色に発色する。163はコバルトにより発色させる。165～169は皿。165は型成型で、体部は緩い鍋を巡らせる形態である。165・166は内面を型紙刷りにより施文する。167は内面に蘇軒（そしょうく）「赤壁賦」の一部と考えられる語句が認められる。167・168は蛇の目凹型高台である。169は内面に「秀為不二嶽 巍々秀千秋」とある。この文言は、幕末の水戸藩士・藤田東湖の「文天祥正氣の歌に和す」の一節に似るが、これは2行目が「巍々聳千秋」である。高台は蛇の目凹型高台で、高台内に「岐314」の統制番号が染付で記載される。戦時統制品で、昭和16年～20年の間に作られたものである。170は瓶である。四角柱で、口縁部は円形を呈する。1側面に「P」の文字が描かれる。171は人形。背面肩部と頭部に小孔がある。



第 145 図 SD5003 出土遺物 (1/4)

埋土中からは、陶器行平鍋または土瓶口縁部が出土した。

出土遺物から、遺構の時期は近世以降である。

5 区 SD5003 (第 132・143・145 図)

5 区中央付近で検出した東西方向の溝である。第 133 図 a-a' 断面によれば、1 層下面、2 層上面で検出している。検出長 3.12m、幅 0.4m、深さ 20cm、主軸方位は N28.16° E である。溝の東端で SD5001 へつながり、これより東では検出していない。SD5001 との合流部には、SD5003 の南北両岸には石列により護岸を、SD5001 との境には石により堰を作る。また、合流部付近には土師質土器土管が設置されていた。埋土中からは磁器、土師質土器大甕片、土管などが出土した。

178・179 は磁器。178 は椀。179 は壺。内面は施釉せず、高台端部には砂目積み痕が残る。180 は土師質土器土管。外面はハケを施し、内面は粘土板の離ぎ目部分に顕著に指押さえ痕を残す。SD5001 との合流部で出土しており、橋として使用したと考えられる。

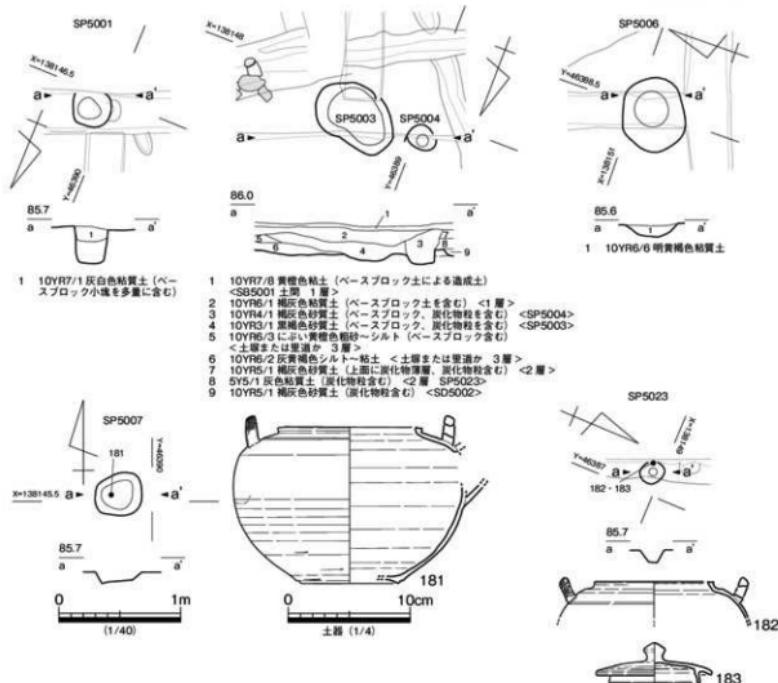
遺構の時期は、SD5001 と同時期と考えられ、近代以降で昭和 20 年代頃に SB5001 の築造の頃に埋め立てられたと考えられる。

172～174 は陶器。172 は小片で器種不明。内外面とも施釉し、横長の楕円形の穴がある。173 は急須。把手部分のみ残る。174 は擂鉢。11 条以上 1 単位で、右から左へ鉤目を施す。備前焼。175～177 は土師質土器。175 は竈。上面には煮炊き具を載せる円形の穴の一部が残る。外面は光沢が出るくらい丁寧に調整し、内面は指ナデ等の調整痕が顕著に残る。176・177 は焙培。いずれも外面は型作りによるもので、19 世紀末以降。

遺構の時期は、近代以降で、統制陶磁器が出土することから、昭和 20 年代前後に埋め立てられたと考えられる。SB5001 築造直前に埋め立てられたものであろう。

5 区 SD5002 (第 132・143 図)

5 区北部で検出した。検出長 5.57m、幅 0.28m、深さ 6cm、主軸方位は N41.92° W である。北側は調査区外へ延びる。掘り込み面は 2 層の下面、ベースの上面である。SD5004 とは連続する位置関係であるが、SD5004 の掘り込み面は 2 層上面であり、異なる溝である。遺構の切り合い関係により、SK5002、SD5003 より古い。また、SD5001 の西側約 2.28m をほぼ平行する位置ではあるが、SD5001 は SD5003 より新しい、または同時併存なので、SD5001 とも関連はないと思われる。



第146図 5区柱穴平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)

5 区 SD5004 (第 132・143 図)

5区南東部で検出した溝である。2層上面から掘り込まれる。SD5001の西側約0.6mの位置で、SD5001と平行に位置する。検出長3.50m、幅0.4m、深さ20cm、主軸方位はN32.97°Wである。溝内部には土管が埋設されていた。埋土中からは焼瓦、土管が出土した。

遺構の時期は、出土遺物により近代以降である。

5区 SD5005 (第132・143図)

5区北部で検出した。SD5001の西側0.22mの位置では平行して位置する。平面検出ではSD5001に切られ、SD5001より東側では検出していない。検出長3.31m、幅0.43m、深さは24cm程度で、主軸方位はW22.06°Nである。埋土中からは土師質土器足釜が出土した。SD5001の前身の溝である可能性があろう。

遺構の時期は中世以降である。

第12表 5区柱穴一覧

番号	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土	報告 遺物	その他 出土遺物	備考
SP5001	円形	32	-	17.2	10YR7/1 灰白色粘質土（ベースブロック小塊を多量に含む）		なし	SP5002を切る 2層下面で検出
SP5002	(円形)	19	-	8.9			陶器	SP5001に切られる
SP5003	楕円形	72	48	6.5	10YR4/1 暗灰色粘質土（ベースブロックを多量に含む）		なし	2層上面で検出
SP5004	楕円形	26	22	7.1	10YR4/1 暗灰色粘質土（ベースブロック、炭化物質を含む）		なし	
SP5005	楕円形	40～	34	12.2			椎丸	北・南は調査 区外へ延びる 壘石あり
SP5006	楕円形	60	50	7.6	10YR6/6 明黄色粘質土		なし	ベース上面で検出
SP5007	楕円形	38	36	9.4		18I (陶器土瓶)	土師質 土器壺	遺物は第2層 との接合遺物
SP5008	楕円形	40～	28	4.2	10YR5/2 灰青褐色粘質土（ベース ブロック少量、炭化物質含む）		なし	SD5002に切られる
SP5009	楕円形	25	16	14.1	10YR7/1 灰白色粘質土（ベースブロック含む）		なし	
SP5010	円形	12	-	4.6	10YR7/1 灰白色粘質土（ベースブロック含む）		なし	
SP5011	円形	14	-	4.5	10YR7/1 灰白色粘質土（ベースブロック含む）		なし	
SP5012	円形	16	-	7.0	10YR7/1 灰白色粘質土（ベースブロック含む）		なし	SK5002に切られる
SP5013	円形	30	-	2.0	10YR6/1 暗灰色粘質土		なし	
SP5014	円形	16	-	0.6	10YR6/2 灰黄色シルト		なし	
SP5015	楕円形	68	56	6.0	10YR5/1 暗灰色粘質土（ベースブロック多量に 含む）		なし	
SP5016	円形	26	-	4.1	桂皮：10YR6/2 灰黄色シルト（ベースブロッ ク含む） 壁方：10YR6/1 暗灰色シルト		なし	
SP5017	円形	14	-	9.4	10YR6/1 暗灰色粘質土		なし	
SP5018	不整円形	30	26	26.8	10YR6/1 暗灰色粘質土（ベースブロック含む）		なし	
SP5019	円形	15	-	3.1	10YR6/4 黄ぶい黄色粘質土（ベースブロック）		なし	SP5020を切る
SP5020	円形	22	-	9.3	10YR5/2 暗灰黄色粘質土		なし	SP5019に切られる
SP5021	円形	32	-	21.6	10YR6/1 暗灰色粘質土（ベースブロック含む）		なし	
SP5022	円形	13	-	5.1	10YR7/2 灰黄色粘質土（ベースブロック含む）		なし	
SP5023	円形	20	-	11.0		182I (陶器 土瓶)・ 183II (陶器 土瓶)	なし	
SP5024	円形	16	-	4.4			なし	

柱穴（第146図）

柱穴を24穴検出した。いずれもSB5001より古いと考えられる、出土遺物の中に近世以前のものは認められない。掘立柱建物を構成するものもなかった。

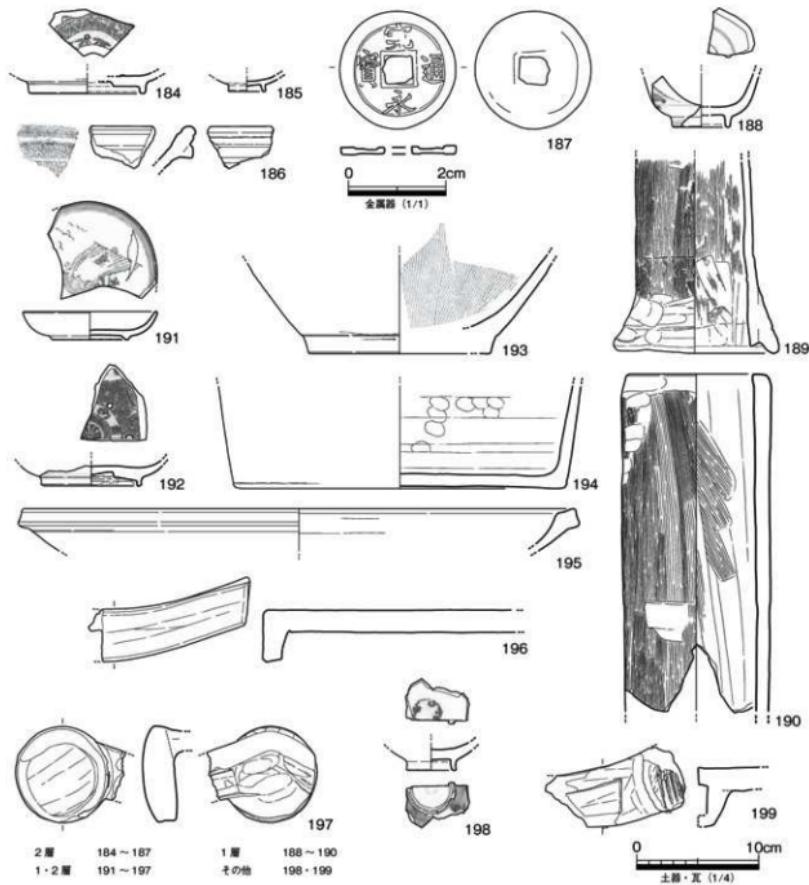
詳細は第12表のとおりである。

5区 包含層から出土した遺物（第147図）

184～187は2層から出土した遺物。184は磁器皿。蛇の目凹型高台。内面は型紙刷りによる。185・186は陶器。185は椀。京焼風陶器。186は擂鉢。187は寛永通宝。

188～190は1層から出土した遺物。188は磁器碗。見込みは無軸。189・190は土管。189は、外面に粘土を足して受け口を作ることが観察できる。外面はハケ、後で粘土を足した受け口部分はヘラ削りで仕上げる。内面はハケにより調整する。190は受け口でないほうの端部が残る。

191～197は1・2層から出土した。191・192は磁器皿。191は内面を色絵により施文する。192は内面を型紙刷りにより施文し、コバルトにより発色させる。蛇の目凹型高台。193は陶器擂鉢。底部外面は無軸。19条程度1単位の鉢目を右から左へ施す。194・195は土師質土器。194は壘底部。195は

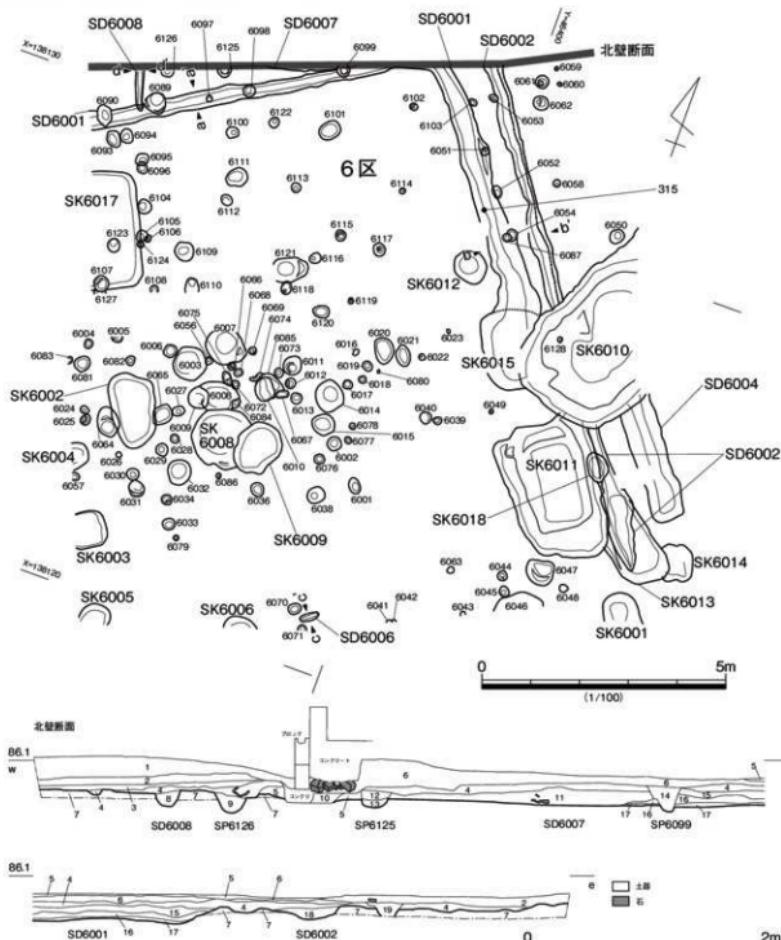


第147図 5区包含層出土遺物 (1/4・1/1)

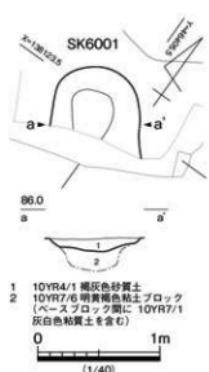
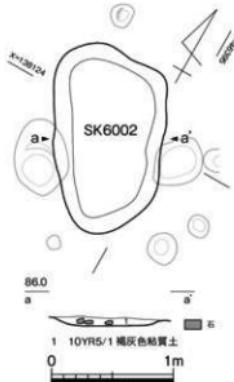
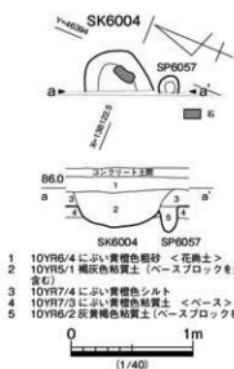
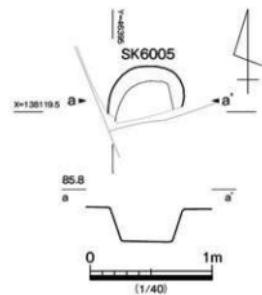
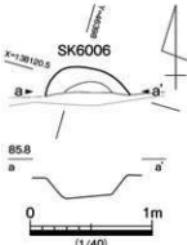
焙烙。外型作りによるもので、外面はほとんど調整痕を残さない。196・197は瓦。196は軒平瓦。197は軒桟瓦の丸瓦部分。いずれも瓦当面に施文しない。

198・199はその他から出土した遺物。198は磁器碗。やや焼成不良。199は軒桟瓦。丸瓦部分は剥離し、剥離した部分には、瓦当との接着を強めるためのヘラ描きが観察できる。

2層は型紙刷りで施文された磁器がある他、陶磁器片、ガラス片等が出土しており、近代以降の整地土、1層は出土遺物に恵まれないが、陶磁器片、埴瓦片が出土しており、同様に近代以降であろう。3層から出土した掲載遺物はないが、わずかに陶器片、磁器人形片が出土しており、近世以降の堆積土と考えられる。



第148図 6区平面図(1/100)・北壁土層断面図(1/40)

第149図 SK6001
平・断面図 (1/40)第150図 SK6002 平・断面図
(1/40)第151図 SK6003 平・断面図
(1/40)第152図 SK6004 平・断面図
(1/40)第153図 SK6005 平・断面図
(1/40)第154図 SK6006 平・
断面図 (1/40)

第5節 6区の調査 (第101・148図)

もとは2軒の宅地があった場所である。西側調査区境から東へ約2mの位置に南北方向の宅地の境がある。

1 土層 (第148図)

概ね 1. 造成土 2. 旧耕土 3. にぶい黄褐色シルト層 4. ベース と考えられる。3. 褐色土系の包含層を掘り込む遺構も認められたが、大半は4. ベースが遺構面である。

2 遺構・遺物

土坑

6区 SK6001（第149図）

6区南端で検出した。楕円形と思われるが、南側は調査区外へ延びる。長軸0.59m以上、短軸0.74m、深さ11cmである。埋土中からは須恵器小片が出土した。

遺構の時期は不明である。

6区 SK6002（第150図）

6区西部で検出した。楕円形で、長軸1.52m、短軸0.90m、深さ6cm、主軸方位はN29.25°Wである。遺構の切り合い関係により、SP6064・6065より新しい。埋土中からは、須恵器片、磁器片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降である。

6区 SK6003（第151図）

6区南西部で検出した。西半部は調査区外へ延びる。コンクリート土間とその下部の整地層の除去後に検出した。隅丸方形と考えられ、東西0.61m以上、南北0.78m、深さは40cm、主軸方位はN27.96°Wである。埋土中からは須恵器小片が出土した。

遺構の時期は不明である。



第155図 SK6008・SK6009 平・断面図
(1/40)

6区 SK6004（第152図）

6区西端付近で検出した。西半部は調査区外へ延びる。楕円形と考えられ、東西0.35m以上、南北0.67m、深さ28cm、主軸方位はN58.73°Eである。耕作土とベースの間で堆積していたにぶい黄褐色シルト層から掘り込まれ、遺構面は隣接するSK6003より上の層になっている。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

6区 SK6005（第153図）

6区南西隅で検出した。南半部は調査区外へ延びる。円形または楕円形と考えられ、東西0.59m、南北0.41m以上、深さ28.7cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

6区 SK6006（第154図）

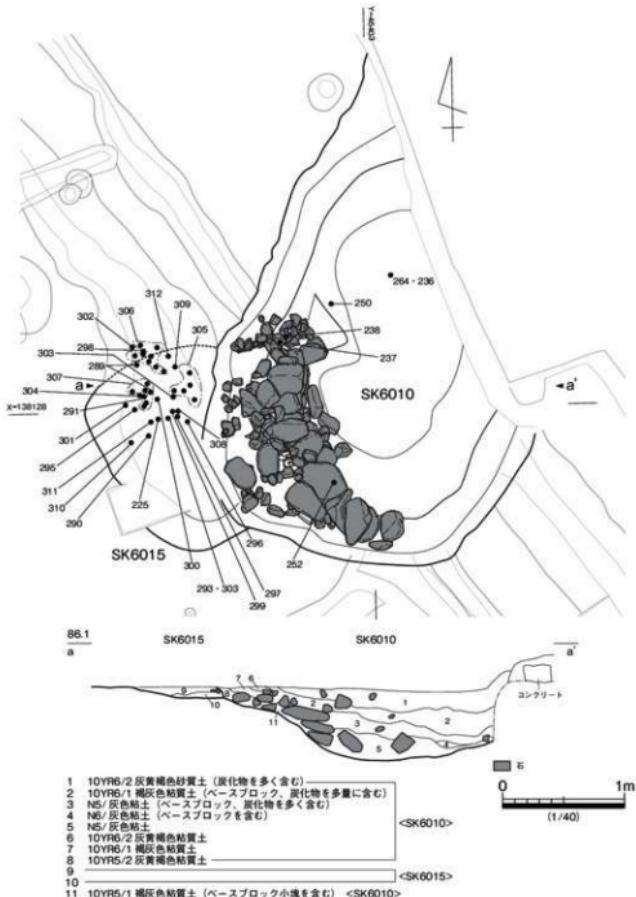
6区南西隅付近、SK6005の2.4m程度東側で検出した。南半部は調査区外へ延びる。円形または楕円

形と考えられ、東西 0.64m 以上、南北 0.21m 以上、深さ 16.8cm である。埋土中からは出土遺物はなかった。遺構の時期は不明である。

6 区 SK6008・SK6009 (第 155 図)

6 区中央やや南西寄りで検出した。SK6008 は東側の一部を SK6009 により掘り込まれる。

SK6008 はおおむね円形を呈し、直径 1.26m、深さ 35cm である。埋土の下半部はベースブロックを多く含み、埋め戻された様子が窺える。土坑の縁は直線状に分層された。桶や甕等の容器が埋納され、土坑の縁の埋土は容器の裏込めと考えられる。容器は出土しなかったので、埋め立て時に取り出されたと



第 156 図 SK6010・SK6015 平・断面図 (1/40)

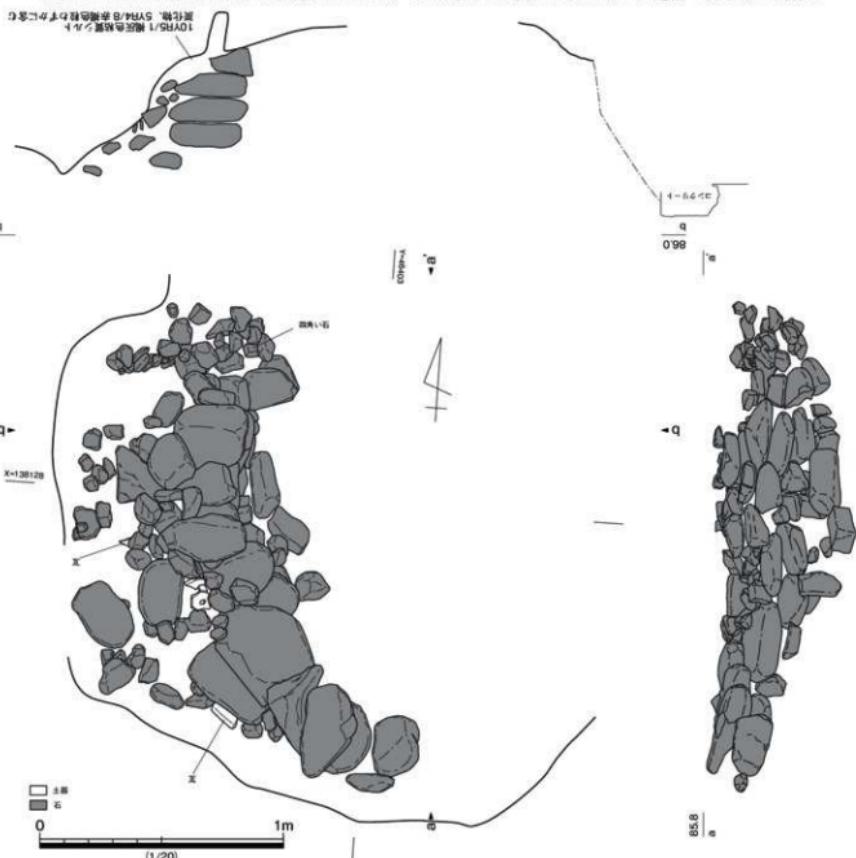
考えられる。埋土中からは瓦片が出土した。

SK6009 は SK6008 の東側を一部掘り込んで検出した。楕円形で、長軸 1.08m、短軸 0.90m、深さ 40 cm を測る。埋土は全体にベースブロックが多く混じり、人為的に埋戻したものと考えられる。出土遺物は土師質土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、SK6008 は出土遺物から近世以降、SK6009 は SK6008 を掘り込むことから同じく近世以降と考えられる。

6 区 SK6010（第 156 ~ 163 図）

6 区中央東端付近で検出した。東半部は調査区外へ延びる。隅丸方形と考えられ、長軸 2.83m 以上、短軸 1.4m 以上、深さ 56cm、主軸方位は N224.9° E で周囲の地割とは合わない。遺構の切り合い関係に

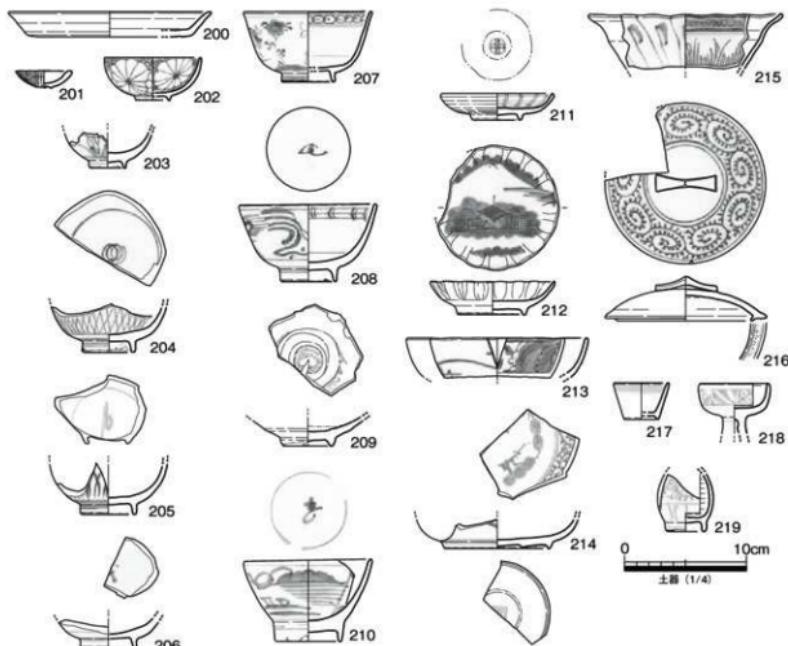


第 157 図 SK6010 石組平面図・立面図（1/20）

より、SD6001・SD6002・SD6004・SK6011・SK6015より新しい。遺構の南西に石組が残されるが、他の部分には石組みは認められない。埋土は、最下層20cm程度は灰色粘土で、水分を多く含む環境にあつたと考えられる。それより上部はベースブロックや炭化物を多く含む層で、埋め戻しに伴う層と考えられる。水溜めとして利用されたと考えられる。埋土中からは、磁器広東椀、陶器椀・擂鉢、土師質土器焙烙・羽釜・脚付き甕など多量の遺物が出土した。埋め戻しに伴い廃棄土坑の役割を果たしたと考えられる。

200は須恵器皿。8世紀後半頃。1～3区で出土した須恵器よりやや新しいと考えられる。201～219は磁器。201は紅皿。外面は菊花形で型成型。外面下半は施釉しない。202～210は椀。202はSK6015との接合資料。203は染付の発色が悪い。204は内外面ともに網目文を施す。209は内面に蛇の目釉剥ぎを施し、その周辺には砂目積み痕が残る。210は広東椀の器形。やや歪みがある。211～214は皿。212は体部に緩い錫状の窪みを巡らせる器形に成型する型成型。口縁端部に口銷を施す。214は蛇の目凹型高台。215は鉢。口縁端部を緩く輪花状の形にする型成型である。216は蓋物の蓋。外面は蛸唐草文、口縁端部から受け部には離れ砂が残る。217は猪口。218は仏飯器。外面は赤色と緑色の色絵により施文する。219は壺体部～底部。

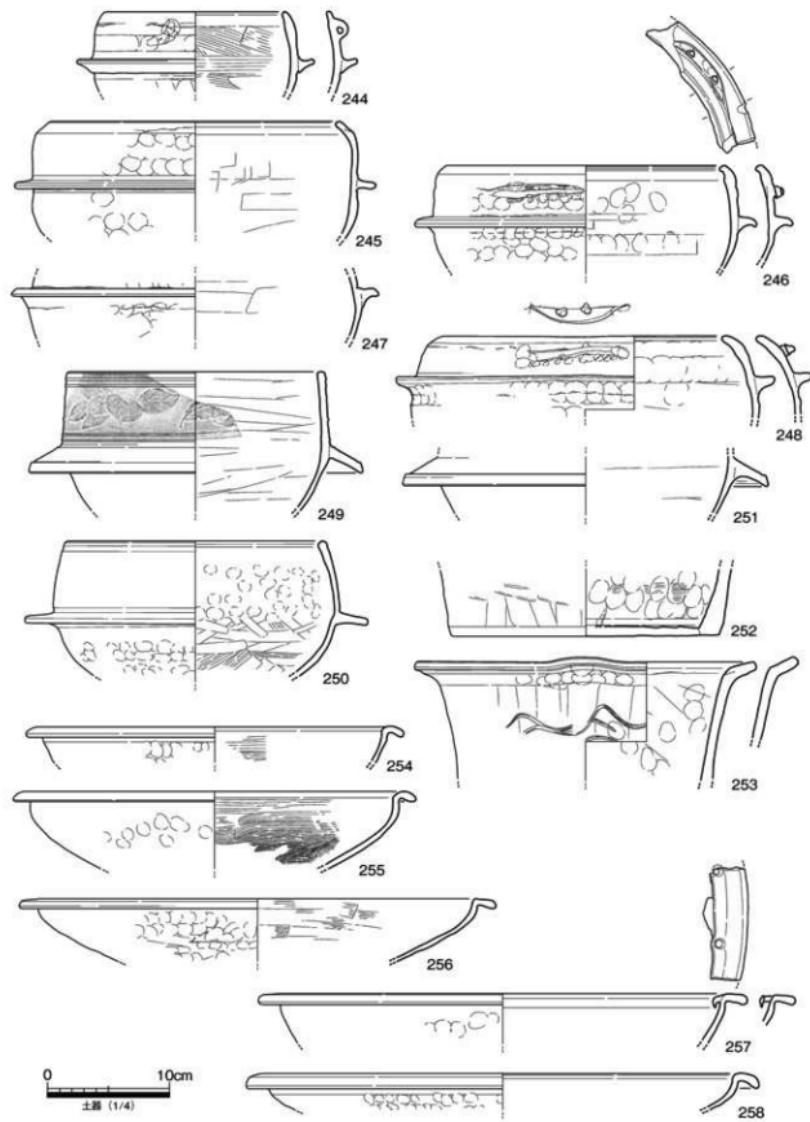
220～242は陶器。220～232は椀。220～224は京焼風陶器。223は高台内に「十」と墨書がある。221・222とも高台内に墨書が認められ、同様の墨書が書かれていたと考えられる。220～223は器形・法量・



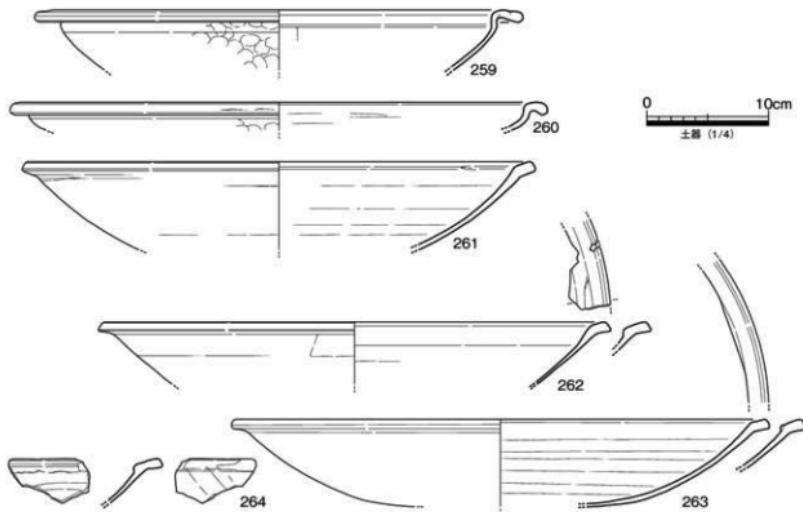
第158図 SK6010出土遺物1 須恵器・磁器(1/4)



第159図 SK6010出土遺物2 陶器 (1/4)



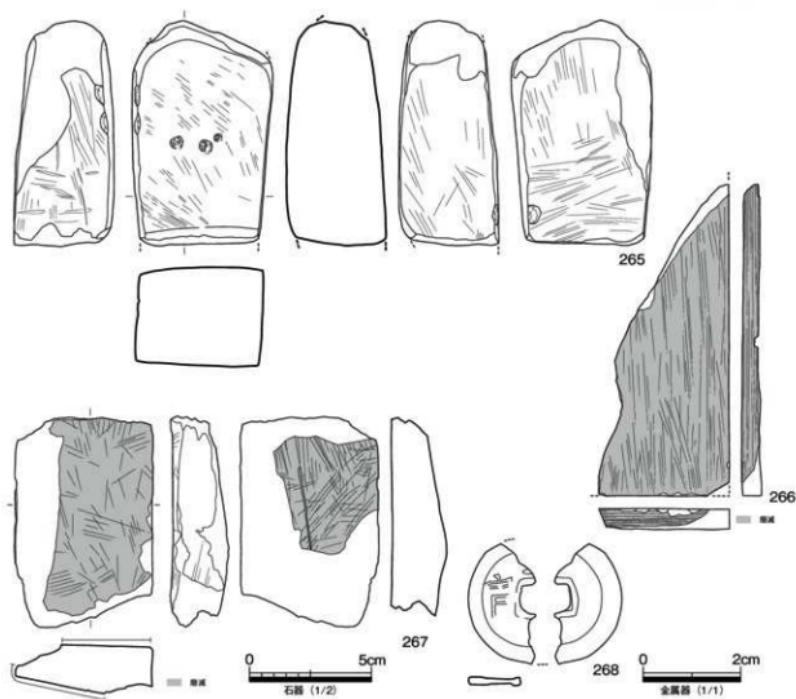
第160図 SK6010出土遺物3 土師質土器 (1/4)



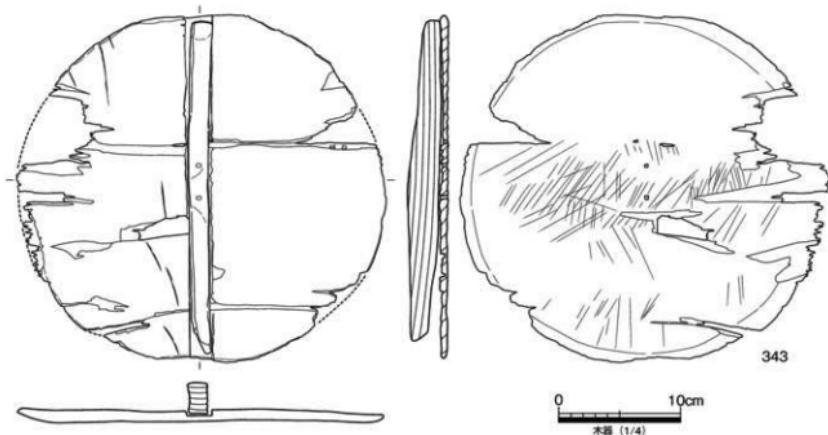
第161図 SK6010出土遺物4 土師質土器 (1/4)

高台裏の墨書きがほぼ同じと考えられ、揃いの器と考えられる。225はSK6015との接合資料。刷毛目唐津とされるが、釉の発色は悪い。226～229は瀬戸美濃産。227～229は腰錆椀。230・231は陶胎染付で、磁器の広東椀の器形。232は外面に亀甲型の文様を並べる。型成型。233は水注。寸胴で短い注ぎ口を持つ。口縁端部と底部外縁以外は施釉する。把手のハクリ痕が残る。底部内面には砂目痕が残る。234は壺。備前焼か。素焼きで体部3か所に窪みを持つ。235～237は鉢。刷毛目唐津風の文様を施文する。内面から外面体部下半部付近まで施釉する。238～242は擂鉢。いずれも体部外縁にはヘラ削りを施す。壠産。8条1単位(238・239・242)、9条1単位(240)の卸目を右から左へ施す。241は11条1単位。242はSD6002との接合資料。底部に細い筋状の圧痕が残る。243は円盤状陶製品。擂鉢の破片を円形に成形したもの。

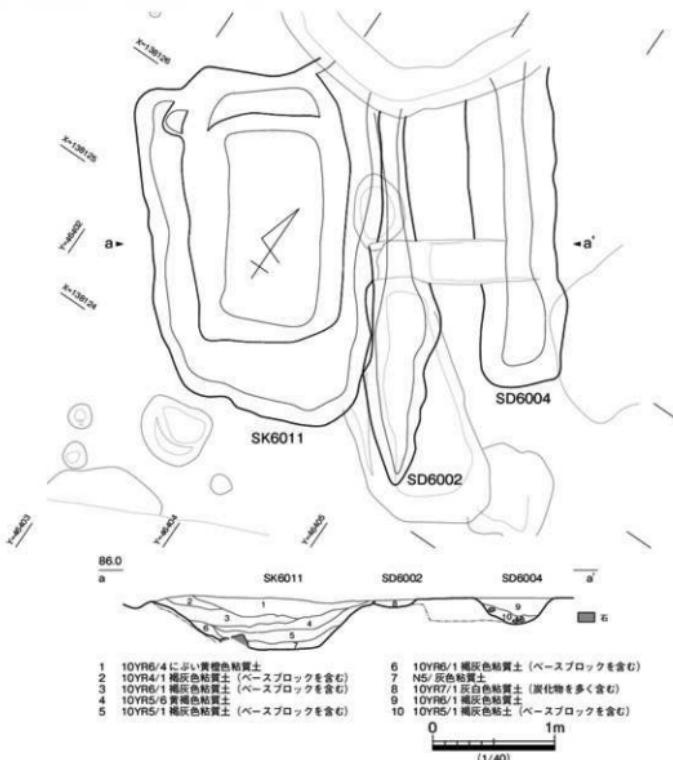
244～264は土師質土器。244～251は羽釜。244は口径14.5cm程度でやや小型。1ヶ所に孔がある外耳が1ヶ所残る。245～248は口径23cm程度で、口縁端部は内傾または内側へや屈曲し、短い鋲を持つ。246・248は鋲の上部に孔が横並びに2ヶ所ある内耳が1ヶ所残される。外面には指押さえ痕が残る。249・251は鋲が下がり気味に付く。249の体部上半はほぼ直立し、251も同様と考えられる。体部に指押さえ痕は認められない。249は押印により植物の文様を施す。現代まで使用された形態に似る。250の体部はやや内傾気味で、鋲はやや長く、外面には指押さえ痕を残す。245～248と249・251の中間の形態を示す。252は壺底部。円形の底部の外側に体部を接着させて作ったことが、底部と体部の接合痕跡からわかる。253は壺か。口縁端部は外反し、体部には波状文を施す。254～264は焙烙。254～260は口縁端部を強く外反させ、体部外縁には指押さえ痕を顕著に残す。254～256は内面にハケを施す。257は横並びに2個の孔を配した内耳が1ヶ所に残る。261～264は外型作りによるもの。外面にほと



第162図 SK6010出土遺物5 石器・銭貨 (1/2・1/1)



第163図 SK6010出土遺物6 木器 (1/4)

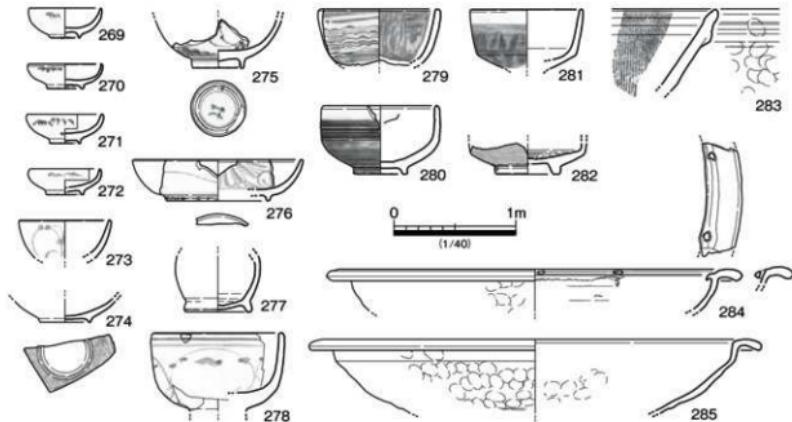


第164図 SK6011・SD6002・SD6004 平・断面図 (1/40)

んど調整痕を残さない。262～264は内側にわずかに拡張する部分を持つ。内耳の名残か。

265～267は砥石。268は銅鏡。傷みが著しく、銭種不明。343は蓋。本体と把手は別々に出土したが、大きさから同一の個体と考えられる。本体は直径30cm程度で、マツ科モミ属の柾目材を使用する。表面の中央付近には、把手がついていたと考えられる窪みが残され、中央付近に小孔が2か所に残される。裏面の中央付近には多数の擦痕が認められる。把手部分は中央がやや山形に成型する。把手にはマツ科マツ属が使用されていた（第7章第2節参照）。羽釜の蓋と考えられる。

陶磁器は、瀬戸美濃産腰錆挽や広東碗の器形の陶胎染付、堺産の擂鉢等、18世紀第4四半期～19世紀初頭（様相7）の遺物が多く出土し、焙烙は18世紀第4四半期～20世紀代の遺物が出土した。多量の陶磁器の供膳具、堺産の擂鉢をはじめ、長期間にわたる羽釜、焙烙など調理用具が出土した。遺構の廃絶に伴い投棄されたものであろう。最終的な埋没は20世紀代以降と考えられる。



第165図 SK6011 出土遺物 (1/4)

6区 SK6011 (第164・165図)

6区南東隅で検出した。隅丸長方形の土坑で、平面図では2段になるようであるが、断面図では段は明確には認められない。長軸2.81m、短軸1.80m、深さ42cm、主軸方位はN35.41°Wである。遺構の切り合い関係により、SK6013、SK6018、SD6002より新しく、SK6010より古い。埋土の大半はベースブロックを含み、人為的に埋め戻されたと考えられる。埋土中からは須恵器、備前焼擂鉢、土師質土器培焰、焼瓦片などが出土した。

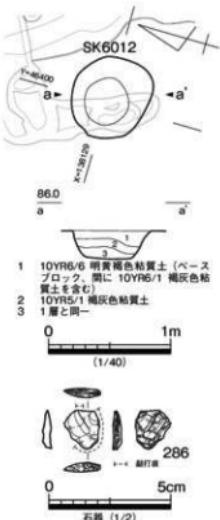
269～277は磁器。269～272は盃。いずれも口径6cm程度で、外面上部に染付で筆のような草を描く。同規格品と考えられる。273～275は椀。275は焼成不良。276は皿。277は壺。

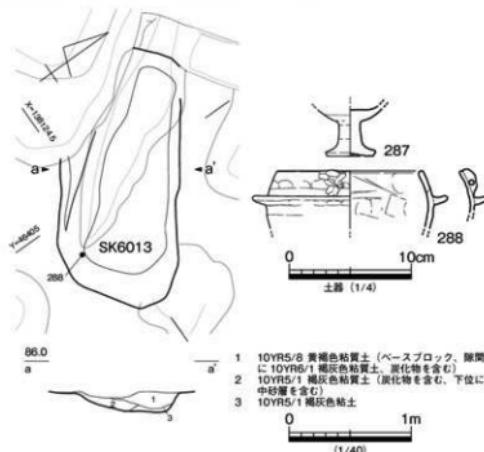
278～282は陶器。278～281は椀。278は陶胎染付。279は刷毛目唐津。280は瀬戸美濃産。腰錫椀。281は色合いで錫錫椀に似るがやや器形が異なる。SD6001との接合資料。282は香炉。内面は施釉しない。283は擂鉢。備前焼。外面はナデにより調整する。1単位は11条以上で右から左へ鉤目を施す。

284・285は土師質土器培焰。いずれも外面に顕著に指押さえ痕を残すもので、284は内面1ヶ所に、横並びに2孔を施した内耳を残す。

278は18世紀後半(様相6)、279・283は18世紀前半(様相5)、280・284・285は18世紀第4四半期～19世紀初頭(様相7)と考えられる。

遺構の時期は、SK6010より古いためや出土遺物により19世紀代と考えられる。

第166図 SK6012 平・断面図
(1/40)・出土遺物 (1/2)



第167図 SK6013 平・断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)

6区 SK6012 (第166図)

6区中央やや東寄り、SD6001の西側にはぼ接して検出した。ぼは円形の土坑で、直径0.65～0.71m、深さ23cm程度を測る。埋土中からは火打石が出土した。

286は火打石。剥片。稜線に敲打痕が残る。チャート製。

遺構の時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

6区 SK6013 (第167図)

6区南東隅付近で検出した。遺構の北半部の大半はSK6011、SD6002により消失する。長軸2.02m、短軸0.98m、深さ17cm、主軸方位はN44.23°Wである。埋土中に炭化物を含み、埋土上部はベースにより埋め戻される。遺構の切り合い関係からSK6011、SD6002より古く、SK6014より新しい。埋土中からは磁器碗・仏壇器・陶器陶胎染付・擂鉢・土師質器羽釜・壺が出土した。不要物等を焼却した後埋め戻されたものと考えられる。

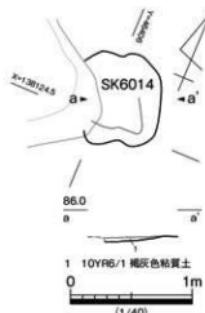
287は磁器仏壇器。底部外面は無釉。288は土師質器羽釜。小型品。外面錫上部に孔を1ヶ所に施した外耳を持つ。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降である。

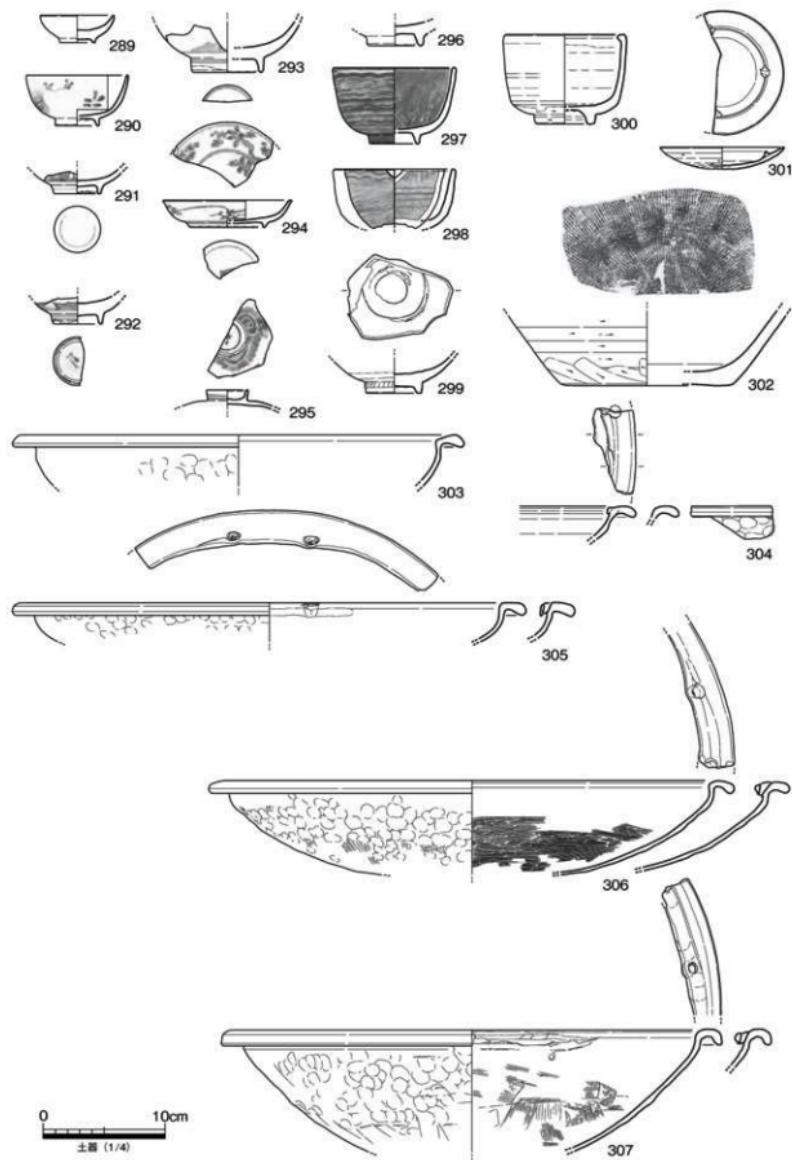
6区 SK6014 (第168図)

6区南東隅で検出した。不整円形の土坑で、東西0.5m以上、南北0.74m、深さ4cmで非常に浅い落ち込みである。埋土は褐灰色粘質土の単層である。遺構の前後関係からSK6013より古い。埋土中からは遺物は出土しなかった。

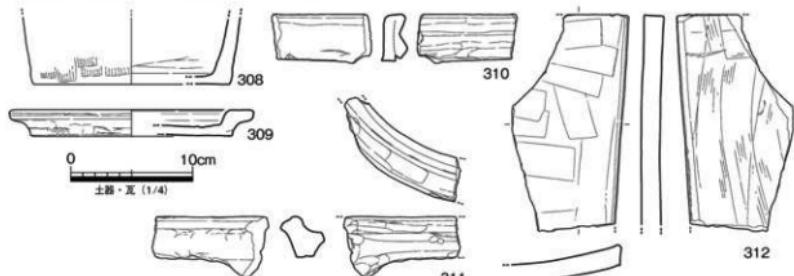
遺構の時期は不明である。



第168図 SK6014 平・断面図 (1/40)



第169図 SK6015出土遺物1 (1/4)

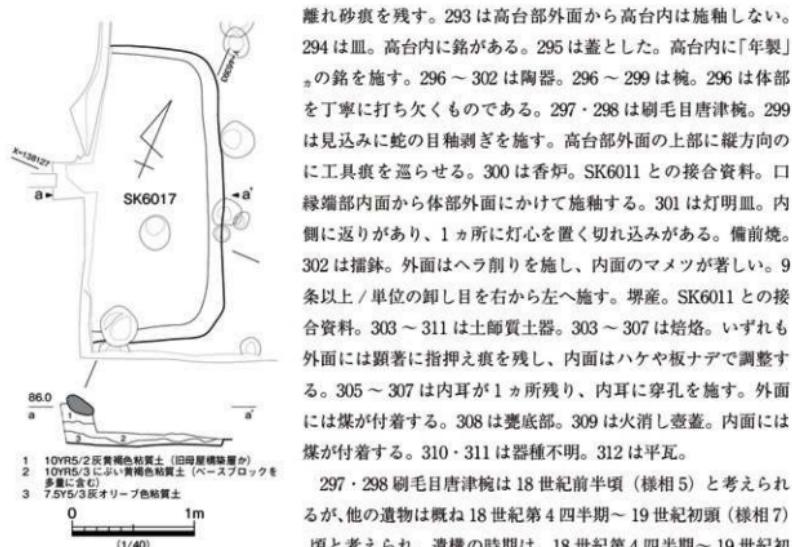


第170図 SK6015出土遺物2(1/4)

6区SK6015(第156・169・170図)

6区中央東寄りで検出した。遺構の東半分はSK6010により消失する。SD6001の南端に連続するような位置で検出し、SD6001との前後関係は明らかではない。隅丸長方形の土坑と考えられ、長軸1.63m、短軸1.19m以上、深さは9cmである。主軸方位はSD6001やSK6011と同じである。埋土中からは焼成不良の須恵器壺、磁器碗・皿、陶器刷毛目唐津碗・陶胎染付碗・燈明皿、土師質土器焙烙・火消壺蓋、燐瓦等多量の遺物が出土した。遺物の大半は土坑の北半部で出土した。最終的に廃棄土坑となったと考えられる。

289～295は磁器。289は盃。290～293は丸碗。290・293はやや焼成不良である。291は高台内に離れ砂痕を残す。293は高台部外面から高台内は施釉しない。



第171図 SK6017平・断面図(1/40)

頭頸と考えられる。

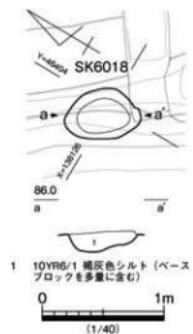
6区 SK6017（第171図）

6区北西部で検出した。隅丸長方形の土坑で、西側は調査区外へ延びる。長軸2.41m、短軸1.3m以上、深さ18cm、主軸方位はN24.18°Wである。重複する柱穴（SP6105・6107・6123・6124）はすべてSK6017の掘削後に検出しており、SK6017はこれらの柱穴より新しいと考えられる。埋土の上半部はベースブロックで占められ、人為的に埋め戻されたと考えられる。上部には家屋の構築土と考えられる層が堆積する。埋土中からは、土師質土器の小片が出土しただけであった。

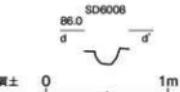
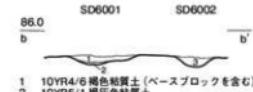
遺構の時期は不明である。

6区 SK6018（第172図）

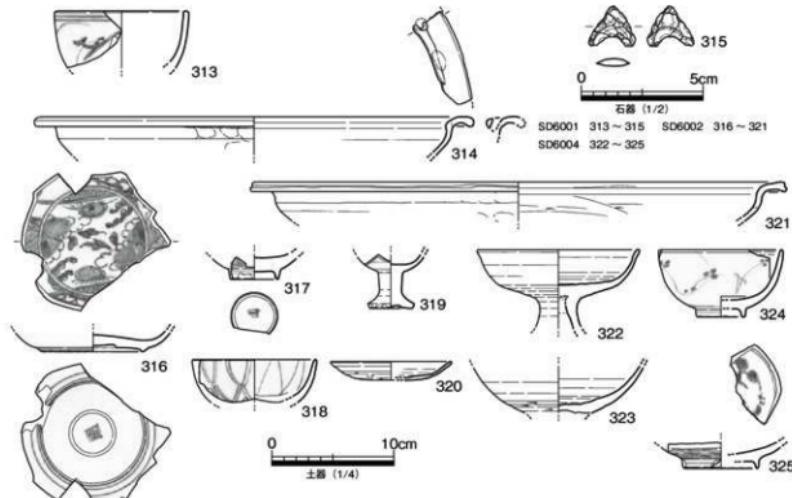
6区南東部で検出した。楕円形の土坑で、長軸0.62m、短軸0.43m、深さは17cmである。埋土は褐色シルトでベースブロックを多量に含む。遺構の前後関係から



第172図 SK6018 平・断面図 (1/40)



第173図 SD6001・SD6002・SD6006・SD6008 断面図 (1/40)



第174図 SD6001・SD6002・SD6004 出土遺物 (1/4・1/2)

SK6011、SD6002より古い。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

溝

6区 SD6001（第148・173・174図）

6区北部で検出した。3層の下面で検出した。遺構の前後関係により、SK6010及び重複して検出したすべての柱穴より古い。ほぼ直角に屈曲する溝で、東西部分が検出長7.1m、幅0.35m、深さ6cm程度、主軸方位はE31.28°N、南北部分が検出長5.65m、幅0.48m、深さ6cm程度、主軸方位はN37.26°Wである。屈曲部は北側調査区外へ延び、南端部はSK6015と重なる。SK6015との前後関係は明らかではないが、SK6015から南側では検出されておらず、同時併存で関連する遺構の可能性もある。埋土中からは、須恵器、陶器陶胎染付椀、磁器二重網目文椀、土師質土器焙烙・羽釜、燻瓦などが出土した。

313～315はSD6001から出土した遺物である。313は陶器椀。陶胎染付。314は土師質土器焙烙。内耳が1ヶ所に残る。315はサヌカイト製石鎌。四基式。

遺構の時期は、出土遺物により18世紀後半（様相6～7）頃と考えられる。

6区 SD6002（第148・164・173・174図）

SD6001の東側0.3～0.47m付近でこれに平行して検出した溝である。3層の下面で検出した。検出長10.73m、幅0.31m、深さ8cm、主軸方位はN35.26°Wである。遺構の前後関係によりSK6010・6011より古くSK6013より新しい。位置関係と溝の規模から、5区SD5002へ連続する可能性も考えられる。埋土中からは陶器瀬戸美濃産腰錦椀、磁器椀、土師質土器焙烙等が出土した。

316～321はSD6002から出土した遺物である。316～319は磁器。316は皿。蛇の目凹型高台で、高台内に「渦福」の銘がある。317・318は椀。317は高台内に銘がある。318は外面二重網目文、内面一重網目文を施す。319は仏飯器。320は陶器。備前焼灯明皿。外面には煤が付着する。321は土師質土器焙烙。外面は指押さえ、内面は板ナデで調整する。

蛇の目凹型高台皿（316）や備前焼灯明皿（320）、焙烙（321）が18世紀第4四半期～19世紀代（様相7～8）であることから、遺構の時期は、18世紀第4四半期～19世紀代と考えられる。

6区 SD6004（第164・174図）

6区南東部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長2.46m、幅0.64m、深さ21cm、主軸方位はN37.71°Wである。遺構の切り合い関係によりSK6010より古いが、SK6010より北側では検出していない。埋土中からは須恵器、磁器椀、土師質土器大甕破片などが出土した。

322～325はSD6004から出土した遺物である。322・323は須恵器高杯。7世紀中頃（佐藤I-1期）。323は焼成不良。324・325は磁器。324は椀。325は皿。

遺構の時期は、出土遺物とSK6010より古いことから、18～19世紀代である。

6区 SD6006（第148・173図）

6区南端付近で検出した。検出長0.4m、幅0.12m、深さ3cm、主軸方位はE37°Nである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

6区 SD6007（第148図）

6区北端で検出した。大部分は北側の調査区外へ延びる。東西方向の溝と考えられ、検出長1.4m、幅10cm以上、深さ12cm、主軸方位はE195°Nである。北壁断面からはSD6001より新しいと考えられる。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、SD6001より新しいことから、近世以降である。

6区 SD6008（第148・173図）

6区北西隅付近で検出した。検出長0.81m、幅0.16m、深さ5cm、主軸方位はN207.5°Wである。遺構の検出はSD6001より先で、SD6001より新しいと考えられる。埋土中からは出土遺物はなかった。

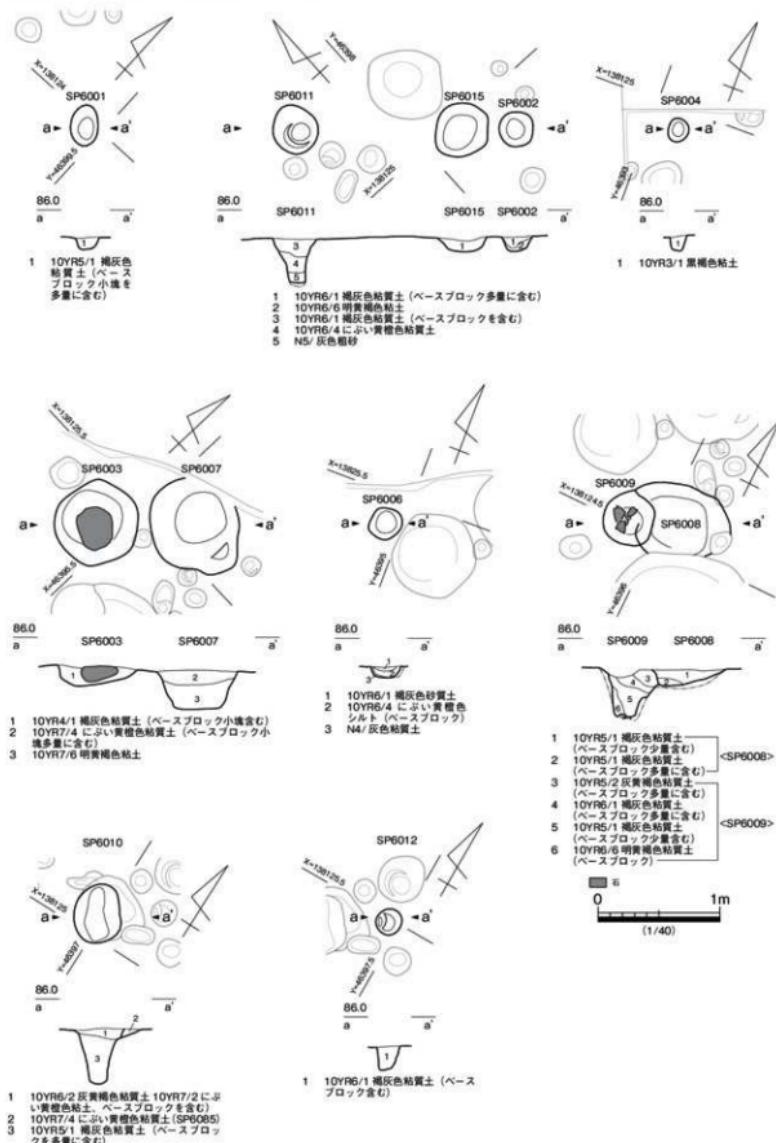
遺構の時期は、SD6001より新しいことから、近世以降である。

柱穴（第175～180図）

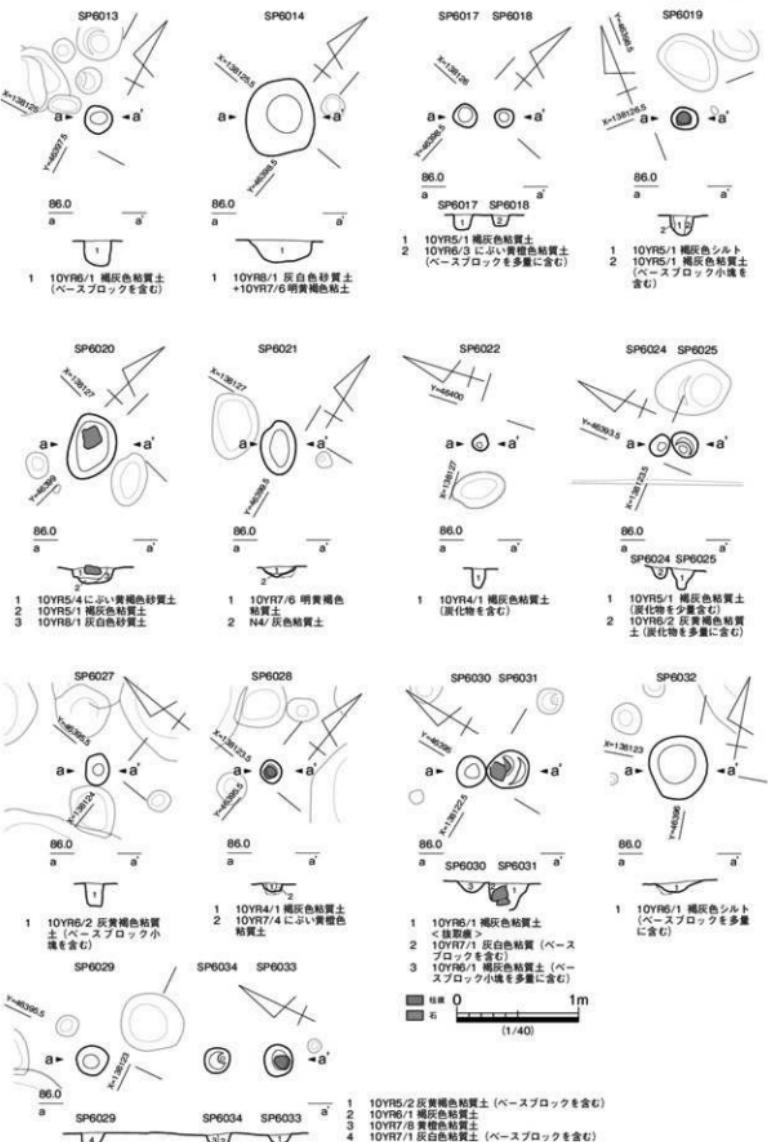
6区から120穴の柱穴を検出した。大半はSD6001の南西側で検出した。SD6001上で検出した柱穴はすべてSD6001より新しい。SD6001が埋没後も、これによる区画を踏襲して塀を作成し、その内側

第13表 6区柱穴一覧（1）

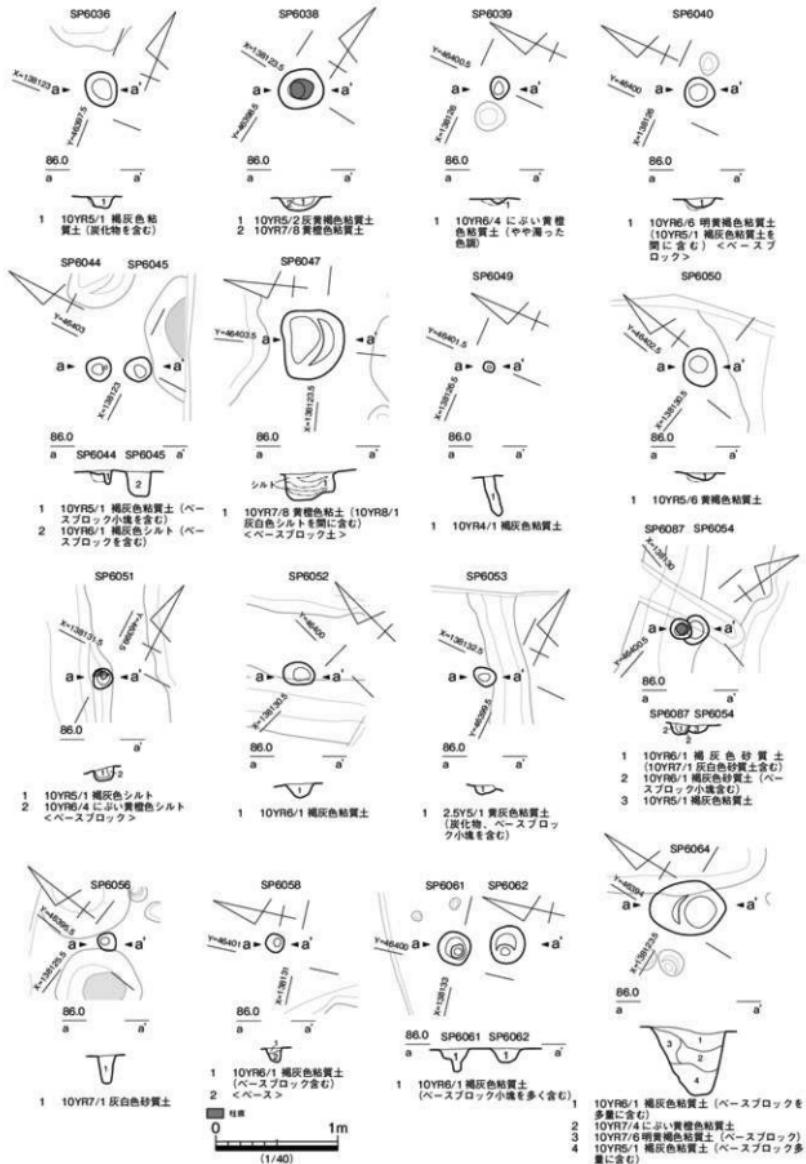
番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	報告遺物	出土遺物	備考
SP6001	楕円形	33	23	10		なし	
SP6002	円形	25	—	12		なし	
SP6003	円形	55	—	15		なし	
SP6004	円形	20	—	13		なし	
SP6005	円形	63	—	15		なし	
SP6006	円形	28	—	7		なし	礎石？
SP6007	不整円形	68	—	34		埴瓦	
SP6008	楕円形	40	—	38		土器小片	SP6009を切る 礎石 SP6008に切られる
SP6009	円形	42	—	45		須恵器	埴石あり
SP6010	楕円形	40	—	46		なし	SP6085を切る
SP6011	円形	36	—	36		なし	
SP6012	円形	20	—	20		なし	
SP6013	円形	21	—	20		なし	
SP6014	不整円形	52	—	18		なし	礎石？
SP6015	円形	41	—	12		なし	礎石？
SP6016	楕円形	15	9	不明		なし	
SP6017	円形	15	—	9		なし	
SP6018	円形	14	—	8		なし	
SP6019	楕円形	21	—	16		なし	柱痕
SP6020	楕円形	33	—	13		なし	礎石？ 石
SP6021	楕円形	27	—	8		なし	
SP6022	円形	11	—	16		なし	
SP6023	円形	8	—	不明		陶器土板	
SP6024	円形	13	—	5		なし	
SP6025	楕円形	24	17	16		なし	
SP6026	円形	12	—	不明		なし	



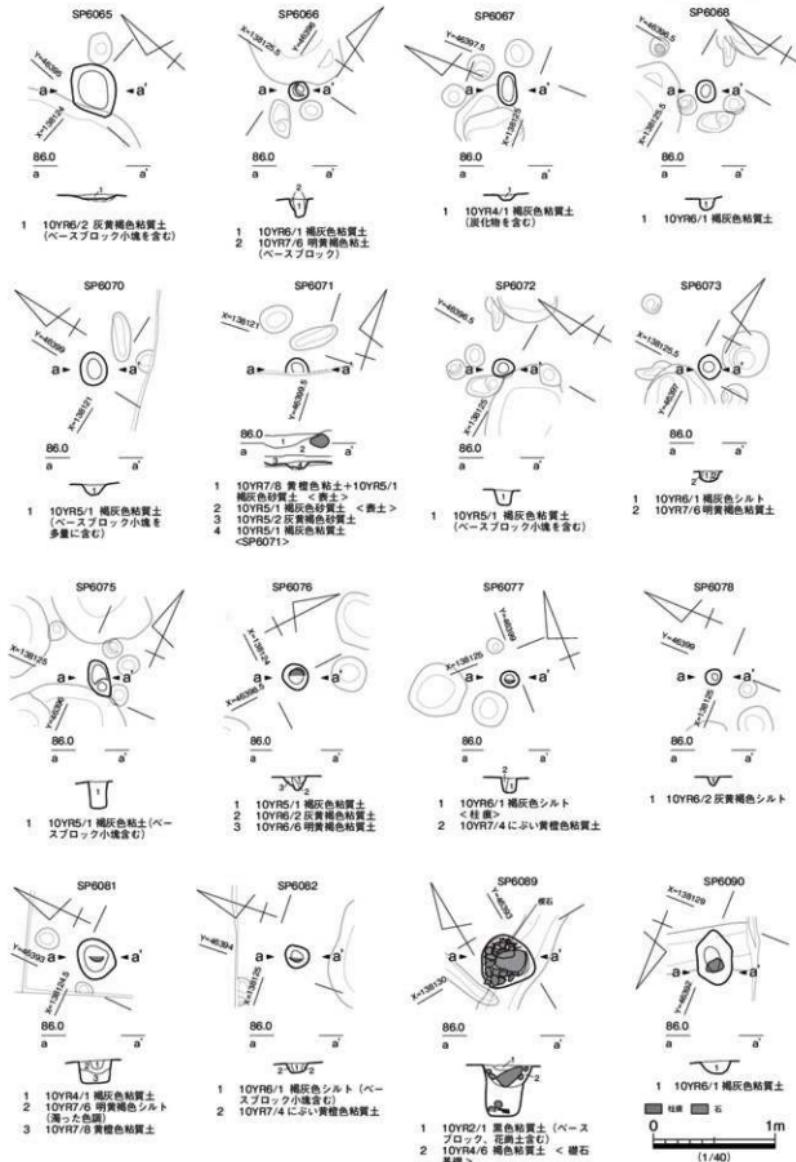
第175図 6区柱穴平・断面図1 (1/40)



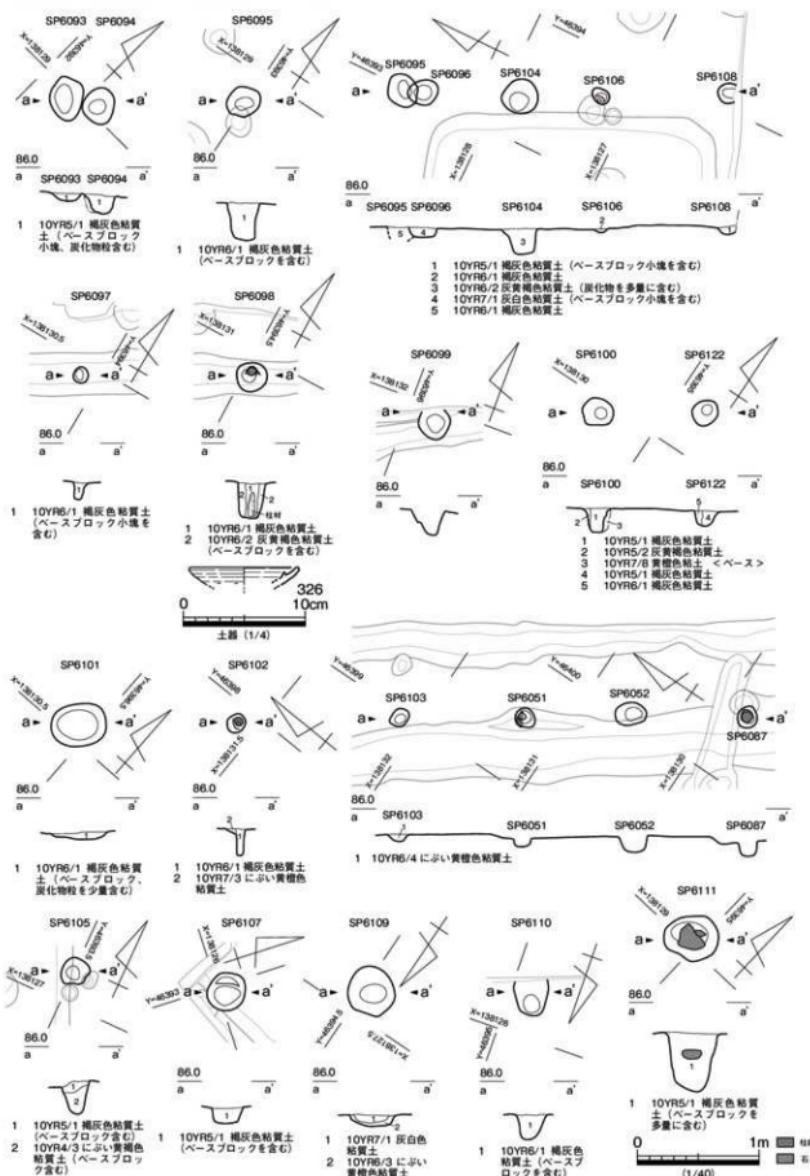
第176図 6区柱穴平・断面図2 (1/40)



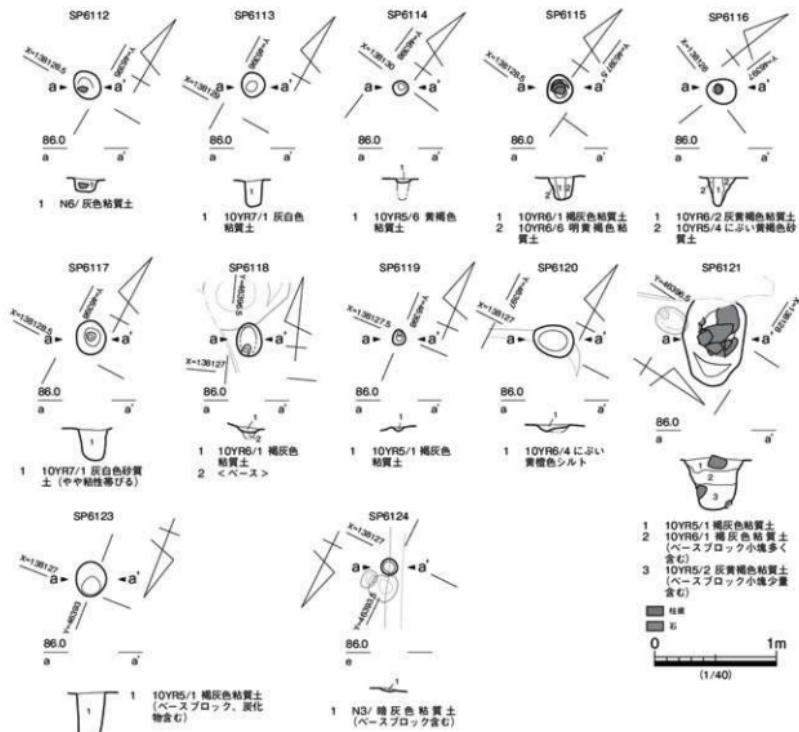
第177図 6区柱穴平・断面図3 (1/40)



第178図 6区柱穴平・断面図4 (1/40)



第 179 図 6 区柱穴平・断面図 5 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第180図 6区柱穴平・断面図6 (1/40)

第14表 6区柱穴一覧 (2)

番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	報告遺物	出土遺物	備考
SP6027	楕円形	25	19	19		なし	
SP6028	円形	16	—	6		なし	柱痕
SP6029	円形	24	—	14		なし	
SP6030	円形	24	—	8		なし	
SP6031	円形	33	—	21		なし	柱痕
SP6032	円形	38	—	8		なし	礫石?
SP6033	円形	22	—	15		なし	柱痕
SP6034	円形	19	—	7		なし	礫石?
SP6036	円形	24	—	9		須恵器	
SP6038	楕円形	35	—	11		なし	
SP6039	楕円形	14	—	4		なし	
SP6040	円形	24	—	7		なし	
SP6041	円形	11	—	不明		なし	
SP6042	円形	8	—	不明		なし	
SP6043	円形	10	—	不明		なし	
SP6044	円形	18	—	11		なし	柱痕

第15表 6区柱穴一覧 (3)

番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	報告遺物	出土遺物	備考
SP6045	円形	20	—	21		なし	
SP6046	楕円形	101	34 ~	不明		なし	
SP6047	不整円形	43	—	21		なし	
SP6048	円形	16	—	不明		なし	
SP6049	円形	9	—	32		なし	杭?
SP6050	楕円形	24	—	6		須恵器	
SP6051	円形	16	—	10			
SP6052	楕円形	24	18	11		須恵器	
SP6053	円形	18	—	7		なし	
SP6054	円形	20	—	9		土師質土器大甕	SP6087に切られる
SP6055	円形	12	—	21		なし	杭?
SP6057	円形	16	—	13		なし	
SP6058	円形	13	—	4		なし	
SP6059	円形	8	—	4		なし	
SP6060	円形	7	—	3		なし	
SP6061	円形	24	—	19		土器小片	
SP6062	円形	27	—	11		なし	
SP6063	円形	13	—	不明		なし	
SP6064	楕円形	62	—	50		現代の棍 須恵器	
SP6065	楕円形	36	—	4		なし	礎石?
SP6066	円形	16	—	15		なし	柱痕
SP6067	楕円形	28	14	4		須恵器 夔	
SP6068	円形	13	—	9		なし	
SP6069	円形	13	—	10		なし	
SP6070	楕円形	20	—	8		なし	
SP6071	円形	18	—	6		なし	
SP6072	円形	14	—	12		なし	
SP6073	円形	16	—	9		なし	
SP6074	楕円形	25 ~	14 ~	8		なし	
SP6075	楕円形	31	17	22		なし	
SP6076	円形	18	—	12		なし	柱痕あり
SP6077	円形	13	—	12		なし	柱痕あり
SP6078	円形	11	—	7		なし	
SP6079	円形	12	—	6		なし	
SP6080	円形	5	—	不明		なし	
SP6081	円形	27	—	19		なし	
SP6082	円形	18	—	8		なし	柱痕あり
SP6083	円形	12	—	6		なし	
SP6084	楕円形	20	14	16		なし	
SP6085	楕円形	15	—	6		なし	SP6010に切られる
SP6086	円形	11	—	10		なし	
SP6087	円形	16	—	9		須恵器	柱痕あり SP6054を切る
SP6089	不整円形	45	43	42		陶器 壁瓦	柱穴内に石
SP6090	楕円形	45	26	40		土師質土器	柱穴内に壁瓦
SP6093	楕円形	25	—	6		なし	礎石?
SP6094	円形	26	—	15		壁瓦	
SP6095	円形	28	—	31		なし	
SP6096	楕円形	24	19	8		なし	
SP6097	円形	12	—	14		なし	杭
SP6098	円形	23	—	29	326(陶器 灯明器)	木	柱痕あり
SP6099	円形	22	—	16		なし	
SP6100	円形	22	—	19		なし	柱痕あり

第16表 6区柱穴一覧 (4)

番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	報告遺物	備考
SP6101	楕円形	45	34	6	なし	礎石?
SP6102	円形	14	—	22	なし	柱痕 桟?
SP6103	円形	17	—	6	なし	柱痕あり
SP6104	円形	30	—	11	なし	
SP6105	円形	24	—	27	なし	
SP6106	楕円形	19.5	14	3	なし	
SP6107	円形	28	—	13	なし	
SP6108	円形	16	—	6	なし	
SP6109	円形	37	—	9	なし	礎石?
SP6110	楕円形	28~	28	21	なし	
SP6111	不整円形	44	36	47	須恵器 壺	石
SP6112	円形	19	—	10	なし	石
SP6113	円形	21	—	15	なし	
SP6114	円形	13	—	3	なし	
SP6115	円形	21	—	18	土器小片	柱痕あり
SP6116	楕円形	24	16	23	なし	柱痕あり
SP6117	円形	25	—	25	陶胎染付 京焼風陶器	
SP6118	楕円形	27	20	4	なし	
SP6119	円形	8	—	3	なし	
SP6120	楕円形	32	24	5	なし	礎石?
SP6121	楕円形	49	—	41	磁器碗	礎石? 石
SP6122	円形	20	—	12	なし	柱痕あり
SP6123	円形	23	—	37	土師質土器小片	
SP6124	円形	12	—	3	なし	
SP6125	円形	28	—	7	なし	
SP6126	円形	26	—	12	なし	

に当たる南西部分で柱穴による施設を造ったと考えられる。

柱穴は一部にやや大きめのものがあるものの、大半が直径0.1~0.3m、深さ5~20cm程度の小規模なものである。柱穴がSD6001・SD6002と同じ方向に並ぶものも認められ、周辺の地割に規制されたと考えられる。大きめの柱穴の中には礎石と考えられる石を検出した柱穴もあった。しかし、明確に掘立柱建物と考えられる柱列は認められず、復元には至らなかった。

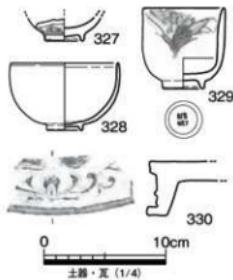
柱穴の埋土中からは、須恵器の他、陶磁器類が出土しており、概ね近世以降と考えられる。

柱穴の詳細は、第13~16表にまとめた。

6区遺構に伴わない遺物（第181図）

328のみ上面精査中、他は壁切りの際に出土した遺物である。

327は磁器碗。高台部に砂が付着する。328は陶器碗。高台内は無釉である。329は磁器湯呑。施文は、范押し等により文様の輪郭を作り、染付を施したと考えられる。高台内に「岐427」の押印がある。戦時統制品で、昭和16年~20年の間に作られたものである。330は軒平瓦。瓦當に均整唐草文を施す。



第181図 6区包含層
出土遺物 (1/4)

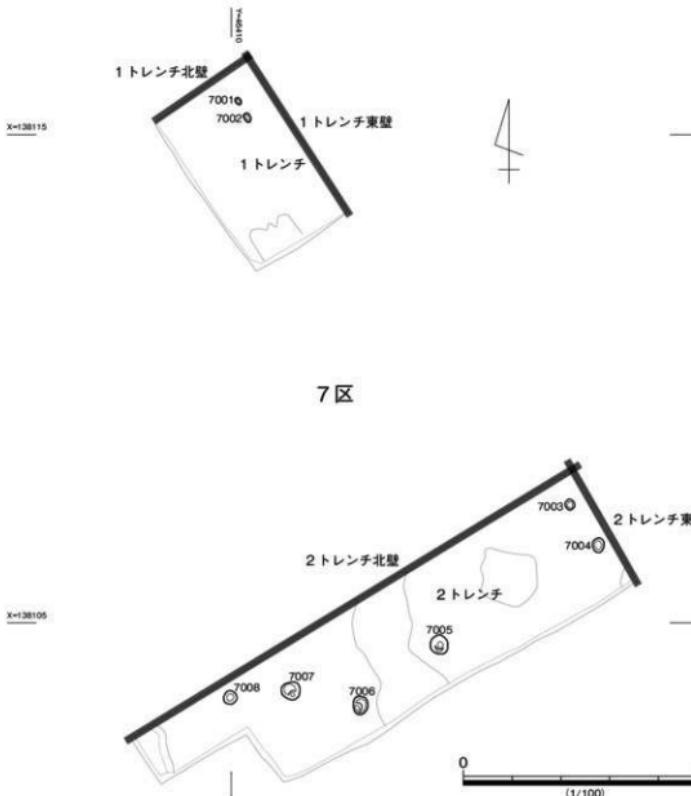
第6節 7区の調査

7区はもと宅地であった。1トレンチ（北側）と2トレンチ（南側）を設定して調査を行った。遺構は希薄で、柱穴を1トレンチで2穴、2トレンチで6穴検出した。

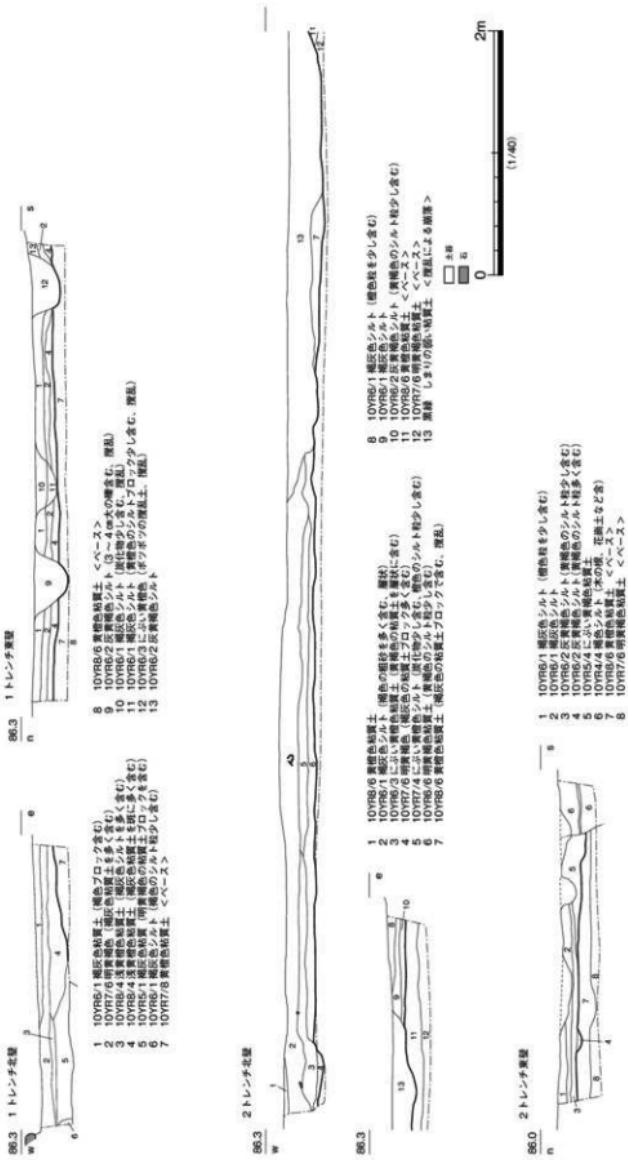
1 土層（第182・183図）

1トレンチは北壁と東壁で土層断面図を作成した。いずれも造成土の下部でベースを検出した。柱穴は2穴検出した。検出面の標高から、いずれもベース上面で検出したと考えられる。

2トレンチは北壁と東壁で土層断面図を作成した。堆積状況は1トレンチと同様で、造成土の下部でベースを検出した。柱穴を6穴検出した。

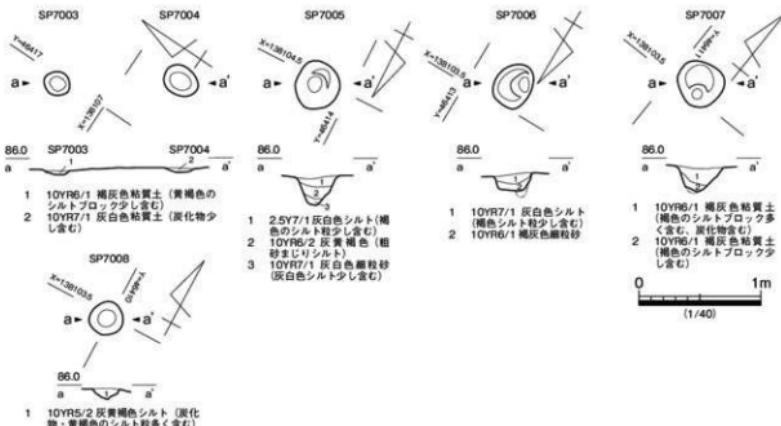


第182図 7区平面図 (1/100)



2 柱穴（第184図）

いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。また、掘立柱建物や構列を構成する柱穴は認められなかつた。詳細は第17表のとおりである。



第184図 7区柱穴平・断面図 (1/40)

第17表 7区柱穴一覧

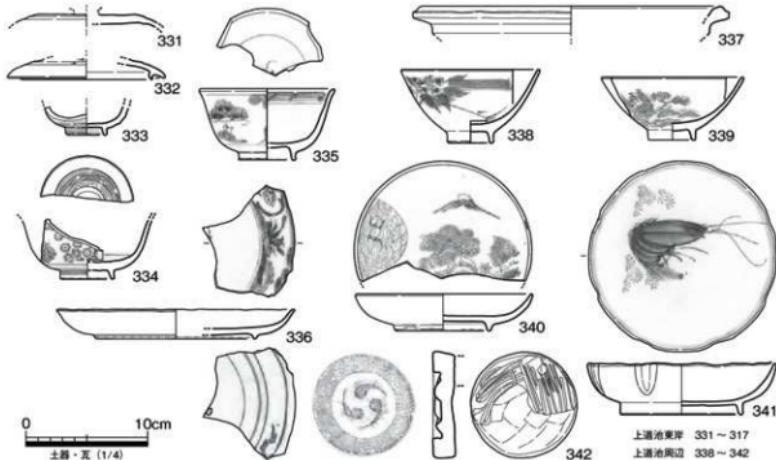
番号	形状	長軸	短軸	深さ	報告遺物	出土遺物	その他
SP7001	楕円形	15.8	10.9	29		なし	
SP7002	楕円形	19.3	11.5	29		なし	
SP7003	円形	20	—	4		なし	
SP7004	楕円形	23	17.4	4		なし	
SP7005	円形	34	—	22		なし	
SP7006	円形	30	—	14		なし	
SP7007	円形	42	—	19		なし	
SP7008	円形	24	—	8		なし	

第7節 その他の出土遺物（第185図）

1～3区で須恵器の破片が多数出土し、その中には焼成失敗品が多数含まれていたことから、近隣に須恵器窯跡の存在の可能性が考えられたため、1～3区の西側に接する上道池の水を抜いた時期に合わせて周辺の踏査を行った。踏査の際に採集した遺物である。踏査の結果、窯跡は認められなかった。

331～337は上道池東岸を踏査した際に採集した遺物である。331・332は須恵器蓋。331は頂部に摘みの痕跡を残す。332は口縁端部内面に返りが付く。1～3区西部の包含層から出土した遺物と概ね同時期で、7世紀後半頃と考えられる。333～336は磁器。333～335は碗。334は見込みに蛇の目軸調ぎを施し、外面の文様は型紙刷りによる。336は皿。底部外面にハリ支え痕を残す。337は土師質土器焙烙。外面にはススが付着する。外面にはほとんど調整痕がなく、外型成型による。

338～342は上道池周辺で採集した遺物である。338～341は磁器。338・339は碗、340・341は皿。341は体部を輪花形にする型成型である。342は軒棟瓦の丸瓦部分が剥離したもの。棟瓦が付く部分には、瓦当が圧着しやすいようにするヘラにより刻み目を施す。



第185図 その他の出土遺物（1/4）

第 7 章 上道池東遺跡の自然科学分析

第 1 節 上道池東遺跡炭素年代測定

株式会社吉田生物研究所

はじめに

香川県に位置する上道池東遺跡 SF01 より検出された試料 3 点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った（試料採取地点は第 115 図参照）。

試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 18 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 18 表 測定試料および処理

No	試料データ	前処理
6	種類：炭化材 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）
7	種類：炭化材 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）
8	種類：炭化材 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）

結果

第 19 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 衔を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ:IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、

OxCALの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

第19表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
6	-27.80 \pm 0.22	1356 \pm 18	1355 \pm 20	653-666 cal AD (68.27%)	646-678 cal AD (92.96%) 752-757 cal AD (2.49%)
7	-27.32 \pm 0.22	1367 \pm 18	1365 \pm 20	651-663 cal AD (68.27%)	644-672 cal AD (95.45%)
8	-28.33 \pm 0.21	1349 \pm 18	1350 \pm 20	654-669 cal AD (68.27%)	648-681 cal AD (87.70%) 748-758 cal AD (6.44%) 768-771 cal AD (1.30%)

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887. 香川県上道池東遺跡出土炭化材及び木製品の樹種調査結果

第2節 上道池東遺跡出土炭化材及び木製品の樹種調査結果

株式会社吉田生物研究所

1. 試料

試料は香川県上道池東遺跡から出土した炭化材及び木製品 10 点である（No.1～8 試料採取地点は第 115 図参照）。

2. 観察方法

試料 No.1～8 については、数mm四方の破片を採取してエボキシ樹脂に包埋し、研磨して木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片の薄片プレパラートを作製した。また No.9,10 については、剃刀で遺物本体から木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取してプレパラートを作製した。これらのプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹 2 種、広葉樹 2 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

（遺物 No.9）

（写真 No.9）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1～4 個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

2) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

（遺物 No.10）

（写真 No.10）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で 1～15 細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

3) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

（遺物 No.8）

（写真 No.8）

木口では年輪が確認出来ないので年輪付近状況は不明であるが、円形ないし稍円形で大体単独の道管

が縦方向に配列している。途中からは急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柵目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の單列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。木口についてはやや不明瞭ながら、以上要素からクリと考えられる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

4) ツツジ科スノキ属シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunberg)

（遺物 No.1 ~ 7）

（写真 No.1 ~ 7）

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（~50 μm）が、単独あるいは2~3個複合して散在する。柵目では道管は単穿孔、階段穿孔（バー数1~10）と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は凸レンズ形を呈する直立細胞の単列のものと、5~8細胞列で高さがきわめて高い多列放射組織（~2mm以上）からなる。多列部には鞘細胞が見られる。シャシャンボは本州（関東南部、東海、石川以西）、四国、九州に分布する。

第20表 上道池東遺跡出土炭化材及び木製品同定表

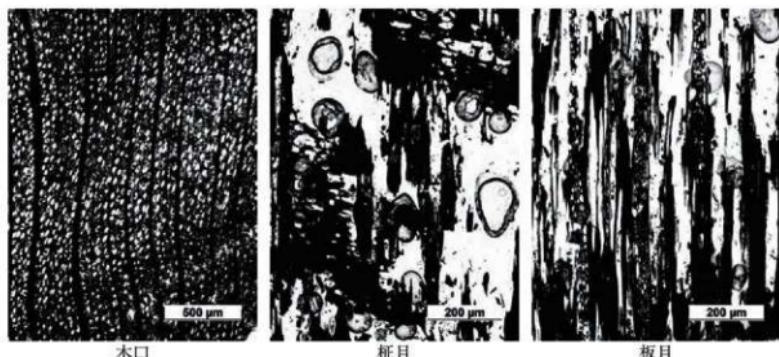
No.	注記番号	遺椎名	試料種類	属種
1	F0067	SF01	炭化材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
2	F0068	SF01	炭化材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
3	F0069	SF01	炭化材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
4	F0070	SF01	炭化材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
5	F0071	SF01	炭化材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
6	F0072	SF01	炭化材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
7	F0073	SF01	炭化材	ツツジ科スノキ属シャシャンボ
8	F0074	SF01	炭化材	ブナ科クリ属クリ
9	K0072	SK6010	343 蓋（本体）	マツ科モミ属
10	K0072	SK6010	343 蓋（把手）	マツ科マツ属[二葉松類]

参考文献

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
- 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ~V」京都大学木質科学研究所（1999）
- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
- 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
- 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
- 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第30冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

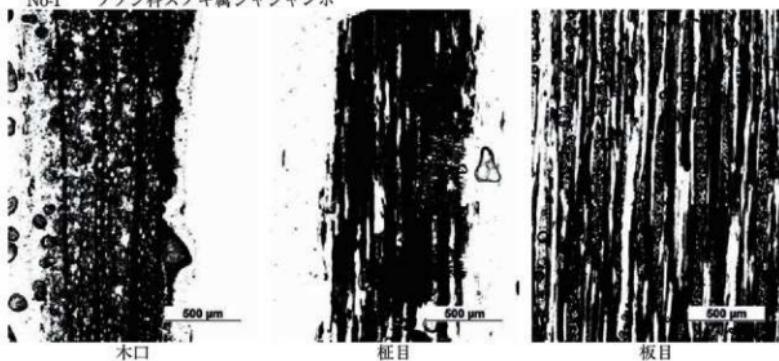
使用顕微鏡

Nikon DS-Fi1



No-1 ツツジ科スノキ属シャシャンボ

P-1

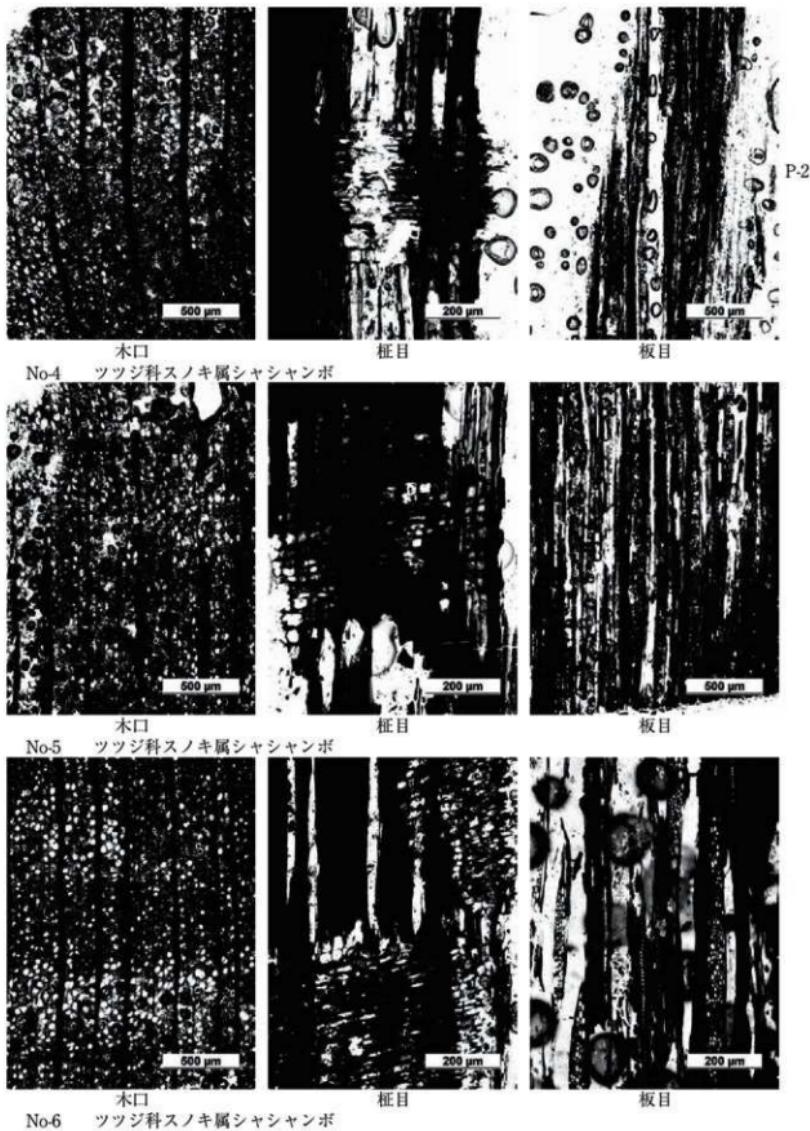


No-2 ツツジ科スノキ属シャシャンボ

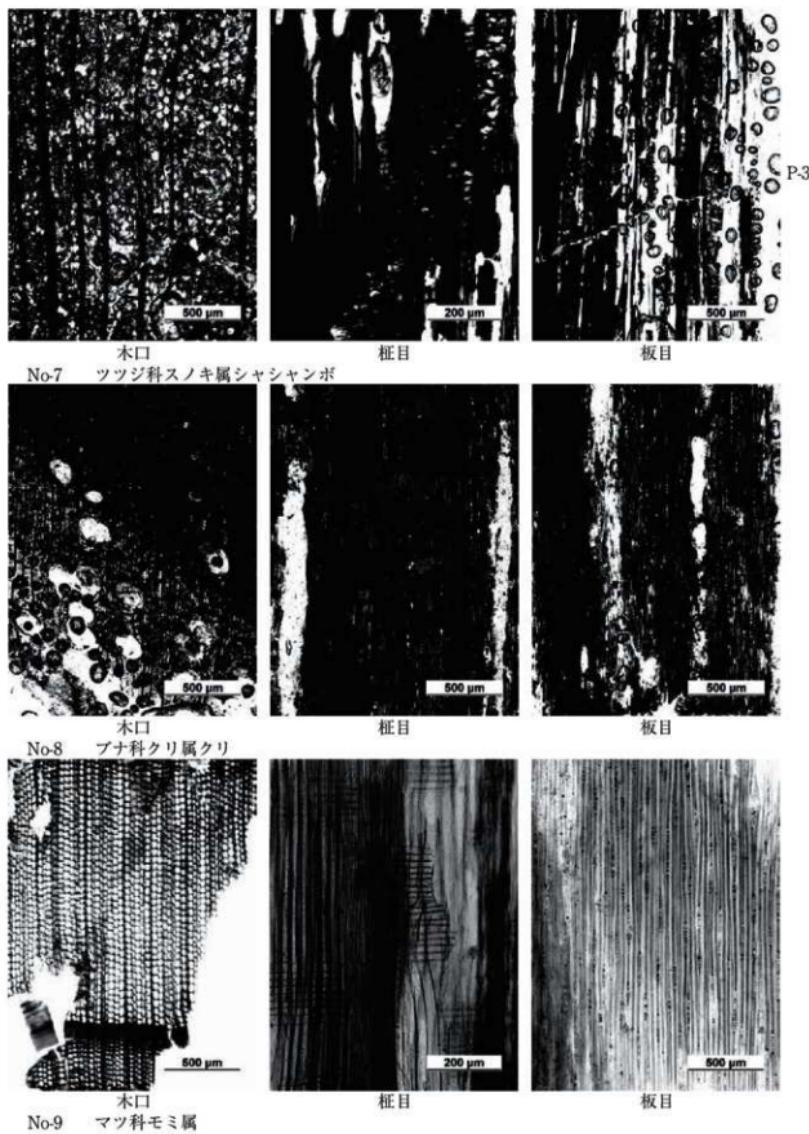


No-3 ツツジ科スノキ属シャシャンボ

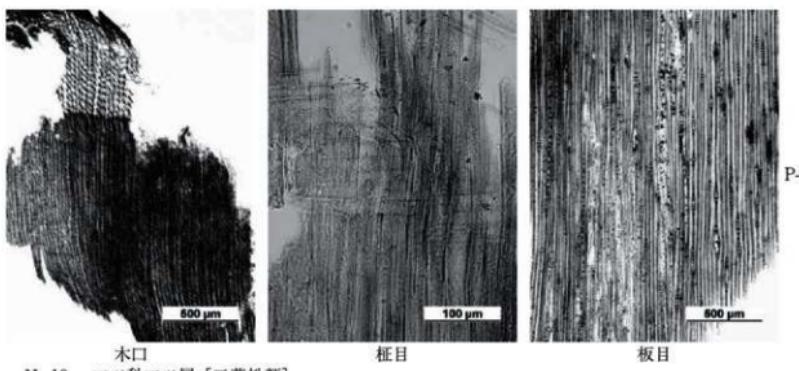
第186図 炭化材顕微鏡写真1



第187図 炭化材顕微鏡写真2



第188図 炭化材3・木製品顕微鏡写真1



No-10 マツ科マツ属〔二葉松類〕

第189図 木製品顕微鏡写真2

第8章 上道池東遺跡 まとめ

第1節 遺構の変遷

1. 第5層形成以前、第5層上面検出遺構（14世紀代以前）（第190図）

1～3区では、明確に第5層（中世包含層）の下部から検出した遺構はSK01、SK03、第5層の堆積がない場所で第4層の下部で検出したのがSK04、SK05のみであった。SK06とした遺構は第5層掘削中に検出したもので、須恵器壺の大きな破片が出土しているが、大きくは第5層の中で捉えられるであろう。

SB01は、包含層の堆積しない田1面で検出したもので、周辺の地割と同じの方向を向かないことから先行する遺構の可能性を考えたが、確定な時期は不明である。

SX01は第5層上面で検出した。SF01はSX01掘削後に検出しており、掘り込み層位は第5層下面である可能性も残るが、¹⁴C年代測定の結果、SF01から出土した炭化材は14世紀中頃であることが判明し（第7章第1節）、SX01とは同時期の可能性が高いと考える。

4～7区で中世まで遡る遺構は認められなかった。

1～3区包含層からは7世紀後半～末を中心とした須恵器が大量に出土した。中には失敗品が多く認められ、窯跡由来と考えられる。香南町には7世紀後半～9世紀代の須恵器窯跡が点在しており、それらとの関連が注目される。

2. 第4層上面検出遺構（近世以降）（第190図）

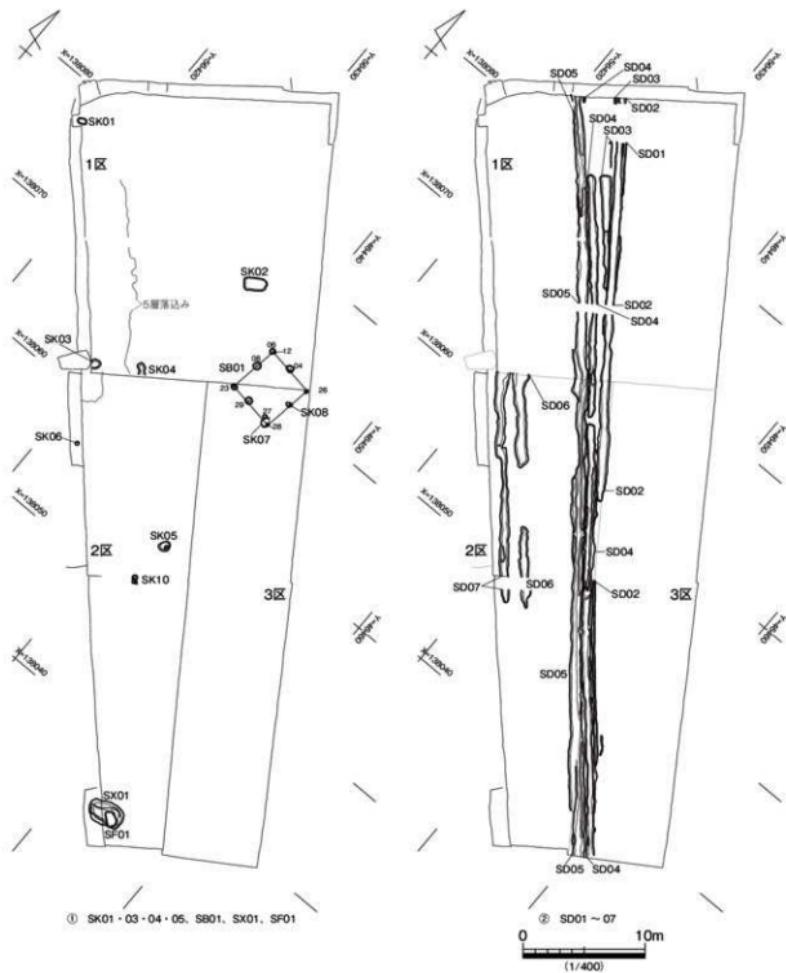
1～3区では、第4層を掘り込む、または第3層の窪み部分として溝群が形成される。第3層は近代～昭和前期の包含層であり、近代以前に溝群が形成されたと考えられる。溝群は、調査直前には1面の水田となっていた土地を南北方向に2分割する位置にある。調査区西端付近でも南北方向の溝群を検出しており、さらに水田面が分割されていた可能性も考えられる。

溝群より西側では、鋤溝と牛の踏跡が検出された。鋤溝群の幅は20cm程度、鋤溝間の芯々距離は概ね50～55cm程度である。

4区と7区については遺構の内容ははっきりとはしなかったが、5・6区では近世～現代の遺構群を検出した。

6区では、溝群と土坑群を検出した。溝は小規模ではあるが、現在の地割に連なる溝群であった。大型土坑であるSK6010・6011・6015からは、18世紀後半～19世紀代の遺物が多量に出土した。調査区内では建物等は確認できなかったが、周辺にはこの時期の集落があったと考えられる。

5区では、昭和20年代に建造された建物、及び建物建造のため埋め戻された土坑・溝を検出した。建物は、道路用地となるため取り壊された、調査直前まで倉庫として使用されていた建物であるが、聞き取り調査と合わせ、建物の構造や使用方法を明らかにすることができた。建物の下面で検出した土坑や溝は、出土遺物からいずれも昭和20年代以降と考えられるもので、6区の遺構群よりは新しいものであろう。



第190図 遺構変遷図 (1/400)

第2節 高松市香南町の窯跡出土須恵器について（第192図）

上道池東遺跡1～3区の包含層では、7世紀後半～末頃を中心とした須恵器が多く出土した。中には破片が溶着する個体など焼成不良品も認められ、生産地に由来するものと考えられる。上道池周辺を踏査したところ窯跡を見つけることはできなかったが、香南町では7世紀後半～9世紀代の古代窯跡が多く所在する。上道池東遺跡出土の須恵器は、これらの窯跡群に連なる窯跡で焼成された可能性がある。

上道池東遺跡の約800m南では茶園窯跡、その150m西側では大坪窯跡の存在が知られている。また、その南側1km付近で音谷池東岸窯跡、池谷窯跡がある。これらは音谷池が存在する谷筋の東岸（茶園窯跡、音谷池東岸窯跡）、西岸（大坪窯、池谷窯跡）に相当する。また、西側の谷筋を隔てた位置ではあるが、大坪窯跡の約1.6km西北西側には新池窯跡がある。

上道池東遺跡から出土した須恵器の理解を深めるため、上道池東遺跡の南側に広がる音谷池窯跡群から出土した資料の中で、当センターで所蔵する旧瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵資料に収蔵されている須恵器を紹介したい。

①茶園窯跡出土資料（第191図）

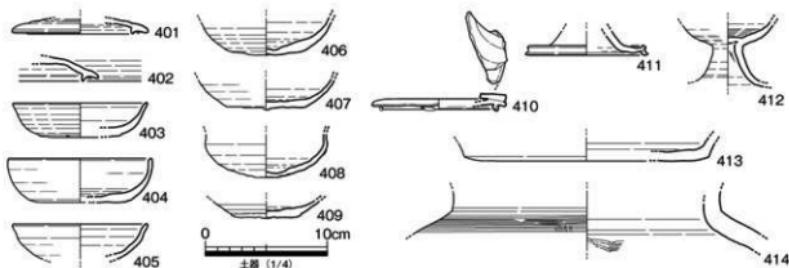
401～414は茶園窯跡出土資料である。401・402は蓋。いずれも小片。いずれも退化した返りが付く。接地は返りの部分である。403～405は杯。404は焼成不良、405は歪みがある。406～409は杯底部か。408は外面に自然釉が掛り、歪みがある。410は蓋。わずかに返りを持つ扁平な器形である。小片。上面に杯または蓋の小片が溶着する。411・412は高杯。412は歪みが大きく、脚内面奥部以外は自然釉が付着する。413は大型器種の底部か。414は甕。外面にはタタキ後カキ目を施す。

遺物の時期は、概ね7世紀中頃～後半（佐藤編年I-1）頃、403・404は7世紀後半～8世紀初頭頃（佐藤編年I-2）と考えられる。上道池東遺跡1～3区の出土資料に多く認められる形態のものである。

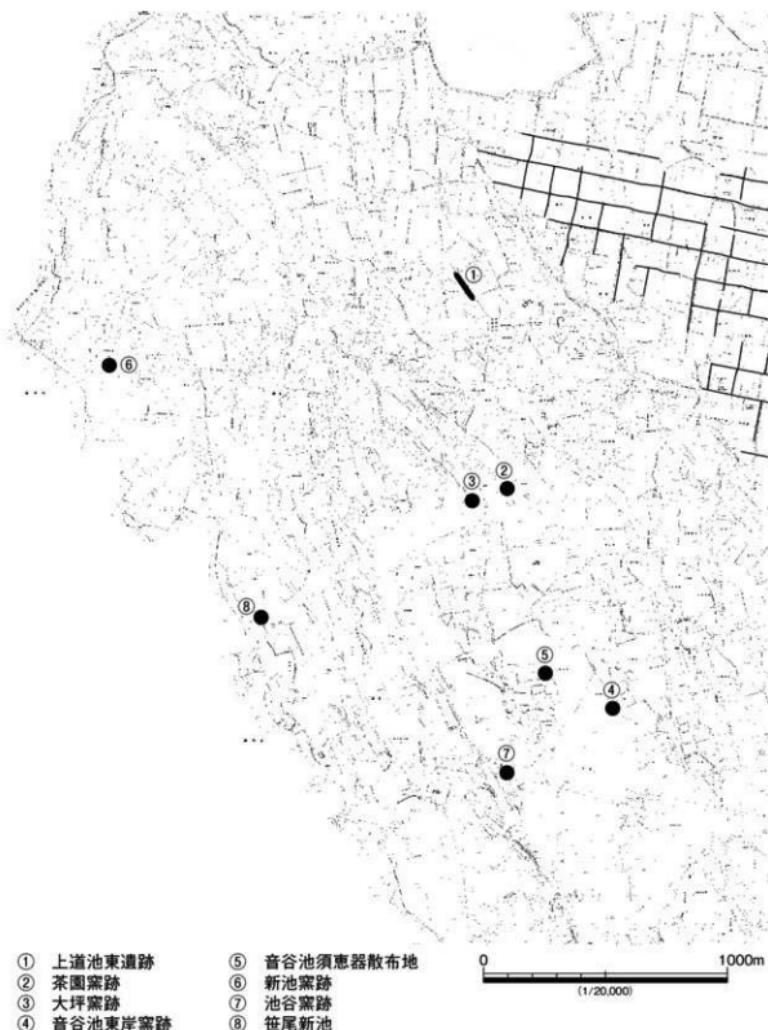
器種は、蓋B、杯B、高杯A、甕が認められ、蓋B、杯Bが主要な器種であったと考えられる。^{註3)}

②大坪窯跡出土資料（第193図）

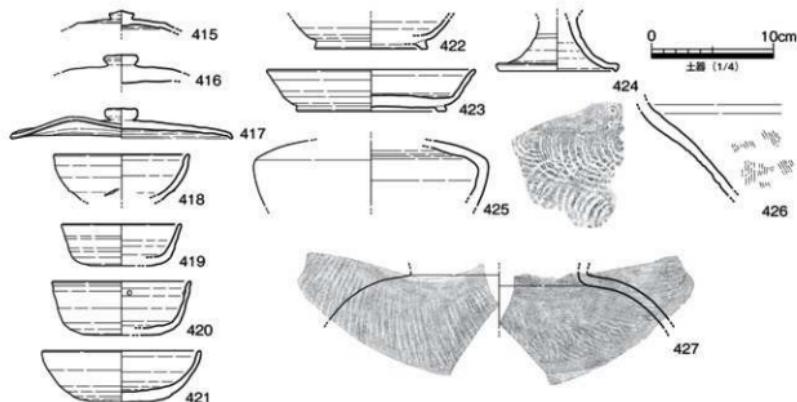
415～427は大坪窯跡出土資料である。415～417は蓋。415は擬宝珠型の摘み、笠形の器形と考えられる。416・417は扁平な摘みを持つ。416は焼成不良で土師質の焼成である。417は扁平な器形と考えられるが、歪みが著しい。418～421は杯。418は外面に土器小片が溶着する。口縁部はやや歪みが



第191図 茶園窯跡出土須恵器（1/4）



第192図 高松市香南町の主要窯跡図 (1/20,000)



第193図 大坪窯跡出土須恵器 (1/4)

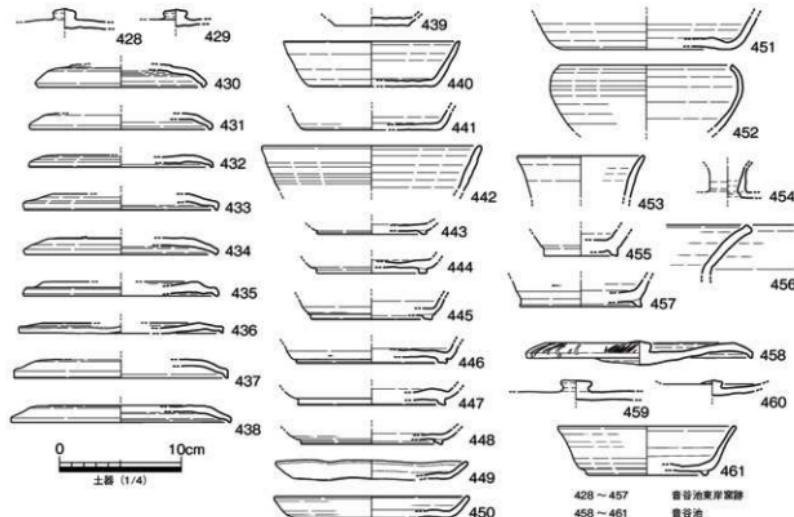
ある。420は内面に土器小片が溶着する。421は歪みがあり、やや焼成不良で土師質の焼成状態の部分が見られる。土器には「池西村大坪 音谷竈趾 一二、二、三」の注記がある。422は高台付杯、423は高台付皿である。422はやや焼成不良である。424は高杯。脚部中央付近に沈線が巡るが、1周せず途中で途切れる。425は壺の体部。肩が張る器形で、頸部は欠損する。「池西村大字西庄字竈尾中尾池の東（かま池北）植田治平氏採集 一二、二、三 寺田」の注記がある。426・427は甕。ともに焼成不良で土師質の焼成である。出土資料は、概ね7世紀後半～8世紀前半（佐藤編年I・2～II・1期）と考えられる。

器種は、杯B、蓋C、杯C、高杯A、壺、甕が認められる。蓋Bは認められず、高杯はやや長脚化する。

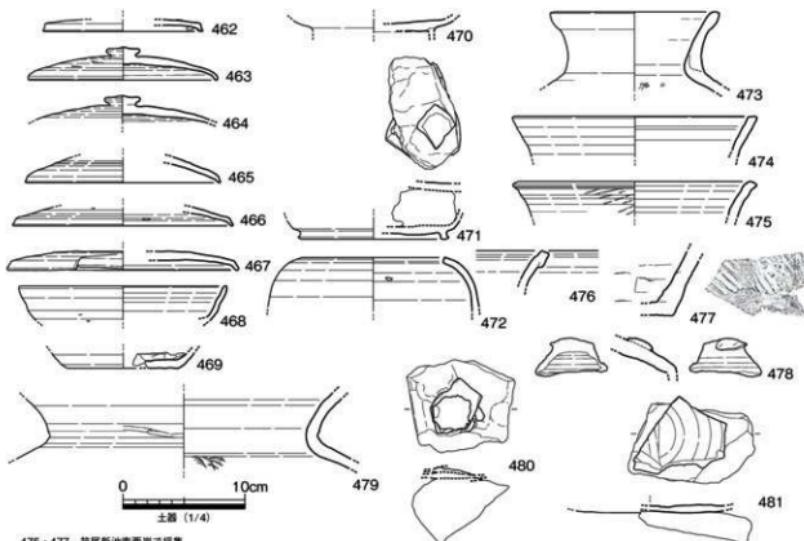
③音谷池東岸窯跡出土資料、音谷池出土資料（第194図）

428～457は音谷池東岸窯跡出土資料である。428～438は蓋。428・429は摘み部分でともに扁平な摘みである。430～438はいずれも小片。430がやや笠型を示す他は扁平な器形で、430・431・434・438は口縁端部の折り曲げは強くない。431と436は歪みがみられ、434は焼成不良である。口径は漸次的に大きくなるが、強いて分ければ13.5cm(430)、14.6～15.8cm(431～435)、16.7～17.8cm(436～438)に分かれよう。439～441は杯。439は底径が小さく、10世紀前半頃（佐藤編年III・2）下るものか。439・440は底部外面に火襷が残る。442は杯口縁部小片。443～448は高台付杯。底径は8.8～9.6cm(443～445)と11.6～12.1cm(446～448)に分かれる。445は焼成不良である。底径が大きいほうは皿の可能性がある。449・450は皿。口径は15.7cm程度。449は歪みが著しい。451は大型器形の底部。452は鉄錆型土器。453は平瓶口縁部。454は長頸壺頸部。455・457は高台付壺底部か。456は壺口縁部小片。

蓋は、器形や口径から8世紀後半～9世紀前半頃（佐藤編年II・2～4期）、杯・皿類は8世紀中頃～8世紀後半頃（佐藤編年II・2～3期）頃、452は8世紀中頃、454は8世紀中頃～後半頃と考えられよう。蓋がやや新しい傾向が認められる可能性があるが、概ね資料群の時期は8世紀中頃～後半と考えられる。



第194図 音谷池東岸窯跡・音谷池出土須恵器 (1/4)



第195図 新池窯跡出土須恵器 (1/4)

458～461 は音谷池採集資料である。458～460 は蓋。458 は歪みが著しい。口縁端部に斜め方向の圧痕が残る。459・460 は摘み部分。461 は高台付杯。やや焼成不良。点数は少ないが、音谷池東岸窯跡出土の土器群と同様な様相を示すと考えられる。

扁平化した蓋 C、杯 B、杯 C、皿 A、皿 B が主な器種で、その他鉄鉢型の鉢、長頸壺、壺が認められた。

④新池窯跡出土資料（第 195 図）

新池窯跡から出土した資料群である。このうち、475・477 は歴史民俗資料館所蔵時に作成した台帳の備考欄に「西庄 笹尾新池南西岸 窯跡か？推定」と記載されたもので、その他は「香南新池」と注記されたものである。香南町の新池窯跡は「西原新池」東岸に位置するもので、笹尾新池は音谷池の西北西約 1.2km にある笹尾新池を指すものであろう。

462～467 は蓋。笠形の器形（463～466）、扁平な器形（462・467）があるが、いずれも口縁端部は緩く折り曲げる程度で、体部との境はあまり明瞭ではない。462 は口径 13cm 程度、内面には窯壁が、外面上には須恵器が溶着する。463・464 は扁平な摘みが付く、笠形の器形。463・465 は口径 15～16cm 程度、464 はやや歪みがある。466・467 は口径 18.0～18.8cm で、466 は内面に土器小片が溶着し、467 は焼成時に歪みによりひび割れする。468・469 は杯。469 は内面に窯壁が溶着する。470 は高台付杯。高台部分は剥離している。471 は高台付杯。内面には窯壁の大きな破片が溶着し、その上部にはさらに須恵器片が溶着する。472 は鉄鉢型土器。内面に土器片が溶着する。473～476 は壺口縁部。473 は内面に青海波文が残る。464・475 は口縁端部を平らにし、476 は外側へ肥厚させる。477 は壺または壺底部。外面上には平行タタキが残る。478 は壺体部小片。肩が張る器形で、長頸壺または広口壺と考えられる。外面上に須恵器別個体が溶着する。479 は壺。頭部にタタキ痕跡、内面には青海波文が残る。480 は石に須恵器片が 2 片重なって溶着する。石の一部には自然釉が掛かる。481 は杯または皿底部で、外面上に石が溶着する。石には自然釉が掛かる。

463～465 は 7 世紀後半（佐藤編年 I・2 期）の器形に似るが、概ね 8 世紀前半～中頃（佐藤編年 II・2～3）の様相を示しているのではないかと考えられる。

蓋 C、杯 B、杯 C の他、鉄鉢型の鉢、壺、壺が認められた。

上道池東遺跡 1～3 区で出土した須恵器群は、茶園窯跡出土遺物と似た様相であるが、杯 C または皿 C の破片が認められ、その点は次の大坪窯跡の様相も呈すると考えられる。

音谷（西庄）窯跡群は、陶邑編年 TK46 併行期（7 世紀後半）の茶園窯跡を嚆矢として、TK48～MT21 併行期（7 世紀後半～8 世紀前半）の大坪窯跡、MT21 併行期（8 世紀初頭～8 世紀前半）の新池窯跡が続く（佐藤 1997）。音谷池東窯跡はそれらに続く 8 世紀中頃～後半頃とされている。

資料提示のみであったが、香南町の窯跡群の変遷を知る一助となれば幸いである。

註）器種名は（佐藤 1993）に掲る。

＜参考文献＞

- 松本敏三・岩橋孝 1985 「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」「瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第 2 号」
佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室解説 40 周年記念考古学論叢』
佐藤竜馬 1997 「7 世紀讃岐における須恵器生産の展開」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 V 特集 7 世紀の讃岐』
財団法人香川県埋蔵文化財センター

第21表 横井南原遺跡 土器調査表(1)

編文 番号	測量区	測量名	種類	器形	調整			色調			土器			法量(cm)	器高 底径	残存率	備考
					内面	外面	外縁	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径				
1	4区	SK4010	弦生土器	盤	幅十寸、指ナメ 厚体正規文、ナメ 凹縁4条、輪	25YR6/6 瓶	中・多	中・並	-	細・少	-	(19.2)	-	-	5.8		
2	5-1区	SK4010	弦生土器	盤	幅十寸、指ナメ 厚体正規文、ナメ 凹縁4条、輪	25YR6/6 瓶	中・多	-	-	細・多	-	(11.2)	-	-	3.8		
5	4区	SD4005	土陶器	甕	幅ナメ、ハゲ 指ナメ、ハゲ 直工	10YR4/1 開灰	75YR6/6 瓶	中・並	中・少	-	細・少	-	-	-	1.8	未調	
6	4区	SD4005	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	25YR5/6 10YR4/1 開灰	中・多	細・少	-	細・少	-	-	(6.6)	2.8			
7	4区	SD4005	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	25YR7/4 浅黄	中・少	-	-	細・少	-	-	(5.0)	2.8			
8	4区	SD4005	集生器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	25YR7/4 浅黄	中・少	-	-	細・少	-	-	(11.0)	-	1.8		
11	4区	SD4006	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	5YR6/6 瓶	中・多	細・少	-	細・少	-	-	(17.0)	-	2.8		
12	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR4/3 10YR5/1 開灰	中・並	中・少	-	細・少	-	-	-	-	3.8		
13	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR7/4 10YR5/1 黃鉄	中・多	細・少	-	細・少	-	-	(11.0)	-	8.8		
14	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR7/4 10YR5/1 黃鉄	中・並	-	-	細・多	-	-	(6.2)	1.8			
15	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	25YR6/6 瓶	細・多	-	-	細・多	-	-	(7.0)	未調			
16	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	25YR5/6 10YR7/4 浅黄	中・並	-	-	細・少	-	-	(6.6)	1.8			
17	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR5/3 10YR5/1 黃鉄	細・多	-	-	細・少	-	-	(6.2)	1.8			
18	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR7/4 10YR5/4 黃鉄	中・並	中・少	-	細・少	-	-	(6.2)	2.8			
19	3区	SD3027	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR7/4 10YR5/1 黃鉄	中・並	中・少	-	細・少	-	-	-	-	未調		
21	3区	SD3028	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR6/4 10YR5/4 黃鉄	中・多	中・少	-	細・少	-	-	-	-	3.8		
22	3区	SD3028	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR5/2 10YR5/1 黃鉄	中・多	-	-	細・少	-	-	(7.0)	2.8			
23	7区	SD7036	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	5YR4/4 10YR5/4 黃鉄	細・多	細・少	-	細・多	-	(20.2)	-	6.8			
24	7区	SD7036	弦生土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	75YR4/6 瓶	中・多	中・少	-	細・多	-	-	(6.3)	2.8			
25	1区	SX1007	集生器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	NS/甕	-	-	-	細・少	-	-	-	-	8.8		
28	7区	SK7002	絆器	皿	施格	施格	施	施 : NS/白	施 : NS/白	施 : NS/白	無	(10.9)	21	6.8	1.8	未調	
29	7区	SK7002	絆器	皿	施格	施格	施	施 : 10Y8/1 灰白	施 : 10Y8/1 灰白	施 : 10Y8/1 灰白	無	(15.6)	-	-	1.8	未調	
30	7区	SK7002	土陶質土器	釜	施格	施	施 : 10Y8/4 10Y8/4 黃鉄	施 : 10Y8/4 10Y8/4 黃鉄	施 : 10Y8/4 10Y8/4 黃鉄	施 : 10Y8/4 10Y8/4 黃鉄	中・少	(42.7)	-	-	1.8	未調付着	
31	7区	SK7010	土陶質土器	甕	幅ナメ、ナメ 直工	10YR6/4 10YR6/4 黃鉄	中・並	中・少	-	細・多	-	-	(34.1)	5.8			

第21表 横井南原遺跡 土器観察表（2）

番号	調査区	遺物名	種類	面積	調整		色調		粘土		法量 (cm)	底径	口径	保存状態
					外面	内面	外画・施	内画・施	石英・長石	赤色粒				
33	7区	SK7028	陶器	要	施鉢	施	施・目、 施ナダ	施・目、 施ナダ	10YR2/2 に5G1	-	-	-	細・少	-
35	7区	SK7029	土器質土器	要	施鉢	施	施ナダ・ ナダ、ナダ	施ナダ・ ナダ	10YR5/2 に5G1	黄灰	中・多	中・少	細・少	-
36	7区	SK7029	土器質土器	要	施鉢	施	施ナダ・ ナダ	施ナダ・ ナダ	10YR6/3 に5G1	黄灰	中・多	中・差	細・多	-
38	7区	SK7030	土器質土器	要	施鉢	施	施ナダ・ ナダ	施ナダ・ ナダ	10YR6/4 に5G1	黄灰	中・多	中・差	粗・少	-
39	7区	SK7031	土器質土器	要	施鉢	施	施ナダ・ ナダ	施ナダ・ ナダ	10YR6/4 に5G1	黄灰	10YR4/1	陶灰	粗・多	-
40	7区	SK7033	土器質土器	要	施鉢	施	施ナダ・ ナダ	施ナダ・ ナダ	10YR7/3 に5G1	黄灰	10YR7/3 に5G1	黄灰	中・多	-
41	北半	SD1001	灰土土器	(底刷)	施手ササ	施	施	施	5YR8/8	橙	5YR8/6	金明	粗・多	-
42	北半	SD1001	灰土土器	杯	回転ナダ	回	回転ナダ	回	23Y3/1	黄灰	23Y3/1	黄灰	粗・少	(9.7)
43	北半	SD1001	灰土土器	杯	回転ナダ	回	回転ナダ	回	23Y4/1	黄灰	23Y4/1	黄灰	中・小	(12.7)
44	北半	SD1001	灰土土器	杯	回転ナダ	回	回転ナダ	回	23Y5/1	黄灰	N/A	N/A	粗・少	(12.8)
45	北半	SD1001	灰土土器	杯	回転ナダ	回	回転ナダ	回	23Y5/2	黄灰	N/A	N/A	粗・少	-
46	北半	SD1001	灰土土器	杯	回転ナダ	回	回転ナダ	回	23Y5/2	陶灰	23Y5/2	陶灰	中・少	-
47	北半	SD1002	灰土土器	蓋	回転ナダ	回	回転ナダ	回	7.5Y6/1	灰	7.5Y6/1	灰	中・少	-
48	北半	SD1001	灰土土器	蓋	回転ナダ	回	回転ナダ	回	5B6/1	青灰	5B6/1	青灰	粗・少	-
49	北半	SD1001	灰土土器	蓋	回転ナダ	回	回転ナダ	回	N/A	N/A	N/A	N/A	粗・少	-
50	11区	SD1001	磁器	皿	施手	施	施の目	施	N/A	白	N/A	白	無	-
51	11区	SD1001	磁器	小皿	施鉢	施	施	施	5Y8/1	白	5Y8/1	白	無	-
52	11区	SD1001	陶器	湯盆	回転ナダ・ ナダ	回	回転ナダ	回	10R5/6	赤	10R5/6	赤	粗・少	-
53	11区	SD1001	陶器	鉢	施	施	回転ナダ・ ナダ	回	10YR6/6	白	10YR6/6	白	粗・少	-
55	21区	SD2005	灰土土器	火鉢	施鉢	施	回転ナダ・ ナダ	回	5Y7/1	灰白	5Y7/1	灰白	粗・少	-
57	21区	SX2004	土器質土器	焰壺	施	施	施	施	10YR7/2	白	10YR7/2	白	粗・少	-
58	22区	SD2033	灰土土器	豆	横ナダ	横	凹線2条・ 横ナダ	横	10YR6/3	白	10YR6/3	白	中・多	-
59	22区	SD2033	陶器	碗	施	施	施	施	2.5Y7/2	灰白	2.5Y7/2	灰白	粗・少	-
									10YR3/3	陶灰	10YR3/3	陶灰	粗・少	-

第21表 横井南原遺跡 土器調査表(3)

編文 番号	測量区	測量名	種類	恐れ	調整			色調			土器			法量(cm)	残存率	備考
					内面	外側	外側・輪	内面・輪	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径	器高	
60	2-2区	SD2033	土師質土器	火焰 焰?	ハケ目、板ナ ナデ?	10YR3/1 黒陶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8 未調
61	3-2区	SD3054	須恵器	杯	輪軸ナデ切 火炎ナデ	NG/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	(6.8)	2/8
62	3区	SK3003	須恵器	杯	回転ナデ	Na/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	(10.2)	1/8
63	3区	SK3003	須恵器	碗	輪軸	輪軸	輪軸	輪軸	輪白	輪白	輪白	輪白	無	-	(3.0)	4/8
64	3区	SK3003	須恵器	皿	輪軸	輪軸	輪軸	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(6.0)	1/8
65	3区	SK3003	須恵器	碗	輪軸	輪軸	輪軸	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(4.6)	2/8 輪調査
66	3区	SK3003	土師質土器	焰焰	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	中・少	(31.1)	1/8 未調
67	3区	SD3015	須恵土器	盃	輪ナデ後指捺 手工	10YR5/4 に、灰・黄白	10YR5/4 に、灰・黄白	10YR5/4 に、灰・黄白	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	-	2/8
69	3区	SD3007	須恵器	盃	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	-	1/8
70	3区	SD3007	須恵器	盃	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(7.2)	3/8
71	3区	SD3007	須恵器	盃	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(6.1)	2/8
72	3区	SD3007	須恵器	盃	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	9.0	1/8
73	3区	SD3007	須恵器	盃	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(13.0)	6/8
74	3区	SD3007	土師質土器	羽釜	輪ナデ 工・後指捺	輪ナデ 工・後指捺	輪ナデ 工・後指捺	輪ナデ 工・後指捺	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(20.5)	1/8 外側付着
75	3区	SD3007	土師質土器	焰焰	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	-	1/8 外側付着
76	3区	SD3008	須恵器	碗	輪軸	輪軸	輪軸	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	-	2/8
79	3-2区	SD3050	須恵器	蓋	回転ナデ	輪ナデ 火炎	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(14.6)	1.5
80	3-2区	SD3050	須恵器	蓋	回転ナデ	輪ナデ 火炎	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	-	3/8 土器壁の色 もあ
81	3区	SD3050	須恵器	蓋	回転ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(5.8)	2/8
82	2-2区	SD3050	須恵器	蓋	回転ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(15.3)	2/8 未調
83	2-2区	SD3050	須恵器	蓋	回転ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(28.6)	1/8 未調
86	7区	SD7035	土師質土器	焰焰	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	-	1/8 未調
87	2-1区	SP2009	須恵器	杯	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪ナデ	輪白	輪白	輪白	輪白	輪白	-	(11.2)	3/8 成

第21表 横井南原遺跡 土器観察表（4）

編文 番号	調査区 名	通称名	種類	基盤	調整		色調	土	石英・長石 等色粒	角閃石 等母岩	砂粒	口括 等	法量 (cm)	底括 等	残存率	備考	
					内面	外面											
88	21区	SP2009	直底器	杯	圓柱ナデ	圓柱	N5/灰	NT/灰白	-	-	-	-	細・少	(13.8)	-	1/8	未調
89	21区	SP2009	直底器	杯	圓柱ナデ	圓柱	10YR7.4 [+5.5] 茶	10YR7.4 [+5.5] 茶	-	-	-	-	中・少	(11.7)	-	1/8	未調
90	22区	SP2065	直底器	杯	圓柱	圓柱	5Y6.1灰	5Y6.1灰	-	-	-	-	中・多	(0.98)	39	6.8	焼成不良
91	32区	SP2044	直底器	蓋	圓柱ナデ	圓柱ナデ	23Y7.2灰黃	23Y7.2灰黃	-	-	-	-	細・少	(25.6)	-	1/8	
92	22区	直底器	杯	圓柱ナデ	圓柱ナデ	圓柱	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	中・少	(11.0)	-	1/8	未調
93	22区	21区との 境の直底器	直底器	蓋	圓柱ナデ	圓柱	5G/灰 [+5.5] 黄	10YR5.2灰褐 [+5.5] 黄	-	-	-	-	細・少	-	-	1/8	
94	3区	直底器	土師質土器	杯	ナデ	ナデ	10YR6.4 [+5.5] 黄	10YR5.1褐灰	-	-	-	-	中・多	-	-	6.4	1/8
100	3区	碗	土師質土器	土管	ヘラ削り後ハケ 目	ヘラ削り後ハケ 目	75YR5.4 [+5.5] 褐	75YR4.3褐	中・並	中・少	-	-	細・多	-	-	1/8	
101	3区	碗	土師質土器	土管	ナデ	ナデ	75YR5.4 [+5.5] 褐	75YR5.4 [+5.5] 褐	中・多	中・並	-	-	-	-	-	12.1	5.8
102	4区	直底器	土師質土器	火斧	楕ナデ	楕ナデ	N2/黑	N2/褐灰	-	-	-	-	細・少	(34.1)	-	1/8	未調
104	7区	機械削輪	縦器	輪	輪	輪	輪	輪	中・少	-	-	-	無	(10.9)	5.0	(4.0)	3/8 型紙破り

第22表 横井南原遺跡 瓦觀察表

編文 番号	調査区 名	通称名	器種	色調	調整	土	白色砂粒 黒色砂粒	灰色砂粒	長さ (残存長) 幅 (残存幅)	法量 (cm)	厚さ	段	残存率	備考	
32	7区	SK7015	平瓦	N4/灰	N4/灰	楕ナデ	楕ナデ	楕ナデ	中・少	-	23.7	1.7	無	鐵片	正面に刷印
105	7区	機械削輪	軒平瓦	N3/褐灰	N3/褐灰	楕ナデ	楕ナデ	楕ナデ	中・少	-	12.3	23.5	38	有	鐵片

第23表 横井南原遺跡 玉觀察表

編文 番号	調査区 名	通称名	器種	色調	調整	土	白色砂粒 黒色砂粒	灰色砂粒	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	材質	法量 (cm)
4	4区	ST4009	玉	白	0.45	0.45	0.45	0.45	0.08	0.08	ガラス	-	-

第24表 横井南原遺跡 石器調査表

編文 番号	調査 区名	遺物名	器種	長さ (cm)	幅	厚さ	重量 (g)	石材	備考
3 4区	SX4010	石鏡	石鏡	1.6	1.7	0.3	0.95	サスカイト	
9 4区	SD4005	石鏡	石鏡	2.4	1.7	0.5	1.92	サスカイト	
10 4区	SD4005	石鏡	石鏡	1.7	1.2	0.3	0.49	サスカイト	
20 3区	SD3007	石鏡	石鏡	4.4	1.9	0.5	3.24	サスカイト	
27 51区	SX5004	石鏡	石鏡	2.0	1.65	0.3	0.94	サスカイト	
68 3区	SD3015	石鏡	石鏡	2.15	1.35	0.3	1.06	サスカイト	未製品
76 3区	SD3007	石鏡	石鏡	2.2	1.6	0.4	1.30	サスカイト	
77 3区	SD3007	石鏡	石鏡	2.9	1.4	0.3	1.66	サスカイト	
84 32区	SD3050	石鏡	石鏡	2.9	2.2	0.8	4.73	サスカイト	
85 7区	SD7003	石鏡	石鏡	2.15	1.4	0.3	0.94	サスカイト	未製品
95 3区	包含層(SD3027 層1層)	石鏡	石鏡	2.15	1.1	0.3	0.51	サスカイト	
96 3区	Nz+3 3層	石鏡	石鏡	1.9	1.75	0.35	0.78	サスカイト	
97 3区	黄色包含層	石鏡	石鏡	2.05	2.25	0.4	1.30	サスカイト	
98 3区	包含層(SD3027 上層) SD3027 上層4層(1層)	石鏡	石鏡	2.5	2.1	0.4	1.30	サスカイト	
99 3区	包含層(SD3027 上層) SD3027 上層4層(1層)	火打石	火打石	1.75	1.4	1.6	3.66	チヤー	
103 4区	包含層	石鏡	石鏡	2.6	2.7	0.9	6.09	サスカイト	

第25表 横井南原遺跡 金属調査表

編文 番号	調査 区名	遺物名	器種	長さ (cm)	幅	厚さ	重量 (g)	材質	備考
26 3区	SX3013	鉤針	鉤針	4.55	1.2	0.9	5.92	真	
34 7区	SX7028	鉤針	鉤針	1.95	0.9	0.2	2.71	鐵種不明	近代以前か
37 7区	SX7029	鉤針	鉤針	3.1	1.2	0.35	3.01	真	
54 1区	SD1001	真津	刀子	3.9	3.4	2.1	38.14	真	
56 21区	SX20023	刀子	刀子	9.0	2.2	0.4	11.46	真	赤色研磨仕上げ?

第26表 上道池東遺跡 土器調査表(1)

編文 番号	調査区名	遺物名	内容	種類	器種	調整	色調			土器	法量 (cm)	残存率	備考
							外面	内面	口径				
1	2.1区	SK06	西側板張	須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N6/灰	-	石英白 長石	角閃石 斜長石	-	-
2	2.2区	SK01		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ、青タキ後板ナダ	10YR6/2灰黄褐N6/灰	-	-	無	(83.3)	-
3	2.2区	SK01		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ、青タキ後板ナダ	10YR5/2灰黄褐N6/灰	-	-	無	(15.0)	-
4	2.2区	SK01		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ、青タキ後板ナダ	10YR5/2灰黄褐N6/灰	-	-	無	(15.0)	-
7	1.2区	SD02		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5YR4/4灰	-	-	中・少	-	-
8	3.1区	SD02		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5YR7/1灰白	N6/灰	-	無	(12.7)	-
9	3.1区	SD02		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5YR7/1灰白	N5/灰	-	無	(13.8)	24
10	1.2区	SD02		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N7/灰白	N5/灰	-	無	(16.5)	-
11	2.1区	SD02		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5YR6/4 [調査部は 2.5Y3/1黒褐 などな]	7.5YR6/4 [2.5Y3/1黒褐 などな]	細・少	細・少	-	-
12	1.1区	SD03		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ、指揮え	10YR8/2灰白	中・並	-	-	-	-
13	2.1区	SD04		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N6/灰	-	-	中・少	-	-
14	2.1区	SD04		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N6/灰	N7/灰白	-	中・多	(10.2)	-
15	3.2区	SD04		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N6/灰	-	-	無	-	-
16	2.1区	SD04		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5YR7/1灰白	2.5Y7/4浅黃	-	無	-	-
17	2.1区	SD05		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N6/灰	-	-	無	-	-
18	2.1区	SD05		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	5Y7/1灰白	N6/灰	-	無	-	(13.8)
19	2.2区	SD05		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N6/灰	-	-	無	-	-
20	2.2区	SD05		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N7/灰白	N7/灰白	-	無	-	-
21	1.2区	SD05		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5Y7/2灰白	2.5Y8/1灰白	-	-	-	-
22	2.2区	SD05		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	-	中・少	-	-
23	2.2区	SD05		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y5/1 黄褐	-	無	-	-
26	2.1区	SD06		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5Y7/1灰白	N5/灰	-	中・少	(10.0)	-
27	2.1区	SD06		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N5/灰	-	-	無	89	-
28	2.1区	SD07		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	5Y7/1灰白	N5/灰	-	無	-	-
29	2.1区	SD07		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N4/灰	7.5Y5/1灰	-	無	(10.0)	-
30	2.1区	第5層		須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	N5/灰	-	-	無	(7.6)	-
31	2.2区	第5層、第4層	須世器	壺	青海波文	タキ後板ナダ	7.5Y7/1灰白	N5/灰	-	中・多	(8.1)	-	-

第26表 上道池東遺跡 土器観察表 (2)

種子番号	品種名	圃場名	通称名	内容	外觀	内面	色調	茎			葉			花		備考					
								種類	構造	調整	表面	裏面	基部	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口徑	茜高	底径	その他
32	12区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N5.灰	N5.灰	-	-	-	-	細少	(9.6)	-	-	-	-	1.8未調				
33	22区	第5圃、第4圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N4.灰	N5.灰	-	-	-	-	中少	(9.0)	-	-	-	-	2.8				
34	22区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N7.灰白	N6.灰	-	-	-	-	細少	(9.8)	-	-	-	-	1.8				
35	21区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N5.灰	N6.灰	-	-	-	-	細多	(10.2)	-	-	-	-	1.8				
36	21区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N6.灰	N6.灰	-	-	-	-	細少	(10.0)	-	-	-	-	1.8未調				
37	21区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N7.灰白	N5.灰	-	-	-	-	中少	-	-	-	-	(10.0)	1.8未調				
38	12区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N4.灰	N5.灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	-	-	1.8未調				
39	12区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N5.灰	N6.1灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	-	-	6.8				
40	21区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N5.灰	N5.灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	-	-	8.8				
41	21区	第5圃、第4圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N7.灰白	2.5Y7/1灰白	-	-	-	-	中少	-	-	-	-	-	4.8				
42	21区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N7.灰白	N5.灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	-	-	1.8未調				
43	12区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N7.灰白	N7.灰白	-	-	-	-	中少	-	-	-	-	-	1.8未調				
44	1区	第5圃	第5圃	須世器 茎 回転ナダ ナダ	N6.灰	N6.灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	-	-	1.8未調				
45	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N5.灰	N6.灰	-	-	-	-	中少	6.7	4.0	6.2	-	-	4.8	口輪部歪みあり			
46	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N5.灰	N5.灰	-	-	-	-	中少	(6.5)	-	-	-	-	2.8				
47	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N7.灰白	N5.灰	-	-	-	-	細少	(10.3)	-	-	-	-	1.8				
48	22区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N7.5Y1灰	2.5Y5/1黄灰	-	-	-	-	細少	(6.3)	-	-	-	-	1.8未調	歪みあり			
49	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N7.5Y1灰	10YR8/2灰白	-	-	-	-	細少	(6.6)	3.0	(5.8)	-	-	3.8	燒成不良			
50	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N5.灰	N6.灰	-	-	-	-	細少	1.58	3.7	11.6	-	-	7.8				
51	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N5.灰	N6.灰	-	-	-	-	中少	(15.8)	-	-	-	-	1.8	重みが重い			
52	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N5.灰	N6.灰	-	-	-	-	中少	-	-	-	(10.4)	-	5.8				
53	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N7.5Y1灰	5Y5/1灰	-	-	-	-	中少	-	-	-	11.0	-	7.8				
54	21区	第5圃	第5圃	須世器 杯 回転ナダ ナダ	N5.灰	10YR6/1灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	(10.0)	-	1.8	脚端部歪みあり			
55	24区	第5圃	第5圃	須世器 高杯 回転ナダ ナダ	N4.灰	N4.灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	(10.8)	-	1.8	脚端部歪みあり			
56	22区	第5圃	第5圃	須世器 高杯 回転ナダ ナダ	N4.灰	N6.灰	-	-	-	-	細少	-	-	-	(10.9)	-	1.8				
57	21区	第5圃	第5圃	須世器 高杯 回転ナダ ナダ	N6.灰	7.5Y6/1灰	-	-	-	-	中少	(16.9)	-	-	-	-	1.8	燒成不良			
58	21区	第5圃	第5圃	須世器 高杯 回転ナダ ナダ	N7.灰白	2.5Y7/1灰白	-	-	-	-	細少	(23.0)	-	-	-	-	1.8未調				
59	2区	第5圃	第4圃	須世器 高杯 回転ナダ ナダ	N6.灰	N6.灰	-	-	-	-	中少	(20.6)	-	-	-	-	1.8				

第26表 上道池遺跡 土器觀察表（3）

編号	調査区名	遺物名	内容	種類	形態	調整	色調			施土	口径	器高	底径	他	注釈(cm)	保存率	備考
							外面	内面	内面・輪								
60	1-2 区	第5層	土師質土器 小皿	マツツ	ハケ目、ナデ・ハケナダ 直板ナダ	マツツ	10YR8/3(浅黄褐色)OYR8/2 白	白	白・少	-	-	-	-	-	6.0	0.7	6.0
61	2-1 区	第5層	土師質土器 小皿	マツツ	ハケ目、ナデ・ハケナダ 直板ナダ	マツツ	10YR8/3(浅黄褐色)OYR8/2 白	白	白・少	-	-	-	-	-	-	-	2.8
67	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y6/1 黄灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	6.8
68	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y6/1 黄灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
69	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y6/1 黄灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
70	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
71	1-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
72	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
73	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
74	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y8/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
75	2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
76	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
77	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
78	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
79	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
80	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
81	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
82	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
83	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
84	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
85	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
86	2-1、 2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調
87	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
88	2-2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	6.8
89	2-1 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	7.8
90	2 区	第4層	須恵器	蓋	回転ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	7.8
91	1-2 区	第4層	須恵器	蓋	ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	7.8
92	1-2 区	第4層	須恵器	蓋	ナダ	マツツ	2.5Y7/1 黄白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	5.8

第26表 上池東遺跡 土器観察表(4)

標文 番号	調査区名	通耕名	内容	種類	型態	調整	色調		土	石英・長石 赤色粒 角閃石	雲母 砂粒	口括 豊高	底括 底括	法量(cm)	現存半 径	備考	
							内面	外面									
93	1-2区	第4層	須世器	蓋	圓筒板ナデ ヌツカ	N4/灰	N3/褐色	5Y5/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	8.8	
94	1-2区	第4層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	N4/灰	N3/褐色	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
95	1-2区	第4層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	N4/灰	N4/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
96	1-2区	第4層、第3層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	N4/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
97	2-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	3.8	見み著しい
98	2-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N6/灰	N6/灰	5Y5/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	2.8	
99	2-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N6/灰	N6/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8	
100	1-1区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N7/灰	N6/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
101	2-1区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N7/灰	N7/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
102	2-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N6/灰	N6/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8	
103	2-1区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ 鋸齒ヘタ切り	N7/灰	N7/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	「青銅部」に他の 形が接着する 外縁自然輪
104	1-1区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N6/灰	N6/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
105	1-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N7/灰	N7/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
106	2-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8	
107	2-1区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N6/灰	N6/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
108	2-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N7/灰	N7/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
109	2-1区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N7/灰	N7/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8 6.9	内面に土器接着痕 無
110	2-2区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	6.8	燒痕不良
111	1-1区	第4層	須世器	杯	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8	底あり
112	1-1区	第4層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8	内面から外面 に自然輪
113	2-1区	第4層	須世器	圓筒 凹凸頭器	圓筒 凹凸頭器	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8	上端にマツツ とくになし
114	2-1区	第4層	須世器	圓筒 凹凸頭器	圓筒 凹凸頭器	N4/灰	N4/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8	上端マツツは 無
115	2-1区	第4層	土師質器	足	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/6灰白	-	-	-	-	-	-	-	8.8	
120	2-2区	第3層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
121	1-2区	第3層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
122	1-2区	第3層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	N5/灰	N5/灰	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
123	1-1区	第3層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	5Y5/1灰 白	5Y5/1灰 白	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	1.8未調	
124	2-2区	第3層	須世器	蓋	圓筒板ナデ	5Y5/1灰 白	5Y5/1灰 白	5Y5/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	4.8	

第26表 上道池東遺跡 土器調査表(5)

編 番 号	調査区分名	遺構名	内容	種類	剖面	内面	調整		色調	基土	法量(cm)	操作率	備考
							外面	里面					
125	3-2 区	第3層 壁 SD 壁土	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
126	1区北半	中央部構造物 上(第3層付)	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
127	1-1 区	第3層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
128	1-2 区	第3層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
129	2-2 区	第3層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N7/灰白 切手後削除記号	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
130	1-2 区	第3層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N3/陶灰 N4/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
131	1-2 区	第3層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
132	1-2 区	第3層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰 N6/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
133	1-1 区	第3層	土師質土器 焼成	壺	ヨコナメ ヨコナメ	N1/R6/2 N2/黄褐色	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
134	1-2 区	第3層	土師質土器 焼成	壺	ヨコナメ ヨコナメ	N0/R4/2 N0/Y6/6 黄褐色	中・少	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
135	2-2 区	第3層	土師質土器 焼成	壺	ヨコナメ ヨコナメ	N4/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
139	2 区	火打傷傷	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N7/灰白	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	(3.1)	-
140	2 区	第2層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N1/Y7/1 灰白	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	1.7	-
141	2-1 区	第2層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N6/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
142	2 区	第2層	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	2.5/Y7/1 灰白	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
143	2 区	第2層	磁器	壺	須恵器 縦目付ナメ	2.5/Y6/2 灰 N6/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
145	2 区	上部構造	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
146	1 区	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N6/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	(16.0)	-	
147	1 区	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N6/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-	
148	2 区	機械削削	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
149	3-1 区	機械削削	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N4/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-
150	2 区	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	上げ付 縦目付	2.5/Y6/1 灰 N6/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	(7.8)	-
151	断長骨科	須恵器 縦目付	壺	須恵器 縦目付ナメ	N5/灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	(38)	-	
155	5 区	SRS001 磁 磁精査	磁器	壺	須恵器 縦目付ナメ	10/G7/8/1 N9/白	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	5.3	-
158	5 区	SRS5002	土師質土器 五輪	壺	須恵器 縦目付ナメ	10/YR4/2 黄褐色 7.5/YR6/3 に 引削灰	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	38	-
159	5 区	SRS5002	土師質土器 五輪	壺	須恵器 縦目付ナメ	-	-	石英・長石 赤色粒・角閃石 白	砂母	口径 器高	-	-	

第26表 上道池東遺跡 土器觀察表 (6)

調査番号	調査区名	遺物名	内容	種類	性質	調整 勾面	外面	外面・施土	石英・ 長石	赤色粒 角閃石	雲母	砂粒	口括	器皿	法量 (cm)	残存率	参考	
160 5区	SK5004	土陶質土器	要 板ナデ、ナア ナデ	陶器	燒成	10YR6/4に よい質感	10YR6/4に よい質感	-	-	-	-	中 多	-	(30.0)	-	6.8	漆板塗地	
161 5区	SD5001	6グリッド	土陶質土器	要 板ナデ、ナア ナデ	陶器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 少	-	4.0	-	2.8	緑色
162 5区	SD5001	2グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 少	(11.0)	-	-	2.8	コバルトによる発色
163 5区	SD5001	1・8グリッド開	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	無	-	(4.0)	-	1.8	内面型紙面により 施文する。外腹形
164 5区	SD5001	5グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 少	-	(6.2)	-	1.8	内面型紙面により 施文する。外腹形
165 5区	SD5001	5グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 少	(14.9)	-	-	1.8	内面型紙面により 施文する。外腹形
166 5区	SD5001	3・4グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	無	-	(7.8)	-	1.8	内面型紙面により 施文する。外腹形
167 5区	SD5001	2・3グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 少	-	(9.0)	-	3.8	内面型紙面により 施文する。外腹形
168 5区	SD5001	3グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	無	-	-	-	1.8	未測定の凹凸台
169 5区	SD5001	2グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	無	-	(10.0)	-	2.8	内面型紙面により 施文する。外腹形
170 5区	SD5001	8グリッド	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 少	(3.6)	4.5	-	3.8	背面頭部・左耳部 に小孔。焼成
171 5区	SD5001	3グリッド	磁器	人形	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	無	-	-	-	8.8	背面頭部・左耳部 に小孔。焼成
172 5区	SD5001	2・4グリッド	陶器	不明	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 少	-	-	-	1.8	未測定の丸形の孔 全体部に拘泥感ある
173 5区	SD5001	1グリッド	陶器	急須	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	無	-	-	-	8.8	未測定の丸形の孔 全体部に拘泥感ある
174 5区	SD5001	1・8グリッド開	陶器	罐	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 多	(29.4)	-	-	1.8	未測定の丸形の孔 全体部に拘泥感ある
175 5区	SD5001	6グリッド	土陶質土器	蓋	指押え後ナデ ・板ナデ	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	細 多	-	-	-	1.8	未測定の丸形の孔 全体部に拘泥感ある
176 5区	SD5001	2グリッド	土陶質土器	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	細 多	(65.4)	-	-	1.8	未測定の丸形の孔 全体部に拘泥感ある
177 5区	SD5001	1・8グリッド開	土陶質土器	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	中 多	(46.0)	-	-	1.8	未測定の丸形の孔 全体部に拘泥感ある
178 5区	SD5003	10・11グリッド 11 12	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	無	-	(4.9)	-	5.8	外腹スヌード
179 5区	SD5003	10・11グリッド 11 12	磁器	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	燒成	無	-	(6.3)	-	1.8	外腹スヌード
180 5区	SD5003	10・11グリッド 11 12	土陶質土器	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	粗 少	-	-	-	3.8	外腹スヌード
181 5区	SP5007	10・11グリッド 11 12	陶器	土陶質土器	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	焰唇	無	10.7	(7.9)	-	7.8	内腹・外腹スヌード

編 号	調査区名	遺構名	内容	種類	點検	調整	色調			粘土	法縫(cm)	保存率	備考							
							外面	内面	外縫	内縫	石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径	器高	底延	その他	
182	5区	SFS023	陶器 土板回転ナデ	施釉	火照	火照	白土・7.5YR8/6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8	
183	5区	SFS023	陶器 土板回転ナデ	施釉	火照	火照	白土・5YR5/6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.8	
184	5区	7グリフP 第2層	磁器 皿	施釉、ハリ施釉	火照	火照	白土・7.5YR7/4	-	-	-	-	-	-	-	-	9.5	-	-	2.8	
185	5区	11グリフP 第2層	陶器 椀	施釉	火照	火照	白土・25Y8/2	-	-	-	-	-	-	-	-	(3.0)	-	-	3.8	
186	5区	7グリフP 第2層	陶器 楠鉢	回転ナデ、直輪ナデ	火照	火照	白土・10R5.4	-	-	-	-	-	-	-	-	中・少	-	-	1.8未調	
188	5区	第1層	磁器 梶	施釉	火照	火照	白土・高分白	10G7/8.1	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	-	(4.3)	-	-	1.8未調
189	5区	10グリフP 第1層	土師質土器 壺	ハケ目、板ナデ	火照	火照	白土・高分白	10Y5.2	始土・灰黄褐	10YR4.1	灰褐	-	-	-	-	中・少	(13.5)	-	-	6.8
190	5区	10グリフP 第1層	土師質土器 壺	ハケ目後板ナデ	火照	火照	白土・高分白	10Y5.6	始土・日後	10YR3/4	灰白	5.5	5.5	3.1	中・並	-	-	-	-	7.8
191	5区	9グリフP 第1・2層	磁器 皿	施釉	火照	火照	白土・透明	10G7/8.1	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	幅・少	(0.8)	2.3	(6.2)	-
192	5区	9グリフP 第1・2層	磁器 皿	施釉、火照	火照	火照	白土・高分白	10G7/8.1	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(7.8)	-
193	5区	8グリフP 第1・2層	陶器 楠鉢	施釉、火照	火照	火照	白土・高分白	10Y5/3/4	始土・10YR7/3	-	-	-	-	-	-	幅・少	-	-	(14.7)	-
194	5区	9グリフP 第1・2層	土師質土器 壺	指押・後板ナデ	火照	火照	白土・高分白	10Y5/4	始土・10YR7/3	-	-	-	-	-	-	多・幅・少	-	-	(27.0)	-
195	5区	9グリフP 第1・2層	土師質土器 壺	火照	火照	火照	白土・高分白	10Y5/4	始土・10YR7/3	-	-	-	-	-	-	中・多	(6.2)	-	-	1.8未調未作成
196	5区	SKS6010	須恵器 皿	回転ナデ	火照	火照	白土・灰白	N8・灰白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(3.7)	-
197	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・灰白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	幅・多	(16.4)	2.0	(13.0)	-
198	6区	SKS6010	須恵器 皿	回転ナデ	火照	火照	白土・火照	N8・灰白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	中・多	(6.2)	-	-	1.8未調
199	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・灰白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	幅・少	4.6	1.4	1.3	-
200	6区	SKS6010	須恵器 皿	回転ナデ	火照	火照	白土・火照	N8・灰白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	(7.8)	3.5	(2.8)	-
201	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・灰白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	幅・少	-	-	-	8.8
202	6区	SKS6010・ SKS6015	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(2.8)	-
203	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	2.9	-
204	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(4.0)	-
205	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	幅・少	-	-	(4.6)	-
206	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(4.4)	-
207	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	無	(10.4)	5.7	(2.2)	-
208	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N9・白	-	-	-	-	-	-	幅・少	11.3	6.3	(4.6)	-
209	6区	SDS6003	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・白	始土・N8・灰白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(4.1)	-
210	6区	SKS6010	磁器 皿	火照	火照	火照	白土・火照	N8・灰白	始土・N8・灰白	-	-	-	-	-	-	無	10.3	6.7	5.2	-

第26表 上道池東遺跡 土器觀察表 (8)

第26表 上道池東遺跡 土器觀察表 (9)

編号	識別名	遺跡名	内容	種類	器種	調整	施土		法量 (cm)		備考			
							外面	内面	外側	内側	石英・赤色粘土 長石			
225	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR7/3 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
226	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(10.6) -	1.8
227	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(11.0) -	1.8
228	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
229	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(11.0) -	1.8
240	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
241	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(11.0) -	1.8
242	6 区	SK6010*	SK6002	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(11.0) -	1.8
243	6 区	SK6010	陶器	陶器	陶器	施施	10YR2/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
244	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指揮子ナデ 10YR5/2 黒褐色 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
245	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指揮子ナデ 10YR5/1 黑灰 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
246	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指揮子ナデ 10YR5/1 黑灰 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
247	6 区	SK6003	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指揮子ナデ 10YR5/3 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(11.0) -	1.8
248	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指揮子ナデ 10YR5/1 黑白 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(11.0) -	1.8
249	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指揮子ナデ 10YR5/3 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
250	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指 10YR4/2 黑灰 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
251	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指 10YR4/2 黑灰 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8
252	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指 10YR5/3 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・多	-	(11.0) -	1.8
253	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指揮子ナデ	指 10YR5/3 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	中・少	-	(11.0) -	1.8
254	6 区	SK6010	土師質土器	羽皿	羽皿	指 10YR5/3 上: 2.5SY8E/6 下: 2.5SY8T/3	-	-	-	細・少	-	(11.0) -	1.8	

第26表 上遺池東遺跡 土器觀察表(10)

編文 番号	調査区名	遺跡名	内容	種類	器種	調整 内面	外面	外縁・輪	内面・輪	赤色粒 灰白	赤色粒 灰白	角觸石	砂粒	口径 少	口径 少(33.0)	器高	底径	其他	製作半 成	備考	
255	6区	SK6010	土師質土器 烧	ナデ、ハケ目ナデ、指揮え、指揮え	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/1灰灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8	外圓ス付着
256	6区	SK6010	土師質土器 烧	ナデ、板ナデ ナデ、指揮え	10YR3/2黑褐	10YR3/2黑褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調
257	6区	SD6003	土師質土器 烧	ナデ、マメツ 指揮え、ナデ	10YR5/2	10YR2/1黑褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調 内圓ス付着
258	6区	SK6010	土師質土器 烧	ナデ、マメツ 指揮え、ナデ	2.5Y3/1黑褐	2.5Y6/2灰黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調
259	6区	SK6010	土師質土器 烧	ナデ、板ナデ、指揮え	10YR6/2灰黄褐色	10YR6/2灰黃褐色	細・多	-	細・多	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調 内圓部付着ス付 着	
260	6区	SD6003	土師質土器 烧	ヨコナデ、板ヨコナデ	10YR5/1灰褐	10YR5/2灰黃褐色	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調
261	6区	SK6010	土師質土器 烧	ヨコナデ	1.5Y3/1黄褐色	1.5Y2/1黑	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調 外圓ス付着 内圓ス付着
262	6区	SK6010	土師質土器 烧	ヨコナデ、板ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ(調整點) 1.5Y3/1黑褐	2.5Y7/1灰白	細・多	-	細・少	細・多	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調 外型的 内圓部付着 官能的
263	6区	SK6010	土師質土器 烧	ヨコナデ、板ヨコナデ	ヨコナデ(調整點) 1.5Y3/1黑褐	2.5Y6/1灰褐	細・少	-	細・少	細・多	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調 外型的 内圓部付着 官能的
264	6区	SK6010	土師質土器 烧	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ(調整點) 1.5Y3/1黑褐	2.5Y7/1灰白	細・少	-	細・少	細・多	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8未調 外型的 内圓部付着 官能的
269	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
270	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
271	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
272	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
273	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
274	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
275	6区	SD6005	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
276	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
277	6区	SK6011	磁器 瓦	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	3.8
278	6区	SK6011	陶器 陶	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	3.8
279	6区	SD6005	陶器 陶	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	3.8
280	6区	SD6005	陶器 陶	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	燒	3.8
281	6区	SK6011・ SK6001	陶器 陶	香炉 田軒ナデ	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	3.8
282	6区	SK6011	陶器 陶	香炉 田軒ナデ	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	香炉	3.8

第26表 上道池東遺跡 土器観察表（11）

編文 番号	調査区名	遺物名	内容	種類	器種	内面	外面	調整	色調		土	法量 (cm)	残存率	備考	
									内面	表面					
283	6区	SK6011	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	灰英・ 長石	赤色粒 角閃石	雲母	砂粒	口径 中・少	-	-
284	6区	SK6005	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	中・少	-	-
285	6区	SK6011	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	中・少	63.0	-
286	6区	SK6013	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	2.5Y5/1黄灰 2.5G5/1黄灰 角閃灰	2.5Y5/1黄灰 2.5G5/1黄灰 角閃灰	-	-	中・少	67.0	-
287	6区	SK6013	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	中・少	11.6	-
288	6区	SK6013	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	-	-	中・少	11.6	-
289	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	66.0	22
290	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	-	-	無	63.2	41
291	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.2	41
292	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	64.0	39
293	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	64.0	39
294	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	64.0	39
295	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	64.0	39
296	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	64.0	39
297	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
298	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
299	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
300	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
301	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
302	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
303	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
304	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
305	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
306	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62
307	6区	SK6015	土師質土器	焼	陶器	壺形ナデ・ ノコナデ・ 指印付	内面	内面	10YR4/4灰白	10YR4/4灰白	-	-	無	63.8	62

第26表 上池東遺跡 土器観察表 (12)

標名	標本名	内容	種類	調整 内面	外面	外側・施 内面・施土	色調		施土	石英・ 長石	赤色粒 角閃石	雲母 斜長石	口括 縫合	法量 (cm)	器高 底径	残存率	備考	
							施土	施土										
308 6区	SK6015	土師質土器	蓋	灰	ハケ目、ナデ ヨコナデ、指 押え後ヨコナデ	10YR5/3 2.5%黄褐色	-	-	-	-	-	-	中・多	-	-	(16.0)	-	2.8
309 6区	SK6015	土師質土器	火照	ヨコナデ	10YR7/3 2.5%黄褐色	-	-	-	-	-	-	-	中・多	(20.0)	22	(16.4)	-	1.8
310 6区	SK6015	土師質土器	不明	ヨコナデ、指 押え後ヨコナデ	10YR5/3 2.5%黄褐色	-	-	-	-	-	-	-	中・多	-	-	-	-	1.8未測
311 6区	SK6015	土師質土器	不明	ヨコナデ、指 押え後ヨコナデ、斜 輪	7.5YR5/3 2.5%黄褐色	-	-	-	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	1.8未測
313 6区	SD6001	陶器	輪	施輪	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	無	(10.4)	-	-	-	2.8
314 6区	SD6001	土師質土器	折沿	ヨコナデ、指 押え	5Y4/1灰	細・少・細・少・細・少	-	-	-	(36.0)	-	-	-	-	-	-	1.8未測	1所所残る
316 6区	SD6002	磁器	里	施輪	透明	施土: N9. 白	-	-	-	-	-	-	細・少	-	-	8.2	-	6.8
317 6区	SD6002	磁器	模	施輪	灰白	施土: N8. 灰白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	38	-	7.8
318 6区	SD6002	磁器	模	施輪	透明	施土: N9. 白	-	-	-	-	-	-	細・少	(10.0)	-	-	-	1.8
319 6区	SD6002	磁器	伝統型施輪	施輪	10YR8/1 灰白	末白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	3.4	-	8.8
320 6区	SD6002	陶器	灯形回転ナデ	回転ベラ割り	5YR5/4 2.5%赤褐色	5YR5/4 2.5%赤褐色	-	-	-	-	-	-	中・少	(9.8)	1.5	(5.8)	-	1.8
321 6区	SD6002	土師質土器	折沿	ヨコナデ	10YR3/1 黄灰 N6. 灰	5Y5/1 黄灰 N6. 灰	-	-	-	-	-	-	細・少	(43.6)	-	-	-	1.8未測
322 6区	SD6004	須磨型 高杯	高杯	ヨコナデ	10Y6/1灰 回転ベラ割り	5Y7/6/1灰 回転ベラ割り	-	-	-	-	-	-	中・少	(13.2)	-	-	-	3.8
323 6区	SD6004	須磨型 高杯	高杯	ヨコナデ	5Y7/6/1灰 回転ベラ割り	5Y7/6/1灰 回転ベラ割り	-	-	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	4.8
324 6区	SD6004	磁器	模	施輪	透明	施土: N7. 末白	-	-	-	-	-	-	無	(10.0)	5.5	(3.4)	-	3.8
325 6区	SD6004	磁器	里	施輪	透明	施土: N8. 末白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(6.0)	-	2.8
326 6区	SD6008	柱瓶	陶器	灯形回転ナデ	施輪、回転 ベラ割り	7.5YR5/3 2.5%赤褐色	-	-	-	-	-	-	無	(8.9)	-	-	-	2.8
327 6区	豐切り	磁器	模	施輪	透明	施土: N8. 末白 灰白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	(3.2)	-	7.8
328 6区	上面斜長	陶器	模	施輪	透明 無施輪	施土: N9. 末白 灰白	-	-	-	-	-	-	無	(8.8)	5.5	(2.8)	-	3.8
329 6区	豐切り	磁器	模	施輪	透明	施土: N9. 白	-	-	-	-	-	-	細・少	6.6	6.6	3.1	-	8.8
331 上池 東岸		須磨型 高杯	蓋	ヨコナデ	回転ベラ割り	7.5Y6/1灰 N6. 末	-	-	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	3.8
332 上池 東岸		須磨型 高杯	蓋	ヨコナデ	回転ベラ割り	N6. 末	-	-	-	-	-	-	中・少	(12.9)	-	-	-	1.8
333 上池 東岸		須磨型 高杯	模	施輪	透明	10YR6/6 灰白	-	-	-	-	-	-	無	-	-	3.1	-	6.8
334 上池 東岸		須磨型 高杯	模	施輪	透明	施土: N9. 白	-	-	-	-	-	-	細・少	-	-	(4.4)	-	2.8

上池東遺跡 観察表

第26表 上道池東遺跡 土器觀察表 (13)

編番 番号	調査区名	遺物名	内容	種類	器種	内面	外面	調整		色調		土器		法量 (cm)	残存率	備考			
								縫合	施釉	白灰	黒色	角・円石	實母	砂粒	口径	器高	底径	その他	
335	上道池東遺跡	-	-	施釉	陶	施釉	施釉	-	-	-	-	-	-	無	(11.0)	5.8	(4.6)	-	
336	上道池東遺跡	-	-	施釉	陶	施釉	施釉	-	-	-	-	-	-	無	(19.5)	24	(13.0)	-	
337	上道池東遺跡	-	-	施釉	陶	施釉	施釉	-	-	-	-	-	-	細・少	(24.6)	-	-	1.8未測定	
338	上道池東遺跡	周辺	土器質土器	焼成	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V71	灰白	75V81	灰白	-	-	-	無	11.2	60	35	-
339	上道池東遺跡	周辺	土器質土器	焼成	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V71	灰白	75V81	灰白	-	-	-	無	(11.5)	52	39	-
340	上道池東遺跡	周辺	土器質土器	焼成	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V71	灰白	75V81	灰白	-	-	-	無	14.3	30	78	-
341	上道池東遺跡	周辺	土器質土器	焼成	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V71	灰白	75V81	灰白	-	-	-	無	16.4	42	107	-

第27表 上道池東遺跡 瓦觀察表

編番 番号	調査区名	遺物名	層位	器種	色調		調整		色調		土器		法量 (cm)	残存率	備考		
					凸面	凹面	凸面	凹面	白色	黑色	灰色砂粒	黑色砂粒	長さ	幅 (保存長)	厚さ		
152	4区	SB5001 (南側)	1Tr 6.2層	軒瓦	N4/灰	N4/灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	鏡片	瓦当部: 3.8
153	5区	SB5001 (南側)	-	軒瓦	N3/灰灰	N3/灰灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	鏡片	瓦当部: 3.8
154	5区	SB5001 (南側)	-	軒瓦	N3/灰灰	N3/灰灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	21	瓦当部: 鏡片 瓦当のみ、三巴文
196	5区	8ダクト1'2層	-	軒瓦	5Y6.1灰	5Y6.1灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	20.6	-
197	5区	8ダクト1'2層	-	軒瓦	N4/灰	N4/灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	25	鏡片
199	5区	東西トレンチ(3)	-	軒瓦	N4/灰	N4/灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	1.8	右側に瓦当部分が付属、鏡分れ部分には割れ目
312	6区	SK6015	壁切口	軒子瓦	N4/灰	N4/灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	0.77	(0.6)
320	6区	周辺	-	軒瓦	N2/黑	N2/黑	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	1.5	鏡片
342	上道池東遺跡	周辺	-	軒瓦	N2/黑	N2/黑	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	板ナデ	中・少	-	-	1.8	瓦当部: 8.8 瓦当のみ

第28表 上道池東遺跡 玉觀察表

編番 番号	調査区名	遺物名	層位	種類	調整			法量	材質	備考
					直徑 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)			
25	2区北半部	S006	-	玉	1.1	1	1.2	2.44	水晶	3カ所に孔、孔部分に白い塗料
138	3区南半部	第3層	玉	直球	1.65	1.7	1.5	5.88	ガラス	風化あり、表面に気泡が多い

第29表 上道池東遺跡 木器觀察表

第30表 上道池東遺跡 金屬器觀察表

編文 番号	調査区名	遺物名	形種	法量(cm)		備考
				長さ	幅	
343	6区	SK6000	蓋	28.4	30.3	33 把手下部(本体 木口部無あり)

第31表 上道池東遺跡 石器觀察表

編文 番号	調査区名	遺物名	内容	形種	法量(cm)		備考
					長さ	幅	
5	2区南半部	SX01		石繩	1.9	1.6	0.35 サスカイト
6	2区南半部	SX01		石片	2	1.05	0.3 サスカイト
62	2区南半部		第5層	石繩	(1.9)	(1.2)	0.3 サスカイト 凹基式
63	2区北半部		第5層	石繩	1.95	1.5	0.45 サスカイト
64	2区北半部		第5層	石繩	2.6	1.5	0.3 サスカイト
65	2区南半部		第5層	石繩	1.5	0.7	0.2 サスカイト
66	2区南半部		第5層	石繩	(1.9)	(1.9)	0.35 サスカイト 凹基式
116	2区南半部		第4層	石繩	1.9	1.45	0.2 サスカイト 平基式
117	1区北半部		第4層	石繩	2.15	1.1	0.25 サスカイト 凹基式
118	2区北半部		第4層	石繩	2.2	1.1	0.2 サスカイト
119	2区北半部		第4層	石繩	2.25	1.5	0.3 サスカイト 凹基式
136	1区北半部		第3層	石繩	2.15	1.4	0.3 サスカイト 凹基式
137	1区北半部		第3層	石繩	2.6	1.6	0.45 サスカイト 凹基式
144	2区		第2層	石繩	2.2	1.5	0.3 サスカイト 凹基式
156	5区	SK6001		繩石	37.0	49.3	16.0 砂岩 縄骨と六角、縄付き
157	5区	SK6001		繩石	28.7	31.4	14.3 砂岩 縄骨と七角、縄付き
265	6区	SK6010		砥石	9.15	5.3	4.1 245.88
266	6区	SK6010		砥石	12.7	5.3	0.8 75.04
267	6区	SK6010		砥石	8.6	5.7	2.4 140.6
286	6区	SK6012		火付石	1.6	1.5	0.4 チヤー卜
315	6区	SD6001		石繩	1.6	1.9	0.3 サスカイト 凹基式

第32表 歴民資料土器觀察表（1）

編 番 号	資料番号	通称名	種類	形態	調整	色調			輪			法量 (cm)			備考				
						内面	外面	内面・輪	内面・輪	長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	少 (11.2)	多 (10.9)	高 (7.4)	幅 (6.4)	厚 (6.0)
401	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	壺	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
402	219-6	茶園削跡 須恵器	壺	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
403	219-6	茶園削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
404	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8 やや地成不良
405	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8 土みあり
406	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	3.8
407	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	6.8
408	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	3.8
409	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	3.8
410	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	壺	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
411	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	高杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	3.8
412	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	高杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8 頭部円
413	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	底部	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8 頭部円
414	822-1(1)	茶園削跡 須恵器	要	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
415	820-3(3)	大坪削跡 須恵器	壺	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
416	219-6(3)	大坪削跡 須恵器	壺	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
417	822-2(2)	大坪削跡 須恵器	壺	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
418	820-3(3)	大坪削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
419	820-3(3)	大坪削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8
420	820-3(3)	大坪削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8 内面に土器接着
421	219-6(3)	大坪削跡 須恵器	杯	回転ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	3.8 色成不良

第32表 居民資料土器觀察表(2)

編 番 号	資料番号	通称名	種類	調整 内面	外面	外面・輪 刮板ナデ	内面・胎 刮板ナデ	色調	石 英石 赤色灰 角閃石 雲母 砂粒	口径 中・少	胎高 (168)	底径 (61)	長さ 120	幅 96	厚 -	その他 -	現存半 備考	注釈(cm)
外	内	外	内															
422	8204(3)	大井削跡 須恵器	杯	刮板ナデ	25Y6/1 黄灰													1.8 やや地成不良
423	8204(2)	大井削跡 須恵器	皿	刮板ナデ	10Y5/1 黄灰	N6/ 仄												
424	8204(2)	大井削跡 須恵器	高杯	刮板ナデ	10Y5/1 黄灰	洗刷(10Y5/1 黄灰)											5.8 沖縄は1周しない	
425	2194(6)	大井削跡 須恵器	盤	刮板ナデ 文後一基 刮板ナデ	10Y5/1 黄灰	10Y5/1 黄灰												重みあり 池西村大字西庄 了佐西村北 福(かまくら)氏 の記念入り
426	2194(6)	大井削跡 須恵器	甕	青海波文 蓋	タタキ マツツ 3Y8B6/8 程	5Y8B6/8 程												1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
427	2194(6)	大井削跡 須恵器	甕	蓋	タタキ マツツ 刮板ナデ	3Y8B6/6 程	7.5Y8B6/6 程											1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
428	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	N4/ 仄	N4/ 仄												1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
429	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	ナデ	刮板ナデ	5Y6/1 黄白												1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
430	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	刮板ナデ	刮板ナデ	N5/ 仄												1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
431	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	刮板ナデ	刮板ナデ	7.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰										1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器	
432	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	刮板ナデ	刮板ナデ	2.5Y5/1 黄灰	N6/ 仄										1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
433	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	刮板ナデ	刮板ナデ	N5/ 仄	N5/ 仄										1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
434	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	刮板ナデ	刮板ナデ	2.5Y7/2 黄灰											1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
435	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	刮板ナデ	刮板ナデ	N4/ 仄	N4/ 仄										1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
436	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	刮板ナデ	N5/ 仄	N6/ 仄											1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
437	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	刮板ナデ	N6/ 仄	N6/ 仄											1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
438	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	蓋	刮板ナデ	刮板ナデ	N5/ 仄	N5/ 仄										1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
439	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	刮板ナデ	刮板ナデ	5Y7/1 黄白	10Y7/1 黄白											2.8 一部外圍に水槽
440	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	刮板ナデ	刮板ナデ	N5/ 仄	N7/ 仄白											2.8 一部外圍に水槽
441	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	刮板ナデ	刮板ナデ	5Y7/1 黄白	5Y7/1 黄白											2.8 一部外圍に水槽
442	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	刮板ナデ	刮板ナデ	N6/ 仄	N6/ 仄											1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器
443	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	刮板ナデ	刮板ナデ	10Y5/1 黄	10Y5/1 黄											1.8 未満 土陶器 底成不良 土陶器

第32表 居民資料土器觀察表（3）

編 番 号	資料番号	遺跡名	種類	調査 箇所	内面	外側	色調		内面・胎土	石英・赤色粒・角閃石	粘土	口径	器高	底径	長さ	幅	厚	その他	内存年 備考
							内面	外側											
444	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	住上ナメテ 倒板ナメテ	10Y6/1灰	10Y6/1灰	白	白	25Y7/1灰白	25Y7/2灰黄	N5/灰	縦・少	-	(8.8)	-	-	-	1.8	焼成不良
445	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	倒板ナメテ 倒板ナメテ	10Y6/1灰	10Y6/1灰	白	白	N5/灰	N5/灰	中・少	-	(12.1)	-	-	-	-	2.8	
446	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N5/灰	N5/灰	白	白	N7/灰白	N7/灰白	中・少	-	(11.8)	-	-	-	-	1.8	
447	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	倒板ナメテ 倒板ナメテ	25Y5/1灰	25Y5/1灰	白	白	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	縦・少	-	(11.6)	-	-	-	-	1.8	茎み大きい 口唇 やや不整か
448	8204(1)	音谷池東 須恵器	杯	倒板ナメテ 倒板ナメテ	10Y6/1灰	10Y6/1灰	白	白	10Y6/1灰	10Y6/1灰	縦・少	(15.6)	1.7	(13.0)	-	-	-	1.8	
449	8204(1)	音谷池東 須恵器	皿	倒板ナメテ 倒板ナメテ	10Y5/1灰	10Y5/1灰	白	白	10Y5/1灰	10Y5/1灰	中・少	(15.7)	1.75	(12.7)	-	-	-	1.8	
450	8204(1)	音谷池東 須恵器	皿	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N5/灰	N5/灰	白	白	N5/灰	N5/灰	縦・多	-	(15.0)	-	-	-	-	1.8	未満
451	8204(1)	音谷池東 須恵器	盤	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N5/灰	N5/灰	白	白	N5/灰	N5/灰	縦・少	(14.0)	-	-	-	-	-	1.8	
452	8204(1)	音谷池東 須恵器	盤	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N4/灰	N4/灰	白	白	N4/灰	N4/灰	縦・少	(10.2)	-	-	-	-	-	1.8	
453	8204(1)	音谷池東 須恵器	平腹	倒板ナメテ 倒板ナメテ	25Y6/1黄灰	25Y6/1黄灰	白	白	25Y6/2灰白	25Y6/2灰白	縦・少	-	-	-	-	-	-	1.8	
454	8204(1)	音谷池東 須恵器	盤	マツリ 倒板ナメテ	25Y6/2灰白	25Y6/2灰白	白	白	25Y6/2灰白	25Y6/2灰白	縦・少	-	-	-	-	-	-	6.8	
455	8204(1)	音谷池東 須恵器	盤	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N6/灰	N6/灰	白	白	N6/灰	N6/灰	縦・少	(6.0)	-	-	-	-	-	2.8	
456	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N4/灰	N4/灰	白	白	N4/灰	N4/灰	中・少	-	-	-	-	-	-	1.8	未満
457	8204(1)	音谷池東 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	25Y6/1黄灰	25Y6/1黄灰	白	白	25Y6/1黄灰	25Y6/1黄灰	縦・少	-	(10.0)	-	-	-	-	1.8	
458	28-6(5)	音谷地 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	10Y6/1灰	10Y6/1灰	白	白	10Y6/1灰	10Y6/1灰	中・少	(18.4)	1.9	-	-	-	-	3.8	外側開口付添に斜 め方向の工具痕
459	28-6(5)	音谷地 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	白	白	5Y6/1灰	5Y6/1灰	縦・少	-	-	-	-	-	-	1.8	多く見る
460	28-6(5)	音谷地 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N5/灰	N5/灰	白	白	N5/灰	N5/灰	中・少	-	-	-	-	-	-	1.8	未満
461	28-6(5)	音谷地 須恵器	杯	倒板ナメテ 倒板ナメテ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	白	白	5Y6/1灰	5Y6/1灰	中・少	(14.4)	4.0	(10.0)	-	-	-	1.8	外側開口付添に斜 め方向の工具痕
462	8154(1)	財池東路 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ (多く)	10Y6/1灰	10Y6/1灰	白	白	10Y6/1灰	10Y6/1灰	縦・少	(13.0)	-	-	-	-	-	1.8	外側に土器溶着 一部自然壊
463	8154(1)	財池東路 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	10Y6/1灰	10Y6/1灰	白	白	10Y6/1灰	10Y6/1灰	中・少	(15.2)	2.7	-	-	-	-	2.8	マツリは後世のも のか
464	8154(1)	財池東路 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	白	白	5Y6/1灰	5Y6/1灰	中・多	-	-	-	-	-	2.8	つまみ	
465	8154(1)	財池東路 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	白	白	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	中・少	(16.0)	-	-	-	-	-	1.8	つまみ
466	8154(1)	財池東路 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	白	白	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	中・多	(18.0)	-	-	-	-	-	1.8	未満
467	8154(1)	財池東路 須恵器	蓋	倒板ナメテ 倒板ナメテ	5Y6/2灰 リーフ	5Y6/2灰 リーフ	白	白	5Y6/2灰 リーフ	5Y6/2灰 リーフ	縦・少	(18.8)	-	-	-	-	-	2.8	焼成時にひび割れ 少し歪みあり
468	8154(1)	財池東路 須恵器	杯	倒板ナメテ 倒板ナメテ	N6/灰	N6/灰	白	白	N6/灰	N6/灰	縦・少	(17.0)	-	-	-	-	-	1.8	未満
469	8154(1)	財池東路 須恵器	杯	倒板ナメテ 倒板ナメテ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	白	白	5Y6/1灰	5Y6/1灰	縦・少	(9.0)	-	-	-	-	-	1.8	内面に黒墨溶着

第32表 歴民資料土器観察表(4)

編 番 号	資料番号	通称名	種類	器體	底盤	底面 外周	内面 内底ナデ	色調	基土	法量(cm)					残存率	備考					
										石英・赤色粒 長石	石英・赤色粒 角閃石白	内面・粘 内底ナデ	内面・粘 内底ナデ	砂粒	口径	器高	底径	幅	厚		
470	815(1)	新池窯跡	須恵器	杯	内底ナデ	不明	内底ナデ	0106/1灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8	やや地底不規
471	815(1)	新池窯跡	須恵器	杯	内底ナデ (底盤溶着)	不明	内底ナデ	0106/1灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8
472	815(1)	新池窯跡	須恵器	鉢	内底ナデ	内底ナデ	内底ナデ	5Y6/1灰	N6/灰	-	-	-	-	-	(11.6)	-	-	-	-	-	1.8未満(内面に土器溶着)
473	815(1)	新池窯跡	須恵器	鉢	内底ナデ	青黄波文	内底ナデ	NS/灰	10R6/1灰灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.8
474	815(1)	新池窯跡	須恵器	甕	内底ナデ	内底ナデ	内底ナデ	NS/灰	10S/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
475	815(2)	尾尾新窯跡	須恵器	甕	内底ナデ	内底ナデ	内底ナデ	NS/灰	5Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
476	815(1)	新池窯跡	須恵器	甕	内底ナデ	内底ナデ	内底ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
477	815(2)	尾尾新窯跡	須恵器	底部 崩落品	底部 板ナデ	内底ナデ	内底ナデ	NS/灰	NT7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
478	815(1)	新池窯跡	須恵器	甕	内底ナデ	内底ナデ	内底ナデ	5Y6/1灰	NT7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満(外面に土器溶着)
479	815(1)	新池窯跡	須恵器	甕	内底ナデ	青黄波文	内底ナデ	5Y7/1灰白	NA/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満
480	815(1)	新池窯跡	須恵器	不明	不明	不明	不明	NS/灰	—	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.8
481	815(1)	新池窯跡	須恵器	甕	内底ナデ	内底ナデ	内底ナデ	不明(石が溶着)	NT7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8未満(中空部分で折れていた)

写真図版



ST4009 北西から

図版1 横井南原遺跡（2023年）



1区全景 北から



2-2・3-2区全景 北から

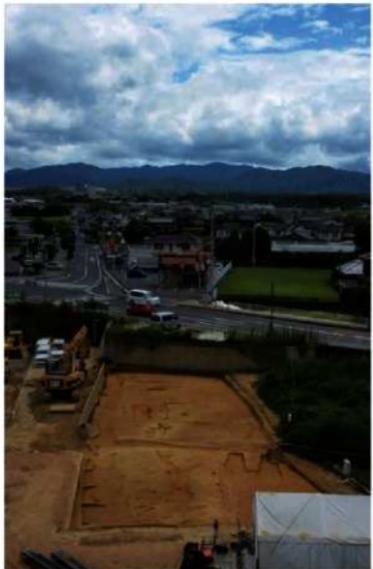


2-1区全景 北から



2-1区全景 南から

図版2 横井南原遺跡（2023年）



2-2・3-1区全景 南から



2-2・3-1区全景 南から



2-2・3-2区全景 北から



2-2・3-2区全景 東から



3-1区全景 南から



3-1区全景 北から

図版3 横井南原遺跡（2023年）



3-1・4区南全景 南東から



3-1・4区南全景 南から



4区南・3-1区全景 北から

図版4 横井南原遺跡（2023年）



4区北全景 北から



5-2区遺構検出状況 北西から



6区全景 北から



7区全景（南半）北から

図版5 横井南原遺跡（2023年）



7区全景 北から



7区
(SD7034・7035付近)
北から

2-2区
南壁



2-2区南壁 北から

1区西壁



1区西壁 東から

図版6 横井南原遺跡（2023年）

3区南壁



3区南壁 北から

4区西壁



4区西壁(南半) 東から

7区西壁



7区西壁(SD7034)
東から

7区西壁(北端) 東から

弥生時代
周溝墓
1・2・3



周溝墓1・2 (SX4010) 遺物出土状況 北から

図版7 横井南原遺跡（2023年）



周溝基1 SX4015a-a' 断面 東から



周溝基1・2 SX4010 遺構検出状況 北から



周溝基1・2 SX4010
遺物出土状況 東から



周溝基1・2
SX4010 遺物出土状況
東から



周溝基1・2
SX4010a-a' 断面 西から

図版8 横井南原遺跡（2023年）



図版9 横井南原遺跡（2023年）

周溝墓
4~6



周溝墓4 東から



周溝墓4 南から

図版 10 横井南原遺跡（2023 年）



周溝墓 4 南から



周溝墓 4・7 検出状況 南から



周溝墓 4・7 南から



周溝墓 4 南から



周溝墓 2・4 SD4006m-m' 断面
西から



周溝墓 2・4 SD4006 石出土状況 東から

図版 11 横井南原遺跡 (2023 年)



周溝墓 2・4 SD4006 全景 東から



周溝墓 2・4 SD4006 石出土状況 南西から



周溝墓 2・4 SD4006 北から



周溝墓 4・5 SD4005 東から



周溝墓 4・5 SD4005 (東半) 南から



周溝墓 4・5 SD4005 土器出土状況 西から

図版 12 横井南原遺跡 (2023 年)



周溝墓 4・5 SD4005b-b'断面
東から



周溝墓 4・7 SD5003o-o'断面
南から



周溝墓 4・5 SD4005c-c'断面
東から



周溝墓 4・7 SD5003r-r'断面
西から



周溝墓 4 ST4009 全景 北西から



周溝墓 4 ST4009a-a'断面 (南半) 西から



周溝墓 4 ST4009a-a'断面 (北半) 西から



周溝墓 4 ST4009d-d'断面 南東から



周溝墓 4 ST4009e-e'断面 北西から

図版 13 横井南原遺跡 (2023 年)



周溝墓 4 ST4009c-c' 断面 北西から



周溝墓 4 ST4009g-g' 断面 (東半)
南東から



周溝墓 4 ST4009 短側板掘方
土器出土状況 南東から



周溝墓 4 ST4009f-f' 断面 (東半)
南東から



周溝墓 4 ST4009f-f' 断面 (西半)
南東から



周溝墓 4 ST4009 検出状況 (北半) 北西から



周溝墓 4 ST4009 検出状況 (南半) 南東から



周溝墓 4 ST4009 炭化材 (分析試料含む)
出土状況 南東から



周溝墓 4 ST4009 完掘状況 北東から

図版 14 横井南原遺跡（2023 年）

周溝墓
5・6



周溝墓 5・6 東から



周溝墓 6 北東から



周溝墓 6 北西から

図版 15 横井南原遺跡 (2023 年)



周溝墓 6 SD3027 土器出土状況 西から



周溝墓 6 SD3027 西端付近土器出土状況 西から



周溝墓 6 SD3027 土器 (12) 出土状況 東から



周溝墓 6 SD3027 完掘状況 東から



周溝墓 6 SD3027a-a' 断面 東から



周溝墓 6 SD3027c-c' 断面 西から



周溝墓 6 SD3027b-b' 断面 (北半) 東から



周溝墓 6 SD3027b-b' 断面 (南半) 東から



周溝墓 6 SD3027d-d' 断面 東から

図版 16 横井南原遺跡 (2023 年)



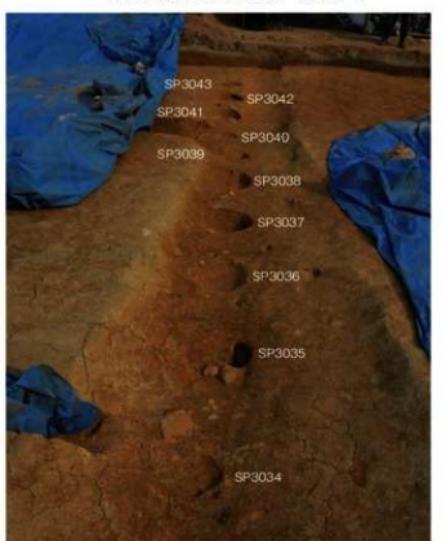
周溝墓 7



溝
SD6003



図版 17 横井南原遺跡 (2023 年)



図版 18 横井南原遺跡（2023 年）



図版 19 横井南原遺跡 (2023 年)



SK7028 断面 西から



SK7028 出土状況 北から



SK7029 断面 西から



SK7029 出土状況 東から



SK7030 断面 北から



SK7030 出土状況 東から



SK7030 ~ 7033 東から



SK7031 出土状況 南から



SK7033 出土状況 南から



SD1001b-b' 断面 北東から



SX2002 周辺 南西から



SD2055 土器 (55) 出土状況 東から

図版 20 横井南原遺跡（2023 年）



SX2002d-d' 断面 東から



SX2003・2004b-b'断面 南から



SX2004c-c' 断面 南から



SX2004 南から



SD2021 周辺 西から



溝
SD2021 断面 北から



SD2031 断面 東から



SD2032d-d' 断面 南から



SD2033b-b' 断面 東から

図版21 横井南原遺跡 (2023年)



図版 22 横井南原遺跡 (2023 年)



SD3007c-c'断面 南から



SD3007 上層 土器 (74)
出土状況 南から



SD3007 北から



SD3007 最上位 土器 (75)
出土状況 東から



SD3008k-k'断面 西から



SD3007・SD3008・SK3003・SK3006周辺 南から

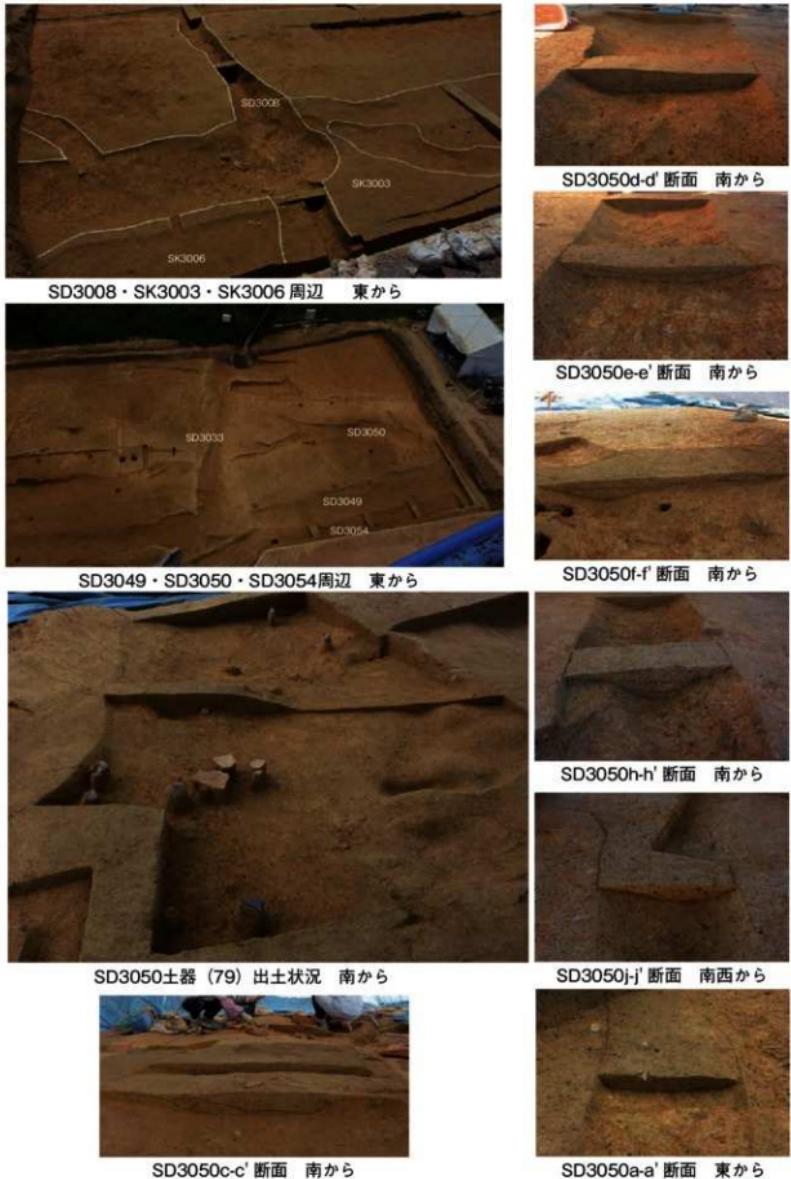


SD3008 j-j'断面 東から



SD3032 b-b'断面 南から

図版23 横井南原遺跡 (2023年)



図版 24 横井南原遺跡（2023 年）



7区全景（北側） 北から



SD7003c-c' 断面 東から



SD7004e-e' 断面 北から



SD7006d-d' 断面 北から



SD7034 断面 東から



SD7035d-d' 断面 北から



SP2009 断面 北から



SP2013 断面 北から



柱穴
SP2015 断面 西から



SP2053 断面 西から



SP2065 断面 南から



SP3044 断面 西から

図版 25 横井南原遺跡 (2023 年)



遺物写真 1

図版 26 横井南原遺跡（2023 年）



遺物写真2

図版27 横井南原遺跡 (2023年)



遺物写真3

図版 28 上道池東遺跡（2023 年）



1 区全景 南から



1 区全景 南西から



2-2 区遺構検出状況 南から



2-1 区全景 北から

図版 29 上道池東遺跡 (2023 年)



3-2 区全景 北から



3-1 区全景 南から



1 区南壁土層
北から



2-2 区西壁土層 東から



2-1 区西壁土層 北東から



③ 2・3 区北半部南壁土層 (西半) 北から

図版 30 上道池東遺跡 (2023 年)



1・3 区
SB01 北西から



1 区 SB01- SP04 断面
南西から



3 区 SB01- SP23 断面
南東から



3 区 SB01- SP26 断面
南東から



3 区 SB01- SP27 断面
南東から



3 区 SB01- SP29 断面
南西から



1 区 南壁土層 (SK04 付近)
北から



2 区 SK06 土器(1)出土状況 東から



2 区 SK06 土器(1)出土出状況 北から

図版 31 上道池東遺跡 (2023 年)

SF01



2 区 SX01 内 SF01 検出状況 南から



2 区 SX01 内 SF01 検出状況・SX01断面
南西から



2 区 SX01 内 SF01 検出状況 南東から



2 区 SX01 土器 (2) 出土状況
東から



2 区 SF01a-a' (西半)・b-b' (北半) 断面
北西から



2 区 SX01 土器 (3) 出土状況
南東から



2 区 SF01b-b' 断面 北から



2 区 SF01b-b' 断面 (南半) 東から

図版 32 上道池東遺跡 (2023 年)



2 区 SF01 検出状況 西から



2 区 SF01 北西から



2 区 SX01 北西から



3 区 SD02・SD04・SD05 北東から



1 区 SD01～SD05 南から



3 区 SD02・SD04・SD05f' 断面 南から

図版 33 上道池東遺跡 (2023 年)



1 区 SD02・SD04・SD05b-b' 断面 北から



2 区 SD06・SD07e-e' 断面 北から



1-2 区 鋤溝検出状況 南から



1 区 SD02～SD05a-a' 断面付近
鋤溝完掘状況 南から



1-2 区 第 4 層上面鋤溝完掘状況 南から



2-1 区 鋤溝完掘状況 北から



1-2 区 鋤溝完掘状況 (第 4 層上面) 南から

図版 34 上道池東遺跡（2023 年）



2-1 区鉤溝・牛蹄跡・ピット検出状況（南部）
南から



2-1 区鉤溝・牛蹄跡・ピット完掘（南部）
東から



2-2 区牛蹄跡検出状況 南から



2-2 区牛蹄跡完掘状況 南から



2-2 区牛蹄跡検出状況（南部）北から



2-2 区牛蹄跡検出状況 南から



2-2 区牛蹄跡検出状況 南から

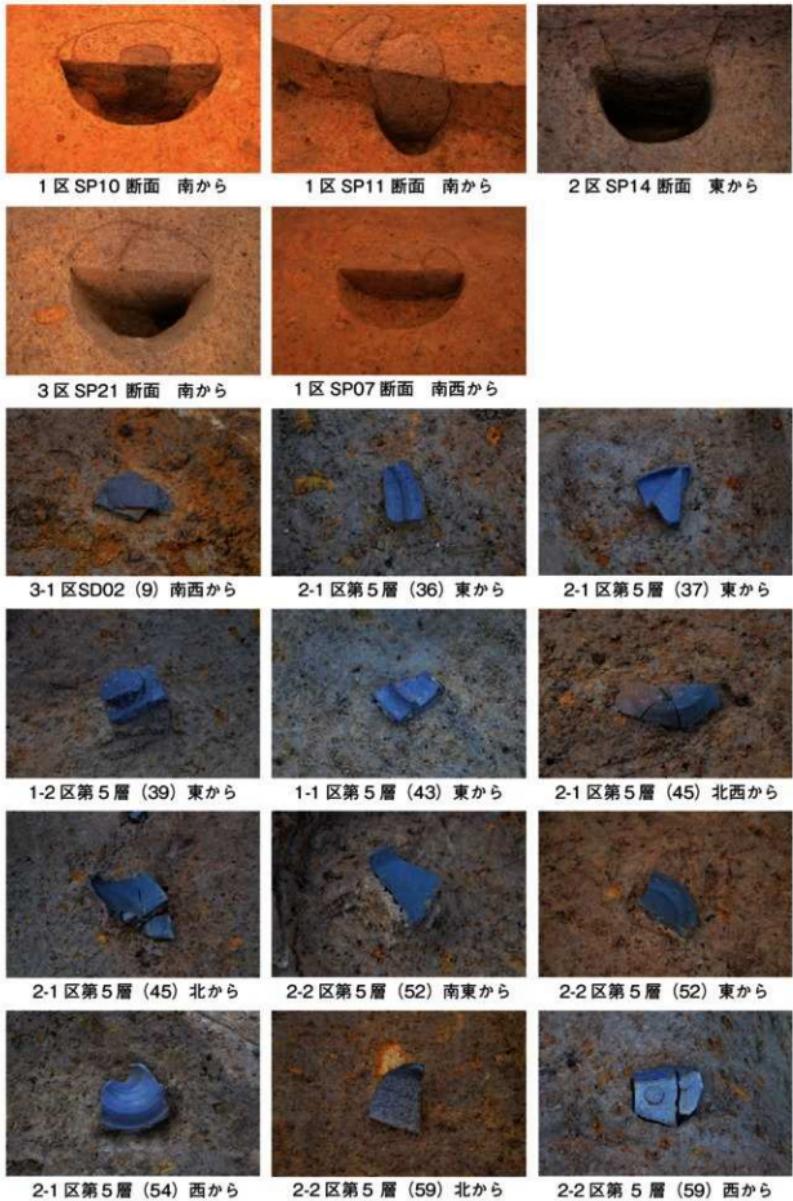


2-2 区牛蹄跡1・2完掘状況
南から



2-2 区牛蹄跡完掘状況 北から

図版 35 上道池東遺跡 (2023 年)



図版 36 上道池東遺跡 (2023 年)



2-1 区第5層 (50) 東から



2-1 区第5層 (50) 北西から



2-1 区第5層 (50) 北から



2-1 区 (61) 第5層 東から



2-1 区第4層 (67) 北東から



2-1 区第4層 (84) 北西から



2-1 区第4層 (115) 北東から



1-2 区第4層 (93) 西から



2-2 区第4層 (97) 東から



2-1 区第4層 (98) 北西から



2-1 区第4層 (103) 西から



2-2 区第4層 (110) 北から



2-2 区第3層 (129) 南から

図版 37 上道池東遺跡 (2023 年)

4区



4区 1 トレンチ全景 南から

4区 1 トレンチ北壁土層 南から

5区



5区全景 南から

5区 e-e' 土層 (西半部) 北から



5区 e-e' 土層 (東半部) 北から

図版 38 上道池東遺跡（2023 年）



5 区全景 南から



5 区 SB5001 北から



5 区 SB5001 東側石列 東から



5 区 SB5001 東側石列 西から



5 区 SB5001 東側石列 西から



5 区 SB5001 東側石列 西から



5 区 SB5001 東側石列 西から



5 区 SB5001 北側石列 南から



5 区 SB5001 南西隅 南から



5 区 SB5001 西から



5 区 SK5004 銅出土状況 南から



5 区 SD5002 南から



5 区 SD5004 北から

図版 39 上道池東遺跡 (2023 年)



5 区 SD5004 土管検出状況 北から



5 区 SD5001・SD5003 合流部 南から



5 区 SD5001・SD5003 合流部 東から



5 区 SD5001・SD5003 合流部 北東から



5 区 e-e' 断面 SP5001
検出状況 北から



5 区 SP5007 遺物 (181)
出土状況 上から



5 区 SP5007 遺物 (181)
出土状況 北から



6 区全景(南半) 東から



図版 41 上道池東遺跡 (2023 年)



6 区 SK6015 遺物検出状況 南から



6 区 SK6015・SK6010 a-a'断面 南から



6 区 SK6015 遺物検出状況 西から



6 区 SD6001・SD6002 断面 南から



6 区 SD6004 断面 南から



6 区 SP6001 断面 南から



6 区 SP6003 断面 南から



6 区 SP6007 断面 南から



6 区 SP6010 断面 北から



6 区 SP6011 断面 東から



6 区 SP6019 断面 西から



6 区 SP6020 断面 南から



6 区 SP6071 断面 北から



6 区 SP6072 断面 南から

図版 42 上道池東遺跡 (2023 年)



6 区 SP6082 断面 東から



6 区 SP6089 断面 西から



6 区 SP6089 底面石出土状況
南から



6 区 SP6098 断面 南から



6 区 SP6100 断面 南から



7 区 1 トレンチ 北西から



7 区 2 トレンチ 北から



7 区 1 トレンチ北壁土層 南から



7 区 2 トレンチ東壁土層 南西から



7 区 2 トレンチ北壁土層 南から



7 区 SP7007 南から

図版 43 上道池東遺跡 (2023 年)



遺物写真 1

図版 44 上道池東遺跡 (2023 年)



遺物写真 2

図版 45 上道池東遺跡 (2023 年)



遺物写真 3

図版 46 上道池東遺跡 (2023 年)



遺物写真 4

図版 47 上道池東遺跡 (2023 年)



遺物写真 5

報告書抄録

ふりがな	よこいなんばらいせき かみみちいけひがしいせき
書名	横井南原遺跡 上道池東遺跡
副書名	県道円座香南線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第4冊
編著者名	山元素子 株式会社文化財コンサルタント 株式会社吉田生物研究所
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 Tel 0877-48-2191 Fax 0877-48-3549 E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行年月日	2023年3月3日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
よこいなんげんざいせき 横井南原遺跡	香川県 さかみけん 高松市香南町横井	37201		34° 14'28" 134° 00'22"	2016.1 2017.4 ~ 10	3,135	県道円底香 南線道路改 築事業
かみみちいげきしきせき 上道池東遺跡	香川県 さかみけん 高松市香南町池内	37201		34° 14'37" 134° 00'15"	2020.11 ~ 2021.3	3,548	県道円底香 南線道路改 築事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横井南原遺跡	墳墓 生産	弥生時代、 近世、近 代	方形周溝墓、溝、 柱穴、土坑	弥生土器、須恵器、 土師質土器、陶磁器	弥生時代の方形周溝墓群を検出 近世以降開発に伴う溝群を検出
上池東遺跡	生産	近世、近 代	溝、柱穴、土坑、 古代～中世包含層	須恵器、土師質土器、 陶磁器	近世以降開発に伴う溝群を検出 古代～中世包含層から 7世紀末頃 の須恵器が多量に出土

横井南原遺跡では、開析谷の斜面を利用して築造された弥生時代後期の方形周溝墓群を検出した。溝を共有せながら築造され、そのうちの1基からは主体部が検出された。主体部からはガラス玉が出土し、周溝墓の規模と考え併せて地域の有力者の周溝墓であったことが想定できる。発掘調査事例が少ない地域ではあるが、地域の弥生時代の歴史を考えると大きな成果を上げることができた。

また、18世紀代の溝群を検出し、近世以降の水田開発の歴史を知る手がかりを得ることができた。

上道池東遺跡では、横井南原遺跡と同様、18世紀代以降の水田耕作に関わる溝群や掘溝痕、牛蹄跡を検出し、近世以降の水田耕作の風景を垣間見ることができた。

古代～中世包含層からは、7世紀後半～末頃の須恵器が多量に出土し、焼成事故品も多く含まれていた。遺跡内や上池道周辺では須恵器窯跡を認めるることはできなかったが、香南町では谷の斜面で7世紀後半～9世紀代の窯跡が知られており、出土した須恵器も周辺の窯跡から廻収された資料と考えられる。

卷一

県道円座香南線道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第4冊

横井南原遺跡
上道池東遺跡

2023年3月3日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191

E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp

発行 香川県教育委員会

印刷 ワールド印刷 株式会社